
チートじゃ済まない外伝 エリオ伝

雨季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートじゃ済まない外伝 エリオ伝

【Nコード】

N3989Q

【作者名】

雨季

【あらすじ】

チートじゃ済まないシリーズの外伝。

主人公は世界の波に揉まれて苦労人＋ほぼチートと化したエリオ・モンディアル。

彼が幻想郷を拠点に様々な世界で何かをする。

殆どのんびり。更新ものんびりなハートフルボツコメディー(?)。多重クロス、キャラ崩壊、ハーレムは当たり前。こんな話でもあな
たは読みますか？

プロローグ（前書き）

このエリオは既にハーレム形成済み。
いろいろな異世界にて修行をしてきました。という設定。
引き返すなら今ですよ。

プロローグ

エリオside

皆さんこんにちは。『エリオ・モンディアル』です。

JS事件から10年。あれからいろいろとあった。ある意味JS事件よりきつかった。

「エリオくん、いる?。」

「キャロかい?うん、いるよ。」

「私もいるよ。」

「ルーもか。」

部屋に入ってきたのは、彼女の『キャロ・ル・ルシエ』と『ルーテシア・アルピーノ』。
彼女が二人でいいのかって?元々それを提案したのは向こうだからいいの。

「用かい?。」

「うん、お兄ちゃん連絡。」

「兄さんから?。」

ああ、さっきから兄と言われているのは『一条要』。家族であり上司である人。ハーレムを作った人。チートじゃ済まないシリーズの

主人公の人。っとメタ発言はよそう。

「ハーレムならエリオの方が」

「……………ソナナコトナイヨ、ルー」

「カタコトだよ」

ええそうですよ。俺は兄さん以上にはハーレム作ってますよ。フラグ神言われても我慢しますよ。

「まあ自覚してるだけましたよね」

「ありがとう、キャラ。でもそれは誉められてるのかな？」

「うん」

「はあ。それで兄さんからの連絡ってのは？」

「「幻想郷を拠点に様々な世界の問題を解決せよ」「」

「……………なん……………だと……………？」

何で俺にそんな面倒な事わさせるのかな。俺だって局員としての仕事があるんだぞ。

「仕事は『お前一人抜けた程度で機能しなくなる局じゃねえ』だつて」

「酷い」

「私達も暇があれば行くね」

「では幻想郷にご案内」

「!? 紫さ、んー！？」

いつの間にかいた幻想郷の賢者こと『八雲紫』さんの能力で創られたスキマに落とされた。俺どうなるんだろ。

幻想郷上空。現在落ちてます。

「おおおおおお！？」

《落とされるなんてよくあるんだから落ち着けよ、相棒》

「だな、ストラーダ」

今の声は俺のデバイスのストラーダ。気がつけば大分フランクな性格になっていた奴だ。

「どこへ落ちてるか分かるか？」

《魔法の森だな》

「良かった。木がある場所で」

《平地だろうと着地は容易いだろう》

「否定しないな」

ガサガサガサガサガサッ

「あいた〜」

逆に木がある方が擦り傷や切り傷が出来て痛かった。すぐ治せるけど。

「エリオ、エリオじゃないか!」

「おう、魔理沙か。久しぶり」

彼女は『霧雨魔理沙』。自称普通の魔法使いだ。彼女の砲撃はなのはさんを彷彿とさせる。

「いつ来たんだよ!!来るなら一言くれればいいのに!!」

「今紫さんに落とされたんだよ。どうせすぐに飛ばされる」

「あらそんな事はしないわよ」

噂をすれば、上半身をスキマから出している紫さんがいた。

「どういふ事ですか？」

「依頼があるまで貴方は人里で待機よ」

「なら幻想郷に来なくても良かったんじゃない」

「私達が楽しいからよ」

「ですよ。幻想郷全員がそんな思考とは思いませんが、一部、しかも幻想郷の最上位に当たる人にそういうのが多いのは理解してま
すよ。」

「なら人里に行けばエリオにいつでも会えるんだな！！」

「いつでも、ではないわ。まあ大抵いるでしょうけど」

「まあさつきからの言動で気づいた人もいるかもしれませんが、魔理沙は俺に惚れてるようです。理由は語れる時があれば。」

「とりあえず人里行ってます」

「家は慧音が用意してるわ」

「了解しました」

「下手に誰かの家に泊まるより遙かにいいな。自由だし。」

「お久しぶりです。慧音さん」

「久しぶりだね、エリオ。八雲紫から話は聞いてるよ。ついてきてくれ」

この人は『上白沢慧音』さん。寺子屋の教師だ。初めて幻想入りした時はお世話になったものだ。

「かなり古臭い小屋だが、十分使えるはずだ」

「確かに十分です。いつもすみません」

「気にしないでくれ。使っていない小屋を提供するだけだ。良ければ寺子屋にも来てくれ。子供達も喜ぶ」

「必ず」

さあ掃除をするぞ。まずは台所から。

「手伝おうか？」

「このくらい一人で大丈夫ですよ」

「掃除道具はどうする。箒や雑巾があった方がいいたろう」

「……ストライダー、モップモード」

《悪いな相棒。俺はあらゆる戦闘は想定して造られているが、流石に掃除は想定されていない》

「くくつ、道具くらい貸してやるよ」

「すみません」

「終わった〜」

結局夜まで掛かったな。

「あ、終わったのね」

「妹紅さん。来たんですか」

彼女は『藤原妹紅』さん。慧音さんの友人で蓬萊の薬とやらを飲んで不老不死になった人だ。

「慧音に聞いてさ。食べ物とか大丈夫かな、って思ったけど大丈夫

「そうだね」

「ハハハ、皆さん優しくして」

掃除中も沢山の人が食料やら日用品やらを持ってきてくれたから大丈夫なんだよね。ありがたやありがたや。

「まあ元気そうで何よりだよ。またね」

「ええ、また」

今日はもう寝よう。依頼とやらが来るまでは幻想郷でのんびりしていよう。休暇みたいなもんだし。

プロローグ（後書き）

エリオ「始まってしまった」

キャラ「始まったね」

ルーテシア「頑張ってる」

エリオ「まあ、適当に」

キャラ「それで行く世界とか決まってるの？」

エリオ「まだだろう」

ルーテシア「うん。この物語は読者がいて初めて始まるから」

キャラ「どっという事？」

ルーテシア「八雲紫が言っていたように、依頼があって初めてエリオは異世界に行く。そして依頼を出すのが」

エリオ「読者って訳か」

キャラ「ある種の読者参加型企画なんだね」

ルーテシア「だから依頼がなければエリオはただ幻想郷でのんびりするだけ」

エリオ「そっちの方が有り難いな」

キャロ「じゃあ皆さん。エリオくんにどんな世界に行ってほしいか教えて下さい」

ルーテシア「原作のないオリジナル世界でもいい。ストーリーのないモンハンのような世界でもいい。コラボだって構わない」

エリオ「異世界じゃなくても幻想郷で異変つてもあるな」

キャロ「作者が知らない作品だと遅れるかも」

ルーテシア「まあ元々メインはこっちじゃないし。更新は気長に待つてほしい」

エリオ「じゃあ次回も見てくださいよ」

ミッション1：挨拶まわり（前書き）

今回は幻想郷の挨拶まわり。

そして言うておきます。キャラ崩壊が激しいです。

ミッション1：挨拶まわり

エリオside

「う、朝か」

ふわぁ〜、よく寝た。久しぶりにゆっくり寝れたよ。

「おはよう」

「ええ、おはようございます。紫さん」

「あらつまらない反応」

紫さんが俺と同じ布団の中にいたけど、これで取り乱してはいけない。というか取り乱さなくなってきた今日この頃。

「藍さんに言いますよ」

「やめて〜。貴方と一緒に寝たなんて知られたら殺されるわ」

「よく言う。で、用は何ですか？」

昨日の今日で早くも依頼が来たのかな。だとしたら頑張らないと。

「沢山の依頼はあるけど、まずは挨拶まわりをしたら？この幻想郷を拠点にする訳だし」

「確かに」

いろいろと会っておきたい人もいるし、意外といい考えかもしれない。今日はそれでいこう。

「じゃあ私は退散するわ」

「ではまた後で」

「ええ」

まずは……無難に博麗神社かな。

という事でやってきました。以前天子のせいで倒壊した時に直すのを手伝ったら異様に立派になってしまった。それでも寶銭箱はボロい。

「あら、エリオじゃない」

「よう、久しぶり」

「あがっていきなさいよ」

「じゃあお邪魔するよ」

彼女は『博麗霊夢』。この神社の巫女にして数々の異変を解決した守銭奴だ。

「今失礼な事考えたわね。五千円賽銭箱に入れなさい」

「流石巫女。やる事が違う」

「何久しぶりに来た友人に金要求してるのよ。久しぶりね、エリオ」

「ようエリオ、わざわざ私に会いに来てくれるなんて嬉しいぜ」

「久しぶり、アリス。魔理沙、それは勘違いだ」

アリスというのは『アリス・マーガトロイド』。人形使いだ。

「それで何しに来たのよ」

「挨拶まわり。これから白玉楼に行く予定だ」

「ふーん、地底の方が早くない？」

「……そうだな」

神社の裏に入り口があるわけだしそっちから先に行くのでしょうか。

「じゃあ早速」

「えー、もっとのんびりしてけよ」

「魔理沙。ここは私の家よ」

「神社つて神様の家だったわよね」

「うっさいわよアリス。私は巫女だからいいの」

「それより酒呑もうよ」

女が三人集まりやなんとやら。つて一人多くないか？

「エリオ、飲み比べする？」

「兄さんに言つて下さいよ」

彼女は『伊吹萃香』さん。見た目は幼女な鬼だ。

「いないからエリオに頼んでるんじゃないか」

兄さんなら鬼とも対等に呑めるんだよな。あの人本当に人間なんだろうか？

「まあ俺は行くから」

「つまんないの」

急性アルコール中毒にはなりたくないですから。

次に着いた場所は幻想郷の地下に存在する地霊殿。

「さとりさん、いますか？」

「あら、貴方が来るなんて珍しい」

彼女の名前は『古明地さとり』。心を読むさとりの妖怪だ。

「お空とお燐はいませんよ」

「そうですか」

お空とお燐というのは『霊鳥路空』と『火焰猫燐』というさとりさんのペットだ。

「エーリッオー!!」

ズドンッ

「がはっ!?!」

「じ、じいしー!?!」

「あ、ごめんごめん」

「いや、鍛えてるから問題ない」

「今後ろから突撃してきたのはさとりさんの妹の『古明地こいし』。無意識を操る能力のせいで気配がよく解らん。なのはさんなら勘で見つけるんだけど。」

「じゃあそろそろ行きます」

「えー、来たばかりじゃん」

「こいし。彼は今、挨拶まわり中ですから。会いたければ人里に行きなさい」

「代弁ありがとうございます」

「あ、私ったらつい」

「気にしてませんよ」

「さとりさんが心を読んで先に言ってしまう事があるのは分かってるし。普段生活しているとその程度何？って感じだし。寧ろ有り難い？」

「相変わらず貴方達の思考はおかしいですね」

「毒されていますから。では」

お次は白玉楼に来たよ。と言いたいんだが、まずこの馬鹿みたいに長い階段を上がないとな。

「一丁行きますか!!」

「あたいが手伝ってあげるよ」

「はい？」

気がつくとも目の前に白玉楼がありました。こんな事出来るのは限られるし、今の声は。

「小町さんか」

「だからさん付けはしなくていいって」

「あ、そうだったな」

彼女は『小野塚小町』。距離を操る能力を持つ死神だ。今俺らが一瞬で白玉楼まで来たのも彼女が階段の距離を無くしたからだろう。

「みんな待ってるよ」

「みんな？小町がいるって事は映姫さんもいるんだろ？」

「まあね」

映姫さんていうのはフルネームは『四季映姫』。小町の上司の閻魔様だ。

「さあ行くよ」

「はいはい」

「いらっしやいエリオさん」

「元気そうだな、妖夢」

「あら、私は無視？」

「そんな事ありませんよ、幽々子さん」

この二人は白玉楼の主である『西行寺幽々子』さんと、その従者で庭師の『魂魄妖夢』だ。妖夢とはよく試合もしたな。ちなみにそうやって試合をしてる間に妖夢に恋愛感情が生まれたとか。

「いい加減死んで妖夢の夫にでもなりなさいな」

「ゆ、幽々子様!？」

「貴女は何を言っているのですか」

ズビシッ

「あたっ」

「映姫さん、お久しぶりです」

「久しぶりですねエリオくん。貴方には女性関係についていろいろ
言いたいですが、今回はやめておきましょう」

「有り難いです」

映姫さんの説教は長いんだよな。しかも本題以外にも別方面にズレ
る事もしばしば。

「分かる。分かるよエリオ」

「エリオくん、小町、やはりお話ししましょうか？」

「滅相もありません」

とつか何故二人共俺の考えが読める。まさか、さとの能力に目
覚めたか!？」

「貴方の顔に書いてあるのよ」

「あ、紫さん。貴女がいるって事は……」

「私もいるよ!!!」

「……橙だけ？」

ああ、良かった。紫さんがいるから藍さんまでいるかと。あ、藍さんていうのは紫さんの式の九尾の狐である。『八雲藍』さん。『橙』はその藍さんの式である。つまり紫さんの式の式。読み方はちえんだ。

「それにしても藍さんがいないとは珍「此処にいるじゃないか!!!」ギャー!!!」

「逃げるな逃げるな」

「ええい!! エリオを離せ!!」

「フフン、自分が出来ないからって僻むなよ、妖夢」

俺は藍さんが苦手だ。昔、幻想入りした時、幻想郷の常識を教えてくださいたのは慧音さんだが、住まいを与えてくれたのは紫さんだ。そこで俺は藍さんに子供のよう扱われていたのだけど、いつの間にか弟のように、そして男として段々と扱いが変わっていった。男として扱われるようになる何かが弾けたらしく貞操を狙われるように。というか初めては藍さんに取られました。

「斬るぞ!!」

「そんなにエリオが欲しいならその体で誘惑すればいいだろう? あ

あ、そんな技だけでなく体も半人前な妖夢には無理か」

「……………」

カチャ

「ふふふ」

スッ

「エリオくん、今は逃げなさい」

「そうですね、映姫さん」

俺にとって一番安定な（安心ではない）紅魔館に逃げよう。

「という事で逃げて来ました」

「紅魔館は避難所じゃないのよ」

「挨拶まわりも兼ねまして」

今、話をしているのは紅魔館の主にして吸血鬼の少女、『レミリア』

スカーレット』さん。

「どうせなら要を連れて来なさいな。フランが手加減しないで遊べるのはあの変人だけなんだから」

「ハハハ……」

変人て……確かにフランと遊べるのは兄さんくらいだけだよ。フランていうのは『フランドール・スカーレット』。レミリアさんの妹にしてあらゆる物を破壊する能力を持つ。何故か兄さんには効かないんだよ。多分O R Tのせいだろう。

「パチュリーさんに会っていった方がいいですかね？」

「パチュリー様は今はお休み中ですのでお邪魔しない方がよろしいかと」

「そうですね。分かりました咲夜さん」

突然現れた人は紅魔館のメイド長の『十六夜咲夜』さん。時を操る能力の持ち主だ。パチュリーさんはフルネームは『パチュリー・ノールレッジ』。七曜の魔女と言われている。

「それじゃあもう行きます」

「ああ待ちなさい。血を置いていきなさい」

「血は置くとは言わないでしょう」

まあ血程度なら肉でも食べれば勝手に増えるし。献血気分で渡せば。

「咲夜さん、お願いします」

「では失礼します」

咲夜さんに注射器で血を抜いてもらう。どうもレミリアさんは血を吸うのが苦手らしい。

「終わりました。紅茶をどうぞ」

「ありがとうございます」

次はどこに行くのでしょうか。

「んー、山はいい」

やってきたのは妖怪の山。目的地は山頂付近にある守矢神社。

「おや、エリオじゃありませんか。帰って来ていたんですね」

「文さんこんにちは」

彼女は『射命丸文』さん。今更説明はいらなかな。とりあえず説明すると鴉天狗の新聞記者だ。

「取材をしても？」

「走りながらで良ければ」

「では」

ダツ バサツ

俺は地を駆け、文さんは宙を舞う。木を縫うように移動を続ける。

「成る程……………では……………」

「はい……………ああ、違います……………ええ」

取材はちゃんと受けてるよ。っと到着。

「もう少ししたかったですけど仕方ありませんね」

「人里にでも来て下さい。お答えします」

「ではそうしましょう。また」

さてと、守矢神社に着いたはいいが、誰かいるのかな。

「すみません」

「おお？エリオじゃないか。遂に早苗を嫁に貰いに来たのかい？」

「違います。挨拶まわりです」

目の前に現れた注連縄を背負った女性は『八坂神奈子』さん。この守矢神社の神様の一人だ。もう一人の神様は『洩矢諏訪子』さん。少女の姿をして目の付いた変わった帽子を被っている。そして早苗というのはこの神社の巫女の『東風谷早苗』の事だ。

「二人共今日はお出掛けだよ」

「そうですね。なら俺が来たと伝えといて下さい」

「分かったよ。で、早苗の旦那になる気は？」

「今はありませんよ」

「そうか。今はだな」

神奈子さんもしつこいもんだ。まあ早苗にさつさと男を作って欲しいんだろう。

残りは二つくらい。まずは……

「相変わらずの竹林だな」

俺が向かっているのはかぐや姫こと『蓬莱山輝夜』さんの住む永遠亭。その前には深い深い竹林がある。

「慣れれば迷わないんだけど」

それに最近じゃ永遠亭にいる天才医師『八意永淋』さんに治療してもらう一般人のため、案内板が設置されている。一昔前は迷いの竹林なんて呼ばれてたのに。でも今でも一歩道を外せば迷える事間違いないし。

「迷わないけどね」

今更俺が迷ったら笑われちまう。

普通に着いたな。うん、途中近道したら畏が大量にあっただけど気になる事じゃないな。

「お邪魔します」

「ん？エリオ？」

「てめっ!！」

グシッ

「痛っ!?!何するのや!！」

「罨を作り過ぎだ。一般人が掛かったらどうするんだよ」

「普通の道じゃないからいいでしょう」

こいつは『因幡てめ』。兎の妖怪で、途中の罨を作ったのもこいつだ。

「みんなは?」

「お師匠様達は薬売り。姫様は寝てるよ」

「うーん、みんな出掛けてるな。まあいいや。俺が来たというのを伝えといてくれるな?」

「そのくらいなら。今度人参頂戴よ」

「あいよ」

ラストは命蓮寺だな。遅いけど幸い人里に近い。寄っても家にはすぐに帰れるな。

「こんばんは」

「エリオくん？久しぶりね」

「お久しぶりです、白蓮さん」

この人は命蓮寺の主の『聖白蓮』さん。いい人だ。とにかくいい人だ。

「幻想郷に来たんですね」

「はい。昨日来まして、今日は挨拶まわりです」

「聖」

「どうしました？星」

「あ、え、ええ、エリオ!？」

「元気そうだな、星」

この虎っぽい格好してるのは毘沙門天の弟子『寅丸星』。星と書いてしょうと読む。

「それで、白蓮さんに用事があるんじゃないか？」

「あ、そうでした。鑑定用の眼鏡を探しているんですけど」

「……その頭に乗っているものは？」

「え？頭つて、あ！？」

「ハハハ、星は変わらないな」

「むう／＼／＼」

どこか、というか大体抜けてるんだよな、星の奴。

「他は、布教中ですか？」

「そうですよ」

「そうですか。ではこの辺で」

「え！？もう！？」

「人里にいるから会いたければ来い」

「だ、だ、誰が会いたいと！？」

「正直だなあ」

「正直ですなあ」

「聖まで〜!!」

星弄りは面白い。

「ただいま」

と言っても誰もいな「お帰りなさい」……。

「ご飯（私）にしますか？（私と）お風呂にしますか？それとも」

「間違えました」

「そんな事言わないで下さい〜!!」

「離せ!!」

こいつが守矢神社の巫女の早苗だ。以前はこんな事するような奴じやなかったが、妖怪退治をやり始めて何かに目覚めだした。

「藍さんよりマシでしょう!!」

「その名を出すな!! 玄関からひよっこり「呼んだか？」ギャー!

「出たー!!」

どうする。前門の巫女、後門の九尾。万事休すか!?

「まだまだ!!雷神・纏!!」

俺は脚に電気を帯びさせる。これにより脚力が一気に上がる。

「逃がすか!!」

「させません!!」

「逃げる!!奥義!!」

―電光石火之逃走劇―

俺は逃げ切った。何よりも速く走り、あの色欲魔達から逃げ切った。でもそのせいで野宿だった。

ミッション1：挨拶まわり（後書き）

エリオ「ふう」

キャロ「賢者モード？」

エリオ「ある意味間違いではないな」

ルーテシア「皆様、沢山の依頼ありがとう」

エリオ「意外と多かつたな」

キャロ「コラボ系もあつたしね」

ルーテシア「作者が知らないのもあつたけど」

エリオ「とりあえず今ある依頼からいろいろ選ばせてもらいます」

キャロ「幻想郷で出来る依頼もあつたからね」

ルーテシア「エリオ。今回出た技の説明したら？」

エリオ「そうだな。まずは『雷神・纏』。これは体に電気を帯びさせて能力を上げるものだ。全身にまんべんなく纏うより、一部の方が効果は高い」

キャロ「もう一つは？」

エリオ「『電光石火之逃走劇』だな。俺の奥義の逃げ技だ。まず捕

まる事はない」

ルーテシア「カッコ悪い」

エリオ「お前から逃げるために開発したんだからね!？」

キャロ「エリオくんは幻想郷で、魔理沙さん、妖夢ちゃん、早苗さん、藍さん、星さんを落としてるよ」

エリオ「どうでもいい情報を流すな」

ルーテシア「また次回も見てね」

ミッション2：暴走！！非想天則！！（前書き）

非想天則とは巨大ロボットである。

ミッション2：暴走！！非想天則！！

諏訪子 side

ふっふっふ、ようやくここまで辿り着いたわ。

私の目の前にそびえ立つのは非想天則。以前のアドバルーンのような張りぼてではなく、まさに本物のロボットである。

「ありがとう、にとりを始めとする河童諸君。君達のおかげで真の非想天則は完成した！！」

『うおおおおお！！！！』

「さあ空！！コクピットに座って！！」

「うにゅ？うにゅ？」

「そっそっ」

この娘は本当に扱い易いわ。まあちょっと頭が弱いのが難点なんだけどね。

「これでいい？」

「はいはい。あ、シートベルトは締めようね」

「シューとべるとっ」

「これこれ、カチッと」

準備完了。空の核融合の力を使えば非想天則のエネルギーは十二分に賄える。そして非想天則に憧れた人、珍しがった人が守矢神社へ見に来るはず！！そうすれば信仰もアップ！！

「さあ空！！力使っているよ！！」

「うん！！」

お、お、おおおお！！動いた！！動いたよ！！これで早苗も大喜び！！

「洩矢様！！」

「どろしたの？河童くん」

「制御出来ません！！」

「……え？」

「うにゅうううう！！？」

しまった！！空が能力をどれくらい操れるかってのを計算に入れてなかった！！

「みんな！！逃げろ！！というか空は力を止める！！」

『うわあああああ！！？』

「うにゅうううう！！？」

聞こえてないし。

エリオside

《相棒、朝だ。起きな》

「……………おう」

眠い。とても眠い。俺って低血圧だったかな？

《ちなみに今は午前5時だ》

「はええよ!!」

《ついでに言うならこの家に客が来てる》

何？こんなに朝早くから？藍さん辺りなら間違いなく襲われている。っていうか気づくな。となると早苗も無し。

トントント

包丁の音？料理作ってるのか？解ったぞ。妖夢だな。

「おーい、妖、む？」

「あ、おはようございます、エリオ」

「なんだ星か」

「なんだ、って酷くありません？」

よく考えたら妖夢は幽々子さんの料理を作らないと駄目だからこんな早くから来るはずないか。

「悪いな、早くから」

「いえ」

「料理って出来たっけ？」

「……………」

「……………手伝っよ」

「いいですよ!!」

心配だ。そんなに料理が得意な訳じゃないんだが、出来ない事もないからな。手伝っしかない。

「ストラーダ、包丁モード」

《ハハハ、そんなもの》

シャキーン

《なれたあああ！？》

甘いぞストラーダ。お前は日夜改造されているのだ。

「「いただきます」」

今日の朝食は釜炊きご飯に焼き魚、味噌汁にたくあんだ。魚がちよつと焦げたのは「ご愛嬌」。

「ちよつと味噌汁が薄かったかな」

「……」

「どうした？」

「私一人じゃこんなの作れないな、って」

「料理なんて練習すればある程度は出来る。頑張れ」

「はい」

俺だって初めは出来なかったけど、今じゃ一人暮らしでも問題ない程度には出来る。デザートに関しては異常に作らされたから上手くなったがな。

「そっぴいや最近の幻想郷はどうなんだ？」

「平凡ですよ。異変もありませんし」

ズーン　ズーン　ズーン

「な、何だ！？」

「地震！？」

「違う！！何かデカいのが動いてる！！」

急いで外に出ると、そこには一昔前の戦隊物のロボットのようなのが動いていた。あれって、非想天則とかいう宣伝用張りぼてじゃ。

「……改めて訊く。最近の幻想郷はどうなんだ？」

「……平凡でした。異変もありませんでしたし」

はあ、適当に倒してくるとしようかな。

「人里の方は頼むぞ」

「はい!!」

「星一人だと心配だな」

「聖達と一緒にやります!!」

「くくつ、それなら安心だ。ストラダー!!」

《おつよ!!》

「《セットアップ!!》」

俺は人里を飛び出し、非想天則へと走っていった。

霊夢 side

あーもう!!何なのよこれ!!

「早苗!!あんたんこの神様の仕業でしょ!!何とかしなさい!!」

「そんな事言われましても。私だって知ったのさっきですし」

「「ちやちや言ってる暇はなさそうだぜ!!」

デカブツが腕を振り回す。当たるつもりはないけど、こんな大きな腕が当たりでもしたら……

「考えただけでも恐ろしい」

「霊夢さん!! 危ない!!」

「ふんっ!! この程度」

ブンッ

「隙有り!! 霊符『夢想封印』!!」

私は色とりどりの霊力の玉をいくつか作り出してデカブツにぶつける。けど少し表面が凹んでいる程度だった。

「嘘……」

「ぼさつとするな!!」

ドンッ

横から魔理沙に突き飛ばされる。そこへデカブツの拳が振り下ろされた。

「魔理沙!?!」

「逃げて!!」

でもいくら魔理沙でも逃げ切れないだろう。私が目を背けそうになった瞬間。

ドガアアアン

魔理沙の姿が消え、デカブツの腕が吹っ飛んだ。

「え？」

「ど、どこですか!？」

「こつちだ」

声がる方を見ると、木の上に立ち、魔理沙を抱えているエリオがいた。

エリオside

危ない危ない。魔理沙も無茶をする。

「魔理沙、大丈夫か？」

「あ、うん／＼」

「エリオよくやった!!」

「怪我はありませんか!？」

「ああ」

早苗がいるって事は、守矢神社の犯行じゃないのか？

「しかし随分いいタイミングだったわね」

「全速力で何とか間に合ったよ」

言えやしない。本当は三人の成長を見るために影に隠れてたなんて。

「とにかく、破壊するー!!」

「待って下さいー!!あの中に空さんがー!!」

「何!?!」

厄介な事をしてくれる。それなら四肢をぶっ壊す!!

「ストラーダー!!一気に叩き伏せるぞー!!」

《任せなー!!》

まずは脚を粉碎する。片足壊せば動きも止まるだろう。

「打ち砕くー!!カートリッジロードー!!」

《ロードカートリッジ》

俺は非想天則の関節部分にストラーダを突っ込んで魔力爆発を起こした。

「うにゅ!?!」

あ、お空の声が聞こえた。本当に入ってるんだな。

「今出してやるからな!!大神宣言!!」

《グングニル》

俺がストラダを投げると、ストラダはホーミングをしてもう片方の脚の関節を穿った。ストラダはそのまま俺の手に戻ってきた。

「最後はもう片方の腕か」

《なあ相棒よ》

「どした?」

《ショートさせた方が早くなかったか?》

「……その考えはなかった」

《おい》

まあ今からでも遅くはないだろう。

「く〜ら〜え〜。雷撃〜」

《やる気ねえな》

まあそれはしょうがない。だけどすっかりショートさせたのだから問題ない。

「よっ、いい、しょー！ー！」

バキィ

「うう〜」

コクピットと思われる部分をこじ開けると、そこには目をぐるぐる回したお空が入っていた。

「さっさとさとりさんに届けるか」

この後、俺はお空をさとりさんの所へ届け、元凶である諏訪子さんは神奈子さんにごつてりと絞られたそう。守矢神社の信仰の方も心配だったが、被害が殆どなかったおかげで問題なかった。ただ今回の件で最も得をしたのは人里を守った命蓮寺だった。

「ほらエリオ、きのこ炒め作ったぞ」

「サンキュー、魔理沙」

ちなみに今魔理沙はお礼として夕飯を作ってくれている。有り難いね、全く。

「じゃあ食べようぜ」

「おう」

今日はちょっと刺激的な1日だったな。

ミッション2：暴走！！非想天則！！（後書き）

エリオ「はい終わりました」

キャロ「お疲れ様」

ルーテシア「依頼が増えたね」

エリオ「どんどん消化しないとな」

キャロ「今回は諏訪子さんが暴走したね」

ルーテシア「実際に暴走したのは非想天則だけど、諏訪子の暴走が無ければそれもなかったしね」

エリオ「ああ。一番の被害者はお空かな」

キャロ「そういえば依頼はまず幻想郷で出来る事をこなすらしいよ」

エリオ「となると、コラボか」

ルーテシア「異世界に行くのは全く知らない作品があったからね。まずはそうするのが賢明」

エリオ「どんな作品でもいいなんて言うから」

キャロ「本当、どうするんだろ」

エリオ「下手したらやらなさそうだな」

ルーテシア「依頼があった世界の中からアンケートで選ぶっていうのもありだね」

エリオ「ともかく、今回は早速コラボだ」

キャロ「お相手は葵（仮）様」

ルーテシア「次回も見てね」

ミッション3…遊び相手？(前書き)

葵(仮)様とのコラボ。
旧作キャラも出るよ。

ミッション3：遊び相手？

霞side

「貴女が依頼を出した人ね？」

えっと、いきなり目の前の空間に裂け目が出来て女の人が出てきました。ってというかこの人、八雲紫だよな。

「依頼って？」

「遊びたいって言ったでしょう？それを叶えてあげる」

「そんな事言っただけ？」

「言ったわ。では幻想郷にご招待」

私の足元にスキマが開いて、私は落とされた。うわ、目がいっぱい。こっち見んな。

「幻想郷に行ったら人里にいるエリオに会いなさい」

「エリオ？」

エリオって、リリカルなのはエリオ？何で幻想郷に？

「おっと」

いきなり放り出されたけど着地成功。とにかく人里を目指して「こ

「んにちわはー」いきなり遭遇ですか？
私の前には黒い球体から顔だけ出した金髪の少女がいる。ルーミア
よね。

「貴女は食べれる人類？」

「貴女は食べれる妖怪？」

「私？うん」

やばい、可愛い。これお持ち帰りしたい。

「ルーミア見つけた！！って人間？」

「見つかったやつたー」

「人間よ」

出てきたのは緑色の髪に触角の生えたボーイッシュな子。リグルね。
二次とかだと男の娘っぽい事やらされてるけど、可愛い女の子じゃ
ない。

「貴女達エリオくんって知ってる？」

「エリオを知ってるの？」

「会わなきゃいけないの」

「エリオなら人里だよ。あっち」

「ありがとう」

妖怪って外界から来た人間は食べてもいいとか聞いた事があるけど、エリオがそれだけ影響力があるのかな？会えば分かるか。

エリオside

「おはよう、エリオ」

「お昼ですよ、紫さん」

「私はさっき起きたからおはようなの」

どういつ持論だよ。この人だから通用するけどさ。

「今日は依頼で人が来てるからよろしくね？」

「いきなりですね。ともかく了解しました」

「理解が早くて助かるわ。すぐ来ると思うから」

誰が来るんだろ。楽な人だといいいけどな。ストレスが溜まるよう

な人の相手は嫌だな。だけどそういう人が虐めるのって基本兄さんなんだよね。

「すみませ〜ん、エリオくんっていますか？」

「はい、いますよ」

早速入ってきたのは白銀の髪をした女性。俺を見てキョトンとしてるけど、どうしたんだ？

「エリオくん？おつきくない」

おつきく？

「ああ、多分貴女の考えてるのはJS事件の頃の俺でしょう。という事は転生者ですね」

「転生者とか普通に言っつて、貴方憑依者？」

「転生者に鍛えられただけで、俺は貴女達風に言えば原作キャラですよ」

「転生者って誰よ」

「知ってるかどうか知りませんが、一条要です」

「要くん!？」

あ、知ってた。やっぱり兄さんは有名だな。知らない人があんまりいないもんな。だからDSな人に見つかって胃痛になるんだよ。

「でも要くんて麻帆良にいるよね？なのはちゃんとかと一緒に」

麻帆良？知らない名前だな。それになのはさん達と一緒に。何かおかしいような。

「いろいろ訊いてもいいですか？」

「うん」

成る程、未来か。兄さんは何処でもトラブルに巻き込まれるようだ。

「慌てないね」

「過去の、しかも性別が違う自分に会った事だってあるんですよ」

「そりゃ慌てないわ」

「で、依頼は？」

「遊びたい」

遊びたいとはこれいかに。下手に戦いたいとか、協力して戦おうとかよりマシ、いやこっちの方が考え方によっては面倒かもしれない。

「何処行きます?」

「お化けとか見たいから、白玉楼!」

「バケバケがいますよ」

「そんな毛玉並みの雑魚はいいわ」

幻想郷の名物なのに、バケバケと毛玉。

「というかお化けだったら博霊神社にいますよ?」

「博霊神社にいたかしら?」

「魅魔さんが」

「魅魔様!?!いるの!?!」

やっぱり知ってるんだな。転生者に幻想郷は有名所らしいし。そのの住民も知ってるよな。

「行こう!?!是非行こう!?!」

「はいはい、なら付いて来て下さい。っと自己紹介を忘れていました。エリオ・モンディアルです」

「霧雨霞よ」

霞 side

此処があのお博霊神社か。思ったより廃れてないわね。

「霊夢、いるか？」

「何よ」

本物の腋巫女だ。あの服って何で腕の部分が落ちないのかしら？

「魅魔さんはいるか？」

「魅魔？何だよ」

「彼女が会いたいんだとさ」

「よろしくね」

「ふーん」

なんだかスッゴいジト目で見られてる。やっぱり怪しいのかな？

「霊夢」

「何よ」

「眠いんだろ」

「うん」

そんだけかい！！博霊の巫女、いきなり現れて魅魔様に会いたいなんで怪しさ満載の事言う奴を警戒しなくていいんかい！！まあ私としては有り難いけどね。

「寝てなよ。魅魔さんはこっちで探しておく」

「うん」

さて、魅魔様は何処にいるかしら？博霊神社にいるなら中に……

「見てるわね」

「貴女も気づきましたか。魅魔さん、出てきて下さい」

「おやバレたかい」

緑色の長髪にとんがり帽子、三日月の刃の付いた杖、足は無し。本物の魅魔様だ。

「初めまして……！」

「はい初めまして」

「魅魔さん、元気そうですね。博霊神社に居着いていて大丈夫かと毎回思われますよ」

「ハツハツハ、あたしを何だと思ってるんだい？」

「悪霊」

「あゝ、うん」

「忘れていましたね。自分が悪霊というのを忘れていました」

「いや、まあその」

うん、魅魔様らしい。それにしても旧作キャラまでいるんだな。この幻想郷すでに楽しいな。

「それで、お嬢ちゃんは何の用だい？」

「あ、ただ会ってみただけ」

「なんだそんな事かい。じゃあちよつと話でもしようか。最近話し相手がいなくて暇なんだよ」

気さくだ。原作通りの人、いや悪霊だ。まあ原作通りじゃない人なんて……

「ん？俺の顔に何か？」

「別に」

此処にいたね。原作通りならどう考えても将来こんな存在になるはずもない。

「楽しかったですか？」

「良かったわ」

話したただけだけど魅魔様の良さが伝わったわ。

「次は何処行きます？」

「結構話し込んだからね。あんまり時間を掛けずに遊びたいわね」

「なら、食事にしますか」

食事？何処かいいお店でもあるのかしら？

「こっちですよ」

エリオくんについて行くと、森の中に入っていった。森の中にお店？

「ここですよ」

屋台ね。ヤツメウナギって書いてあるって事はみすちーのお店か。

「やってるかい？」

「あ、エリオ。今仕込みが終わった所だよ」

「ならいいかな？」

「うん、あれ？そっちの人は？」

「霞よ。よろしく」

「彼女さん？藍さんが怒るよ」

「そんなんじゃない。単に幻想郷を案内しているだけだ」

ほほう、このエリオくんは藍しゃまにフラグを立ててる訳か。

「じゃあちよつと待っててね。すぐに焼くから」

そう言ってみすちーはウナギを焼き始める。いい匂いね。

「霞さんは、人生楽しいですか？」

「そうね。いろいろあるけど楽しい人生よ」

「そうですか。人生を楽しむのはいいものですね」

変な奴ね。私より年下なのにそんな偉そうな事言っちゃって。

「はい出来ましたよ」

「美味しそ〜」

「流石はミスティアだな」

ヤツメウナギなんて初めてだったけど結構美味しいわね。流石の女将すちー。

「今日は早いじゃないか」

「お、エリオをいんのか。ヨッシャ飲むぞー！そのねーちゃんも一緒になー！」

いろいろと名無しの妖怪が集まってきて宴会が始まった。そんな中でもエリオくんは中心にいた。あのいろんなものを惹きつけるのは要くんそっくりだわ。

「霞さん、飲んでますか？」

「結構ね」

さあ宴会を楽しむとしましょう。

「結構飲んでましたけど、大丈夫ですか？」

「アルコールは即分解したから大丈夫よ」

そうでもしないと急性アルコール中毒になるかもしれないじゃない。

「でもエリオくんはそんな事してないでしょ？」

「自分のペースで飲んでましたから。さて霞さん。依頼はこれで？」

「十分よ。楽しかったわ」

「そう、良かったわね」

おおっ、ゆかりん。またいきなり現れたわね。

「じゃあ帰すわよ」

「お願い」

「霞さん、また」

「ええ、また」

私はそれだけ言うとスキマに落とされたけど、やっぱりこれ苦手だ

わ。目玉、こっち見んな。

ミッション3：遊び相手？（後書き）

エリオ「終わった」

キャロ「お疲れ様」

ルーテシア「まだまだコラボは続くから頑張って」

エリオ「次はなっぺ様か」

キャロ「フラグはどうするの？」

エリオ「なっぺ様がやってほしいならやるかもしれないってさ」

ルーテシア「その時は誰がいいか教えて。指定がないならいいけど」

キャロ「ではここからは私達の管理局の日常をどうぞ」

エリオ「なんで？」

ルーテシア「腐った管理局が多い二次創作でも別方面に腐った（？）うちの管理局を見せるだけ」

キャロ「ではどうぞ」

ほのぼの(?) 管理局

A「エリオさんが消えたって」

B「今度は何人にフラグ立てて帰ってくるか賭けようぜ」

A「5人」

B「3人」

C「大穴の無し」

A・B「「ねーよ」」

隊長「お前ら働け!!」

A・B・C「「隊長が一番勝ってるくせに」」

隊長「まあそうなんだが」

『けーほーけーほー。犯罪だにゃー』(CV:若本)

A「あ、仕事だ」

B「この警報誰が作ったんだよ」

C「こんなかの誰かじゃね？」

隊長「……………」

A・B・C「「あんたか！」「」

隊長「う、五月蠅い！！」

A「何がやねん！！」

B「いくぞC！！」

C「おつよ！！」

B・C「「Wリアット！！」」「」

隊長「あぶらなっ！？」

A「さっさと仕事すませよつぜ」

B「この仕事が終わったら俺、告白するんだ」

C「死亡フラグはいいから」

A「ヨッシャ！！さっさと犯罪撲滅だ！！」

B・C「「応！！」」「」

キャロ「とある部隊の日常でした」

エリオ「隊長働け」

ルーテシア「あれを喰らったら働けない」

キャロ「みんな犯罪は無くすために頑張るけど日常がね」

エリオ「酷いな」

ルーテシア「では次回もお楽しみに」

ミッション4…どうあがいても無駄な事(前書き)

なっぺ様とのコラボ。

人生にはどうにもならない事もある。

ミッション4…どうあがいても無駄な事

吼太side

逃げなければ、逃げなければ!!

「コータくん？」

「隠れてないで出てきて〜。気持ちいい事するだけだから〜」

なのは達に絞り殺される!!

「依頼を出したのは貴方かしら？」

「うおっ!?! 誰だ!?!」

「八雲紫よ。それで、あの子達から逃げたいって依頼を出したのは貴方？」

そんなのいつ出したかなんて知らないが、今あいつらから逃げられるなら。

「見つけた!!」

「ちっ! 頼む!!」

「ふふふ、ではご案内」

次元に裂け目が出来てそこへ落とされた。これ何処に行くんだろ。

といつか紫の空間に目玉というのが気持ち悪いんだが。

エリオside

「えっさほいさ」

俺は現在畑仕事中。暇な時は人里の皆さんへのお手伝いは忘れませ
ん。

《相棒》

「何だストラーダ」

《何で俺が鋤になってんだ!!》

「大丈夫だ。秋になったら鎌になって稲刈りだ」

《何が大丈夫なんだ!!》

皆さんの役に立つんだからギャーギャー言つなよ。男らしくない。

「エリオー、休憩だよー」

「はい」

「はい、お茶とおむすび」

「ありがとうございます」

はあ、のんびり出来る。「こういつ時間ていうのは大事にしたいね。

「いてっ！！？」

ドサッ

「んあ？」

いきなり空から人が降ってきた。ってこの人は。

「吼太さん！！」

「え？誰？」

「エリオですよ。要兄さんの所の」

「……なんで大きいんだ？」

「吼太さんが成長しないからそう見えるんですよ」

「ああ成る程、ってそんな訳あるか！！」

いいッッコミだ。じゃあ説明するとしよう。

「俺は」S事件から10年経ったエリオです」

「へー」

「吼太さんはどうして此処に？」

「なのは達から逃げてきた」

「そうですね」

まあフラグ王ですからしょうがないですよ。フラグ神とかに比べたらきつと遥かにマシですよ。そくに違いはない。まだフラグ王なんですから。

「物凄い失礼な事考えなかったか？」

「はい」

「そこは嘘でもいいえって言えよ!!」

いいツツコミだ。流石は吼太さん。

「今日は仕事あがりますね」

「あいよ、ご苦労さん」

「なあエリオ、此処は何処だ？」

「幻想郷です」

吼太 side

「どうやらこの世界は忘れられたものとかが集まって出来た世界らしい。たまに俺みたいのが入る事もあるようだ。それらを幻想入りと言っらしい。」

「帰りたいならいつでも言っして下さい」

「まあ今日1日は滞在するよ」

「今帰ってもあいつらに襲われるだけだしな。ほとぼりが冷めるまで待とう。」

「どうせだからいろいろ見て回りましょつか」

「じゃあ案内を頼む」

「ならあそこに行きますか。ついて来て下さい」

「エリオについて行くと森の中に入り、森の更に奥、そこにポツンとあるお店に着いた。」

「香霖堂？」

「いろいろ面白いものがありますよ。お邪魔します」

中は随分ごちゃごちゃしているな。片付いてはいるんだが、如何せん物の数や種類が多すぎる。

「いらっしやい、エリオ。そっちは？」

「兄さんの友人の吉谷吼太さん。吼太さん、こちらは香霖堂の店主の森近霖之助さん」

「よろしく吼太、くん？霖之助と呼んでくれ」

「よろしくお願いします、霖之助さん」

ちょっとどもって疑問系だったけど名前から男と判断してくれたんだろう。いい人だ。それにしても此処にあるのも全部この人が集めたのかな？

「お、PCエンジンじゃん」

懐かしいなんてレベルじゃないぞ。今の子供は知らねえだろ。成る程、忘れられた物が幻想郷に入るってのはこういう事か。

「おや、それが解るのかい？」

「まあ、多少は」

どんなソフトがあるとかはさっぱりだけど。

「霖之助さん、いる?」

「お邪魔します」

「おや、また珍しい」

店に入ってきたのは金髪で赤いカチューシャを付けて浮いてる人形を連れた女性と、薄紫の髪で、髪を一束だけ纏めている女性。

「アリスに神綺さん。こんにちは」

「あらエリオ、こんにちは」

「エリオじゃない!!久しぶりね」

神綺という方の女性の髪束がピコピコ動いているんだが、あれはアホ毛か何かだったのか?

「そっちの女の子は?」

「兄さんの友人の吉谷吼太さん。男ですよ」

「えー!?そんなに可愛いのに!?!」

「神綺さん、事実でも言っつては」

「エリオ……」

「すみません。つい本音が」

この野郎。イイ性格になったじゃねえか。いつかぶっ飛ばす。

「エリオがいると賑やかだね。さてアリス、何か用があるんじゃないのかい？」

「あ、そうだった。新しいお茶とかないかしら？茶葉が切れたからついでにと思って」

「少し待ってくれ」

お茶まであるのか。本当に何でもありそうだな。ただ古いものばかりだけど。

「これ何かしら？」

「お母さん、あんまり物を触らないでよ」

「大丈夫よ」

グラッ

！？ マズい！！

「危ない！！」

「え？きやつ！！？」

神綺さんが触っていた棚の上から物が崩れ落ちてきた。それに気づ

いた俺は神綺さんの上に覆い被さるように飛びかかった。

ガラガラガラッ

「お母さん!？」

「吼太さん、生きてますね？」

「多少は心配しろ。年上を敬え」

物を押し返して顔を出す。ちよつと痛かったな。

「神綺さん、怪我はありませんか？」

「え、ええ。でも貴方は」

「この程度で怪我するような鍛え方してません。女性に傷が付く方が大変ですよ」

「ありがと／＼／＼」

「流石はフラグ王。お見事」

エリオ、脳天にギガドリルぶち込んだる。いつ俺がフラグを立てたと言っんだ。本当に失礼な奴だ。

「今日はすまなかつたね。アリスは茶葉をタダにしておくよ」

「ちゃんと整頓してよね霖之助さん」

「吼太くんにはこれを」

「本？」

かなりの魔力を持つてるみたいだな。魔導書かな。

「霖之助さん！？これ何処で！？」

「ん？エリオ解るのか？」

「解るも何も、それは『大奥義書』と言って、『大いなる教本』や『グラン・グリモワール』、『赤い竜』とも呼ばれる最上級の魔導書ですよ！..!」

うへっ、大層な代物だったんだな。

「こんなもの貰っても？」

「構わないよ。置いといても魔理沙に持って行かれるだけだからね」

なら有り難く頂いところかな。いい貰い物した。

「吼太くん」

「何ですか？神綺さん」

「今日、良ければお夕飯作ってあげようか？」

「お母さん……ご飯作れたの？」

「アリスちゃん酷いわ！！」

「じゃあお願いします」

遠慮したら逆に悪いしな。ここは甘えさせてもらおう。

「じゃあ行きましょう。アリスちゃん、行くわよ！！」

「はいはい」

「キッチンなら俺の家のを使っていいですよ」

「ありがとうエリオ」

神綺さんのご飯はなかなか美味かった。エリオもアリスさんも驚いてたけど。そして食後の会話の時、それは起こった。

「ねえ吼太くん」

「何ですか？」

「アリスちゃんのパパになる気はない？」

「ブーーーーッ!!!?」

俺とアリスさんは飲んでいたお茶を嘔いてしまった。いきなり娘の前で何を言ってるんだこの人。

「……神綺さん」

「何かしらエリオ。私は本気よ」

エリオ！何か言ってくれ！！

「吼太さんのラバーズは競争率が高いですから気をつけて」

「頑張るわ!!」

「何応援してる!!」

このエリオは何を言っている。何がしたい。俺をどうしたい!!

「吼太くん。こんなオバサンじゃ嫌？」

「いやいや、凄く若いですよ」

「なら一晩だけでいいから思い出頂戴」

「お母さん自重して!!--」

ここはしつかり断らないとお互いのためにならないし。でも神綺さんを傷つけちゃうだろうし。

「時間よ」

空間に裂け目が出来てそこから紫さんが出てくる。やった!!--これで逃れれる!!--

「.....ごめんなさい。空気読まなかったわね」

「帰らないで!!--」

なんとか紫さんに元の世界へ帰してもらった。あのままだったら危なかったかもな。

「コータくん見ーつけた」

一難去つてまた一難。実感したよ畜生。

ミッション4：どうあがいても無駄な事（後書き）

エリオ「弄りがいがあります」

キャロ「今回はやっぱりフラグ王だった吼太さんのお話」

ルーテシア「神綺が落ちたね」

エリオ「当然の帰結だよ」

キャロ「前回のほのぼの（？）管理局が思ったより好評だったね」

ルーテシア「あれには驚いた」

エリオ「今回も書くのか？」

キャロ「短いけどあるよ」

ルーテシア「どうぞ」

ほのぼの(?) (管理局)

A「今日は特別指導員が来るんだとよ」

B「何処から?」

C「異世界らしいぜ」

A「管理局も国際的になったよな」

B「それ国際的って言うのか?」

隊長「お前ら注目しろ!! 特別指導員の方の登場だ!!」

マスター・アジア「貴様らの力見せてもらおう」

A・B・C「」「」その人はらめえ!!!!」「」「」

キャロ「日常です」

エリオ「誰も望んでないよ。こんな日常」

ルーテシア「今回は249様とコラボ」

エリオ「次回もお楽しみに」

ミッション5・語り合おう(前書き)

249様の魔法少女リリカルなのは―鋼鉄の仮面―とのコラボ。
これでいいのか解らない。駄目なら書き直します。

ミッション5・語り合おう

陽side

何が起こったか分からねえ。俺は珍しく一人で散歩していただけだった。それだけだったのに。

「ハアイ」

いきなり目の前女の生首が現れた。

「こんにちは、僕」

「僕って言うんじゃないぞ」

「見た目9歳でしょ？まあとにかく、面白い所に行く気はない？」

面白い所だ？こいつ何言ってるんだ？俺を誘拐したい変人とか？

「安心なさい。向こうに行っても帰ってきたら一分ぐらいしか経ってないから」

「おいおい、俺が行くなんて決めてないぞ」

「私が決めたわ」

こいつ、人がいい子っぽく振る舞ってればいい気になりやがって。

「！？体が」

「幻想郷にご案内」

地面に裂け目が出来て俺は落ちていった。

エリオside

まだ朝早く、俺が寝ていると上から何かが降ってきた。

「ぐへっ!?!」

「いつつ。あのババアめ!!」

「……少年、退いてくれ」

「ん?クッションかと思ったら人が」

はあ、今回異世界から来たのは随分変わり者、でもないか。よくあるよくある。

「わりいな。文句はババアに言ってくれ」

「そのババアってのは金髪で変わった帽子を被って紫を基調としたゴスロリっぽい服を着ている人か？」

「知ってるのか？」

「まあな。俺はエリオ・モンディアル。君は？」

「俺は長瀬陽だ。体は9歳だが精神は19だからな」

「転生者か」

「！？ 何者だよ」

「そついうのに慣れた人間さ」

まずはいろいろと説明してやらないとな。こついうのに慣れてる人にはちゃんと教えないといけない。慣れればいらなただけだね。

「つまり神隠しに遭ったと」

「分かり易く言えばな」

幻想入りは基本的に神隠しと言われてるからな。

「帰るならすぐに帰せるけど」

「……折角だから観光してくわ」

「なら案内しよう」

「助かる」

何処に案内しようかな。無難な所に案内するのもあれだし、とはいえ危ない所はあれだし。地底の旧地獄街道なら大丈夫かな。

「決まったか？」

「ああ、行こうか」

陽side

連れてこられた場所は神社の近くにある穴だ。此処に入るのか？

「さあ跳ぶぞ」

「ちよっ！？押すな押すなああああ！！！！」

落ちる落ちる！！何処にも掴まる場所がないぞ！！って何かあった
！！

「とっ！！！！」

「きゃっ！！！！」

あれ？女の声？俺が掴まったのはどうみても桶だけだ。

「……………」

いる！！桶の中に何かいる！！

「なぐにやっつてんだ」

「は？うわあああ！！！！」

足に何か引っ掛けられて引きずり落とされた。見ると鎖分銅が巻き
付いていた。お前は忍者か！！？

「ぶつかるぶつかる！！！！」

そうだ！ゾルダに変身だ！！って間に合わねー！！

ふわっ

「あ？？」

いきなり無重力状態になりゆっくりと降りた。

「反重力魔法成功」

「お前、殺す気か!!」

「生きてるんだからいいじゃないか。さあ行こう」

まあいい。タバコでも吸って落ち着こう。

「体に悪いぞ」

「好きなんだからいいだろ」

「早死に確定だな」

「うつせえ」

人の好みにケチつけるなよ。そりゃ禁煙した方が健康にいいのは解
ってるが、そう簡単に止められるものでもない。

「つと、着いたぞ」

「此処は？」

「旧地獄街道」

地獄に旧も新もあるのかよ。店が結構あるけど、本当に地獄だった
のか？それとも街道というだけあって昔は地獄への通り道だったと

か？

「こんな所にいるなんて珍しいわね」

「お、パルスイじゃん」

そこには金髪緑目、そしてエルフ耳の女がいた。不機嫌そうだ。

「そっちのガキは？」

「誰が「俺のダチの長瀬陽だ」おい勝手にダチに「ふん、相変わらず誰とでも仲良くなれるのね。妬ましい」おい、俺を「だったら友好的に振る舞ったらどうだ？」お前」「そんな事簡単に出来る訳ないでしょ」「人の台詞を遮るな！！！」

絶対意図的だろ。なんだこいつら、人を馬鹿にしてんのか？

「立ち話は終わりにして店に入ろうぜ」

「なんであんたと店に入らないと駄目なのよ。そうやって誰でも誘うあんたが妬ましい」

「陽もいるって」

「そついう事じゃないだろ。その女が言ってるのは」

「そのガキは分かってるじゃない」

そう言うと女、パルスイはこっちを見た。なんかジッと見られてるな。文句あつか？

「ガキのくせに随分な眼をしてるわね。妬ましい」

「あゝ？」

さつきからなんだこいつ。妬ましい妬ましいと。些細な事に嫉妬しやがって。

「お前さ、不満なのかよ」

「不満？」

「今の生活が、自分が、世界が、一つたりとも自分が自慢出来る事がないのかよ」

「ガキが全てを理解したような事を言わないで」

「ガキガキガキガキ。俺はガキじゃねえ！！」

「でも人間なんですよ？なら私達からすればガキよ」

私達？なんだこいつ。自分達は人間より長生きする種族なんですとでも言うのか？

「はいはい、立ち話は終わりって言っただろ」

！？ バインド！？エリオの奴、魔導師だったのか！？しかも異様に硬い。

「くっ、離しなさい！！」

「そつだぞ!!」

「店の椅子に座つたらな」

……今は大人しくしてやる。

「あ、うめえ」

「私達に奢るなんて。無駄にある財力が妬ましい」

「無駄言つな。金はあつて困るもんじゃない」

「美味しい酒も呑めるしねえ」

……あれ？一人分声が多いぞ。

エリオの横には一本の赤い角が生えた女が見えた。

「鬼、何で此処にいるのよ」

「先にいたのはあたしだよ。それに勇儀って呼べって言ってるだろ」

鬼？さっきのパルスイの発言といい、何なんだこいつらは。

「陽、お前の疑問に答えよう。二人は妖怪なんだ。パルスイは橋姫、勇儀さんは鬼」

妖怪か。成る程、だからさっきの発言なのか。しかし鬼は解るけど橋姫は知らないな。

「そういえば陽はどんな人生を送ったんだ？一度死んだんだろ？」

「俺？まあ正確には死んじゃいないんだが、前は孤児院にいた」

「孤児院？」

「ああ、なんか親がなくなてな。物心付いた時には孤児院で過ごしていた」

俺はとりあえず昔の事を話した。孤児院での生活。やさぐれて不良紛いの事をしていた事。遊戯王の賞金やバイトで孤児院を支えていた事。改めて人に話すと俺の人生って普通じゃないんだよな。しかも異世界に行ってるし。

「ほー、若いのに大変だったんだね」

「これが俺にとって普通だったからな。で、エリオの方はどうなんだ？」

「俺か。俺は創られた命だ」

「は？」

創られた、命？つーとフェイトみたいなものか。

「ま、兄さんのせいで変な事にも慣れてそんな過去、何それ美味しいの？って感じになっただけだね」

それっていい事なのか？なんかこれを表す言葉があったような。そうだ！駄目だこいつ、早くなんとかしないと。だな。

「……妬ましい」

「ん？」

「そんな悲しい過去を当たり前に話せる貴方達が妬ましい」

さつきから本当になんなんだよ。因縁付けたいのか？

「勘弁しとくれよ。橋姫つてのは嫉妬する妖怪なんだ」

「勇儀、五月蠅いわよ」

「嫉妬する妖怪、ね。だけど人生楽しくないだろ」

「ええ、だから妬ましい存在を攻撃するのよ」

「いい迷惑だな。お前が人生を楽しめばそんな事はないだろ」

「それが出来れば苦労しないわ。妬ましいわね、それが出来るのが。貴方もそのうち自分が出来ない事で他人を妬むわよ」

「ないな。それに出来ないって、やってみなけりゃ分からねえだろ。お前は自分の性質を理由に逃げてるだけだ」

「貴方には何も解らない。なのに自分の世界に酔いしれる貴方が妬ましい」

「誰が何に酔いしれてるって?」

店の中が険悪なムードに包まれる。鬼、勇儀も入り込めていない。そんな中でも一人黙々と食事をしていたエリオがようやく口を開いた。

「お前ら、押し付けすぎ」

「何?」

「押し付けすぎ?」

「陽には陽の、パルスイにはパルスイの価値観がある。お前らはそれを押し付けすぎなんだよ。別にいいじゃないか、家族でもない他人がどんな人生歩もうと」

「それも価値観の押し付けじゃないかしら?」

俺も同じ事を思った。これに対してエリオはなんと言うんだ?

「そつだよ」

……あっさり認めやがった。

「こんなのに答えなんてないんだよ。今ある答えは一つ」

……それは一体何なんだ？

「今は飯の時間だ」

……………はあ？

「……………ハハハ！！エリオの言う通りだよ！！さあ陽、パルスィ、エリオの奢りなんだからジャンジャン食うよ！！」

「ほどほどに、してもらえませんかよね」

何だか一気に気が抜けたな。エリオの野郎、やってくれる。

「あのお気楽さが妬ましいわ」

「今回は同感してやる。ありゃ妬ましい」

さて、俺も飯を食うか。

今は夕方。俺とエリオは地底を出て歩いていた。

「エリオ、お前本当に変わり者だな」

「そうか？俺の周りの方が変わり者だよ」

これ以上って一体どんなのがこいつの周りにいるんだよ。

「なあ、参考までに訊くが、お前の生き方ってどんなのだ？」

「そうだな。俺は「私の婿になる事だな」げええ！！藍さん！！」

いきなり現れた何本も狐の尻尾が付いた女を見た瞬間にエリオが逃げ出した。女はそのエリオを追って行ってしまった。

「あらあら、あの子達も相変わらずね」

「あ、ババア」

「最近の子は口がなくてないわね」

神出鬼没だな。だがこいつが出たって事は帰れるのか。

「どうだったかしら？」

「なかなか有意義だったんじゃないの」

「それは良かったわね。じゃあさようなら」

また地面に裂け目が出来て俺は落ちた。そして落ちながら俺は考えた。もっと普通に世界は渡れないのかと。

ミッション5・語り合おう(後書き)

エリオ「此処にも名前が必要かな？」

キャラ「いいんじゃない？」

ルーテシア「面倒」

エリオ「新しい人とのコラボは難しいらしいぞ」

キャラ「常連さんはもう自分のキャラのようにハチャメチャにするのね」

ルーテシア「暁優とか暁優とか暁優とか」

エリオ「今回もあれやるの？」

キャラ「一応やるみたいだよ」

ルーテシア「ではどうぞ」

ほのぼの(?) () 管理局

A 「今日空と模擬戦だと」

B 「うわだりい」

C 「働きたくないでござる」

A 「模擬戦は仕事じゃねえよ」

B 「でもだりい」

C 「適当にあしらうか」

隊長 「ほらお前ら、行くぞ」

A 「ちやーす」

B 「ちやつちやちやーす」

C 「うわらばっ!?!」

隊長 「死亡台詞は早いぞC」

空隊長「お前ら！！不甲斐ない動きを見せたら訓練倍増だ！！」

隊員達『はい！！』

隊長「お前ら！！くだらないポケをしたら今日から定食の味噌汁は具無しだ！！」

A・B・C「それは鬼畜っす！！」

空隊員「見つけた！！」

A「サブミッションは王者の技！！」

ゴキイ

空隊員「ぎゃあああああ！？」

空隊員「遠距離戦なら」

B「眼魔砲!!」

空隊員「ぐあああああ!?!」

空隊員「一番弱そうなの見つけた!!」

C「レイジングストーム!!」

空隊員「なんでー!?!?!」

隊長「お前らネタに走りすぎ！！今日のカレーはルー抜き！！」

A・B・C「「「ただのライスじゃん！！」」」

キャロ「管理局ではよくある事」

エリオ「A・B・Cがどんどん酷い事に」

ルーテシア「次回はライ様とコラボ。見てね」

ミッション6・戯れ(前書き)

ライ様とのコラボ。

一真が出ると無意識にバトル路線へ行ってしまう。何故だろう。

ミッション6：戯れ

—真side

最近いろいろと事件やらなんやらあったけど、今日は平和だ。と思
っていた。

「こんにちは」

「誰だよあんた」

空間の裂け目から女性が上半身を乗り出していた。いろんなもんを
見たが、どう反応すればいいやら。

「ちょっと異世界に来る気はない？」

「異世界？何で」

「貴方の知り合いがいるんだけど」

知り合いか。誰だ？俺の知り合いの周りにこんな女性はいなかった
はずだが。

「それで、来る？来ない？」

「まあ、いいかな」

「じゃあこれを通って」

空間に裂け目が出る。多少不気味だが、もしもの時はカムイで斬って出るか。

「そうだ。俺の知り合いが誰か訊いてもいいか？」

「一条要よ。まあ会ってもらうのはエリオだけど」

要の所のエリオか。会うのはあのトーナメント以来か。というかエリオはどうなってるんだ？要は一度寿命で死んだっぽいけど。ともかく行ってみよう。

「じゃあお邪魔します」

「ようこそ、幻想郷へ」

裂け目に入り数歩歩いただけで外に出た。昔ながらの田舎って感じだな。

「迷ったらエリオについて訊けば教えてもらえるわ」

「あんたは案内してくれないのか？」

「私だって暇じゃないのよ」

そう言って女性は消えた。とにかく探せば解るか。

エリオ s i d e

「阿求、こんにちは」

「あ、エリオさん。こんにちは」

「余り物だけど昨日作った羊羹」

「わ！ありがとうございます」

昨日久しぶりに作ったら、羊羹を作りすぎたから阿求に差し入れに
来た。

「変わりませんね、エリオさんも」

「変わったって言うてもらいたいね。そんなじゃいつまでも未熟み
たいじゃないか」

「雰囲気がつて事ですよ。初めて会った時からずっと」

「雰囲気がねえ。そこら辺は自分では解らないからなんとも言えない
な。」

「エリオは此処か？」

「ん？慧音さんだ。行ってくる」

「はい」

阿求の家の玄関まで行くと、そこには慧音さんと何故か一真さんがいた。

「お久しぶりです。一真さん」

「やっぱり知り合いだったか。では君はゆっくりしていくといい」

そう言っつて慧音さんは出て行った。

「エリオ、だよな？」

「そうですよ？そういうえばお子さん達は元気ですか？」

「は？子供？」

あれ？なんか噛み合っつてないな。並行世界？いや、こないだの吼太さんみたいに過去かもしれない。

「阿求、もう帰るな」

「分かりました」

「じゃあ俺の家で少し話しましょうか」

「ああ、お互い食い違いがあるみたいだしな」

—真side

こいつはあのトーナメントから10年後のエリオって事か。要は更に未来だけだ。

「だから若いと思いましたよ」

「若いつて、まあ10年も経てば人間老けるだろ」

「吼太さんは「例外を出すな」ですよね」

さっきまで話してて分かったが、こいつも随分な性格になったもんだ。

「あの、お願いがあるんですが」

「俺にか？」

「はい。少し「エリオ、入るわよ」はいはい」

エリオの家に来たのは変わった巫女服を着たのと、まんま魔法使いの奴だった。

「礼をしに来たわよ」

「私はオマケだぜ。で、そっちは誰だ？」

「御剣一真だ。要の友人だ」

「要さんの」

「なら変わり者だな」

ちよつと待て。何故あいつの友人だと変わり者なんだ。あれか？あいつが変わり者だからか？あいつって変わり者か？

「そうだエリオ。さっきのお願いってなんだ？」

「忘れてました。えっと、一撃だけ勝負して下さい。あれからの成長を見てもらいたいので」

一撃か。まあ一撃くらいだったら付き合ってもいいかな。

「私達も見てもいい？」

「駄目って言っても勝手に見るだろ」

「へへっ、流石エリオ。分かってるな」

「一真さん、いいですか？」

「ああ、いいぞ」

10年での成長を見せてもらおうとするか。

戦う場所は草原。何も無いって訳じゃないが、十分に広い。

「いきます。雷槍」

エリオは右手にストラダーを持ち、左手に雷の槍を創り出す。

「一撃が一発という決まりはありませんよね？」

「まあな。しかし二本槍がお前の戦い方か？」

「変則二本槍ですよ。片方を雷の槍にする事で、いつでも出し消し可能にする。これで一本と二本を使い分けるって訳です」

成る程な。相手によって使い分けるって事か。どんな技を出してくるのかな。

「リミットブレイク!!!」

エリオの全身から魔力が放出され、電撃がほとばしる。

「全力だな。ゼロ、セットアップ」

《ああ、セットアップ》

俺が握り締めるのはカムイ。初めは別の剣でやろうと思ったが、礼儀に欠けるからこつちでやらせてもらおう。

「さあ来い!!」

「言われなくとも!!」

エリオは一気に後ろへ跳んだ。一步で100mは跳んだらうか。そこから槍を突きながら突進してきた。速い。突進速度も当然だが、槍を突く速度が速い。槍は一流の者が突けば閃光となり、点となる。しかしエリオのそれは点が集まりすぎて最早壁になっている。

「突槍壁!!!!」

雷の壁は立ち塞がるもの全てを削りながら向かってくる。削岩機とかのレベルじゃないな。

「ふうふうう」

俺はカムイを振りかぶる。そしてエリオに合わせてカムイを振り下ろした。

「ハッ!!!」

エリオside

「……完敗です」

一真さんの一撃は槍の壁を斬り裂いた。雷槍は霧散し、ストラーダは弾き飛ばされた。

「いい技だったぞ。結構傷つけられた。ちょっと痺れたし」

「鎧に傷を付けたところで意味はありません。というかあれだけの雷撃でちよつと痺れた程度って」

やっぱり一真さんには勝てないな。あの頃より成長したんだけどな。

「だけどあれが全力か？今のエリオなら更に上の威力を出せると思っただが」

「ある事はあるんですけど、ここいら一帯が消滅しますんで。あの二人も見えますし」

「広域殲滅型か。ならしょうがないな」

「凄かったわね、貴方達」

「エリオの通った後なんて地面が抉れてるぞ」

まあそういう技だし。目の前のものを抉りながら突進をする前面殲滅技。対軍戦とかで一番役に立つな。

「あー疲れた。霊夢、飯作ってくれ」

「何で私が。って言いたいけどまだ礼をしてないからね。いいわよ」

よし、これで飯を確保出来た。

「一真さんもいいよな？」

「いや、俺は「いいわよ」「じゃあ、頂こうか」

「なら私もな」

「はあ？魔理沙は「助けたろ」「しょうがないわね」

ちやっかりしてるな。だけど飯はみんなで食べた方が美味しいな。

一真side

巫女さんが作る料理だからなんか質素なもんかと思っただが。

「オムライスか」

洋食が出るとは思わなかったな。

「苦手だった？」

「いや、そうじゃない。和食が出ると思ったから」

「基本和食が多いですけど洋食がない訳じゃないですよ」

「そうなのか。しかし美味しいな。彼氏とか喜ぶだろ」

「霊夢にそんなのいませんよ」

「そうだぜ。なんならあんたが彼氏になったらどうだ？」

魔理沙つて子も面白い事を言うな。俺に彼女と付き合えと？

「一真さんは嫁さんがいるから駄目だぞ。あ、でもハーレムだから」

「だからって一人くらい増えても大丈夫って事はないぞ」

「ハハハハハハ」

あ、霊夢がプルプル震えてる。なんか嫌な予感がする。

「あんた達好き勝手言ってるじゃないわよ！！夢想天生！！」

「ギギギギギギあああああ！！？」

うっかり怒らせてしまったようだ。この後なんとか霊夢の怒りを鎮める事が出来た。

「そろそろ帰していいかしら？」

「あんたは」

「紫さん。お願いします」

「こらエリオ。勝手に決めるな。まあ時間的にちょうどいいけどな。」

「じゃあなエリオ」

「また手合わせをお願いします」

「暇があつたらな。今度は別の技を見せてくれよ」

「ええ、必ず」

帰ったうちのエリオも鍛えてやるのかな。

ミッション6：戯れ（後書き）

エリオ「疲れた」

キャラ「まあ一真さん相手じゃね」

ルーテシア「技紹介、してね」

エリオ「そうだな。なら紹介しようか」

『雷槍』

文字通り雷の槍。

『突槍壁』

とにかく高速で二本の槍を突きながら突進する。あまりの突きの速度に壁が迫って来るように見える。前方に対する無差別攻撃。

エリオ「こんな感じ」

キャラ「エリオくんの言ってた他の技ってあれ？」

エリオ「あれ」

ルーテシア「あれじゃあ出せないよね」

エリオ「一真さんなら大丈夫だろうけど、普通の奴に使ったら間違
いなく殺せるからな」

ルーテシア「それにエリオってあれ使う時は敵しかいない時だけだ

もんね」

エリオ「巻き込むからな」

キャロ「じゃあいつものあれ、やるっか」

ルーテシア「何気にファンが多いこのお話。スタート」

ほのぼの(?) 管理局

A「……ああ、そうだ。………了解した」

B「どうした、神妙そうに電話して」

C「彼女か？彼女なのか？」

A「言ってなかったっけ？俺、妻いるぞ」

B・C・隊長「」「なん………だと………?」「」

A「隊長まで!?!いやちよつと良かった。今日は有給使って帰りま

す
」

隊長「断る!!」

A「ええ!？」

B・C「リア充仕事しろ!!」

A「少なくともお前らよりしてるわ!!」

隊長「とにかく理由を言え!!」

A「妻の陣痛が始まってるんですけど」

B・C・隊長「さっさと行って奥さん安心させるバカたれ!!」
」

A「言ってる事がちげえ!?!とにかく行ってきます」

隊長「おう!!」

B「男の子なら太郎」

C「女の子なら花子にしろ」

A「断る!!」

隊長「……行つたな」

B「Aは有給つすか？」

隊長「有給だよ。ただし無期限のな」

C「ひゃー、隊長男前」

隊長「私は女だと何度言えば分かる」

B「読者は男と思ってましたよ」

C「ちげえねえ」

エリオ「隊長は女だったのか」

キャラ「本編より衝撃だね」

ルーテシア「人に優しく。それがうちの管理局のモットー」

エリオ「正確には部隊ごとに違うんだけどね」

キャラ「次回は畏無様とのコラボ。次回もお楽しみに」

ミッション7：ほのぼのしましょう（前書き）

雨「今回はちょっと特別な前書き。ゲストが二人います。ルキとリザです」

ルキ「ルキよ」

リザ「リザ」

雨「ルキはMHP3に出るアグナコトルというモンスターの擬人化キャラ。リザは同作のアグナコトル亜種というモンスターの擬人化キャラです」

ルキ「なんで私達がいるかというと、雨季の周りの作者が集まってモンスターハンターの小説を書き始めたからよ」

リザ「題名は『モンスターハンター』ハンターとモンスターの物語』。私達みたいに擬人化キャラが出るから嫌いな人は気をつけて」

雨「二人共よく出来ました。頭撫でてやろう」

ルキ「ちょっと！！子供扱いしないでよ！！／＼／＼」

リザ「……………へ、変態／＼／＼」

雨「こりゃ手厳しいな。ならやめるか」

ルキ・リザ「あ……………」

雨「どうした？」「ニヤニヤ

ルキ・リザ「な、何でもない！！／＼／＼」

雨「くくっ、今回は畏無様とのコラボ。では本編をどうぞ」

ミッション7：ほのぼのしまじょう

響介 side

朝起きると謎の空間にいた。周りは紫で目玉が沢山こっちを見てる。

「こんにちは、いきなりごめんなさいね」

「あ、いえ」

突然出てきたお姉さん。一体何者なんだろう。

「ねえ僕、強くなりたい？」

「強く……」

霞姉に追いつくために強くなりたい。けどこの人について行っていいのかな？

「大丈夫よ。指導する人のは私じゃないから」

「そうなんですか？」

「真面目なのだから安心していいわよ」

とにかく強くなれるなら行ってみようかな。

「終わったら観光していいわよ」

観光？行くの観光地なのかな？

「ではご案内」

「え？わわわわっ！？落ちるー！？」

エリオside

「ほらほら！！」

「フッ！！ハッ！！」

今、俺は萃香さんに鍛錬に付き合ってもらっている。鬼の筋力はやっぱり強いな。当たったら痛い。

「瞬間的になら天狗より速いんじゃない？」

「どうでしょうね」

永続的に天狗より速くなりたいと俺は考えてるんだけどね。やろうと思えば出来るけど、通常状態でやりたいな。

「わあああああ！？」

「ん？」

「子供、ですかね」

空から降ってくるとは、また紫さんかな。とりあえず受け止めよう。

「っっ」

「あ、ありがとうございます」

「ごめんなさいね。高さを間違えたわ」

「やっぱり紫かい」

気をつけてほしいね。まあ何故か今回は本当に反省してるみたいだからいいけど。

「じゃあ僕。今抱っこしてるお兄さんに稽古つけてもらってね？」

「俺が？」

「よろしくね、エリオ」

帰ってしまった。とにかく今のでこの子が違う世界から来たというのが分かった。

「エリオ・モンディアルだ。よろしくな」

「私は伊吹萃香だよ」

「安藤響介です。よろしくお願いします」

「んな丁寧な話し方じゃなくていいぞ」

「分かった」

でこの子、響介に稽古つけてやるんだっけか？

「まず君のバトルスタイルを教えてください」

「近接戦と中距離戦が主かな」

「なら体力作りに走り込みでも」

ビクッ

今、響介がすっごい震えたぞ。まるでトラウマがあるかのようだ。

「それって、延々と終わりのないシャトルランする？」

「そんな鬼畜な事しないで」

なんだよそれ。こんな子供に延々とシャトルランさせるなんて人にする事じゃないな。

「なら山登りをしよう。それならいいだろ？」

「ああ」

「じゃあ私は帰るよ」

「ええ、また」

萃香さんは霧となって帰っていった。それを見た響介はキョトンとしていた。

「今の子は？消えたけど」

「萃香さんは鬼でな。密と疎を操る能力を持つんだ」

「お、鬼？」

まあ分からないよな。鬼なんて普通はいないからな。こいつがどんな世界から来たから知らないけど。

「じゃあ行くか」

「おう」

エリオって変わってるな。いきなり現れた俺に普通に対応したり、話し方を丁寧じゃなくていいって言ったり。

「この山を登るぞ」

「案外普通な山だな」

「妖怪の住処だけだな」

妖怪って、さっきの子も鬼とか言ってたし、なんなんだろうな。

「途中休憩もあるからな」

「助かるな、それは」

そこから山を普通にランニング感覚で登った。その途中、突然エリオがストップをかけた。

「どうした？」

「さてここで問題だ。このキノコ、よく似ているがどっちかは毒だ。どっちが毒でしょう」

いきなりサバイバル知識を試されてもな。そんなの見分け方なんて知らないっての。

「どつするのね」

「簡単だよ。小動物でも捕まえて食べればいい」

「駄目！！動物は大切に！！」

「冗談だよ。こうすればいい」

エリオがライターを取り出してキノコを炙ると、片方は普通に焦げて、もう片方は紫の煙を出した。

「へー、そのキノコが毒か」

「いや、焦げたのが毒」

「いやいや！！その紫が食用ておかしいだろ！？」

「食用？誰が食用って言った？こっちは魔法薬用だぞ」

魔法薬用……そんなの分かる訳ないだろ。そんなの専門じゃないんだから。

「そこな人達！！こっちは参道ではありませんよ！！ってエリオ？」

「こんにちは桜さん。ちょいとこいつの鍛錬のために邪魔してますよ」

「いえ、貴方なら構いませんよ」

空から白髪の犬耳の女性の人が来た。この人も妖怪つてののか？アルフみたいだな。

「そうだ！！どうせですから響介と試合してみませんか？」

え！？何をいきなり、というかさっきからいきなりばかりだな。

「うーん、まだ仕事なんですよ。ごめんなさいね」

「まあ突然の無茶振りですからね。こちらこそごめんなさい」

「他の哨戒天狗には伝えておきますから自由にして下さい」

行っちゃった。とにかく許可はもらったんだよね。

「今の人（？）は？」

「犬走椀さん。白狼天狗ながら結構な力を持つてる人だ」

「へー」

天狗って鼻が長くて赤い顔してる爺さんかと思ったけどそうでもないんだな。あ、さっきの鬼の子も幼女だったか。

「じゃ、下りるか」

「許可貰ったばかりなの？」

「許可がなければ俺を無視してお前が襲われる可能性もあるぞ」

「それは、嫌だな」

「よっしゃ、行くぞ！ー！」

エリオの後を追いかけるように走る。下りだから大分楽だと思っていたけど、スピードに乗ってしまつたら木を避けるために減速するのも一苦労だし、曲がるのも足腰にくる。下りつてきつついな。

「到着」

「意外ときつかつたな」

「だろ？山は下りが本番なんだよ」

その通りだな。でもいい運動になるよこれは。あのシャトルランより数倍いい。

「それにしても小腹が空いたな」

「まあ、そろそろ3時だから………しまった！！甘味堂の新作餡蜜、今日発売だ！！響介、掴まれ！！」

「え？」

掴まれって、担がれたんですけど。

「振り落とされるなよ！！」

「え、ちょ、ギャーーーー！！？」

速い速い速い！！速すぎる！！フェイトより速い！！もっと減速して安全運転しろ！！

……エリオに運ばれたのが今日一番きつかった。新幹線に生身で掴まってる感じだった。

「餡蜜美味しいわね」

「そうですね」

「……誰!？」

さっきまでいなかったよねこの人!!いつの間に隣に!?

「この人は亡霊の姫、西行寺幽々子さん」

「よろしくねえ」

亡霊……亡霊って餡蜜食べるのか。初めて知った。あんまり知っても意味がない気もするけど。

「おかわり」

「お客様、一人一つとなっております」

「ならスペシャルパフェ五つでいいわ」

どんだけ食べるんだよ。スペシャルパフェって滅茶苦茶デカいってメニューに書いてあったぞ。

「見つけた!!」

「あ、妖夢」

「帰りますよ!!勝手に抜け出して!!」

「あ、待って!!パフェ、パフェが!!」

お姫様は女の子に引きずられていきました。一体何だったんだ？

「まあ俺らはのんびり食べようぞ」

「……だな」

もう深く考えるのは止めましょう。そうした方が精神衛生上よろしい気がする。

「今日はどうだった？」

「楽しかった、かな」

普段出来ない体験をしたし。見る事のないものを見たし。訓練は、まあ良かったかな？

「そか。幻想郷は全てを受け入れる。また来るといい」
「ああ」

「私も歓迎するわよ」

「いたんですか？」

「帰せるのは私だもの」

俺の前にあの紫の空間が口を開ける。いつになるか分からないけど、今度はもっといろいろな遊んでみたいな。

ミッション7：ほのぼのしまじょう（後書き）

エリオ「なんか要望通りじゃないんじゃない？」

キャロ「気にしたら負けだよ」

ルーテシア「エリオ負け」

エリオ「ええー」

キャロ「なんか隊長さんも人気になったね」

エリオ「隊長さん？」

ルーテシア「ほのぼの（？）管理局の隊長さん」

エリオ「ああ、彼女」

キャロ「では早速スタート」

ほのぼの(?) 管理局

A 「ただいま」

B 「あれ？育休は？」

A 「妻にさっさと仕事しろって」

C 「ハハハ、大変な奥さんだな」

? 「この隊長はいるかね？」

隊長 「ここにいる」

? 「あ、少し話をよろしいかね？」

隊長 「まあいいだろう」

A 「なあ、さっきのって」

B 「空のエース部隊の隊長さんだ」

C 「またあれかね？」

空隊長 「今日、一晩でいい！食事に」

隊長 「私より弱いには興味がなくてね」

空隊長 「そこを何とか」

隊長「クドい！！梅之一！！梅花一閃！！」

空隊長「ぎゃあああああ！！！！」

A「弱っ！！」

B「隊長の剣技『松竹梅』の最下位、梅すら耐えられないか」

C「しかも一って一番弱いじゃん」

？「お、噂通り面白そうだな」

？「そうね」

A・B・C「」「誰だ！！」「」

鈴「要のダチの鈴」

百合姫「同じく百合姫。名無しキャラにはいい動きね」

隊長「どうしたお前達」

鈴「そこなお姉さん、食事にいかないか？」

隊長「……………いいだろう」

B「あっさり……………」

A「あの人の友人だぞ」

C「俺らが東になっても勝てないな」

百合姫「貴方達もいいわよ」

A・B・C「ラッキー」「」

鈴「そっぴゃこの部隊の名前って何だ？」

隊長「……恥ずかしいな」

百合姫「恥ずかしい名前なの？」

A「まあ隠す必要もないですし言いましょっや」

B「俺らにぴつたりな名前ですし」

隊長「だな。では」

隊長・A・B・C「」
プロブレムチャイルド「我ら、地上特殊戦闘部隊……またの名を
『問題児』……」

エリオ「何であるの二人が」

キャロ「出たかったらしいから」

ルーテシア「次回はバルディッシュ様とのコラボ。お楽しみに」

ミッション8：烈風VS半人前（前書き）

今回はバルディッシュ様とのコラボ。

前前回書きに出したルキとリザはこれからも出すべきだろうか？

ミッション8：烈風VS半人前

ヒスイside

新しいモード、まだまだ上手く使えんな。いくらシグナムに剣の基礎を習っても実戦経験が欲しいな。

「なら相手がいるわね」

「そうだ、な!？」

「こんにちは」

「誰だ？」

いきなり現れた紫の服を着た金髪の女。かなりの力を感じる。

「今更人が突然現れた程度で驚く事ないでしょ？」

いや、どちらかといえば俺は招待する側じゃなくてされる側だからこういう経験は……

「ってなんでそれを知ってる？」

「一条要の知り合いだから、という回答じゃ駄目かしら？」

「いや、十分だ」

要なら仕方ない。あいつのせいで俺も随分非常識になったもんだな。

「試合相手が欲しいんでしょ？」

「いるのか？」

「いいのがね」

俺と釣り合ってる相手なのか？要の知り合いが紹介するのだから要の知り合いだろうし。それがチートという可能性も、でも俺くらいのがいるし。

「行く？行かない？」

「行こう」

「なら入りなさい」

空間に裂け目が出る。どこに繋がってるんだこれ？

「死なないから安心なさい」

「なら安心するか」

どんな奴が相手になるんだろうな。

妖夢 side

「やつ！ たあ！！」

「ほら、隙だらけだぞ」

「くっ！？」

やっぱりエリオは強い。どれだけ斬り掛かろうと軽くあしらわれてしまう。

「てやあああああ！！！」

「遅いよ」

ガキン

「あ」

「チエック」

私の刀は弾かれ、エリオの槍が頬に当たる。また負けた。攻めどころを間違えたかな。

「さて、そちらにいるのは誰かな？」

「気づいていたか」

いつから隠れていたのか。そこには一人の男性がいた。

「ヒスイさん？」

「ん？知り合いだっけ？」

「ほらエリオですよ」

「要の所の？」

「はい」

男性はその返事を聞いて少し懐かしいような表情を見せた。

「久しぶりだな」

「ええ。それで今日はどうして此処に？」

「いい試合相手がいると聞いたんだが、お前か？」

「俺は聞いてませんから分かりませんが」

お二人の話を聞く限り、男性の名前はヒスイさんで、エリオの知り合い。そしてヒスイさんは試合をしに来た。こんな感じでしょうか？

「やりますか？」

「あの、エリオ」

「どうした妖夢」

「私にやらせてもらえますか？」

普段武器を使って試合をしてくれるのはエリオしかいない。ならばには他の人とやってみないと成長しない。

「ヒスイさんはいいですか？」

「ああ、俺は構わない」

「魂魄妖夢です。よろしくお願いします」

「ヒスイ・ハーツだ。お手柔らかな」

ヒスイside

俺はデバイス、ゲイルアークを手の甲辺りから刃の出る2ndモードにする。妖夢は二本の刀を持っているようだが、今手に取っているのは一本。二刀流じゃないのか？

「いきますー！ー」

動きはなかなか。しかし重さがないな。少女だからしょうがないんだろうが、それを補うためか技術が高い。しばらく打ち合うが、こちらから仕掛けてみる事にした。

「魔神剣!!」

「ふっ!!」

飛んで避けた!? デバイスとか何にもなく飛べるのかよ!!

「やあっ!!」

「?」

妖夢が剣を振ると、何か光の筋のようなものが出来た。始めは斬撃でも飛ばすのかと思ったが、その考えはすぐに間違いだと気づかされた。

「な!?!」

光の筋は弾けるように無数の光の弾になった。動きは遅く、起動は読みやすいが、逃げ道が制限されるな。

「なら撃ち落とす!! 唸れ、風念! ストリームアロー!!」

風の矢が光弾を撃ち落としていく。これで終わりじゃないぞ。

「奔れ、光念! フォトン!!」

「キヤッ!?!」

光が妖夢の目の前で弾ける。本来は光で縛り付けてそれを弾けさせる術なんだが、今回は目眩ましに使わせてもらった。

《ウインドムーブ》

「烈空斬!!」

高速で後ろに回り込み、空中にいる妖夢に向かって縦回転をして斬り掛かった。

ガキン

「ぐうっ!？」

「らあっ!!」

妖夢はギリギリ反応して防いだものの、飛んでいたためか踏ん張りが効かず、地面に叩き付けられ、砂煙が起こった。

「断迷剣」

「ん？」

砂煙の中から巨大な刃が現れた。魔力ではない何かエネルギーの塊だ。

「迷津慈航斬!!」

「ちっ!ゲイルアーク!!」

《ウィンドムーブ》

高速移動魔法で巨大な刃を避け、着地する。地面には大きな斬撃の跡が出来ていた。

「人鬼」

まだ何か来るのか!?

「未来永劫斬!」

「速っ!」

居合いからの高速斬撃。ウィンドムーブを使っても間に合わない。防ぐしかない。

「がっ!」

防ぎはした。だがあまりの速さで最初の斬撃とは威力が違った。そのまま俺は宙に打ち上げられてしまった。

「ハアアアアアア!」

「っ!」

上下左右、斜めまで。ありとあらゆる方向から妖夢が斬撃を入れてくる。速い。速いけどな。これ以上の速さも見た事あるんだよ!!

「オオオオオオオ!」

受け流す。とにかく受け流す。あつちは高速で向かってくるんだから最低限の動きで攻撃を流さないと斬られる。そして最後の1撃であるう真上からの斬撃。流石にこれは流せそうにない。受け止めるしかない。

ズドーン

「ハア、ハア」

「ぜえ、ぜえ」

きつかったが、まだ十分やれる。構えて妖夢に向かおうとした時。

「そこまです」

だがエリオが止めに入ってきた。

「どっいつつもりだ？」

「そうですよ」

「だって妖夢もう無理だろ？」

「私はまだ「ちよん」「みよん!」？」

コテッ

エリオが妖夢のおでこをつついただけで妖夢は転けた。本当に無理みたいだな。

「大技の連発。今のお前がそんなのやったらスタミナ切れになるのは見え見えだ。自分の限界も判らずスタミナ配分を間違えるから半人前なんて言われるんだぞ」

「うう」

「まあこれからの課題だな。ヒスイさんはまだ余裕があるようですから、どうです？一戦」

「……止めておく」

対峙してはつきり分かった。負けるつもりはないが、万全な状態でも勝てるかどうか怪しい。

「そうですか……」

「そう残念そうにするなって」

「そうよ。そんな風にしてると藍を呼ぶわよ」

「それは勘弁して下さい！！って紫さん」

「あ、俺を連れてきた」

「八雲紫よ」

そういう名前だったのか。しかしエリオの怯えようはなんだ？そんなに藍とかいうのは怖いのか？

「どうだったかしら？」

「良かった。しかし妖夢は半人前とか言われてたが」

「そうね。祖父に比べたら半人前、それ以下かもね」

あんな技が使えて半人前かよ。この世界の基準はどうなってんだ？

「まだまだ頑張らないとな」

この世界がどういう世界か知らないがはに苦戦するよつじや駄目だな。

「じゃあお帰りの時間よ」

「いつもの人より早くないですか？」

「依頼は果たしたもの」

「俺はもういいよ。疲れたし」

「そうですか。今度は試合しましょうね」

「そうだな」

次会うまでには強くなって確実に勝てるようにならないとな。

「さよなら〜」

「何故落とすうううう……………」

俺、落ちキャラじゃないだろ。

ミッション8：烈風VS半人前（後書き）

エリオ「珍しく俺sideがなかった」

キャラ「そういう時もあるよ」

ルーテシア「本編にまだ出ない私達よりマシ」

エリオ「一応主人公だからな。二人も出るのが約束されてるからいいじゃないか」

キャラ「A・B・C・隊長は人気者だよね」

ルーテシア「適当にプロフィール紹介する？」

キャラ「いいんじゃない？名無しキャラなんだし」

エリオ「まあいつも通りどうぞ」

ほのぼの(?) 管理局

A「……あ」

B「どうしたよ」

A「弁当忘れた」

C「隊長に貰ったらどうだ?」

隊長「やらんぞ。毎朝頑張って作ってるんだからな」

A「いりませんで」

隊長「私の弁当が不味いというのか!」

A・B・C「」「酷い被害妄想だ」「」

?「すみません」

隊長「……お嬢ちゃんは迷子かな?」

A「あ、おまえ」

?「ダーリン!!お弁当持ってきたよ!!あと私はハニーって呼んでよ」

A「断る」

B「なあ、この子って」

A「妻だが？」

A妻「ダーリンがいつもお世話になってます」

A…身長190くらい

A妻…身長130くらい

B・C・隊長「」「警察、いや病院に行こう！」「」

A「だろうと思った。ちなみに妻は俺より4歳上だぞ」

A…24

B・C・隊長「」「嘘だと言ってよお嬢ちゃん！」「」

A妻「本当だよ。でも人に年齢言わないでよ。ダーリン、メッ！！」

A「すまん」

A妻「分かればいいの。はいお弁当。お仕事頑張ってね」

A「ああ、というか子供はいいのか？」

A妻「お義母さんに任せたから」

B「A、ちょっと来い」

A「飯が」

隊長「後で飯の時間なら作ってやる」

C「そんなのより今は彼女との馴れ初めから訊こうか」

A「お前ら離せー！！」

エリオ「酷いな」

キャロ「4人について訊きたい事があれば感想に書いてね」

ルーテシア「次回は、あれ、みんなで言おう。せーの」

エリオ・キャロ・ルーテシア「」「フラグ最高神の紅魔制覇」」「」

フラグ最高神の紅魔制覇（前書き）

雨季「なんか長くなった。それと今回はルキとリザも一緒です」

ルキ「本編はいつもの倍以上かしら」

リザ「なんで？」

雨季「フラグ最高神だから」

リザ「理由になってない」

雨季「あれはそれだけフラグを乱立するんだよ」

ルキ「凄いのかなんなのか」

雨季「二人は俺みたいので良かったのか？」

ルキ「な！？いつあんたが好きって言ったのよー!!」

リザ「……馬鹿」

雨季「こりゃ失礼。では本編をどうぞ」

フラグ最高神の紅魔制覇

紫side

……あら、誰か幻想入りしたわね。自力とはやるじゃない。飛んでるみたいだし、ちよつと見てみましょう。

「あら、貴女達だったの」

「うひゃあ！？いきなり出てこないでよ！！」

「八雲紫か。久しぶりだぜ」

スキマの先にいたのは赤い外套を羽織った岡崎夢美とセーラー服とかいっのを着て顔の描いてあるミサイルに乗った北白河ちゆり。二人共外界とはまた違う世界から来ている人間だ。エリオみたいなのね。

「それで、また妖怪でも研究に来たのかしら？」

「まさか。今回の研究対象はエリオ・モンディアルよ！！彼は私達とはまた違う世界、魔法と科学が融合した世界から来た存在よ。その力は興味深いわ」

「本音を言つとな、教授がエリオの手作りお菓子をいつも食べたいからなんだぜ」

ベシッ

「何言ってるのよ!!!殴るわよ!!!」

「もう殴ってるぜ」

しかしエリオねえ。私は構わないし、エリオ自身が許可したらない
いんだけど。

「貴様のような者（雌豚）にエリオが渡せるか!!!」

藍が許さないのよね。今、藍の言葉の中に乱暴なものが入ってた気が
するわ。私はそんな娘に育てた覚えはないわよ。

「出てきたぜ、エリオ中毒者が」

「エリオチユー毒か。うむ、その通りだな。エリオのキスは私を溶
かす毒だ」

「字が違っぜ」

「ふん、あなたのような女狐といるとエリオが大変ね。こっちで養
つてあげるから渡しなさい」

あ、藍の靈力がどんどん高まってる。私、藍が怖いわ。

「ミミちゃんゴー!!!」

「あ!ちゆり逃げ」消え去れ!!!「きゃああああ!?!」

北白河ちゆりはミサイルを飛ばし逃げ出した。そして岡崎夢美は藍
の問答無用の全力の弾幕で吹き飛ばされた。そんな時、岡崎夢美の

外套から何かビンのようなものが落ちていった。あそこは、紅魔館かしら。

「まあ今回の依頼者でも連れてきましょう」

確か今回は暁優は危険人物って聞いたけど、どんなのかしら？

優 side

「こんにちは」

「うわっ!?!」

突然目の前から女の人が上半身を乗り出して出てきた。

「いきなりだけど違う世界に飛んでもらうわ」

「本当にいきなりですね。それよりお姉さんは誰ですか？」

「お姉さん、か。八雲紫。妖怪よ」

「よ、妖怪!?!」

今までいろんな人に会ったけど流石に妖怪は初めて、だよな？

「じゃあね〜」

「え？うわああああ……」

いきなり落とされた。不幸だー！と叫びたい。

ズドン

「いっつ〜」

「痛いのはこちらです」

「え？うわわ、ごめんなさい！」

落ちた先には人がいた。俺がその人の腹の上に跨がっている状態だ。

「文々。新聞で……す？」

「あ、文さん」

多分この人の家に女性が入ってきた。さっきの台詞からして新聞屋さんだろう。

「号外です！！これは藍さんや早苗さんに伝えなければ！！」

「待てい！！この人は男だ！！」

「ヤオイですか！？なら阿求さんですね！！」

「そっちの方が衝撃事実！！というかヤオイって幻想入りしてたのか！？」

あ、飛んで行っちゃった。って飛ぶ？翼も生えてたし、今の人も妖怪？

「優さん、ちょっと待ってて下さい！！」

「え、何で俺の名前を？」

「文さん待ちなさい！！」

……………とりあえず待とう。

「……ただいま」

あ、帰ってきた。げっそりしてるけど大丈夫か？

「優さん、今回は貴方ですか」

「今回？というか何で俺を知ってるんだ？」

「一条要の世界のエリオです。お元気そうで何よりです」

要の所のエリオか。成る程、俺が落ちたりしてきても慌てないはずだ。あの世界はもっとおかしな事が起こるしな。

「しかし優さんが幻想郷に来るとは」

「？ 何で？」

「幻想郷って優さんが苦手そうなのがいっぱいいますから。幽霊とか」

「幽霊！？」

そんなのがいるの！？帰りたくなってきた。

「そう怯えないで。幽霊いない場所に行きましょう」

「お願い」

というか幻想郷とかいうの回るの決定なんだね。まあ幽霊がない

なら俺は構わないけど。

「こっちですよ」

「何があるんだ？」

「吸血鬼の屋敷、紅魔館ですよ」

吸血鬼か。妖怪、幽霊ときたから現実的、だよな。

「此処……ですよ？」

「……ピンク？」

大きな屋敷があったけど、ピンクの霧に包まれていた。そうピンク。ドピンクだ。健康に悪そうだ。

「優さんは此処で待ってて下さい」

「え？」

「すぐに戻ってきますー!!」

「あ……」

行っちゃった。速いな、エリオ。

エリオ s i d e

何だよあれ！！紅霧異変じゃなくて桃霧異変か！？

「霊夢はいるか！？」

「どつしたのよ」

「異変だ！！」

「……どんなよ」

俺は今の紅魔館の現状を説明したんだが、霊夢が乗り気じゃない。

「それ紅魔館の周りだけでしょう？ならほっときなさいよ」

そつだ。こいつ自分に被害が及ばない限りはめつたに動かないんだ

った。

《相棒よ》

「んだよ」

《今解析結果が出たんだが、あの霧には媚薬作用があるぞ》

「「はい？」」

ちよつと待て、俺はそんな場所にあの、優さんを置いてきてしまったのか？

「まずった」

《そつだな》

「？」

優side

エリオが行ってしまって数分。やる事もないのでちよつと屋敷に近

づいてみると門の前に女性が倒れていた。

「大丈夫ですか!？」

俺は駆け寄って女性の状態を確かめようとしたんだけど。

「すぴー」

「……寝てる」

こんな外で、変な霧が立ち込める中寝てる。しかも洋館に合わぬ手ヤイナ服。

「ん……」

「あ、起きましたか」

「……誰ですか貴女は!？侵入者ですね!！」

「え?いや、俺は」

「問答無用!！」

ズドン

「い……」

不意打ちにも近い腹への一撃で俺は膝をついた。

「男の人だったんですね」

「何故……今」

「触れば気の流れなどで解ります。しかし男ですか」

女性が近づいてきて、俺の顔を両手で挟むように抑えた。そして

ムチユーー

濃厚なキスをされました。

「ぷはっ」

「な、なな、何で!？」

「紅魔館には男性がいないんですよ。それに私妖怪ですから、たまに人を食べたくなっちゃうんです」

「いや、だからって」

「敗者は勝者の言う事を聞いて下さい。大丈夫、痛くしませんから」

ドスッ

身構えた時、鈍い音と同時に女性は倒れた。女性の後頭部にはナイフが深々と刺さっていた。

「大丈夫ですか!？生きてますか!？」

「大丈夫ですよ。美鈴はその程度では死にません」

そこに立っていたのは銀髪のメイドさん。

「でも」

「それよりも、うちの門番が粗相をしてしまい申し訳ありません。我が主が謝罪をしたいと申されましたので、どうかいらして下さりませんか？」

「はあ、それはいいですが、彼女は」

「こうしておけばいいんです」

ズボッ

引っこ抜いた！？ピューピュー血が出てるけど、なんとなく大丈夫な気がした。

「ではついて来て下さい」

「はい」

館の中はものの見事に真っ赤だった。それに外で見た時も大きいとは思ったが、それ以上に明らかに広い。

「お嬢様、お連れしました」

「入りなさい」

大きな扉の先にいたのは変わった帽子を被って、蝙蝠のような羽を生やした少女だった。

「貴方、名前は？」

「暁優。よろしくね。えっと」

「レミリア・スカーレットよ」

「私はお嬢様の従者の十六夜咲夜と申します」

「よろしくね、レミリアちゃん、咲夜さん」

「……これでも500よ」

500?……まさか年齢?そういえばエリオが吸血鬼がいるって言うってたけど、彼女がそうなのか。

「うちの門番が粗相をして済まなかったわ」

「あ、いや、気にしてないから」

「優しいのね」

……あれ？体が、上手く動かない？

「へえ、まだ魔眼に対抗出来るのね。咲夜」

「はい」

！？　一瞬で手足が縛られた！？　一体どうやって！？

「ふふふ、抵抗しなくてもいいわ」

レミリアちゃんが近づいて来る。咲夜さんは俺の服をナイフで切り裂いた。ズボンは大丈夫だったけど、上半身は裸だ。

「綺麗ね。男とは思えないわ」

「そうですね。羨ましい」

「ハハハ……」

ヤバイヤバイヤバイ。どうやってこの状況を切り抜ければいい。

「まだ硬くならないわね」

「ちよっ！？触らないで！！」

「お嬢様。舐めたりしゃぶったりするのが効果的かと」

「咲夜さんも何言ってるの！？」

レミリアちゃんの手が俺のズボンに伸びる。もう駄目だ!!

「そこまでよ!!」

「パチエ？」

なんか紫な人が入ってきた瞬間、部屋が白い煙に包まれた。

「失礼します!!」

「わっ!？」

俺は突然抱えられて部屋の外へ連れ出された。そこで見たのは抱えてる人の頭と背中から羽が生えているのだった。

「貴女は？」

「今は逃げるのが先です!!」

なんだか抱えさせてしまって申し訳ないな。

着いたのは館の地下室でいいだろうか。そこにはさっきの紫の人と

俺を抱えた人。そしてレミアちゃんと良く似た服装をした金髪で、黒い枝にクリスタルがぶら下がったような羽（？）を生やした少女だった。

「大丈夫だったわね？」

「ありがとうございます。貴女達は？」

「私はパチュリー・ノーレッジ。そっちは従者の小悪魔。それでこっちがレミイの妹のフランドール・スカーレット」

「小悪魔です」

「フランだよ！！よろしくね、お姉ちゃん」

「暁優です。フランちゃん、俺は男だよ」

「え、可愛いのに」

もう慣れたけど、男なのに可愛いって言われるのはなんだかな。

「さて暁優。外の霧は見たかしら？」

「はい」

「あれは媚薬作用があるみたいよ」

媚薬……物凄い嫌な言葉だ。でもここにいる人達は大丈夫だよな。

「私は本を保存するために常に空気が綺麗になる魔法を使ってある

図書館にいたから大丈夫。小悪魔は淫魔の力もあるから媚薬耐性は高い。妹様は媚薬が届かなかった地下室にいたから大丈夫」

「他にはメイド妖精っていうのがいたんですけど、そういうのに敏感みたいで逃げ出しました」

「解説ありがとうございます」

あ、でもパチュリーさんは外に出てたよな。大丈夫なのか？

「私が媚薬に犯されてると思った？」

「その点については問題ありません。私が薬を作りましたから」

「流石淫魔なだけはあるわね。こういった魔法薬は私より知識があるわ」

「一応優さんも飲んで下さい」

「分かりました」

渡されたのは無色透明の液体。しかも無味無臭。水と変わらないな。

「これでしばらく大丈夫よ」

「しばらく何ですか？」

「周りに霧がある限りね。その前にレミイ達を元に戻さない」と

「これを飲ませればいいんですか？」

「そうだけど」

「俺がやります」

その答えにその場にいた全員が驚いていた。

「今狙われてるのは俺ですから」

「だけど危ないわ!!」

「大丈夫ですよ。命を掛けて戦う訳じゃないんですから。フランちゃん」

「なあに？」

「お姉ちゃんは必ず元に戻してあげるからね」

フランちゃんは少し不安そうな顔をしてたけど、頭を撫でて安心させてあげる事にした。

「ん〜」

「フランちゃん、待っててね。パチユリーさん、薬貰えますか？」

「仕方ないわね。美鈴はこっちでやるわ。レミィと咲夜はお願い。咲夜は時を操る程度の能力持ちだから気をつけて」

時を操る程度の能力……だから一瞬で縛られたのか。注意しないとまたやられるな。

「じゃあやってきます」

パチユリー side

あの男も無茶するわね。捕まったら自分がどうなるか分かってるでしょうに。

「カッコ良かったですね」

「あれは馬鹿っていうのよ。……………嫌いじゃないけど」

うん、嫌いじゃないけど……………よく分からないこの感情は……………

「お兄ちゃん……………」

さっきから妹様はぼーっとしてるし。私達も媚薬に毒されてるわね。そう思いましょう。

「とにかく、私は美鈴をどうにかするわよ」

「はいパチユリー様」

優side

……迷った。

「広すぎだろこの館!!」

「なら案内して差し上げましょうか?」

「!? 咲夜さん」

見つかったというべきか、見つけたというべきか、どうやって薬を
飲ませようか。

「お嬢様がお待ちです」

今は咲夜さんとレミリアちゃんが別の今がチャンスだ。

「咲夜さん!!」

「キャッ!?!」

俺は咲夜さんの肩を掴んで壁に押し付ける。周りから見たら俺が襲ってるように見えるかもしれない。でも咲夜さんのためなんだ。

「ふふっ、綺麗な顔して大胆なんですね。分かりましたわ。お嬢様の前に少しお相手して差し上げます」

「……ちよつとすみません」

「緊張なさってるのかしら？」

俺は水を飲むふりをして薬を口に含む。そして咲夜さんに口づけをした。人工呼吸みたいなものと自分に言い聞かせる。

「ん、ちゅ」

「んん……!？」

上手く飲ませる事が出来た。これでいいはず。

「あ、私」

「治りましたか？」

「///すみません!!」

「え？」

「このような粗相をしてしまうとは」

「もしかして、覚えてます?」

「……………はい／／／／」

うわー、なんか気まずい。でも自分から引き受けてしまった事だしな。

「レミリアちゃんはどこにいますか？」

「あ、私がやりますので」

「なら協力して下さい。上手くやるには一人より二人の方がやりやすいはずですよ」

咲夜さんが俺を連れずに戻ってきて薬を飲ませようとしても、怪しく思われるのは間違いないからな。

「そうですね」

俺らが立てた作戦は簡単なものだ。咲夜さんが俺を捕まえたふりをして俺と一緒にレミリアちゃんの所へ行く。そして待っていて疲れているだろうから飲み物を咲夜さんが差し出す。もちろん薬を入れてだ。

「失礼します。つれて参りました」

「入りなさい」

「レミリアちゃん、こんな事やめないか？」

「お断りよ」

やっぱりか。まあ分かった事だし咲夜さんに頑張ってもらおう。

「お嬢様、その前に喉を潤しては？」

「なら頂くとしましょう」

咲夜さんが出したお茶をレミリアちゃんが飲んだ。これでレミリアちゃんも元に戻るはず!!

「じゃあ始めましょう、優」

「「!?!?」

何で!?!咲夜さんはすぐに戻ったっていうのに!!

「あら、どうしたのかしら?二人共面白い顔して」

「あ、えっと」

「その……」

「……アハハハハ！あなた達面白すぎよ！！」

……もしかして、レミリアちゃんは最初から。

「優は気がついたみたいね。あんな媚薬なんか私に私が掛かると思った？」

「じゃあ、何で」

「一目惚れ。駄目かしら？」

こういう場合はどうすればいいんだろう。媚薬が効いてなくて、でも襲われそう。………なのは達と同じだな。抵抗するだけ意味がない。

「お嬢様………」

「何よその目は……いいじゃない！！私が一目惚れしたって……！！」

「そういう問題じゃないでしょうが」

「あ、パチエ」

パチユリーさん達とその後ろに、顔を赤らめた美鈴(?)さんもいた。

「貴女ね、彼や妹様がどれだけ心配したと思ってるのよ」

「お姉様、お兄ちゃんが好きだからって良くないよ」

「うー……」

「まあ良かったじゃないか。無事だったんだから。あとは霧をどうにかするだけだね」

「それも問題ないわ。外を見て」

窓から外を見ると、そこではエリオが巫女さんと魔法使いの女の子と一緒に粉剤を巻き散らかしていた。

「もつと、もつとだ!!」

「霧を消せえ!!」

「エリオも魔理沙もテンション高いわね」

どんどん霧が薄くなってるな。確かにこれなら大丈夫かな。

「優様、お詫びとしてお食事でもして行って下さい」

「あ、じゃあ」

逃げ出していたメイド妖精っていうのも戻ってきてパーティーが始まった。その中心は何故か俺だ。

「何でだろ」

「当然ですよ。優さんがいなければ大変だったんですから。また来て下さいよ。私待ってますから」

「門番の貴女が言う。ですが私達はお待ちしておりますよ」

「ありがとう、美鈴さん、咲夜さん」

次に近くにきたのはパチュリーさんと小悪魔さん。

「貴方、無茶するってよく言われない？」

「パチュリー様、そんなのいいじゃないですか。優さん、紅魔館に来たら図書館にも寄って下さいね」

「まあ貴方なら問題ないわ。いろいろ世話になったし、人格者みただし」

「私もパチュリー様も心よりお待ちしておりますよ」

「小悪魔!!」

「必ず寄ります」

「待ってますからね」

「小悪魔！！離さない！！」

パチュリーさんは小悪魔さんに引っ張られていった。

「お兄ちゃん！！」

「おっと」

フランちゃんが俺の胸に飛び込んできた。その後ろからはレミリアちゃんがついてきた。

「えへへ」

「今日は楽しかったわ」

「お姉様遊んでたもんね」

「うっ」

「お兄ちゃんナデナデして」

「はいはい」

「うー！！フランばかり！！」

「レミリアちゃんも」(ナデナデ)

「うー」

なんかレミリアちゃんがお饅頭っぽくなっただよに見えたけど気の

せいだろうか。

「ほら言った通り」

「エリオも誑しだと思ったが、ありゃエリオ以上だな」

「あんなのがいるもんなのね。まさか紅魔館を落とすとは」

エリオ組が物凄い失礼な事言ってるけど、もしかして俺の事なのか？俺そんな事してないのに。

「優さんは紫さんが来るまではのんびりしていて下さい」

「じゃあそつするよ」

結局この日紫さんは来なかったので紅魔館に一晚泊まる事になった。なんかいろいろ身の危険も感じたけど、普通に朝を迎えて、紫さんが来たので普通に帰る事が出来た。

「……あ」

朝帰りの理由、なんて説明しよう。

フラグ最高神の紅魔制覇（後書き）

エリオ「出番が……」

キャラ「頑張つて」

ルーテシア「フラグ最高神は出番すら奪うんだね」

エリオ「本当に凄い人だよ」

キャラ「見習つちや駄目だよ」

エリオ「見習わねえよ」

ルーテシア「そういえば ほのぼの（？）管理局の四人のプロファイラーが知りたいって人がいたから、早速だけどスタート」

ほのぼの（？）管理局

A「早速だが我々のプロフィールを発表する」

B「めんどくせえ」

C「仕方ない。やってやるか」

隊長「簡単に、年齢、身長、見た目、特徴だけでいいな」

A「では発表していきます」

A：24歳 191cm 黒髪黒眼短髪

唯一の妻子持ちにして最年長。ロリコンではない（自称）。戦闘は接近戦が得意。ツツコミ。

B：22歳 176cm 金髪青眼長髪

遠距離戦が得意なサボリ魔。真面目な時の集中力は凄まじい。イケメンだが何故か彼女はいない。ボケ。

C：19歳 183cm 白髪赤眼短髪

アルビノなのに健康優良児にも選ばれた事もある。戦闘は遠近両方出来るバランス型。ボケ。たまにツツコミ。

隊長：21歳 163cm 赤髪赤眼長髪

美人で男前。寄ってくる男は数知れず。やられた男も数知れず。カップ。ボケ。

A「ボケの割合多くない？」

B「しかし隊長」カップだったのか」

貴史「揉みごたえありそうだな」

C「うんうん、って誰!？」

隊長「南武貴史さんだ。私の胸を揉みたいというのでな」

貴史「じゃ、頂きます」

むにゆ

隊長「あ……」

もみもみ

隊長「んあ…そこ／／／／」

ぐにゆ

隊長「ああん!!／／／／」

貴史「ご馳走さん」

A「思いつきり揉んだな」

B「羨ましい」

C「……入ったな」

貴史「良かったぞ。じゃあな」

隊長「待て。体が火照ってしまったではないか。しっかり責任を取って貰うぞ」

貴史「いや、もう、体が!？」

隊長「いい男だ」 お持ち帰り」

貴史「俺でも振り切れんギャグ補正だとー!？」

A・B・C「」「南無南無」

エリオ「性格違っ!!」

キャロ「Cさんの入ったなは隊長さんのスイッチの事だね」
ルーテシア「次回はお持ち帰りされた南武貴史の生みの親、秋代様
とのコラボ。お楽しみに」

ミッション9：全力のエリオ（前書き）

雨季「ここにも題名があるかな、と思ってる雨季です」

ルキ「別に気にしなくていいんじゃない？」

リザ「なくても大丈夫」

雨季「ならいつか」

ルキ「今回は、秋代様とのコラボね」

リザ「うん。最近出番がなかったエリオが頑張る」

雨季「無駄に長くしてもウザがられるから、本編スタート」

ミッション9：全力のエリオ

エリオside

今日も今日で楽しくお手伝い。今日は寺子屋の生徒達に勉強を教えている。

「……となるんだ。解ったかな？」

『はい』

子供は素直でいいね。何人かの女生徒からは熱視線を感じるけど。気にしたら負けだ。

「エリオ、今日はもういいぞ」

「？ いいんですか？」

「お前に客が来てるしな」

客？また紫さんが誰か連れてきたのかな？いや、幻想郷の人っていうのも。まあ会ってみよう。

「どちら様ですか？」

「よう」

「あ、貴史さんにカスミさんに薫さん。そっちは？」

「私の従者の茶々丸だ」

「絡繰茶々丸です」

「エリオ・モンディアルです」

「なんで俺のいる所に来たんだろう。兄さんがいる管理局に行けばいいのに。」

「エリオ」

「何ですか？貴史さん」

「お前の管理局何かおかしくないか？俺が食われかけたんだが」

「食われかけたって、何したんですかこの人は。しかし貴史さんを食えそうなのは限られるな。」

「誰ですか？」

「確か、『プロブレムチャイルド問題児』とかいう部隊の隊長」

「あの人ですか。まあ『七つの大罪』じゃないだけマシですね」

「何なん？その痛い名前の部隊は」

「簡単に言ってしまうえば、貴史さんが食われかけた隊長さんレベルの才能の人が七人集まった部隊です。部隊の名前はそこの隊長さんが決めたそうです」

あそこの部隊は本当に凄い。以前誘われた事があるけど、俺なんか誘ってもな。

「ちなみにその隊長さんは『プロブレムチャイルド問題児』の隊長さんのお姉さんだそうです」

「それは近寄りたくないな」

「よく分からんのだが、貴史、何があった？」

「ん、気にするな」

「それで、俺に何か用ですか？」

「ああ、忘れてた。うちの茶々丸と戦ってくれないか？」

茶々丸さんと戦いか。どういう人か知らないけど、とりあえず第一印象はグッドだったな。って関係ないだろ。

「構いませんが、世界は違う世界でお願いします」

「もちろんだ。そのために貴史がいるんだから」

「薫さんは？」

「観客や」

「よろしくお願いします」

勝てるかどうか分からないけど、やるからには本気でいかせてもら

う。

茶々丸 side

どこかの無人世界。私はエリオ様と戦う事になった。マスターが実戦経験を積むにはいい相手と言っていたけれど、大丈夫だろうか、エリオ様が。

「行きますよ。ストラダ、セットアップ」

《セットアップ》

エリオ様の武器が槍ですか。

「では私も行かせてもらいます」

私は科学式の魔法陣、ゲートから機会仕掛けの剣を取り出す。

「ハア!!」

「ヤッ!!」

エリオ様の槍捌きは一撃一撃が速く、隙もない。なら隙を作ればいい。

「これはどうです？」

パンッ

「……」

ガキン

剣に付いているトリガーを引いて弾を放ったものの、軽く弾かれた。

「その程度ですか？」

「いえ、まだありますが、よく防ぎましたね」

「奇襲には慣れてますから」

戦闘経験は圧倒的にあちらが上という事ですか。

「ですが性能は負けませんよ」

次にゲートから出すのは無数のミサイル。かなりの高威力ですが、エリオ様なら大丈夫でしょう。

「手数で攻めますか。悪くありません。ですが遅い！！」

エリオ様は飛ぶミサイルを足場としてこちらへ向かってくる。それを私は剣で受け止める。

「ストラーダ」

《おうよ》

「!?!」

突如エリオ様の槍が三叉槍に形を変え、私の剣を絡め取った。そしていつの間にかエリオ様が持っていた雷で出来た槍が私を貫こうとしていた。防ぐには武器がない。武器を出す時間はない。避ける余裕はない。

「なら、攻める!! オーバーヒート!!」

「くっ!?!」

私は自ら熱暴走を起こし、高速のインファイトをする。エリオ様はそれすら避けているが、何でしょう、この違和感は。

カスミ s i d e

エリオの成長には目を見張るものがあるな。茶々丸の攻撃が効かな

いとは。

「凄いなあ、エリオくん」

「あれほど強いとは。将来が楽しみだな」

「……」

「貴史？」

「先読み？いや未来視か？」

貴史は何を言ってるんだ？いや待て、よく見ると確かに不自然な回避があるな。

「成る程、確かに未来視だな」

「だろ。あの回避は先読みとかのレベルじゃないだろ」

「あ、今もやな」

だが所々避けきれず防ぐ時がある。常に未来視をして避ける事は不可能という事か。茶々丸は上手く対応出来るかな？

茶々丸 side

これは……訊いてみますか。

「エリオ様」

「何ですか？」

「先読み、もしくはそれに近い能力を持っていますね」

「正解です。俺は以前宝石翁に眼に魔術を施してもらいましてね。3秒に一度、一瞬ですが未来が見えます」

……こうもあっさり答えてもらえるとは、流石に予想外でした。

「バレたら答えますよ。隠す必要ありませんし」

「そうですね」

ならば、未来を視ても避けきれない攻撃をするのみ。

「その魔法陣。また性懲りもなくミサイルですか？」

「いいえ、武器ですよ。貴方が避けきれない攻撃をするための」

作り出した無数の魔法陣から顔を出した物を見てエリオ様の顔が引きつった。

「……………ハハハ、そりゃ避けきれないわ」

私が出したのは無数のガトリング砲。この量なら隙間なく弾幕を張れます。

「ファイヤー!!」

「常識考えろ!!」

撃ち出されるガトリングの弾。エリオ様は自分の前で槍を回し、弾幕を弾いている。ですがその守りでは弾は弾けても、ミサイルは弾けませんよね。

「ファイヤー!!」

「!?!」

ズドーン

撃ち出したミサイルが見事に直撃した。煙が晴れた先には血塗れのエリオ様がいた。

「ハア…ハア…。いつてえ」

「まだやりますか?」

「当然。動ける限りはやります。とはいえ、もう大分キツイ。次で最後にします」

「分かりました」

「じゃあ、やるぜ相棒」

《任せな、相棒》

エリオ様は空へと跳んだ。ちょっとした高さではない。魔法を使つてどんどんと高度を上げていく。

「どこまで行つた？」

「大気圏、現在対流圏です」

「そこまでか」

私も探知しているだけなのでエリオ様が何をするかは分からない。しかし用心するに越したことはありません。

《ゼンリヨクゼンカイナノ》

よく分からない少女の音声と共に私の体は黄金に輝く。所謂スーパーモードだ。さあ、どこからでも来なさい。

エリオside

そろそろ、か。体の事を考えるといつもより高くはいけないな。まあ十分なんだけど。

《準備OKだ》

「ならやるぞ」

魔力無しでもバリアジャケットと浮遊のみ出来る簡易デバイスを起動させておく。そしてストライダーに全魔力を注ぎ込む。するとストライダーが雷をほとばしらせ光り輝く。

「墜ちろ!!紫電……龍星!!!!!!」

《ドラゴンダイブ!!!!!!!!!!》

カスミside

来た。天空から巨大な雷の龍が。あれがエリオの奥の手か。茶々丸はそれに向かってレーザーやミサイルを乱発するが威力が落ちる様子が見られない。

「大丈夫なんかあれ!？」

「私は茶々丸を信頼するよ」

「俺らも軽く防御するぞ。流石に巻き込まれそうだ」

近くなるにつれその巨大さがよく分かる。だが茶々丸の攻撃も並みではない。徐々にはあるが龍の体が削れている。しかしあれでは……

「間に合わない」

ドオオオオーン

龍が落ちた瞬間、辺り一面が吹き飛んだ。私達も龍の攻撃範囲だったが、防御していたので問題なく耐える事が出来た。

「茶々丸……」

流石に少しだが心配になった。ぱっと見ではあるが、出来たクレイターの範囲は都市一つほど。深さは何百メートルというレベルだろ

う。

「天災やな」

「だが茶々丸は立ってるようだぞ」

貴史がそう言ったので煙が晴れ始めているクレーターの中心を確かめると、ボロボロではあるものの茶々丸は確かに立っていた。そして近くに突き刺さっているストラダーにエリオが転移してきた。そう設定してあったのだらう。

「「……」」

双方無言でいる。どちらも動けないだらう。

「……参りました」

エリオのその一言で試合は終わりを告げた。

エリオ s i d e

なんであれを耐えるかな。俺の必殺技だったのに。

「エリオ様、何故負けを認めたのですか？」

「あの状態でも茶々丸さんは魔法陣からミサイルなりなんなり出せたでしょう？俺は動く事もままならなかったですから」

あそこで数%でも魔力を残しておけば勝てたのは俺だったろう。

「ありがとうエリオ。今日は茶々丸にもいい経験になった」

「「ちら」」

「次は完勝出来るようにならないとな」

「そうですね、マスター」

「俺だってそう簡単には負けません」

俺だってまだまだ伸び盛りなんだ。目標は兄さんを超える事なんだから、ここで躓くわけにはいかない。

「じゃあなエリオ」

「ほなまたな」

「暇があればまた茶々丸の相手を頼む」

「本日はありがとうございました」

「では皆さん、また」

……さて、修行頑張らないと。その前に目を治さないと。酷
使し過ぎて世界がモノクロだ。

ミッション9：全力のエリオ（後書き）

エリオ「無念です」

キャロ「いつの間にあんな眼を手に入れたの？」

エリオ「こないだアルトルージュさんの所に行った時」

ルーテシア「眼、大丈夫？」

エリオ「問題ない。治った」

キャロ「そう、良かった」

ルーテシア「無理しないでね」

エリオ「無茶はするかもな」

キャロ「もう」

ルーテシア「じゃあいつも通り、あれをどうぞ」

ほのぼの(?) 管理局

隊長「ふんふんふんーん」

A「隊長ご機嫌だな」

B「前回のあれだろ」

C「あれか」

A「あの人もご愁傷様だな」

隊長「あ、おいB」

B「何ぞんす」

隊長「一狩り行こうぜ」

C「ちょい待ち。俺もやるぜ」

B「お、Cもやってるのか」

C「始めたばかりだけど」

隊長「ハハハ！なら揉んでやるっ」

B「前G級の力を見せてやる」

C「ちょっとお二方、足引っ張らないで下せえ」

隊長「っ、強い」

B「初心者のレベルじゃねえ」

C「さあどんどん狩るぞ」

A「……………最近のゲームは分からん」

エリオ「最近作者はモンハンにハマってます」

キャロ「皆さんと一緒にモンハン小説出してるしね」

ルーテシア「今回は短めだね」

エリオ「まあ、気にする事でもないよ」

キヤロ「次回は香崎様とのコラボ。あのチート夫婦が来るよ。次回もお楽しみに」

ミッション10：遊び心満載（前書き）

雨「チート夫婦が来るよ」

ルキ「私達の生みの親のキャラなのよね」

リザ「うん」

雨「二人にとっては兄貴分とかになるのかな？」

ルキ「そうね……私達はあるのキャラになってるけど」

リザ「……そうだね」

雨「なら俺は育ての親になるのか？」

ルキ・リザ「夫」

雨「はいはい。ではスタート」

ミッション10：遊び心満載

百合姫 side

「ユリ、幻想郷行かねえ？」

「うん、いいわよ。じゃあ早速」

「あ、行くのは並行世界の幻想郷だ」

並行世界の？まあいいんだけど、何でいきなり？

「こないだ要の所の管理局行つたる？」

「ああ、JSから10年経ってるあそこね」

「あそこのエリオが幻想郷にいるらしんだよ」

へー、幻想郷にね。あの管理局内はいろいろと異世界の物があったりしたけど、実際に違う世界に行ってるのね。

「なら行きましょう。面白そうだし」

「そう言うと思って準備は済んでるぜ」

流石は鈴、よく分かってる。

「レツツコー」

エリオ side

おはようございます皆さん。今日の朝食はシンプルに玄米に大根の味噌汁、鮎の塩焼きに沢庵です。ああ、ご飯が美味いなあ。

「ほらエリオ、顔にご飯粒が付いてるぜ」

「魔理沙、そんなものどこにもないぞ。っとエリオ、服に染みがあるぞ。すぐ脱げ、今脱げ」

「嫌ですね、年中発情期の女狐は。エリオさんは人なんですから私と一緒にするのが一番なんです」

「貴女は現人神。人ではないでしょう。あ、エリオ、お味噌汁のおかわりは？」

「もう十分ですよ、星さん。エリオの胃袋を把握出来てないでよくこの場にいられますね」

…… 修羅場です。朝から魔理沙、藍さん、早苗、星、妖夢が俺の家に来てしまった。この現状、どう抜け出すべきか。

「修羅場だなあ」

「修羅場ねえ」

「「「「誰だ!?!」」」」

「鈴さん、百合姫さん、お久しぶりです。ご飯いりますか?」

「もう食ってきたからいらん」

「さいですか」

この人達、というか異世界から来る人は突然来るから慣れちゃうんだよね。

「彼女達呆然としてるけどいいの?」

「慣れてないだけです。それで用は?」

「「遊びに来た」」

まあ予想は出来ていましたけど、確かこの人達って幻想郷に住んできた事があるとかないとか。まあいつか。

「じゃあ行きますか。片付けよろしく」

鈴 side

エリオも随分といい性格になったもんだな。

「何処行きます?」

「ん、幽香の所は?」

「あ、止めといた方がいいですよ。恋人いますし」

「……なに!!!?」

幽香に恋人!? そりゃ並行世界なんだからその可能性は十分にあるが、一体何処のどいつだ!!

「普通の人間ですよ。あなた達が気にしてもしょうがないでしょう。本人の問題なんですし」

「でも気になるじゃない!!」

「そっだぞ!!」

「安心して下さい。いい人ですから」

……今回は見逃してやろう。というか後でこっそり見に行こう。そ
うした方がいい。変な男に引っ掛かってたら大変だし。

「天界なんてどうですか？」

「天子の所か。まあいいんじゃないか？」

「私もとりあえずいいわよ」

今は遊びに行くとするか。

天界って結構簡単にこれるよな。途中もエリオの顔パスでどうにか
なっかし。

「天子いるか？」

「誰よ。ってエリオじゃない」

「おやエリオくん、こんにちわ。そちらの方々は？」

「神北鈴だ」

「御神百合姫よ」

「二人は兄さんの友人です」

「ゲツ、要の」

ん？要の奴何かしたのか？天子が物凄い嫌な顔してるけど。

「天子、兄さんにこつてり搾られたもんな」

「こつてり縛られたとな！？」

「縛られたなら最高だっ、オホン」

あ、この天子もドMなんだな。しかしどうして搾られたんだろうな。

「総領娘様が要さんに戦いを挑んだんですけど、見事に返り討ちに
されまして」

「そりゃ天人程度が要に喧嘩売ったらね」

「少なくともこの幻想郷に要に勝てるのいなさそうだしな」

「むむむ、この私を馬鹿にして！！倒してやる！！」

威勢はいいんだよな。暇だしやってやるか。

「鈴、私がやるわ」

「そうか。じゃあやってくれ」

ユリが天子と一緒に違う部屋に行って少し経った。そしてユリだけが戻ってきた。

「あの百合姫さん、総領娘様は？」

「ちょっと、ね」

衣玖が天子を見に行ってる間に俺らは別の場所に移動する事にした。

「総領娘様……!?」

うん、ユリは楽しんだみたいだな。

エリオside

二人の要望で次に来たのはにとりの工房だ。

「にとり、俺だ」

「結婚してくれー!!」

「違うー!!」

鈴さんは何が楽しいのか。俺のツッコミが楽しいのか？

「……………こないわね」

確かに。留守にしているのか？いや、中から気配はするから聞こえていないのか？

「入ってみますか」

中に入ってみると、にとりが溶接作業をしていた。これじゃあ聞こえんわな。

「待とうか」

「邪魔したら悪いしね」

しばらくすると作業が終わってにとりがこっちに気が付いた。

「あれ？いつの間に？」

「さっきから。こっちは兄さんの友人の鈴さんと百合姫さん」

「よろしく」

「よろしく」

「それで、何作ってたんだ？」

「これだよ」

にとりが出したのは玩具の銃みたいなもの。レーザーでも出るのか？

「まだ名前は決まってるんだけど、これで撃った相手の年齢と性別を自由に変えられるんだ」

「……ほう」

あ、ヤバい。この二人に渡したら駄目だ。

「ちょっと見せて」

「待てにと」「いいよ」「」

「このダイヤルで年齢変更。スイッチで性別変更か」

「「エリオ食らえ〜!!」」

「断つ、動けん!?!」

銃から出た光線が俺に当たった瞬間、俺は煙に包まれた。

どうなったかしら？9歳女に設定したけど。

「うう、トラウマが」

「「WWWWW」

「笑うなあー！」

うんうん、可愛らしくなったわ。もう少し遊んでから戻してあげましょう。

ボンッ

「「「……………あ」」」

「壊れてんじゃねえかー！」

「すぐ直すからね」

あーあ、しばらくこのままね。

「なら直るまで私達が遊んであげる」

「嫌だー！！助けてストライダー！！」

《バロスWWWWW》

「うわーん！……！」

「ユリ」

「分かってるわ、鈴」

「この瞬間を残さねば!!」

このエリオの可愛さは本当にヤバい。なんていうか、ヤバい。帰ったらみんなに見せてあげよう。

オマケ

チート夫婦は帰る前に風見幽香の様子を見に来たようです。

「さてさて、どんな奴かしら?」

「俺達が見極めてやろう」

風見家の窓から二人が覗き見すると、そこには幽香と男が一人いた。

「はい、あ〜ん」

「幽香、恥ずかしいよ／＼／＼」

「いいじゃないの。二人だけなんだから」

「あ、ご飯粒付いてるよ」

チユツ

「もう、貴方も恥ずかしいじゃないの／＼／＼」

「幽香以外にはやらないよ」

「私もよ」

「ふふふ」

「「ダー」「」

チート夫婦は砂糖を吐いてしまった。

ミッション10：遊び心満載（後書き）

エリ子「ひっく」

キャロ・ルーテシア「エリ子たんハアハア」

エリ子「ひっ!?!」

キャロ「大丈夫。優しくするから」

ルーテシア「痛くないよ。気持ちいいよ」

エリ子「ほのぼの(?) 管理局 早く始めて!」

ほのぼの(?) 管理局

鈴「モンハンしにきたぞ」

百合姫「一狩行こうぜ」

A「あ、どつも」

B「よっしゃ！！」

C「でも5人になるぞ」

隊長「お前達でやってくれ。私は用がある」

鈴「そうなのか」

百合姫「残念ね」

隊長「申し訳ない」

一真「来たか」

隊長「待たせたな。ではやろうか」

一真「字が違うぞ」

隊長「いいじゃないか！！その肉体を味あわせてくれ！！」

一真「こいつ変態だ！！って逃げれん！？」

隊長「ん……くちゅ」

一真「んんん!?!」

A「……」

鈴「弓働くな!?!」

B「働くな!?!」

百合姫「曲射が邪魔よ!?!粉塵だけ使いなさい!?!」

C「ピーヒャラピーヒャラ。攻撃力up」

A「……寂しい」

エリオ「第二の被害者は一真さんか」

キャラ「戻っちゃった」

ルーテシア「残念」

エリオ「お前達は……」

キャラ「だって可愛かったんだもん!!」

ルーテシア「あんな事やこんな事をしたかった」

エリオ「自重を覚えろ。次回はユタ様とのコラボでFateの世界へ行く。お楽しみに」

ミッション11：初めて依頼らしい事（前書き）

雨季「さ、始めようか」

ルキ「そうね」

リザ「……」

ルキ「どうしたのよ。元気ないわよ」

リザ「最近暑くなってきた」

ルキ「まだまだ寒いじゃない」

雨季「リザは凍土暮らしのアグナコトル亜種だからな。春の訪れに敏感なんだろ」

？「春ですよ」

リザ「……今、変なのが」

雨季「春の幻想郷名物だ」

ルキ「じゃあ本編行くわよ。今回はユタ様とのコラボ、スタート！
！」

ミッション11：初めて依頼らしい事

エリオside

「エリオ、おはよう」

「おはようございます紫さん。ご飯食べに来たんですか？」

「嬉しいお誘いだけど、依頼よ」

依頼か。また誰か遊びに来るのか？まあいつもの事だし、さて、誰が来るのかな？

「残念だけど、今回は異世界で歪みを直してきてもらっわ」

「俺は森羅じゃないんですよ。その手の仕事は零見さん達にやらせて下さいよ」

「そう言わないの」

仕方ない。やるからには本気でやる。

「で、歪みって？」

「宝石翁がいる世界で依頼主が待ってるわ。時間軸的には、聖杯戦争の終わり寸前だそうよ」

まためんどくさい時期だな。正直誰が残っているか分からないんだよな。

「分かりました。ではお願いします」

哭堵優 side

そろそろ来てもらわないと困るんだけどな。

「お待たせしました。エリオ・モンディアルです」

「来たか。哭堵優だ」

こいつが噂の奴か。確かに強いな。安心したぜ。

「今回の依頼は？」

「歪みの修正。ってそんな事じゃないよな。本来ギルガメッシュが衛宮士郎に倒されるべきってのは知ってるか？」

「本人に聞きました」

本人にか。このエリオも随分といろいろな経験を積んでるんだな。流石は要の弟子ってか？

「その歪みから出て来た憎悪っていうのがギルガメツシュに取り憑いたんだ」

「成る程、把握しました。つまり憎悪とかいうのが取り憑いたせいでギルガメツシュさんが強化。そして土郎さんが負けそうな状況とこの世全ての悪を飲み干した英雄王も堕ちたものですね」

よく堕ちたって言えるな。心強いと言えば心強いか。

「ギルガメツシュさんを倒せば憎悪も消え、歪みも直るんですか？」

「いや、確かに憎悪を倒せば歪みも弱まる。だが直るわけじゃない。今の俺らじゃ出来ないから紫にやってもらう」

「そうですね。大変ですね、力が使えないのは」

今ので気づくよな。本当に面倒だ。なんで封じるかな。

「俺も頑張りますんで」

「頼りにしてるぞ」

さて、現場に向かおうか。

お、いたいた。ギルガメッシュ、黒くなってるな。全体的に能力も上がってそうだし、厄介だ。

「到着」

「誰だ！？此処は危ないから逃げろ！！」

「少なくともお前よりは強いよ、衛宮士郎」

「それは説明出来れば後でします。今はあれを倒しましょう」

「我^{おれ}を無視するなよ雑種共が！！」

おっと、憎悪に飲まれたと思ってたが、意識があるのか。それとも憎悪が操って喋ってるだけか？

「まあどっちでも関係ないか」

王の財宝から飛んできた武器を俺はグラムで、エリオはストラーダ^{ゲート・オブ・バビロン}で、士郎は投影武器で撃ち落とす。

「士郎さんは自分のやるべき事をお願いします」

「前衛は俺がやる」

「………すまない」

エリオside

強化状態のギルガメツシユさん。どんなものか知りませんが。

「倒させてもらっ」

「ほざけ雑種!!」

王の財宝ゲート・オブ・バビロンから飛んでくる宝具を避けながら走る。狙いが甘いな。ただ一発の威力が強化されている。

「当たらなければ関係ないな。雷神・纏!!」

「ぬっ!？」

すれ違いざまに雷撃を叩き込んだんだが、効いていないのか?今のギルガメツシユさんの装備は私服。黄金の鎧ならともかく、あれでは対魔力はないに等しいはず。

「考えてもしょうがないか」

とにかく後ろに回れたのは大きい。王の財宝ゲート・オブ・バビロンは後方への攻撃が不可能だ。確実に倒すにはこれの方が楽だ。

「My whole life was (この体は、) “unlimited blade works” (無限の剣で出来ていた)」

士郎さんの方も準備が出来たようだ。世界が塗り替えられ、無限とも思える剣が刺さっている世界になった。

「固有結界？生意気な」

「ほら、何処を見ている」

ザンッ

「ぐう！？」

「がら空きです」

ドスッ

「貴様ら！！」

「行け！！」

ズドドドド

哭堵さんがまず背中から一撃。その瞬間に俺が心臓を一刺し。そして土郎さんが剣群を叩き込んだ。しかしそこにはギルガメッシュさんがほぼ無傷で立っていた。

「再生。厄介な」

「みただいな」

「方法は一つ、ですかね」

「二人共、どうすればいいのか解るのか？」

「ある程度は」

実に単純にして困難な事だけどな。ギルガメツシュさんの完全消滅なんて。

哭堵優 side

ここは消滅の鎌しかないな。だがその隙があるか？ここはあいつに任せてみるか。

「エリオ、鎌使えるか？」

「鎖鎌、稲刈り用の鎌、その他諸々も」

「死神つばいの」

「無理です」

「嘘！？」

「嘘です」

こいつこんな状況でよくそんな事言えるな。余裕ありすぎだろ。

「エアよ」

「マズい！！」

放置しすぎた！このままだとヤバい事になる！！

「爆ぜろ！！」

ドゴーン

「ナイスだ士郎！！」

士郎がさつき飛ばした剣を爆発させてギルガメッシュの動きを止めた。

「喰らつとけ！！」

「舐めるな雑種！！」

ガキン

受け止めたか。だが問題ない。

「エリオ、頼む」

「頼まりました」

ザンツ

「お見事」

エリオは俺が出した消滅の鎌を受け取りギルガメッシュの首を落とした。そしてギルガメッシュは憎悪と共に消滅した。

エリオside

終わった終わった。あー疲れた。

「ありがとう、助かったよ」

「俺は仕事だしな」

「俺も仕事ですが、貴方への恩返しもありますね」

「俺に？」

「エリオ・モンディアル。未来の並行世界にて衛宮士郎達に師事した男だ」

「アーチャー！？」

やっと出てきてくれましたか。もっと早く来てくれれば楽だったのに。

「お久しぶりです。それとも初めましてがいいですか？」

「初めましてが正確だろう。私は記録で君を知っているだけだからな」

「二人共、どういう事なんだ？」

「未来で会うかもしれないという事です」

「終わったわよ」

紫さんがいいタイミングで来てくれたな。

「ではさようなら。哭堵さん、今度幻想郷に遊びに来て下さい」
「暇ならそつする」

帰ったら寝よう。久しぶりの本格的な依頼は面倒だったな。

ミッション11：初めて依頼らしい事（後書き）

エリオ「いい疲れだ」

キャラ「変なエリオくん」

ルーテシア「仕事好き？ガリユーに押し付けた仕事もやる？」

エリオ「ガリユーをいたわれ」

A「こんにちわ」

B「邪魔するぜ」

C「おつす」

エリオ「あれ？どうしたんですか？」

A「隊長に追い出された」

B「何でも貴史って人が来るとか」

C「キャラさん、ルーテシアさん、ちょっとお茶しませんか？」

B「お前なんか駄目に決まってるだろ。ここは俺が」

A「黙れナンパ共」

キャラ「変わらず愉快だね」

ルーテシア「じゃあ見てみようか」

ほのぼの（？）（管理局

隊長「来たか、姉よ」

姉「ああ。で、面白い事って?」

貴史「揉ませろ!!」

隊長「どうだ?」

姉「……美味しそう」

貴史「いい胸してるじゃないか。では早速」

姉「ギョッ」

貴史「ムグッ!?!」

隊長「いきなり抱きついてどうする」

姉「ほらほら、お姉さんのおっぱい自由にしているのよ」

貴史（は、離せん！？力ではなく技術で俺を押さえてるだど！？ク
ロナ並みの才能があるんじゃないか！？）

姉「そんなに暴れちゃ駄目よ」

隊長「しかし流石は姉だな。私が苦戦した貴史をこつも容易く」

姉「この子の相手をしてると強くなってる気がするわ」

隊長「私も強くなったしな。では頂きます」

貴史「モガーーーー！！（離せーーーー！！）」

全員『これは酷い』

A「隊長のお姉さんが化け物とは聞いていたが」

B「こええよ」

C「どうだ読者！！これがギャグ状態のうちの管理局だ！！」

B「そうだ！！うちは凄いんだ！！」

A「お前らが偉ぶるな」

エリオ「貴史がこつもあつさり」と

キャラ「ギャグ補正……97億！？」

ルーテシア「なんて数値なの……」

エリオ「そこも訳の分からない会話はやめて。次回は悠久なる時間様とのコラボ。お楽しみに」

ミッション12：驚かない、驚けない、驚いた（前書き）

雨季「こんにちは」

ルキ「あれ？リザは？」

雨季「寒さを求めて北海道」

ルキ「どんどん北に行きそうの」

雨季「夏には北極かもな」

ルキ「なら私は火山に行くわ」

雨季「お前の実家じゃねえか」

ルキ「今回は悠久なる時間様とのコラボ。スタート」

ミッション12：驚かない、驚けない、驚いた

鏡^{かがみ}side

深夜に変な気配を感じてドアを開けると、その先には紫の空間に無数の目玉が存在する世界が広まっていた。

「……なんだこれ」

「あら驚かないのね」

「誰だ？」

俺の上に突然女性が現れて、上半身を出して俺の頭に乗った。重い。

「レディーに重いとは失礼よ」

「あだだだ！！グリグリしないでくれ！！」

乗ってきたのは向こうなのに。しかも心読まれた。

「悪い子は神隠しよ」

「え？いやちよっと」

「ぼーい」

「うわわ！？何でだよおおおお！？」

無理矢理よくわからない空間に放り出されてしまった。俺が悪いのか？

「あー、びっくりした」

「それはこちらの台詞ですよ」

放り出された先には、子供がいた。いや確かに子供なんだけど、威厳があるというかなんというか。

「スキマから出てくるとは、八雲紫に連れてこられましたか。災難でしたね」

「えっと、君は？」

「人に名を尋ねる時はまず自分からですよ」

「あ、そうだな。神代鏡だ。よろしく」

「私は四季映姫・ヤマザナドウです」

や、山？日本名とよく分からないものが混ざってないか？

「ああ、ヤマザナドゥというのは役職名です」

「役職？」

「ええ、私はこの幻想郷で閻魔をやっています」

閻魔？こんな小さい女の子が？閻魔といえばあの、おっさんってイメージがあるんだけどな。でも閻魔なら敬語で話した方がいいかな。

「貴方は、なかなか大変な人生を歩んでいるんですね」

「それって……」

「閻魔というものは視たくなくても魂が視えてしまうものなのですよ」

「じゃあ視られちゃったのかな、俺の人生。」

「ただ貴方の暁優や吉谷吼太と同じような人種なのです。貴方ももう少し女性からの好意に敏感になるべきです。それが今の貴方に出来る善行です」

「はあ……」

「どういふ事なのかよく分からないんだけど、何をすればいいんだろう。」

「分かっていないようですね」

「すみません」

「分かりきっていた事ですから気にしていません」

え？俺馬鹿にされてるの？

「あ、そうです。貴方に一つ頼みがあるのですが」

「何ですか？」

「私の部下の様子を見て来てもらえませんか？サボリ癖が酷い子です」

「そのくらいなら」

「ではお願いします。あちらに真っ直ぐいけば川が見えます。そこに赤い髪を二つに結った無駄乳の女がいるはずです」

「……無駄乳？」

「早く行きなさい！！」

「はい！！」

こっちの方にいるんだよな。しかし微妙におどろおどろしい川だな。

「あの人かな」

……寝てるな。確かにサボリ癖があるみたいだな。

「すみません。起きて下さい」

「……むにゃ、四季様、それはご勘弁を、むにゃ」

「寝てたらその四季様に怒られますよー」

「ん？………何しに来たんだい！！此処は生きてる人間の来る場所じゃないよー！！」

「え？俺は」

「あくまで帰らない気かい。なら実力行使させてもらっよー！！」

駄目だこりゃ。話を聞く気がなさそうだ。一旦止めてから話をしな
いと。

「ワールド・オブ・ライト」

「くっ、眩しいけどこれがなんだって言うんだい！！」

確かに見た目は光の世界。ただ眩しいだけ。でもすぐに効果に気づ
くだろう。

「!? 能力が使えない!? あんた何したんだい!？」

「この空間がそういうものなんですよ。それよりも俺の話を」「小町
!！」あ、映姫さん」

「し、四季様!？」

「彼に頼んで呼びに行かせたら、襲い掛かろうとするとは何事です
!！」

「え、ええ!？」

「いいですか? 貴女は大体「何してるんですか?」「エリオくん」

今度来たのは男の人。知り合いのようだな。

「こんにちは。神代鏡さんですよね」

「そうだけど」

「貴方を送りつけた人に頼まれて迎えに来たんですが」

「そうなのか。助かったよ」

このまま巻き込まれてしまおうかと思ったけど、ここで助け舟が来て
良かった。

「行きますか。小町さんは叱られて下さい」

「そんな、あたしも助け「小町！！聞いていますか？」すみません！！」

悲惨だな。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。エリオ・モンディアルです」

「神代鏡だ。普通に喋ってくれて構わない」

「ならそつちも子供みたいな格好してないで大きくなったらどうだ？」

「気づいてたのか？」

「勘だ」

勘か。ならしょうがないという事にしよう。年齢は18くらいにとくかな。

「本当に大きくなったな」

「信じてなかったのか？その割には驚かないな」

「この程度じゃ驚けない人生送ってるからな。鏡って空飛べるか？」

「飛べるぞ」

「ならここから飛んで周りを見渡してみな」

とりあえずやってみるか。やってみて損はないしな。

「……………おお」

「どうだ」

そこに広がっていたのは雄大な自然。今の日本ではほぼ見る事が出来ないであろう原風景。小さな村には活気に溢れ、子供が駆け回る。

「いいな」

「だろ？これが現世に取り残された。いや現世が取り残した世界、幻想郷だ」

驚いた。こんな世界があつたんだな。

「ちよつと人里行くか」

「俺は此処の事は知らないから任せる」

人里ってさっきの村か。田舎なんだけど、今の日本の田舎とは全くの別物だな。

「エリオ兄ちゃんだ!!」

「遊ばー!!」

「そっちは誰？」

「落ち着けお前ら、遊んでやるから。こっちは兄ちゃんの友達の鏡兄ちゃんだ」

「よろしくね」

『よろしくー!!』

元気がいいな。子供はこういうもんか。しかし遊ぶのか。

「どうしたよ」

「いや、俺さ、この眼のせいで誰かと遊ぶって事がなかったから」

そう言って俺は赤い眼を見せたんだけど、エリオはともかく子供までそれが?って顔してるし。

「幻想郷じゃその程度個性だぞ」

「ルーミアちゃんとか妖怪いるしね」

「チルノちゃんみたいな妖精もいるよ」

「エリオちゃんみたいな無自覚ジゴロもいるよ」

「おいおい!?最後の誰が言った!?!」

『寅の姉ちゃん』

「星か!!あの女郎、子供に何教えてやがる!!」

あ、エリオが走って行ってしまった。これって俺が子供の相手するのか?

「鏡兄ちゃん遊ぼー」

「えっと、じゃあ遊ぼうか」

「じゃあ鬼ごっこ!!兄ちゃん鬼ね!!」

『わー!!!!』

「速っ!?!」

意外と速い子供達を相手している間にエリオも帰ってきてきて何故か子供側に加わった。鬼は二人じゃ駄目なのか?

「意外と、疲れるな」

「子供は元気だからな」

夕方までほぼ休みなしって、子供が元気なのか、幻想郷の子供が特別なのか。

「楽しめたかしら？」

「あんたは」

「紫さん、お迎えですか？」

確か、八雲紫だったか。

「そろそろお帰りでいいかしら？」

「そうだな。もういいかな」

「また来いよ」

「ああ」

ここはまた機会が来たいな。

ミッション12：驚かない、驚けない、驚いた（後書き）

エリオ「日常でした」

キャラ「まあ日常だね」

ルーテシア「寺子屋にはちょっとした妖怪や妖精もいる」

キャラ「なんで言ったの？」

ルーテシア「説明？」

エリオ「なんで疑問系なんだよ」

ルーテシア「気にしたら負け。安西先生も言ってた」

エリオ「安西先生はそんな微妙な発言はせんだろ」

キャラ「ではそろそろ皆さんお楽しみのおれの時間です。どつぞ」

ほのぼの(?) 管理局

B「A、何やってんだ？」

A「見て分からないか？」

C「地図だよな。どっか行くのか？」

A「いや、卓上旅行」

B「根暗め」

C「寂しいな」

A「黙れ」

隊長「何をしているんだ？」

C「Aが卓上旅行やってます」

隊長「……今度みんなで旅行に行こう」

A「ええい、隊長までか」

B「だってそんな趣味な奴初めて見たからよ」

A「俺にとっては一種のイメトレなんだけどな」

隊長「ああ、お前のレアスキルはイメージが重要だったな」

B・C「レアスキル持ちだったの!?!」

A「お前ら一緒に訓練や仕事してきてそれか!?!」

B・C「だって、ねえ」

隊長「私も最近プロフィールを見返して知った」

A「もうやだこの部隊」

隊長・B・C「頑張れツツコミ」

A「ふざけるな!! 帰ったら妻に慰めてもらうんだい!!」

隊長・B・C「このリア充め!!」

A「隊長は相手がいるでしょう」

隊長「貴史や一真は恋人ではない。現在恋人募集中だ」

B・C「俺も」

A「知るかよ」

エリオ「実はレアスキル持ちのAさん」

キャロ「イメージが大切なんだね」

ルーテシア「イメージなら私も負けてない」

エリオ「どうせ妄想だろう」

キャロ「次回は葵（仮）様とのコラボ」

エリオ「最近誰とコラボ約束したか忘れ気味なので感想で書いてくれると嬉しいです。では次回もお楽しみに」

ミッション13：知ってるけど知らない（前書き）

雨季「さあ始まりますよ」

ルキ「今回は葵（仮）様の爆走 最強 イリヤさんとのコラボ」

リザ「無駄にイリヤスフィールへの愛がある作品」

雨季「無駄につて」

リザ「事実。雨季が椀を好きなようなもの」

雨季「そうだけど」

ルキ「私達のことはどう思ってるのよ」

雨季「好きだよ」

ルキ「ならよろしい」

リザ「じゃあ本編、スタート」

ミッション13：知ってるけど知らない

エリオside

今日はどこに行くか。久しぶりに太陽の花畑……やめよう。砂糖を吐く事になりそうだ。

「暇してるわね」

「持て余しています。それで紫さん、今回は？」

「貴方が知ってて知らない人が依頼人よ」

どんなナゾナゾだ？俺が知ってて知らないとなると……分からない。

「じゃあ出ていらっしやい」

「おっはよー！ー！」

「イリヤさん？」

「イリヤさんだよー！！ただ貴方の知ってるイリヤスフィールとは別人だけど」

「……成る程、把握しました。並行世界から来たんですね」

「正解。流石ね」

確かに知ってるけど知らない人だ。しかし何をしに来たんだろう。

「ちょっと試合しない?」

「? イリヤさん、戦えるんですか? 言っちゃ悪いですがイリヤさんじゃ」

「相手にならない、とでも言つのかしら?」

「……失礼」

なんて威圧感だ。さっきの言葉がそっくりそのまま返された気分だ。

「ここでやると迷惑だから他の世界へ行ってもらつわ」

「お願いね、紫」

正直厄介だが、試合だ。気楽にやろう。

イリヤ side

あの人から話を聞いてたけど、なかなか面白そうな男ね。

「お願いします。ストラダ、セットアップ」

《セットアップ》

「じゃあ私も、出でよ、ヘラクレス！！」

私の呼び掛けで腕輪が私のサーヴァントであるヘラクレスになった。

「ちょっと、イリヤさんだけでもキツいのにはバーサーカーさん付きですか？」

「今の我はバーサーカーではない。ヘラクレスと呼んでほしい」

「さいですか。しかも聖杯戦争中より確実に強いじゃないですか」

「見抜くか。見事な観察眼だ」

やっぱりそこそこな実力があればヘラクレスの力も見抜けちゃうわよね。

「強いイリヤさんとヘラクレスさん、お二人を同時に相手しろと？
無茶を言う」

「あ、ヘラクレスはただの審判だから」

「大英雄をそんな事に使っていないんですか？」

私のサーヴァントだから問題なし。今回は私が戦いたいただけなんだから。

「どこからでも来なさい!!」

「では、雷神・纏!!」

成る程、雷を纏って自分の能力を上げる技ね。武器の強化にも使えそうね。

「雷槍」

次は雷の槍か。雷を中心とした戦いをするようね。

「ハッ!!」

「速いわね」

「簡単に避けておいてよく言いますね」

だってあの人に比べたらまだまだもの。でも速いのは確かね。

「突槍壁!!!!」

「おっと」

エリオが槍を突きまくっただけで壁のようになって迫ってきた。防ぐのも面倒だし、エリオの後ろに転移っと。

「ていつ!!!!」

「あぶなっ!!?」

不意打ちの蹴りだったのに避けられちゃった。

「よく避けたわね」

「戦いの時は常に警戒してますから」

「いい心掛けね」

「どうも」

「でもそれは私も同じよ」

私は空から降ってきた雷撃を踊るように避ける。戦いでも優雅さは忘れちゃ駄目よね。

「どちらも不意打ちは無意味ですか」

「そうかしら？」

「……俺には効くかもしれませんね」

そう思うなら早速不意打ちさせてもらおうかしら。

「ザ・ワールド！！時よ止まれ！！」

世界の時間が止まり、私はエリオに向かって鉄甲作用を使ってナイフを四方八方から投げつけた。

「そして時は動きだす」

「うおっ!?!」

これから逃げ出せるかしら?

「オラアアア!」

「へえ」

「くっ、少し刺さったか」

左腕に数本ナイフが刺さっているけども、それ以外は多少切れている程度。

「お見事ね」

「まだまだです。この程度無傷で切り抜けられない俺は未熟者です」

「なら力を見せて。まだ手札を隠しているでしょう?」

「……………」

試合だから手札を隠しているんでしょうけど、私はその力を見てみたいのよね。

「見せてよ」

「仕方ありませんね、一つだけですよ」
「エリオが出したのは、薬のカプセル?薬に頼った力なのかしら?まあそれでも楽しめたらいいけど。」

「これは敵地に潜入するための道具として、魔力を封じるものです」

「魔力を封じて一般人を装うものって事？」

「そうです。ただ一つ、副作用がありました」

そうやってエリオは薬を飲んだ。すると確かに魔力が無くなっていき、エリオの纏っていた雷や雷の槍も消えた。デバイスは槍のままね。まあデバイスは使用者がなくても武器形態を維持出来るしね。

「それで、副作用についてですが」

「何かしら？」

「身体能力が馬鹿みたいに跳ね上がる」

次の瞬間、エリオは私の真後ろに回り込み、槍を突いてきた。あまりに突然すぎて回避が遅くなってしまった。

ズドーン

……槍の刺さった音じゃないでしょう。それにしても。

「どういづつもりかしら？ヘラクレス」

ヘラクレスが身を挺して私を守っていた。斧剣ごと上半身が吹き飛んでいたので返事は返ってこない。

「大丈夫ですかね？」

「大丈夫よ、もう再生してるし。それで、さっきの返事は？」

「申し訳ない我が主。主ならばあれを受けても問題ないのは理解していたが、サーヴァントとしての本能で動いてしまった」

仕方ないわね。どうあるとヘラクレスは私のサーヴァントだもの。

「でも興醒めだわ。エリオ、幻想郷観光お願い出来る？」

「分かりました。紫さん、見ていたら幻想郷に帰して下さい」

「分かったわ」

エリオside

どこに案内しようかな。幻想郷なんて見る場所がいくらかもあるかな。

「何が見たいですか？」

「景色のいい場所がいいわ」

景色のいい場所か。なら霧の湖に行くか。幸い今いる場所からも近い。

「ならこっちにいい場所があります」

「よろしくね」

「此处です」

「悪くないわね。所々変なのがいるけど」

「毛玉ですか？慣れれば可愛いもんですよ」

俺が近くいた毛玉を突つつく。うん、ふさふさで気持ちいい。

ガジッ

「かじられてるわよ」

「痛くないですよ」

ガジガジ

「エリオだ！！何やってるの？」

「エリオさん、こんにちわ」

「おー、チルノに大ちゃん。この人の観光？」

「よろしくね、妖精さん」

そういえばあの世界に妖精は殆どいなかったと思うけど、まあこのイリヤさんは慣れてるのかもしれないな。

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ。イリヤって呼んでね」

「アタイはチルノよ！！最近レティと剣を習ってるわ」

「大妖精です。大ちゃんって呼ばれてます」

「……大ちゃん可愛いわね」

「ふええ！？あ、ありがとうございます／＼／＼」

「ちょっとイリヤ！！大ちゃんはアタイのものよ！！」

「ち、チルノちゃん！？／＼／＼」

二人共大ちゃんまで遊んでるな。どうせだから俺も参加するか。

「大ちゃんは兄さんが好きじゃなかったっけ？」

「エリオさんまで！？／／／／」

「『大ちゃんは可愛いなあ』」

「ふにゅ／／／／」

結局大ちゃんだけでかなりの時間が潰せてしまった。今度大ちゃんにはお詫びにお菓子をあげよう。

「なかなか楽しかったわ」

「それは良かった。また来て下さいね」

「そうさせてもらっわ。次は此処に別荘を造ってみようかしら？」

別荘ってそれはどうなんだろう？まあ悪くはないんだろっけど紫さんがなんて言うか。そんな事を考えてる間にイリヤさんは帰ってしまってしまった。まあ本気じゃなかっただろう。

ミッション13：知ってるけど知らない（後書き）

エリオ「イリヤさんは強いな」

キャラ「あそこのがおかしただけだね」

ルーテシア「仕方ない」

エリオ「うちのチルノとレティさんは俗に言うアドチルやアドレティになり始めています」

キャラ「作者が無駄に好きなのよね」

ルーテシア「そんな事より私達の出番はまだ？」

エリオ「我慢強く待とうよ。あっちのアリシャよりは希望があるんだから」

ルーテシア「分かった」

キャラ「じゃあいつも通り ほのぼの(?) 管理局 スタートです」

ほのぼの(?) 管理局

Aside

これでよし。今日の俺の仕事は終わったな。

「隊長、隊長の分もやりますよ」

「私のは気にするな」

「気にしますよ。お腹に子供がいるんですから」

なんかこの間一真さんとの子供が出来てしまったらしい。詳しくはライ様の活動報告を見てくれ。ん？何言ってるんだ俺？

「私がやるのは書類関係だけだ。出勤はせんよ」

「ですが、気にするんですよ」

「なら半分やってもらおうか」

「了解です」

こうやって書類処理をしている時は非常に静かな職場だ。普段五月蠅いBとCもこういう時は人が変わったように仕事をする。いや、事実Bは人が変わっているんだが。

「B、そっちはどれくらい終わった？」

「……9割」

「そちらの性格は流石だな」

「……そんな事はない」

Bは俗に言う二重人格だ。普段おちゃらけてるのは違い、今のBは余分な事はせず、ただ言われた仕事をこなす存在。本体のB曰く、仕事がめんどろだと思っていたらそこにいたそつだ。

「……隊長、貸して」

「Bまでか。そんなに気にしなくてもいいぞ」

「……無理はいけない」

「全く。なら先程からサボっているCに頼もつか」

「いきなりとばっちり来た！？助けてA！！B！！」

「お前がちゃんとやらないのが悪い」

「……頑張れ」

「血も涙もないのか！？」

Cはなんだかんだ言ってもやるんだよな。やっぱりこいつも隊長が心配って事か。

「頑張ってくれ。私は飲み物を買ってくる」

「了解」

「……お疲れ様です」

「チキシヨウ」

隊長 side

あいつらにもコーピーくらい買ってやるか。それにしても私は幸せものだ。部下から愛されて。

「これはこれは、プロブレムチャイルド問題児の隊長さんではありませんか」

「……どうも」

厄介なのに見つかったな。自称超エリート部隊の奴か。

「んん？隊長自ら買い出しですか？部下にパシられるとは情けない」

「残念。私は個人的に買い物に來ただけですよ。これはあいつらへ

の労いです。貴方の部隊にそういうものはないので？」

「そういうのは下級の部隊がやるものですよ。貴女の部隊のようにね」

気色悪い豚が。自らの実力と相手の実力を比べることすら出来んとはな。

「しかし貴女はいい女だ。どうです？あんな部隊など捨ててうちに来ては？」

「お断りです。臭い豚小屋には行きたくありませんね」

「……貴様、今なんと？」

「臭い豚小屋と言ったんだ。耳まで腐っていたか」

「このアマが！！下手に出てりやつけあがりやがって！！！！」

「いつ下手に出た？」

厄介なことになったな。周りも手を出したくないようだし。仕方あるまい。こんな事をしてはいいつらに叱られるだろうが、ここでやっておくが。

「おいコラ、うちの隊長に何してやがる」

ドガッ

「ぐぶふう！？？」

「C!?!なんでC!?!」

「隊長の帰りが遅いんで見に来ました。何やってんすかさっさと帰りますよ」

「あ、ああ。すまない」

「AとBには報告しますからね」

「それは……」

「やめませんよ」

あの二人本気で怒りそうだ。しかも今のBはあの状態。うう、逃げようかな。

C s i d e

隊長はこつてり搾られて今は机に倒れている。あの人はちよつと喧嘩っ早いんだよな。

「あ、俺ちよつと電話してくる」

「おー、分かった。隊長は任せとけ」

部屋の外に出て、周りにあまり人がいない広場で電話をする。

『あ、お兄ちゃん？』

「おうお兄ちゃんだぞ。元気か？」

『うん！！私もお父さんも元気だよ』

「……わりい、親父の事は」

『あ……ごめん』

「お前は悪くねえよ」

うちは親父と俺と妹の三人暮らした。お袋は管理局で働いていたが、妹が産まれてすぐに死んだ。理由は殉職だ。だから親父は管理局が嫌いだった。だが俺が自分の意志で管理局に入るのには反対はしなかった。反対はしなかったが。

「もうあの人と俺は他人なんだから」

『お兄ちゃん……』

俺が管理局へ入る条件。それは親子の縁を切る事だった。正直嫌だった。だけど俺はこの道へ進みたかった。お袋が歩んだこの道へ。

『そつだ！！最近何かあつた？』

「ああ、聞いて驚け。実はな……」

B s i d e

いいもんだねえ。話せる妹がいるってのは。俺末っ子だから分かんね。

「盗み聞きか？」

「Aもか？」

「俺はお前の監視だ」

「うへえ」

こいつはどうしてこんなに堅物かね？もっと柔軟に行こうぜ。

「なあB」

「どしたよ」

「虐待受けてたって本当か？」

「イエス。隊長からか？」

「ああ」

あんまり思い出したくない記憶だが、まあ事実だからしょうがない。

「もう一人のBは」

「その時に出来た。周りに逆らわず、ただ命令を聞くだけのロボットのようなもう一人の自分」

でもあいつには感謝してるんだぜ。おかげで面倒な仕事をしなくて済む。

「悪いな。変な事聞いて」

「気にすんな。仲間だろ。それに俺も聞きたいことがある」

「何だ？」

俺にとっては非常に大切な事。これは知っておかないといけない。

「どうやってたら二次元以外に嫁が出来る？」

「知るか!!!」

おお神よ、我に嫁を与え給え。

……だが断る

「断られた!？」

「電波でも来たか？」

エリオ「作者があまりに本編より人気があるから本気を出したそうです」

キャラ「これは酷い」

ルーテシア「本当に本気だね」

エリオ「本編もこれくらいやればいいのに」

キャラ「次回は海人様とのコラボ。次回もお楽しみに」

ミッション14：エリオ凶化計画（前書き）

雨「ちゃっちゃと書けちゃった」

ルキ「いい事じゃない」

リザ「うんうん」

椀「そうですね」

ルキ・リザ「……何故いる!?!」

雨「俺が呼んだ。三人にはホワイトデーという事で俺手作りのホットケーキをやるっ」

椀「ありがとうございます」

ルキ「ホットケーキ?」

リザ「好きだからいいけど」

雨「簡単に作れるしね。今回は海人様とのコラボ。どうぞ」

椀「そういえば今回微妙に依頼通りじゃないですよね」

ルキ「そうなの?」

リザ「なら……お仕置き?」

雨「いや、海人様も納得してくれる。かも」

椀・ルキ・リザ「お仕置き」

雨「優しくしてくれないとやー!!」

ミッション14：エリオ凶化計画

エリオside

物語は突然始まる。

朝何故か家にいた飛翔さんが作った飯を食べてる時、飛翔さんがとんでもない事を言いだした。

「飛翔さん、マジですか？」

「ああ、面白いだろ？」

「そうですね。並行世界の俺らの強化なんてね」

「最低バグを目指そうぜ」

どこの世界の俺らをどうやって強化しようかね。同じ存在でもそれぞれ違うからな。

「一人いいのがいるじゃない」

「そうじゃぞ」

………あれ？飛翔さんと紫さん以外によく聞き慣れた声があるぞ。

「老師!？」

「久しぶりじゃのエリオ」

「エリオ、とんでもない知り合いがいるな」

「ハハハ……………」

何故来た老師。あんたが出る場面じゃない。

「エリオ」

「うおっ！アルトルージュさん、抱き付かないで下さい」

「アルトと呼べ。敬語も駄目だ」

「はいはい、しょうがないなアルトは」

アルトには何を言っても無駄だ。もう諦めよう。諦めてリィゾさんと戦おう。

「やっぱりお前はおかしいな、エリオ」

自覚しています。しかし老師が来たのはアルトを連れてくるためか。

「そういえば紫さん、いいのって」

「ああ忘れてたわ。以前貴方が行った世界のエリオがいるじゃない。女の子になってるあの子よ」

「いましたね」

「それ誰だ？」

飛翔さんは知らないからな。簡単に説明しておこう。

「……………という訳です」

「並行世界にいる女の俺らね。大丈夫か？」

「大丈夫であろう。私もその場に共にいたため見たが、なかなか根性はあつたぞ」

「なら大丈夫かな」

俺も反対はしないが、いいのか？勝手に強化したりして。

「では行こうぞー!!」

「アルトは留守番。老師任せます」

「うむ」

「御爺様！？裏切ったか!？」

裏切っていないと思うな。寧ろ正しい選択だ。

「二人共飛ばすわよ」

「頼みます」

飛翔 side

着いたな。この世界に女エリオがいるのか。

「機動六課に行きますか」

「ああ」

普通にミッドチルダだから六課の場所も変わってないだろう。

「エリオさん！？エリオさんですよね！」

「ん？ああ俺じゃないか」

この子が話に出ていた噂の女エリオか。

「お久しぶりです!!」

「ああ久しぶり」(なでなで)

「えへへ／＼／＼」

この反応ってあれだよな。どう考えても懐いてるよな。そこまでの関係なのかこいつ。

「あの、こちらの方は?」

「不破飛翔さん。俺の知り合いだ」

「そうなんですか。初めまして、僕もエリオ・モンディアルと言います」

「話は聞いているよ。よろしく」

「今日はお前に話があつてきたんだ。ちょっと六課に行こうか」

「僕に話……／＼／＼」

絶対なんか勘違いしてるぞ。ぼーっとしてるし、いいのかこれ。まあほっといても六課に来るだろう。

「つまりうちのエリオを鍛えてくれるんか？」

「ええ」

今はエリオがはやてさんに交渉していてくれてるんだが、さっきからシグナムさんが睨んでいる。俺ではなくエリオをなんだが。

「よっしゃ、頼むで」

「主はやて、そんな簡単に決めてよろしいのですか？」

「シグナムは警戒しすぎやで。いくらこないだ負けたからって」

「な！？私はそんな私情で動いておりません！！」

負けたのか。仕方ないな。このエリオは異常に強いし。とにかく許可はもらえた。頑張つて強くしてやるか。

「頑張つて強くなつてきいや」

「はい！！」

「なら行くこつな」

「は〜い」

ズコーッ

声質があまりに違うだろ。本人達以外ずっとこけてしまったじゃないか。どうなるんだらうなこれ。

エリオ（女） side

エリオさんと一緒に訓練だ。頑張るぞ。

「この世界でやるか」

飛翔さんって人の転移で来た世界は不思議な世界だった。何というか、白い。

「随分変わった世界ですね」

「要んとこの神様が貸してくれたぞ」

「あの人はですか」

「やっぱり知ってるんだな」

神様？そんな人がいるんだ。凄いなあ。

「ちなみに世界設定は元の世界の一秒がここの一日。老けないだ」

……凄いなあ。

「とりあえずデバイス無しの基礎訓練をやるつか」

「はい!」

よしやるぞ。強くなってエリオさんと……デヘヘ／／／

「あ、その前に君はなんて呼べばいい？俺がこっちエリオと区別しやすい方がいいし」

そつえば確かに。エリオさんも私も同じ名前だからな。

「うーん……ならエリでお願いします」

「分かった。エリオもそれでいいな」

「いいですよ。改めてよろしく、エリ」

「お願いします、エリオさん、飛翔さん」

厳しい。二人の修行が凄く厳しい。僕が今までやってきたのはなんだったんだろう？

「よく頑張った。次の訓練をやるうか」

「え！？まだやるんですか飛翔さん！！」

「今までは基礎。ここからいろいろ覚えてもらおうぞ」

うう、強くなるためだもん。エリオさんのためだもん。

「あれ？エリオさんは？」

「プレゼントを取りにいった。それまでにエリオを納得させるレベルにならないとな」

プレゼント……エリオさんが僕のために。

「頑張ります！！」

「その意気だ。やるぞ」

待っていて下さいエリオさん。僕強くなります。

エリオside

ふー、疲れた。老師や紫さんの協力があったとはいえこれを手に入れるのはキツイ。

「ただいま。どうです？飛翔さん」

「飲み込みがかなり早いな。やる気もあるから教えてて楽しいよ」

「そうですね」

確かに動きも見違えるようだ。これならいろいろと大丈夫かな。

「エリ、こっちに来て」

「あ、エリオさんお帰りなさい」

「ただいま。ちょっと俺と試合しようか」

「……………ええ!？」

ま、驚くよな。でもちよつとは肌でエリの実力を感じたいし。

「やってみな。今のエリの実力を見せてやれ」

「……………分かりました。いくよ、ストラダー」

《了解》

「アホーッ
転送」

俺が出したのはただの槍。ハンデとしては十分だろ。

「やあっ！！」

「ほっ、と！？」

エリが突いたストラーダを防ごうとしたら、守りをすり抜けてきた。御神流の貫か。おそらく徹も習得しているだろう。斬は小太刀じゃないから必要ないな。次は俺が攻めてみるか。

「よっ、はっ」

突き、払い、叩き付け、蹴り、いろいろとパターンを変えて攻撃してみるが、よく防いでいる。

「そこ！！」

「おっと」

僅かな隙を見せたら攻撃してきた。露骨な隙には反応しなかったのは良かったが、僅かとはいえ相手を作った隙を攻めるのはあまり頂けないな。

「お、縮地。後ろだ、な！！」

無拍子の見事な縮地だったが、俺には見えている。エリが移動した後ろに槍を薙払う。

「フツ!!」

「むっ」

エリは左手の甲に小さなシールドを作り、俺の槍を受け流した。カウインター、来るな。

「ストラダー!!」

《リミットブレイク》

「ハアアアアア!!ライジングストライク!!」

！ エリは右手で雷を纏ったストラダーを突いてきたが、これは当たるとマズいな。咄嗟に受け流された槍に身を任せるようにして回転し、それを避けた。

「はあ…はあ…」

「お疲れ様。よくここまで強くなったな」

しかし最後のはなんだったんだ？

「飛翔さん、最後のは」

「あれか。御神流の雷徹と射抜を合わせた技だ」

「まだ未熟なエリに教える代物じゃないでしょう」

「どんどん吸収して面白かったから」

雷徹は衝撃を与える徹の二段掛け。射抜は御神流最速の突き。エリはよく使えたな。

「エリ、本当によくやったな」

「はい」

「エリオ、プレゼントは？」

「ああ、そうですね。じゃ、まずストラダを貸してくれ」

「はい、どうぞ」

えっと、これを組み込んでと。これでよし。

「これで俺のストラダと同じ機能が使える。使いこなすかはエリ次第だな」

「ありがとうございます」

流石に包丁とか鍬とかはないぞ。それと雷神・纏のデータもオマケに入れといてやったが、エリなら大丈夫だろ。

「んでもう一つ」

「ワクワク」

「こいつだ!!」

俺が取り出したそれは

「プー」

一匹のうり坊だった。

「可愛い〜!!この子貰ってもいいんですか?」

「もちろんだ。ウルスラグナって言うんだけどな」

「じゃあウルスだね。よろしく、ウルス」

「プー」

うんうん、ウルスラグナも懐いたようで良かった。

「エリオ」

「何ですか?」

「ウルスラグナって」

もしかして気づいたかな。隠す必要はないし言うか。

「ゾロアスター教に出る10の化身の異名を持つ神ですね」

「よく捕まえたな」

「探すのは苦労しましたが、捕まえるのは簡単でしたよ」

ソーセージちらつかせたら向こうから寄ってきたし。

「じゃあ帰るぞ」

「はい」

俺と飛翔さんはあの後エリがどうなったか気になったので、JS事件の様子を見る事にした。そこには大猪や大鴉になったウルスラグナに乗り、ガジェットを粉碎し、ゆりかごに穴を開けるエリの姿が。

「やりすぎた」

ミッドチルダ中が呆然だよ。

オマケ

「ただいま」

「お帰りエリ、オ」

ん？藍さんが勝手に家にいるのはいつもの事だからいいが、何故固まった？

「ふ、ふふふ、少女をお持ち帰りか」

「え？」

振り向くとそこにはエリがいた。

「宝石翁ってお爺さんが連れてきてくれました」

老師よ。呪います。

とりあえずうちが藍さんの弾幕で崩壊したのをここに記す。

ミッション14：エリオ凶化計画（後書き）

エリオ「……………」

キャロ「エリオくんから離れなさい!！」

エリ「ヤです」

ルーテシア「キャロ、子供に怒るなんて子供ね」

キャロ「な!?!？」

エリ「エリオさん」（ギョッ）

キャロ「あ、こら!……」

エリオ「……………」 ほのぼの（？）管理局 スタート」

ほのぼの（？）管理局

A「おはようございます」

B「おいつす」

C「いきなり全員が休日出勤なんて大変だな」

A「全くだ。ん？隊長はどうしたんだ？」

隊長「お、集まっているな」

A「おはようございま……す？」

B「……隊長、その子達は？」

隊長「ほら二人共、ご挨拶」

真哉「御剣真哉です」

聖哉「み、御剣聖哉です」

C「黒髪に赤眼……まさか隊長の」

隊長「双子の息子だ。赤い眼は私そっくりだろう？真哉が兄で聖哉が弟だ」

A「でも前回まで妊娠してたんじゃない」

隊長姉「ご都合主義故致し方なし……」

A・B・C「」「」ならしょうがな……い！？」「」

隊長「姉よ、その子はもしや」

隊長姉「私の娘だ。赤髪赤眼がよく似ておるう」

亜衣「南武亜衣だよ。よろしくね叔母殿」

A・B・C「」「流石ご都合主義。凄まじい」「」

隊長「私達も名をだすか？」

隊長姉「言うだけ言いましょう。隊長こと妹の名前はマリア。私はカルタよ」

隊長「A・B・Cは名無しのままだがな」

B・C「」「理不尽だ!!」「」

A「名無しの方が愛着が湧くんだらう。よく名前が とあるよう
な感じで」

隊長「では帰っていいぞ」

A・B・C「」「これだけのために休日出勤かよ」「」

エリオ「ご都合主義万歳」

キャロ「凄いわね」

ルーテシア「隊長と子供を作ったのは一真。隊長姉と子供を作ったのは貴史。更に貴史はジェイルとの子供がいて、要にもジェイルとの子供がいる」

エリ「頭がこんがりそうです」

エリオ「考えるのは止めよう」

キャロ「今回はここまで。次回はバルディッシュ様とのコラボ。お楽しみに」

ミッション15：メタ発言？気にするな！！（前書き）

雨季「メタ発言は気にするだけ負けです」

ルキ「え、何それ」

リザ「ルキ負け」

ルキ「負けたの！？何に負けたの！？」

早苗「常識に縛られたらいけません！！」

雨季「本編へお帰り下さい」

ルキ「今のは？」

リザ「ルキ負け」

ルキ「また！？」

雨季「ルキは面白いな。さて今回はバルディッシュ様とのコラボです。本編どうぞ」

ミッション15：メタ発言？気にするな！！

エリオside

「エリオさん、おはようございます」

「エリか。おはよう」

「……つまらないです。反応が無さ過ぎです」

いつの間にか布団で一緒に寝ているのくらいで驚くもんか。藍さんなんて気が付いたら

「呼んだか？」

「うひゃあ！？呼んでません！！というか心読まないで！！」

「流石です師匠」

「精進しろよ弟子」

あんたらいつの間に関係になったんだよ。怖いよ。大切な何かを失いそうだよ。嘘だと言ってよ、バーニイ。

コンコン

「あ？客か。今行きます」

誰が来たのかな。この現状から助けしてくれる人か、現状を悪化させ

る人か。

「おっ、ヒスイさんにシルフさん」

「今いいか？」

「もちろん」

「「お邪魔します」」

まだ当たりの部類かな。助けられるとも限らないんだが。

「エリオさん、お客様ですか？」

「ああ」

「……エリオ、その娘は？」

「一応エリオ・モンディアルです。女ですけど」

「エリと呼んで下さい」

「ヒスイ・ハーツだ」

「シルフです。しかし女の子のエリオさんとは」

「まあ要の所のエリオだからな。何があってもおかしくない」

流石ヒスイさん。よく分かってらっしゃる。兄さんの友人なだけあるな。この場合兄さんがおかしいんだらうけど。

「シルフさんは抱きつかないように」

「な、なな何を言ってるんですか！？わ、私がそんな事をするのも！？」

「「する」」

物凄い狼狽しておいて何を言ってるんですか。今も凄い残念そうな顔してるじゃないですか。とりあえず飯だ。まだ食ってないからな。

飯を食い終わって最初に聞く事と言えばこれしかない。

「「ご用件は？」」

「妖夢の自機復活祝いと自機から外れた咲夜を慰める」

『メメタア』

全員が同時に言ってしまった。仕方ない。そんなメタな依頼が来るとは思ってないんだから。

「外伝だから大丈夫だろ」

『メメタア』

それもメタ発言ですよ。しかし言いたい。外伝でなくともシリアルでない限りメタ発言は許されると。

「なら藍さんは妖夢をお願いします。俺は咲夜さん連れてきますんで」

「いいだろう」

では呼びに行きますか。

レミリアさんもついて来た。まあそりゃそつか。向こうも多分幽々子さんも来るだろう。

「ただいま」

「エリオーー!!!」

「よう橙、今日も元気だな」

「うん!!」

橙がいるなら紫さんもいそうだな。あの人がこんなイベント見逃すはずもないし。

「こんな狭い家によくこんなに集まったな」

「お祝い事だもの。ああ、そっちの従者さんは慰めだったわね」

「黙りなさい西行寺幽々子。そっちの従者こそ異変解決どころか1ポスすら倒せず泣きを見ない事ね」

「ふふふ」

「くくく」

あーあ、幽々子さんもレミリアさんも挑発しあつて。殺気は無いけど無駄に威圧感があるんですから気をつけて下さいよ。橙とか怯えますよ。

「エリちゃん遊ば!!」

「待つてよ橙」

そんな事はなかった。流石八雲の式の式。エリもこの環境に適應してる。

「あそこの二人はおいといて宴会を始めましょう」

「宴会？」

「幻想郷ではよくある事ですよ、ヒスイさん」

「……そうか。そういえば主役二人にプレゼントがあるぞ」

咲夜 side

私は主役でいいのかしら？今回呼ばれたけど、私は慰めという理由でしょう」。

「んじゃまず咲夜から」

「こ、これは！！」

「優のプロマイドだけど」

「ありがとう」

ふふふ、こんなものを頂いちゃって。参加しなくて逆に良かったかも。ああ優さん可愛らしいわ。

「あと情報だと優とやるとか」

「本当に？」

「ちょっと咲夜だけズルいわよ！！」

「紅魔全員相手って聞いてるぞ」

むう、独り占め出来ないのは残念だけど、お嬢様達の事を考えたら

そんなのは駄目よね。

「あの、ヒスイさん。私は？」

「妖夢には治癒石っていうのを」

「何故私にはエリオのグッズがないのですか！！」

「え、なんか苦勞してそうだから」

あら残念ね。私とは違って好きな人の物が貰えないのは。

「それとヒールエナジー製造機」

「ストレスも軽減出来ますか？」

「体の疲れだけだけど」

「そちらの方も必要でしたね」

「そうだな」

主人が勝手だと本当に大変ね。ストレスが溜まって。さて帰ったらこのプロマイドを部屋に飾りましょう。私の物だものね。

妖夢 side

うう、私もエリオの何かが欲しかった。最近自称弟子のエリとかいうののせいで以前のように相手をしてもらえなくなったし。

「酒をもっと下さい!！」

「飲み過ぎじゃないか？」

「うるひゃい!！ヒスイしゃんもシルフしゃんも私の酒が飲めない
のでしゅか!？」

「呂律が回って「飲めー!！」」「ぶっ!？」

「シルフー!！!？」

もうろつとねもらってしまえばいいんれしゅ!！

「妖夢、落ち着きなさい」

「そつよ」

「幽々子しゃま、紫しゃま」

「「貴女の扱いなんてそんなものよ」「

「うわああああん!！!！!！!！」

「火にガソリンを投げ込んでどうする!？」

えぐ、ひっく……ひびくよお……

「……………ん？」

「起きたか？」

「……………エリオ？」

エリオの顔が凄く近い。枕がちょっと硬い。

「って膝枕！？」

あわわ！？何で膝枕をしてもらっているの！？……………うん、分かった。

「……………酔いつぶれたんですね」

「思い出したか？」

「半霊が教えてくれました」

情けない。何してるんだらう私。

「しばらくこのまま休め」

「あの、皆さんは？」

「……………カオスだよ」

？ どういう事でしょう？

ヒスイside

酔いつぶれた妖夢をエリオが連れて行ったのはいい。シルフも復活した。

「だが何故お前がいるんだ、要！！」

「酒があるとこ我はあり！！さあシルフも飲め！！」

「ハラホラヒレ〜」

「復活したのに潰すな！！」

この時代の要がやってきてしまった。紫さんが連れてきたんだろ
うが、あれだけあった酒が消えていく。

「お嬢様」

「何かしら咲夜」

「妹様が到着致しました」

妹様？レミリアの妹か？……コハクは元気にやってるかな。

「要だ！！ドーン！！」

ドゴオオン

「うおっ！？」

いきなり要が爆発した！？大丈夫かあれ！？家も大丈夫か！？

「やんちゃな子供にはお仕置きだ！！」

ブンッ

「キャー！！！！」

飛んでった！！要があの子の腕を掴んでぶん投げたぞ！！あっちも大丈夫か！？

「ちよっくら相手してくる」

「妹を頼むわよ。ワインあげるから」

「熟成したのを頼むぜ」

あー、行っちゃった。

「どうだったかしら？」

「これで良かったのか？お祝いと慰めの予定だったんだが」

「本人達が幸せそうだからいいんじゃない？」

確かにさっきから咲夜は優のブロマイドを見てニヤニヤしてるし、
エリオと妖夢もそこそこいい雰囲気だ。

「頭が、頭が〜」

「大丈夫か、シルフ？」

「頭が痛いです」

「精霊でも酔うのね。今日は帰って休みなさい」

「そうしよう。シルフ、行くぞ」

「うう〜」

酔い止めあったかな？というか既に酔ってる時に酔い止め効くのか？
根本的な問題としては精霊に人間の薬が効くのか？……………まあ
その時に考えよう。

ミッション15：メタ発言？気にするな！！（後書き）

キャラ「エリオくんはいません」

ルーテシア「妖夢があのまま寝ちゃったんだって。妬ましい」

キャラ「まあ今回は許してあげよう」

ルーテシア「そのかわり、今度は私達の番」

キャラ「エリオくんにおもいつきり甘えようね」

ルーテシア「b」

キャラ「じゃあいつも通り ほのぼの（？）（管理局 始めようか」

ルーテシア「スタート」

ほのぼの（？）（管理局

Aside

「仕事だぞ」

隊長が突然そんな事を言っつて部屋に入ってきた。ここ部隊の部屋じやなくて俺個人の部屋なんですけど。

「部隊長の私だから問題ない」

「ですよ。それで何故俺ですか？隊長では駄目なんですか？」

「まだ子供に手がかかるからな。BもCも準備出来てるぞ」

「了解しました。それと嘘はいけませんよ。真哉くんも聖哉くんも隊長よりしっかりしてるでしょう」

「五月蠅い！！」

「では行つて参ります」

でも本当に出来た子達だよ。隊長の手伝いをしっかりしてるし、寝てる隊長に毛布かけたりするし。うちの子もあんな感じになってほしいもんだ。

「そついえば仕事はどんなものですか？」

「立てこもっている誘拐犯を捕まえてくれ」

「了解」

立てこもりか。レアスキル使わないと駄目かな。まあじゃなければ

俺は呼ばれないか。

C s i d e

Aはまだか？隊長が言うにはあいつがいれば余裕な仕事らしいが。というか隊長一人で余裕だろ。

「すまない。遅れた」

「あ、やっとか」

「待ったぞ」

「現状を教えてくれ」

そこは知らないと駄目だからな。だがここはここを指揮している奴に頼もう。

「教えてやってくれ」

「分かりました。犯人は4人。人質は2人。この建物自体最新の防衛システムがあるのですが」

「乗っ取られたと。しかもそのせいで侵入出来ない」

「いや、侵入自体は可能だ。だがそれには多少時間がかかるし、その間に人質が殺される可能性があるって事だ」

「成る程な。ならバレないように入ってしまえばいいんだろ？」

Aの言う通りだが、そう簡単に出来ないからみんな困ってるんだろ
うが。

「B、どんな小さくてもいい。何か蟻一匹でも進入可能な場所はな
いか？」

「何で俺なんだよ」

「もう一人のお前に変われば早いだろ」

「仕方ねえな。……………今調べる」

おお、変わった変わった。この状態のBは女子にも人気なんだよな。
うちの部隊に届くバレンタインチョコはAかこの状態のBか隊長。
俺は、妹くらいだ。

「……………あつた。立体映像で映す」

流星に仕事が早いな。しかし本当に虫ぐらいしか通れなさそうな道
じゃないか。

「十分だ」

「は？お前何言って……」

Aが、消えた？

『じゃあ行ってくる』

「おい、何処から念話してるんだよ」

『帰ってきたら伝える』

帰ってきたらって、もしかしてもう行ったのか？

「うわー！？」

「何処から侵入しやがった！？」

突然中から犯人達の声が響いてきた。そしてBが正面から突撃して行った。

「おい待てよ！！」

「……………任務」

あー、もう！！一気に殲滅してやる！！

B s i d e

無事仕事も終了。俺らはファミレスでAの今回の行動について聞く事にした。

「いきなり消えたあれはなんだ？」

「消えてない。いた」

「いなかったろ。なあB」

「ああ、いなかったな」

「じゃあもう一度見せてやるよ」

そう言ったAはまたいなくなった。そしてAの代わりにいたのが。

「隊長！？」「」

「騒ぐな。今戻る」

あ、Aになった。今のは変身魔法か？

「今のが俺のレアスキルだ」

「変身魔法はレアスキルじゃないだろう」

「変身魔法と俺のレアスキル『百面相』は別物だ」

百面相、それがこいつのレアスキル名か。

「どう違うんだ？」

「百面相はやるうと思えば完全にその存在に成り切る事が出来る。相手のスキルだって同じ物が使える。性格も、思考も、全て同じに出来る。まあ任意切り替え可能だが」

「今回は虫にでもなったのか？」

「蠅だ」

「「エンガチヨ」」

「黙れ」

だがこれで謎が解けた。便利な能力だな。俺の二重人格より使い勝手いいな。

「今回は良かったが、攻撃されたら効果が切れるし、イメージが上手いかなければ変身出来ない。魔力を使わないメリットはあるが」

イメージか。あの卓上旅行はそのためか。

「それじゃあ飯にしようぜ」

「Aの奢りな」

「何故だ!？」

「レアスキルを秘密にしたからだよ」

「お前らが聞かなかっただけじゃん!!」

俺ら知んね。そんなの知んね。

エリオ「ただいま」

キャロ「また作者が暴走したよ」

エリオ「今回はちゃんと予告があったから良かったんじゃないか？」

ルーテシア「でも相変わらず酷い」

エリオ「そりゃ作者だからな」

ルーテシア「次回は249様とのコラボ。お楽しみに」

ミッション16：アシスタントだそうです（前書き）

雨季「始まりました」

ルキ「今回でコラボは終わりだっけ？」

リザ「次回どこ行くの？」

雨季「それは後書きで言おう。しかしあれだな」

ルキ「何？」

雨季「俺の周りにはデレデレ、ツンデレ、クーデレが揃ってるな」

ルキ「な！？だ、誰がツンデレよー！」

雨季「俺はお前とは言ってないぞ」

リザ「………言ってるようなもの」

雨季「そだね。では本編どうぞ」

ミッション16：アシスタントだそうです

ファルチエ side

「ファルチエ、いるかしら？」

「あら紫さんじゃない」

「儂もおるぞ、ロツン」

エクステスもいるのね。それで何をしに来たのかしら？

「この間そつちでエクステスがエリオのアシスタントとか決まった
でしょう？」

そんな事もあったわね。あの王様ゲームはなかなか愉快だったわ。

「どうせだから貴方も、と思って」

「あら、いいのかしら？」

「ええ」

それじゃあお邪魔しようかしらね。どうせ今はやる事もないし。

「じゃあ行くわよ。っとその前に」

チユッ

「あら／＼／」

「この間のお返しよ／＼／／／」

不意打ちだったからちよつと赤くなっちゃったわ。紫さんはもっと赤いけどね。

「しかしあれだな、ロツソは男のはずなのに女同士のいけない行為にしか見えんな」

「オカマだもの」

エリオside

最近うちも手狭になってきたな。エリという居候も来て、よく宴会も開かれ、酔ったのがそのまま寝る事だつてある。

「そうだ、増築しよう。そうと決まればまずは慧音さんに相談だ」

「その前にお客さんよ」

「分かりました、紫さん」

「驚かんの」

「慣れてるわね」

「まあ、そうですね」

このお二人は、確かエクステスさんとファルチエさんでしたね。エクステスさんはアシスタントを頼んだんですって？

「エクステスさんは何が出来ますか？」

「基本的に何でも出来るぞ」

「それは助かります」

「なら早く慧音の所に行つてきなさい。私はファルチエといるから」

「分かりました。では」

紫さんはファルチエさんと一緒にどこか行くのかな？まあいいか。

「エリ、留守番頼む」

「はい」

「誰がオカんだ、誰が」

「だ、大丈夫か？頭突きの音ではなかったぞ」

「陥没してない？俺のおでこ陥没してない？慧音さん今一瞬だけワイハクタクになったでしょう。そうじゃないとあの威力は出ないよ。」

「口は災いの元だ。未婚の女性に対して失礼だぞ」

「……はい」

「なら早く相手を探せばいいのに。と言いたいが、言ったら間違いなく頭が粉碎する。そういえば紫さん達何してるんだろうな。」

ファルチエ side

「紫さん、何処へ行くのかしら？」

「ちよつといい場所よ」

「いい場所ねえ。この森の中も十分いい場所だと思うけど。ん？今、空気が変わった？」

「ようこそ、我が住処『マヨヒガ』へ」

「へえ」

不思議な場所。幻想郷は現代に取り残されたような世界だけど、此処はそれが顕著だ。確かにそこにあるのにぼんやりしている。何もおかしくないのに何かおかしい。不思議な、とても不思議な、まるで紫さんのような世界。

「広いわね。一つの村くらいあるんじゃない？」

「そうね。住んでるのは一つだけだ」

まあそうよね。日替わりで住む場所を変えたりしたら面倒だしね。

「これあげるわ」

「アメジストのピアス？」

「ええ、それを使って呼んでくれれば私はすぐ行くわ」

「そうなの。これは石言葉に何か意味があつての事かしら？」

「どうかしら。ただ私は自分の名前と同じ色のその石が好きだけ」

ふふっ、ならそういう事しておきましょう。石言葉は一つの石にいろいろあるから想像が膨らんじゃうのよね。

「なら私の家に行きましょう。貴方の事をいろいろ知りたいし」

「そうね。私も紫さんの事を知りたいわ」

エクステス side

エリオの家を増築するのに沢山の人妖が協力を申し出た。特に河童達の力はなかなかのものだったな。だが本職である人間の大工の方が一枚も二枚も上手だったがな。

「そういえばエリオがおらんな」

「エリオならさっき向こうに行きましたよ」

向こうというと林じゃないか。何をしに行ったのだろうな。ちょっと見に行ってみるか。

「少し行ってくる。家は頼むぞ」

「はい」

おったおった。む、今何か飲んだの。

「何をしておる？」

「！？ あ、いえ」

「そうどもっておると何かを隠しているようにしか見えぬぞ」

「う……」

「教えてくれぬか？今はアシスタントなのだから」

悩んでおるな。そこまで言うのがはばかれる事なのか？

「うーん、一種の不治の病ですね」

「何！？」

不治の病だと！？そんなものを患っておるようには見えなかったが、僕の力を使えば治せるかもしれない。

「どんな病だ？治せるかもしれない」

「治せませんし、治して貰うつもりもありません」

「……事情があるようだ。だがそこまで言うなら聞かないでおう」

「ありがとうございます」

「ただ最後に聞いておく。それは薬で抑えられるものなのだな？」

「大丈夫です。死ぬまで付き合いますよ」

しっかりと覚悟はしているようだ。ならこれ以上はお節介だな。

エリオside

増築したのはいいが、何故一日で三階建てになった。

「あら、大きくなったわね」

「驚きです。紫さん達は何をしていたんですか？」

「お話よ」

それが本当だろうと違おうと俺には関係ないからいいか。

「エクステスさん、材料を削って貰って悪かったですね」

「あの程度は朝飯前だ」

「さて、増築祝いしますか」

「料理なら任せなさい!!」

ならファルチエさんをお願いしようとするか。多少手伝いもするけど、それはエリに任せるか。

「エリ、ファルチエさんの手伝いでもしな」

「はい!!お願いします!!」

「よろしくね」

このあと、俺ら5人でささやかな増築祝いをしてファルチエさんとエクステスさんは帰って行った。

ミッション16：アシスタントだそうです（後書き）

エリオ「平凡」

キャロ「良かったね」

ルーテシア「のんびりしているのはいいね」

エリオ「全くだよ。ああいうのがないと胃痛になるよ」

キャロ「じゃああれやろうか」

ルーテシア「ほのぼの（？）管理局 スタート。今回はちょっと特別編。貴史とその家族が隊長姉に会いに来る」

ほのぼの（？）管理局

貴史「ちよつといいか？」

もぶ「はい？」

貴史「カルタ知らねえ？」

もぶ「カルタ……… ああ、うちの部隊の隊長ですね。ご案内します」

乱「どんな人なんだ？」

貴史「変人だ」

ジェイル「変人か」

もぶ「隊長、お客様です」

カルタ「ご苦労。よく来たな」

亜衣「親父殿だ!!」

貴史「その口調はどうにかならんか？」

カルタ「ごめんなさいね。私がSF三国志見せたから」

ジェイル「なんだそれは」

亜衣「楽しいよ。そっちの二人はだーれ？」

ジェイル「神崎ジェイルだ。貴史の妻だよ」

乱「神武乱だ。一応亜衣の姉だな」

亜衣「姉殿なの！？わーい！！」

乱「あぶ、ぐはっ！？」

ジェイル「正面から突撃したのに後ろから出たぞ。空間移動か？」

カルタ「あらあら、無意識に時空操作したわね」

貴史「とんでもないな」

カルタ「お前の力も継いでるぞ。しかも私と同じようにどんどん成長するぞ」

ジェイル「流石というべきか」

貴史「俺以上だぞ。俺の努力はなんだ」

亜衣「姉殿」

乱「うう……」

カルタ「今日は楽しんでいってくれたまえ」

ジェイル「口調が一定でないな。理由はあるのか？」

カルタ「ない。生まれつきだ。だが何かと便利だぞ」

貴史「便利なのか？」

カルタ「まあね」

亜衣「今日はみんなで遊ぼうね!！」

貴史「ああいいぞ」

エリオ「こんな家族嫌だ。強すぎる」

キャラ「そういえば次回はどこ行くの？」

ルーテシア「新しい世界だよね」

エリオ「恋姫世界」

ルーテシア「以前行った事があるんだよね」

エリオ「裏設定でだけだな。それは次回の前書きで話してもらおう」

キャラ「では次回もお楽しみに」

ミッション17：恋姫世界へ（前書き）

雨季「今回から真・恋姫無双の世界です。真・恋姫無双ってのは三国志の人が性転換した世界です」

ルキ「エリオは前にこの世界に来た事があるのよね」

雨季「エリオの介入によってどう変わったか、リザお願い」

リザ「ん、まず元々の主人公『北郷一刀』は魏にいる。エリオは、本編を見て。エリオの介入によって死ぬはずの人が生きてる事もある。一応勝者は魏。とりあえずこんな感じ」

ルキ「エリオがいたならその国が勝つんじゃないの？」

雨季「それは神様がさせなかったの」

リザ「一刀がいる国が勝つのが正しいから」

雨季「では本編をどうぞ」

ミッション17：恋姫世界へ

エリオside

今日から新しい世界に行ってくれと紫さんに言われた。

「という事だから家は頼むぞエリ」

「任せて下さい！！全部僕色に染め上げておきます！！」

「それはやめてくれ」

帰ってきたら家がピンクに染まってたとかなんて嫌だぞ。

「ウルス、見張っといてくれ」

「プー！！」

「エリオ、準備はいいかしら？」

「大丈夫ですよ。常に着の身着のままですから」

ストラーダがなくても俺は大丈夫だ。食料は現地調達出来るし、金は裏から巻き上げれる。生きるには十分だ。

「なら行ってらっしゃい」

「お土産期待してますよ」

「プー」

「行ってきます」

スキマをくぐって新たな世界へいざ行かん。しかしスキマって本当に便利だな。簡易スキマとか作れないかな。

「っと」

到着。見渡す限りの荒野。遠くには山も見える。

「成る程、三国志の世界か」

《ああ、しかも相棒のよく知る世界だ。あの我が儘姫がいるな》

「そうかそうか。なら久しぶりに顔見せしないと。呉は、こっちなかな？」

《ああ》

どれくらい振りだろうな。あの事件のすぐ後だから、一年くらいかな。

《久しぶりに会うから泣かれるんじゃないか？》

「かもしれんな。元気かな？」

《あの姫が元気じゃないわけないだろ》

「ハハハ、それもそうだ」

呉も随分発展してきたな。一刀もいろんなところを発展させてきたんだろう。その影響がここにも出てるんだらうな。

《相棒よ》

『念話しろよ。街中だぞ』

『すまん。しかし何故ハサンの仮面を付けてるんだ？』

『面白そうだからだ』

じろじろ見られるのはしょうがないが、顔が見えるか見えないかは大切だ。これで俺って気づかれないだろう。

『そんな仮面で大丈夫か？』

『大丈夫だ、問題ない。華蝶仮面を考えてみる』

『ああそうだった。よくあれでバレなかったもんだ』

本当に。どう見てもバレバレなのにみんな気づかないから何かのボケかと思っただくらいだ。

「おいそこの怪しい奴！！」

あ、兵に見つかった。

「私ですか？」

「貴様以外に誰が居る」

確かにそうだ。ってこの兵、どこかで見た事あるような。

「ああ思い出した。七乃の部下じゃないか」

「！？ 貴様！！張勳様の真名を！！」

「落ち着け。顔を見せる」

俺が顔を見せると兵は目を白黒させて固まった。こっぴつ反応が見たかったんだよ。

「エリ、オ、様？」

「帰ってきたぞ」

「し、失礼致しました!!」

「五月蠅い。街の人が見てるだろ。ちよつとそこの飯屋で現状を教えてくれ」

「御意!!」

成る程。今は三国会議で呉の武将の大半は出掛けていると。

「大変でしたよ。エリオ様がいなくなつて袁術様も張勳様も落ち込んでしまつて」

「今は大丈夫なのか？」

「ええ。しかし時折静かになる事もあります」

「あの美羽と七乃がね」

「それだけエリオ様に依存していたという事ではないでしょうか？」

お一方のみならず兵の志気もかなり落ち込みました」

「ふーん、ならちよっくら会ってくるか。城にいるんだろ？」

「はい」

「じゃ、乗り込むか」

「え？ちよつと、エリオ様！？」

「支払い頼んだぜ」

待ってるよ、お姫様。今貴女の将が行きますよ。

美羽 side

「……はあ」

エリオがいなくなつて一年。『そのうち帰ってくる』と書いた置き手紙一つだけ残して突然いなくなりおつて。

「ばかあ」

「美羽様……」

「な、七乃!?!いつの間におったのじゃ!?!」

「いかん、泣いておるのを見られたか!?!」

「今、泣いて」

「や、ちよつと、欠伸をしておったのじゃ!?!別にエリオの事を考えておったわけではないぞ!?!」

「そうですよね!?!あんな呉に寝返つたり、美羽様の蜂蜜取つたり、私達の事叩いたり、勝手にいなくなるような馬鹿な男……」

「そうじゃ。あんな馬鹿なんか……」

「馬鹿で悪つござんした」

「「え?」「」

この声、間違えるはずがない!?!いつも一緒にいてくれた。いつも妾に優しくしてくれた。いつも間違いを正してくれた。この声を。

「エリオ!?!」

「ただいま、お姫様」

「帰ってくるのが遅いのじゃ!?!妾をこんなに待たせおつて!?!」

「悪かった。七乃もな」

「べ、別に私は貴方を待っていませんよ！！ただ美羽様が待っているので一緒に待って差し上げてただけですよ！！貴方のような馬鹿で間抜けで朴念仁で恥知らずな槍使いなんて！！」

「朴念仁ではないぞ」

そんな事はどうでもいい。今はただエリオが帰ってきてくれた事が嬉しい。

「そういえばどうやってここまで？」

「ちよつと侵入した。警備が緩かったんでな」

「そんな事出来るのは貴方ぐらいですよ」

「そうじゃ。ともかく、せっかく帰ってきたのじゃ。今までいなかっただけ分しっかり働いてもらっぞ」

「分かりました、お姫様」

早速何を頼もつかの。とにかく今は意地を張らずに甘えよう。この一年間分つとな。

ミッション17：恋姫世界へ（後書き）

エリ「今回からは僕も参加します」

キャロ・ルーテシア「……………」

エリ「歓迎されてません。そういえばエリオさんは袁術さんの所にいるんですね」

キャロ「一応ね。でも所属としては呉だよ」

ルーテシア「二人を追放しない代わりに呉の将になったの。でも殆ど戦わなかったけどね」

キャロ「一刀のいる魏を勝たせるためにね」

エリ「そうなんですか」

キャロ「気になった事があれば感想で答えるよ」

ルーテシア「じゃあいつも通り ほのぼの(?) 管理局 スタート」

ほのぼの(?) 管理局

隊長「お前ら、ペットを飼ってるか？」

A「ペットですか？」

B「一応いますよ」

C「俺も」

隊長「それは良かった。実はうちの子達がペットを飼いたいと言い出してな。参考にしようと思って」

A「分かりました。うちので良ければ」

隊長「ではAから頼む」

A「うちは普通ですよ。ダックスフンド一匹にフレンチブルドッグ二匹。妻が熱帯魚を飼ってますね」

隊長「そうか。ではBはどうだ？」

B「俺は完全に趣味でクワガタやカブトムシを飼ってますね。ビールハウスを用意してまでやっています」

隊長「そこまでやるのか？」

B「熱帯原産のは寒さに弱いですからね。土の中においても冬だと死ぬのがいるから。高地原産のはそうでもないですけど。それともう

エリ「今回はほのぼのでした」

キャラ「私達のペットは」

ルーテシア「エリオ」

エリ「フリードやガリユーは？」

キャラ「相棒だよ」

ルーテシア「仕事も肩代わりしてくれる相棒」

ガリユー「やれやれだぜ」

エリ・キャラ・ルーテシア「「「!!!?」「」」

ガリユー「……………」

エリ「今のは」

キャラ「気にしたら負け、かな？」

ルーテシア「とりあえず、次回もお楽しみに」

ミッション18：魏へ行こう（前書き）

雨季「今年度最大のスランプ」

ルキ「今年度になったばかりじゃない」

リザ「頑張れ」

雨季「なんかね、ネタが出ないんだよ。いろいろと」

ルキ「それは誰にも何も出来ないわよ」

リザ「頭をスッキリさせたら？冷やしてあげるよ」

雨季「凍るから断る」

ルキ「凍ったら私が」

雨季「燃えるから断る」

リザ「萌える？」

雨季「日本語は難しい。では本編どうぞ」

ミッション18：魏へ行く

エリオside

「スー、スー」

今、美羽は俺の右腕に抱きついて俺と一緒に寝ている。別にいやらしい意味じゃないぞ。

「んん、エリオさん……クウ」

ついでに言うと七乃が左腕に抱きついている。これもいやらしい意味じゃないぞ。とりあえず二人の力が意外に強い。腕が鬱血しそうなんだが。

「二人共さつさと起きんか……い」

「あ、祭さん。お久しぶりです」

「エリオ!?!」

「んん、五月蠅いぞ」

「ふあゝ、エリオさん、おはようございます」

あ、やっと開放された。血が流れ始めて腕が痺れる。

「これエリオ!?!いつ帰ってきおった!?!」

「昨日ですよ。皆さんは三国会議に行っているようですが、祭さんは行かなかつたんですよ」

「もう引退じゃ。老兵は次の世代を育てる事に専念せんとな」

「ハハハ、まだまだお若いでしょう」

「相変わらず世辞が上手いな。……………一条はおるか？」

「兄さんはいませんよ。そんなに飲み比べしたかったですか？」

「うむ」

この人もなかなかのうわばみだからな。兄さんも酒飲み仲間だっ
喜んでたよな。流石に兄さんほどは飲めないようだけど。

「エリオ」

「美羽は顔を洗ってきなさい」

「ん」

「七乃も」

「子供扱いしないで下さいよ、むにゃ」

「寝言か！！」

「変わつたらんようじゃな。安心した」

「俺はそう簡単には変わりませんよ」

10年前を知ってたら変わったと思われるかもしれないけど、最近の俺しか知らないなら多分もう変わったとは思われないだろう。今の俺は一種の完成形だから。

「さて、二人が準備したら三国会議に乗り込みますか」

「面白い事を考える。わしは止めんから勝手に行けい」

「それはどうも。みんなどんな反応するんでしょうね」

「目を点にするじゃろうな。少し想像しただけで分かる」

うん、俺もその光景しか見えない。そしてその光景が見たい。

「祭さんも来ます？」

「わしは主不在の呉を任されておるからの。残念じゃが行けん。見たかったがの」

「酒の肴にでもするんですか？」

「よく分かっておるではないか」

「悪いお方だ」

「お主もな」

そうですね。でもたまに見たくなるんですよ。皆さんの面白い顔

とかが。それがいい感じにストレス解消にもなりますしね。

「そういえばストラダ、転移符とかまだあるか？」

《問題ないぜ》

「その絡繰も変わらないの」

こいつは結構簡単に変わるけどね。AI的な意味じゃなくて機能的な意味で。この前は映写機としての機能を付けたっけ？

「エリオく、髪を結んでたもれ」

「七乃にやってもらえ」

「嫌じゃ、エリオがやってくれんと嫌じゃ」

「はいはい」

以前よりかなり甘えん坊になったんじゃないか？今までいなかった反動かね。

「はい出来た。これから魏に行くんだが」

「妾も行く!!」

「分かってるよ。七乃もだろ？」

「もちろん。美羽様が行くのについて行かない従者がいますか」

「だよな。じゃあ行くぞ。祭さん、また」

「うむ、土産は酒でよいぞ」

もちろん買ってこないよ。多少ならともかく多量は体に悪いからね。

「到着」

「相変わらず便利じゃの」

「こつこつのがあれば魏にも勝てたのでは？」

「それじゃあ駄目なんだよ」

確かに俺の力を全て使えばどんな国にも勝てるだろう。だけどそれは国の力じゃない。俺の力なんだ。そんな国じゃ誰も信頼してくれない。

「街の前まで来たはいいけど、城にはどうやって入ろうかな」

「正面から入れば良いではないか」

「だな」

少し街を歩いて思ったんだが、やはり魏の発展は目まぐるしい。刀のアイデアと李典の行動力。この二つがあるからな。

「蜂蜜飴じゃー！蜂蜜飴があるぞー！」

「じゃあ買ってあげますね」

「駄目」

「エリオは妾に敵しすぎるぞー！」

美羽の蜂蜜好きをどうこう言つつもりはないが、蜂蜜を食へ過ぎなんだよ。お前は熊か。

「むー」

「はいはい、むくれないむくれない。好きなご飯作ってやるから」

「妾は蜂蜜を食べたいんじゃー！」

「はーい、美羽様。蜂蜜飴ですよ」

「七乃！甘やかすなー！」

そんな事してるから美羽がいつまで経っても自立出来ないんだ。

「いいじゃないですか。美羽様はエリオさんがいなくなってから蜂蜜を殆ど食べなかつたんですよ」

「そうなのか？」

「……………」

「つたく、今日は好きにしる」

「本当か!？」

「ああ」

それだけ落ち込んでたのか、俺の言う事を守っていたのか。どちらにしるご褒美をちゃんとあげないとな。

「え、あ……エリオ？」

「おお、一刀か。久しぶり」

「帰ってきたのかよ!!もう会えないと思ったぞ!!」

「男にそんな事思われても」

「酷いなおい」

「隊長、どうしました?ってエリオ・モンディアル!？」

「おお!?!いなくなったんとちゃうんか!？」

「ど、ど、どしてしてるのー!？」

一刀だけじゃなく魏の三羽鳥も出てきたか。重要なのは一刀だけだが。

「美羽と七乃もいるぞ。話があるからちよっくら飯にしよっぜ。場所はそのちに任せる」

「分かったよ」

「これとこれが欲しいのじゃ」

「じゃあそれお願いします」

「私はこれとこれとこれとこれと」さっきのままで「ちよ!?!?」

七乃は遠慮をしる。いくら俺の奢りだからって好き勝手頼んでいいって事じゃないぞ。それにそんなに食べれないだろうし、太るぞ。

「で、話ってなんだ?」

「一刀、俺も会議参加してもいいよな?」

「それは俺の一存じゃあ」

「そうだぞ。いくら隊長が偉いからといってもそれを決めるのは華琳様だ」

「なら問題ないよな？曹操殿」

「ええ、構わないわ」

『え？』

「モグモグ」

店内のほぼ全員が固まる。響くのは美羽の咀嚼音だけ。曹操さんが店に入ってきたのに気づかなかったのかね？

「華琳、いつの間に？」

「エリオ・モンディアルが会議参加について貴方に尋ねた時よ」

「心臓に悪いから何か一言言ってから頼むよ」

「言おうとしたらエリオ・モンディアルが訊いてきたから答えたのよ。こいつに文句を言いなさい」

「みんな気づいてるもんだと思って。というか曹操さんがここまで近づいても何も言わなかったのは、一刀達を驚かせようとしたからじゃないんですか？」

「よく分かってるじゃない」

そうじゃなきゃ気配を遮断して入ってこないしな。ともかく、これで会議参加の許可は頂いた。みんなの驚く顔が楽しみだ。

ミッション18：魏へ行く(後書き)

エリ「美羽さんがデレデレ」

キャロ「何気に七乃さんもね」

ルーテシア「ここから更に最低二人はフラグが」

キャロ「お仕置きが必要だね」

ルーテシア「触手攻めの準備は出来てる」

エリ「10年前ならともかく、今のエリオさんのそれは需要がありませんよ」

キャロ「私とルーちゃんにはある」

ルーテシア「じゃあいつも通り、あれ始め」

A「……………」

B「お待たせ」

C「いい場所だな」

A「……………美しい」

B「トリップすんな」

C「せつかく食いもんとか酒買ってきたのに」

A「お前らは桜を愛でる精神がないのか。見ろ、この雄大な桜並木を」

B・C「花より団子」

A「全く」

もぶ「おや、君達は問題児フロブレムチャイルドの隊員じゃないか。君達も花見かい？」

A「七つの大罪のもぶさん」

B「チイス」

C「何人が貴方の名前が『もぶ』って気づいてるでしょうね」

もぶ「さあね。隊長さんは？」

A「一真さん、隊長の旦那さんと子供達と一緒に家族で花見ですよ」

B「邪魔したら悪いし」

C「だから男三人寂しく花見」

もぶ「そうかい。まあ楽しんだもの勝ちだよ。じゃあね」

A「では」

B「俺らに彼女が出来る事を祈って」

A「俺は妻がいる」

C「美少女が寄ってくる事を祈って」

A「ないだろ」

B「お約束はここまでにして」

A・B・C「」「乾杯!!!!!!」「」

隊長「ほら、酌をしてやろっ」

一真「つとと」

真哉「お母さん、お菓子食べてもいい？」

隊長「ああ、いいよ」

聖哉「お父さん、おつまみあるよ」

一真「ありがとう。マリアも少しは飲んだらどうだ？」

隊長「私は家族でいれるだけで満足なんだよ」（一真の肩に頭を乗せる）

一真「そうか」（なでなで）

真哉「仲良しだね」

聖哉「とつてもね」

エリ「今回はお花見ですか。いつか僕もエリオさんと二人で」

キャロ「それは私が」

ルーテシア「私を忘れてる」

エリ「なら三人で」

キャロ「それはない」

ルーテシア「全力で同意」

エリ「ですよ。みんなライバルですよ」

キャロ「じゃあ今回はここまで。次回もお楽しみに」

ミッション19：俺がいる意味？ないよ（前書き）

雨季「本気でスランプだ」

ルキ「頑張りなさいよ」

リザ「こんなでも待ってる読者がいる」

雨季「そうだな。頑張って治すよ」

ルキ「ほの管の方のネタは湧くのにね」

雨季「何故知っている」

リザ「ブツブツ言ってた」

雨季「独り言か。気をつけないとな」

ルキ「じゃあ本編どうぞ」

ミッション19：俺がいる意味？ないよ

エリオside

今日から三国会議の三日目が始まるらしい。そして俺は飛び入り参加って訳だ。

「楽しみだな」

「そんなに会議が楽しみかしら？」

「おっと、曹操殿に一刀か。楽しみなのはみんなの顔だよ」

「エリオってそんな性格だっけ？」

「普段はな。そうだ一刀、手合わせしないか？」

一刀が強くなったのは見れば分かる。もちろん俺くらいに強くなってる訳じゃないが、少なくとも並みの将とそこそこ戦えるレベルだな。

「エリオに勝てるはずないだろ。三国最強なんだから」

「一刀、やりなさい」

「華琳！？」

「エリオだって手加減くらいするわよ」

「うーん」

「安心しろ。お前の強さを見るだけだから。と言っても時間があまりないな」

会議までもう時間がない。試合は会議が終わってからだな。

「そうね。しかしエリオ、あの二人はどうにかならないのかしら？」

「美羽と七乃が何か？」

「貴方と一緒に部屋にしろって五月蠅いのよ」

あの二人は……ちょっとは落ち着くという事を覚えたかと思っただが、どうやら違ったようだな。

「愛されてるな」

「一刀の方が大変だろ。曹操殿に夏侯姉妹、張三姉妹、他にも」

「もういい。俺が悪かった」

まあ俺もかなりの人数を落としてしまっている事を考えると人の事は言えないんだけどな。

「準備しよつと」

「何を準備するのかしら？」

「脅かす準備」

「ほどほどにしろよ」

馬鹿言え。遊びであろうと何だろうと全力でやるのがギャグの基本だぞ。

一刀side

あいつ何するんだろうな。

「袁術に張勳！？何故いるの！？」

「おお、孫権か。実はな「遊びに来たんですよ。ねえ美羽様」う、うむ」

会議室に入ってきた孫権さんが、先にいた二人を見て驚いていた。後に付いている呉の面々も差はあれど驚いてるみたいだ。

「貴女達には城を任せてたはずよ。第一「いつ来たのかしら？」雪蓮姉様？」

「呉から此処まで来るのにそこそこ時間が掛かるはずよ」

「あう……」

「そ、それは貴女達の出発した次の日に」

「それならおかしいわね。道中にはいくつも関所がある。貴女達が関所を通れば駿馬に乗った兵が報告に来るわ。もし関所全てを避けて来るとしたらかなりの時間が掛かるはずよ」

「えーと……」

確かエリオのお札で来たんだっけ？エリオから口止めされてるようだから説明出来ないだろうな。

「一刀さん、どうしたんですか？」

「劉備さんか。ちょっとした揉め事かな」

「大変ですね」

蜀の面々も来ちゃったな。エリオが行動するとしたらここら辺かな。

ガタガタ

「ん？」

今、机が揺れたよな。

ガタガタガタガタ

「う、浮いた!？」

「何!？」

会議室の家具が浮き、飛び回り始めた。やってるのは間違いなくエリオだから俺はそこまで驚かなかったけど、みんなはかなり慌てる。

「フツ!!」

しかし呂布が戟を振るうと家具は落ちてきた。

「あ、なんで？」

「……糸」

糸?どれどれ……本当だ。めちゃくちゃ細くてよく解らないけど、触ると糸があるのが解る。

「それと、屋根裏」

「侵入者か!!秋蘭、撃って撃って撃ちまくれ!!」

「姉者、少し落ち着け。呂布、まだいるのか？」

「もういない」

「逃げられたか」

呂布は凄いな。エリオのやってる事を悉く見破ってる感じだな。

「はいはい、みんな落ち着きなさい。今回の犯人を教えるから」

「華琳様、その言い方だと犯人を知っているようですが」

「そうよ桂花。隠れてないで出て来なさい」

「了解。皆さんお久しぶり」

『エリオ（・モンディアル）！！！？』

「うん、いい反応。それを待っていた」

みんなが驚いてるのを見てエリオが満足そうな顔をしていた。

「……エリオが二人を連れてきたのね」

「そうですよ、雪蓮さん」

「今回の悪戯といい、突然いなくなった事といい。袁術達より性質たちが悪いわ。蓮華！！南海霸王を貸しなさい！！」

「ひゃ、はい！！」

「孫策殿！！私も手伝うぞ！！」

「姉者、気をつけてな」

「鈴々もやるのだ！！」

「全員掛かって来いよ！！ついでだ、一刀もやるぞ！！」

孫策さんに春蘭、張飛ちゃんと一緒にエリオに挑む事になってしまった。何故こうなった。

「どっからでも来い」

「痛めつけてやるわ」

「貴様を今度こそ倒してやる」

「全力なのだ!!」

俺が三人に混ざって突撃しても邪魔にしかならない。タイミングをずらして斬りつけるか。

「ハアアアアアア!!!!」

「オオオオオオオ!!!!」

「てりやりやりやり!!!!」

「ハッ、又ルい!!!!」

エリオはどこからともなく槍を出し、三人の攻撃を避け、孫策さんの剣を吹き飛ばし、春蘭を転ばせ、張飛ちゃんを投げ飛ばした。

「そらっ!!」

「がつ!!?」

そして一瞬で俺の目の前まで来て突きを放ってきた。なんとか剣で防いだが、剣は折られて吹き飛ばされた。

「終了」

分かっていたが強すぎる。

エリオ s i d e

いきなりの試合だったが、なかなか良かった。

「さて、会議を始めるわよ」

やる事もないし、俺はのんびり聞いていよう。まあやってる事は最

近の街の様子とか盗賊とか、俺からすればどうでもいい。

「エリオ、貴方の意見は？」

「……………ぐう」

「寝るな！！」

「おおう」

「風の立場を取らないで欲しいのですよ」

いかんいかん、マジで寝てた。

「しかし俺に訊かないでくれ」

「なら何故貴様はいるのだ」

「はっはっは、関羽殿は分かかっておられないようだ。そんなの決ま
っている。いる意味などない」

『なら帰れ！！』

みんな酷いなあ。

ミッション19：俺がいる意味？ないよ（後書き）

エリ「エリオさん強い」

キャラ「でも最後はね」

ルーテシア「私達がいればあんな事にはならなかった」

エリ「そうなのですか？」

キャラ「ちよつと脅すからね」

ルーテシア「毒虫を這わせるから」

エリ「可哀想……」

キャラ「じゃあいつも通り ほのぼの（？）管理局 スタート」

ほのぼの（？）管理局

A「茶が美味しい」

？「失礼？ここが、おや君は」

A「先生！？お久しぶりです」

先生「おお、Aくんか。立派になったものだね」

B「どうした。ってその渋い老紳士は先生じゃねえか！！」

先生「Bくんもいるのか」

C「オース、今日も元気に出社してきたよ。って先生！？何故に！？」

先生「君も変わらないな、Cくん」

隊長「お前ら五月蠅い……………先生ではないですか！！」

先生「なんだ、教え子勢揃いだな。さつきもカルタくんやもぶくんもいたしな」

A「しかし先生は幼稚園の頃から変わりませんね」

B「……………俺にとって先生は小学校の時の担任だが」

C「俺は中学」

隊長「私と姉は高校だったが。見た目も変わらん」

A「先生、おいくつですか？」

先生「はっはっは、秘密だよ」

隊長「しかも私と姉が同時に挑んでも手も足も出なかったしな」

B「俺ともう一人の俺の関係をなんとかしてくれたのも先生だったな」

C「マジで何者だよ先生。そんなに出来るなら俺に彼女を」

先生「無理だよ」

C「畜生……」

先生「君達の元気な顔が見れて満足だよ。ではね」

ボタン

A「あ、ちよつと」

ガチャ

B「……消えた」

C「ドアを閉めて一秒も経ってないぞ」

隊長「……流石は先生」

エリ「誰ですか」

キャラ「メインキャラ全員の担任をやった事がある先生」

ルーテシア「何者かは不明。ただ分かっているのはこの作品において最強つて事」

キャラ「見た目は渋い老紳士。KOFのオズワルドみたいな人」

エリ「凄いですね」

キャラ「では次回もお楽しみに」

ミッション20：VS悪竜 エリオの病（前書き）

雨季「やあこんにちは」

ルキ「遅い！燃やすわよ！」

リザ「凍らすよ」

雨季「やめて。まだ死にたくない」

ルキ「ニコ動見ずに働きなさい」

雨季「だって学校始まつたり、鬼巫女が可愛かつたり」

リザ「浮気？」

ルキ「浮気ね」

ルキ・リザ「お仕置き」

雨季「ギャース！！？」

ルキ「じゃあ本編どうぞ」

リザ「間違いがあつたら教えて」

ミッション20：VS悪竜 エリオの病

エリオside

会議で遊んでから二日、なんかいろんな人から勝負を仕掛けられている。今は巖顔さんと魏延を相手にしている。しかし巖顔さんのあの大砲はいつ見てもロマンを感じるな。

「余所見すんなよ!!」

「突っ込み過ぎだね。簡単に避けれるよ」

魏延の金棒を跳んで避ける。避けやすいつたらありゃしない。

「ならばそこを狙うまで!!」

「おっと危ない」

「弾を取るでない!!」

「いや、いいじゃないですか」

このくらいなら手で取るくらいは容易い。よく戦場ではこれ以上のスピードと威力の攻撃が飛んできたし。

「今日は終わりにしましょう」

「勝ち逃げか？」

「何か問題が？これ以上やっても勝つのは俺だし」

「ぐぬぬ」

「焰耶、悔しいがあやつの言う通りじゃぞ」

蔵顔さんは流石に分かってるね。それにそろそろ飯の時間だし。

「訓練中失礼致します!!」

「どうした」

「山岳地帯に竜が現れたとのことで緊急会議が開かれる事になりました!!」

竜か。キャラが従えるような生態系に組み込まれたものでなく幻想である竜だろう。面倒だな。

「とりあえずまずは会議に行くか」

どうやら俺らが最後だったらしく、俺らが来てすぐに会議は始まった。

「竜が現れた山岳地帯には村がいくつかあるわ。竜の存在を伝えてくれたのも村の住民よ」

「竜の特徴などがありますか？」

「天を覆うほど巨大な黒い竜だったそうよ。正確な情報ではないけど」

黒い竜か。情報が少ないな。大きさだって竜を見ればその威圧感で巨大に見える。こうなると黒い色すら怪しいな。自分の上空、太陽を隠すように飛ばれたら黒く見える。

「エリオ、妾は見てみたいぞ」

「こら美羽、これは遊びじゃないんだぞ」

「私は元々貴方に頼むつもりだったわよ。ついでだから袁術も「曹操……」「冗談よ」

「行くなら俺一人だ」

竜なんてもんがいる所に誰かを連れていけるか。キャロヤルーのような力のある奴ならともかく、この時代の武将ではいくら氣の力を使おうとも戦える相手ではない。せめて竜殺しの武器があれば話は別だが、それでも美羽は連れていけない。

「では行ってきます。帰ってきたら何か下さい」

「考えておくわ」

「気をつけるよ」

「一刀もな。魏から三国の種馬にならないようにな」

「ちょ、おま!?!」

一刀が白い目で見られているのを楽しみながら俺は竜がいるという山岳地帯へと向かった。

竜がいるという場所の近くの村に着いたはいいが、やはり村には人っ子一人いなかった。だが俺にはそれ以上に気になった事があった。

「雰囲気が違う」

この村に来るまでの雰囲気と村の近くまで来た時の雰囲気。それが明らかに違うのだ。一体何が……

「? 暗く……」

突然辺り一帯が暗くなったので上空を見ると、そこには話に出た通

りの天を覆うほど巨大な黒い竜が飛んでいた。

「ハハハ……」

ここいらに来て感じた異様な雰囲気はこの竜から漏れた魔力だったのか。

「面白い!! ストラダ!!」

《任せる!! セットアップ!!》

「貫け!! サンダーブレード!!」

上空に巨大な雷の剣を作り出し、竜に突き刺そうとしたが弾かれてしまった。それによって竜は俺の存在に気づいたらしく竜は吼えた。

「!!!!!!」

「馬鹿でかい声だな。塞いでやるよ!! 雷神・纏!!」

竜の顎にストラダを叩きつけたが、ダメージは一切ないようだ。いくら竜といえどさっきのサンダーブレードや今の叩きつけ、そのどちらでも全く傷つかないなんて。

「ならもう一丁!!」

何度も何度も同じ場所に突きを入れた。それでも鱗一枚傷つく事はなかった。ただ硬いだけじゃない。何かに防がれている感じた。竜は反撃で腕を振るが竜の体を蹴って避ける。

「ストラーダ、何か解ったか？」

《いろいろと検索してみたが、おそらくあれはヴリトラだ》

「ヴリトラかよ。なら効かないはずだ」

ヴリトラは木、石、鉄、乾いた物、湿った物の攻撃を受け付けず、昼と夜にも攻撃を無力化する。更にその体は硬く、狙うならば夕方に口の中に何かを打ち込むしかない。

「ヴリトラハンになってみますか」

美羽 side

「七乃、こつちじゃな？」

「そうですね」

エリオめ、せっかく竜などという珍しいものを妾に見せんとわ。

「でも大丈夫ですかね？」

「怖じ気づいたなら来なくてよいぞ」

「まさか。美羽様を一人に出来ませんよ」

ならば良いのじゃ。七乃はいつも妾の隣に、エリオもじゃ。

「そういえば美羽様は竜を見たいだけなんですか？」

「それもあるが、妾が竜を見たと聞けばあやつらも妾の評価を改めるはず」

「流石美羽様！！その小悪党のような考え、まさに三国一！！」

「そうじゃろそうじゃろ」

エリオは七乃はいつも妾を貶していると言つが、三国一が人を貶す言葉のほづがない。エリオは馬鹿じゃな。

「……………美羽様」

「どうした？」

「あれ……………」

七乃が指差す方を見ると、夕日の中に巨大な影があった。山ではないのか？

「って動いたぞ！！飛んでるぞ！！」

「多分あれが竜ですよ」

「行くぞ!!」

「えっ!?!ちよつと美羽様!!」

馬を走らせ影へと向かう。近づくにつれ影の全貌が見え始め、飛び交う雷が見えた。あの雷はエリオじやろう。しかし大きいな。

「美羽様!!帰りますよ!!」

「これだけ離れておれば」

!!「ひっ!?!」

竜が吼えたかと思うと炎を吐いてきた。それは勢いが衰える事なくこちらへ向かってくる。

「危ない!!」

七乃が守ろうとしてくれるがこんな巨大な炎、妾達は消し炭になるしかない。大人しく待っておれば良かった。

「うらぁ!!!!」

「あ……エリオ」

しかしその炎は飛んできたエリオが雷をぶつけて消した。

「何しに来やがったこの馬鹿共!!」

「い、いめんなさい」

「早く逃げる!!」

「……エリオ」

「んだよ」

「瞳……そんなに朱かったか？」

「何？」

エリオに怒られながらも妾が気になってしまったのはエリオの瞳。まるで血のように真っ赤に染まった瞳。

「薬が切れたか」

《来るぞ!!》

竜が大口を開けてこちらへ飛んでくる。全員纏めて食らうつもりだ。

「アホーッ
転送」

《相棒!?それは使うな!!》

エリオがどこからともなく取り出したのは炎のように赤い弓と矢羽根が真っ赤な矢。それをエリオがつかえると、矢は光に包まれ、矢をつがえているエリオの右手が燃え始めた。

「エリオさん!?何をしていますか!?!」

「

!?!?!?!」

竜はもう目の前。エリオは無言でつがえた矢を放つと矢は一筋の光となり、竜の口に吸い込まれ、竜は内側から破裂した。

「……………え？」

妾も七乃も呆然とした。破裂した竜の血や肉片は地に落ちる前に炎に包まれて燃え尽きた。

バタツ

「エリオ!？」

「……………酷い」

倒れたエリオの右腕はもはや炭と同じになっていた。

《おい!!!早く連れて帰るぞ!!!》

「あ、はい!！」

七乃がエリオを自分の馬の上に乗せた。妾も馬に乗って魏へと走った。

エリオside

.....「こは？」

「起きたか？」

「華蛇 ドクン ぐっ」

「この薬だろう。ほら」

「すまない」

ゴクリ

.....ふう、落ち着いた。現状を確認するか。えっと確かヴリトラを殺して倒れた。それだけか。

「さて、いろいろ教えてもらうぞ」

「美羽と七乃は？」

「勝手に行ったから説教中だ」

成る程な。っとこいつの説明をしていなかったな。こいつは華蛇。この世界では珍しい男の医者だ。

「エリオ、お前の右腕はほぼ死んでいた。だというのに勝手に治った。いや復元したと言った方が正しいか」

見られたか。教えるしかないか。華蛇なら信用出来るし。

「死徒よねえくん。まさか貴方が死徒とは思わなかったけど」

「貂蟬、いたのか」

こいつは貂蟬。変態オカマでこの世界の管理者的なもの一人だ。

「死徒とは？」

「簡単に言えば人の血を吸う鬼だ。決して治らない感染症かな」

「そして貴方が使ったのは第五聖典。鳳凰を使った弓と矢ね」

「よくご存知で」

「カリー・ド・マルシエに聞いたわよくん」

あれと知り合いか。話にしか聞いた事はないが、シエルさんのカリー好きの原因になったという死徒。カリー好きが第五聖典を知っていたとは。

「死徒である貴方が聖典を使うなんて、無茶すぎよ」

「まあ、緊急時だったし、薬の効果があれば普段は普通に使えるし」

「という事は、さっき飲ませた薬は死徒とやらない薬か？」

「残念だが死徒は一度なれば治る事はないし、またなるのを防ぐ事も出来ない。さっきの薬は死徒としての力を一時的に封じるものだ」

「死徒としての能力を抑えるかわりに吸血衝動も抑えられる。便利な薬じゃない」

「ああ」

永琳さんは流石だよ。頼んだ時はこんな薬を作れるとは思わなかったが、月の頭脳を舐めてた。

「治せない病があるとは、己の未熟さが恨めしいな」

「気にする事ないわよ」。死徒は誰にも治せないわ」

……チートの誰かなら治せそうな気がしたが、治す気はない。もしもの時死徒の力は役に立つからな。

「それじゃあ今日はもう寝る」

「ゆっくり休め。竜殺しなんて事をやってのけたのだからな」

「ああ」

あー疲れた疲れた。

ミッション20：VS悪竜 エリオの病（後書き）

エリ「エリオさんの病気って」

キャロ「そう、死徒化」

エリ「……死徒ってなんですか？」

ルーテシア「危険な吸血鬼。そもそもエリオがそうだったのも」

アルト「それは私が話す」

キャロ「アルトルージュさん……」

エリ「お久しぶりです」

アルト「うむ、久しぶり。さてと、早速話そうか。

まず私がエリオに出会ったのは御爺様がエリオを連れてきたからだ。人間にしては面白かったし、我が騎士二人とも戦う事が出来るほど強かったからすぐに気に入った。

そしてエリオが我が城で過ごして数日、白翼公が攻めてきおった」

エリ「白翼公？」

ルーテシア「アルトルージュと敵対してた死徒」

アルト「うむ、その白翼公の軍勢と戦争になつてな。その中でもエリオは無数の死徒を殲滅していた。そして終わりに近づいた時、油断してしまった私の首を白翼公が刈ろうとした。だがそれをエリオ

が割って入って止めた。エリオは己の首を斬られながらも教会のメ
レムから奪った第五聖典で白翼公を消し去った」

キャロ「でもエリオくんは首を斬られたからもう死にかけ。そこで
アルトルージュさんが契約してエリオくんを死徒にしたの」

ルーテシア「一方的だったけどね」

アルト「だからエリオの妻になろうとしておるのだ」

キャロ・ルーテシア「駄目」

アルト「ケチめ」

エリ「大変だったんですね。じゃああんまり時間がないけど ほの
ほの(?) 管理局 スタート」

ほのほの(?) 管理局

隊長「今日は学校から子供達が見学に来る。私や姉、Aの子もいる
ぞ」

A「聞いてませんが」

隊長「さつき先生から連絡があった」

B・C「「ならしょうがない」「」

？「すみませ〜ん」

隊長「来たな」

B「お片付けお片付け」

C「ああ大変だ」

A「真面目にやれよ」

隊長「どうぞ」

？「失礼します。今日は一日……お兄ちゃん!？」

C「妹!?!お前教師だったの!?!」

A「ツッコミ所が違う」

B「付き合ってください!?!」

A「とりあえず落ち着け」

隊長「今日はよろしく頼む」

「妹「いえいえ、こちらこそ」

「キャロ・ルーテシア「短かつ!!」」

「エリ「携帯投稿ですから。続きは次回まで待って下さい」

「アルト「ではな。また見てくれ」

ミッション21：命令だ、蜀に行け（前書き）

雨季「こんにちは」

ルキ「今回からエリオは魏から蜀に移動します」

リザ「今回は短め」

雨季「なかなかいいのが出てこないからね」

ルキ「そのスランプどうにか出来ないの？」

雨季「新しく出来た後輩でもいじろうかな」

リザ「嫌な先輩だね」

雨季「俺は先輩に出会い頭に遊びで絞められたぞ」

ルキ「大丈夫なの？」

リザ「嫌ならちゃんと言わないと」

雨季「まあ気にしてないからさ。では本編をどうぞ」

ミッション21：命令だ、蜀に行け

エリオside

ヴリトラを殺す時に無茶をしたエリオです。強制安静状態です。

「詰み」

「はわっ!？」

まあ有り難い事にいろんな人がお見舞いに来るから暇ではないな。今は諸葛亮とこの時代の将棋的なもので遊んでいる。

「エリオさん強すぎです」

「お遊びはな。実戦では軍師殿にはかなわんよ」

「貴方に策がいらなだけでしょ」

「あ、蓮華。どうしたのさ。お見舞い？花より食い物がいいな」

「そんなのじゃなくて命令よ」

それはそれは、もう少し病人（笑）を気遣ってくれてもいいのにな。それに命令って、可愛くお願いって言えないもんかね。

「蜀に行きなさい。あの二人は無しよ」

「それは構わないが、勝手付いてこないか？こう言うのもなんだが、

あいつら俺に依存してるからな」

「分かっているわ。でも引き止めておくから安心なさい」

「寧ろ目の届かない場所にて不安」

「その気持ちは分からないでもないけど、いい加減互いに離れないと駄目でしょう」

そうなんだよな。何気に俺も過保護だからそろそろ離れないと駄目なんだよな。もし離れなかったら兄さんみたいな親バカとなってしまう。

「じゃ、二人を頼む」

「ええ、貴方もしつかり視察してきなさい」

「御意に。という事だ。暫くよろしくな、諸葛亮」

「はい」

蜀か。楽しみだな。それにしても視察って何すればいいんだろ」

「思春も付けるから安心なさい」

「あれ？」

「声に出てましたよ」

うん知ってる。わざとやったから。しかし思春か。真面目にやらな

いと怒られるな。あ、思春ってのは甘寧の真名ね。

「行くぞ」

「あれ？美羽達とお別れの挨拶は？」

「貴様は子供か。そんなものあるわけないだろ。また消えるというなら許しを貰ってやるが」

そんなつもりは一切ないけど、しかし思春てこんな事言うキャラだっけ？もつと規律に厳しくて雪蓮さんや蓮華の命令がないと考えを曲げないような感じだったと思ったけど。まあいつか。柔らかいのはいい事だ。

「ありがとう。そういう気遣いをしてくれる思春は好きだよ」

「な、な……す……す、すす好きなどと／＼／＼」

……もしかして、フラグやっちゃった？

「ま、まあ私も戦友としては貴様は嫌いではないぞ。何度か危機を救われたしな」

ああそつだよな。あー良かった。でもよくよく考えたら思春に限って男にうつつを抜かすなんて事はないよな。ここでフラグなんて立てたらまるでフラグ王じゃないか。大丈夫、俺はフラグに気づく子だ。

「早く行くぞ!」

「はいはい」

思春 side

エリオメ。いきなりふざけた事を言いおつて。す、す、好きなどと思いつき出すだけで顔が熱くなってくる。まるで恋する乙女とやらじゃないか。

「……い」

あいつを意識し出したのはいつからだったか。ああそつだ、あいつが消える前日の試合の時だ。

「お……い」

あいつはそれまで真面目にやる事がなかった。祭殿が殺されそうになった瞬間は違ったと聞くが、私は見ていないからな。しかし最後の試合の時に初めて見せたあの、男らしい顔というか、その、あれが……

「おーいー!!」

「っ!?! な、なんだ!?!」

「もう着いてるぞ」

「わ、分かったから!! 顔が近い!! 斬るぞ!! / / / /」

「それは勘弁」

ふう、考え込み過ぎたか。あいつは、私から離れたらすぐ蜀の将と話し込みおつて。なんだろうなこの感情は。あいつが他の女と話しているのと胸が痛くなってくる。……………ああそうか、理解した。これはきつとあれだ。

「殺意だ」

「甘寧殿、何を物騒な事を言っている」

「む、関羽殿か。この度は視察の許可を頂き感謝いたします」

「それは桃華様に言ってくれ。私が許可した事ではないのでな」

「ぶっ、ではそうしよう」

「おい、二人共早くしろよ」

「愛紗ちゃん！甘寧さん！早く行こー！！」

あの二人は……だが時間なのは確かか。

「では行こうか」

「そうだな」

しかしあれだな。エリオがいるだけで何か起こりそうな気がしてならない。

オマケ

「何故妾を置いていった!？」

「分かっているでしょう袁術。貴女も張勳もエリオに依存し過ぎだつて」

「えーい！孫権では話にならん！！孫策を呼べ！！」

カチャ

「呼ばれて来たわよ」

「あ……怖いから、剣を首に押し付けないで……」

「貴女が我が儘言わなければね」

「七乃」

「彼女ならもう倒したわよ」

「ふえくん」

ミッション21：命令だ、蜀に行け（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

前回のあらすじ

子供達が職場見学に。下見として来た教師がCの妹だった。

隊長「ではもうすぐ子供達が来るのかな？」

C妹「はい、本日はよろしくお願いします」

隊長「何かあったら手伝おう。いいなお前達、子供達にあまり変な事教えるんじゃないぞ。特にB」

B「なんで名指しなんですか」

隊長「青田買いはやめろよ」

B「俺はロリコンじゃねえ!!!」

A「だがお前ならやりかねないだろ」

C「妹に手出したら殺す」

B「味方はいないようだ」

隊長・A・C「」「」「当然」「」

B「ひでえ」

C 妹「あはは……じゃあ子供達を呼んできますね」

C 妹「はい皆さん、ここが今日見学させて頂く部隊ですよ」

隊長「うむ、ようこそ。親が局員という子もいて仕事を知っているものもいるかもしれないが、ゆっくり見ていってくれ」

子供達『はい！！』

B「お、元気がいいね」

A「……………」（娘には手を出す気配がないな）

子供「おじさん何してるの？」

A「書類の処理だよ。一番地味で面倒な仕事かな」

子供「悪い人を退治に行かないの？」

C「まず悪い人が出てこないからな。悪い人が出たら連絡があるんだ」

亜衣「先生のお兄ちゃんて本当？」

C「何処から仕入れた」

亜衣「ママー!!」

隊長「ならしょうがないな」

子供「お姉さん亜衣ちゃんママ知ってるの？」

隊長「お姉さんのお姉さんだからな。私はそこでコソコソしている
真哉と聖哉のママだ」

真哉・聖哉「ビクッ」「」

B「んだあ？ママが働いてる職場にいるのがそんなに恥ずかしいか
？」

A「いつもはここでお手伝いをしてるじゃないか」

真哉「それとこれとは」

聖哉「違うと思っ」

C妹「あらあら、みんな家族がいっぱい働いているのね」

A娘「あたしもね、そこにいるのがパパだよ」

子供「じゃあおじさんだけ家族がないんだな!」

B「ぐはぁ！？言っではいけない事を！！」

隊長「独身だしな」

A「兄弟もいない」

C「養子でも取ったらどうだ？」

B「五月蠅い！！！！ええい！！ここにいる子全員を養子にしたるか！？」

隊長「ロリコン」

A「シヨタコン」

C「妹に近づくな」

B「冗談も通じんのか！？」

全員『アハハハハハ』

B「笑うな！！」

エリ「あれ？なんで始まりからほのぼの（？）（？）が」

キャラ「まあいいんじゃない？」

ルーテシア「5万アクセス達成したら本編に一回だけ出るみたいだし」

キャラ「ほのぼの(?) 管理局と共演したい人募集中」

エリ「そんな事勝手に言っていないんですか？」

ルーテシア「短編集つぼいことになるから大丈夫。ライ様の一真は強制参加」

キャラ「チート夫婦も出る予定だね」

エリ「では次回もお楽しみに」

ミッション22：視察 子守り（前書き）

雨季「今回は早く書けた」

ルキ「良かったじゃない」

リザ「お疲れ様」

雨季「今回はエリオがフラグを建てる」

ルキ「今回『も』の間違いでしょう」

雨季「東方ポケット戦争EVOを買ったんだけど凄く楽しい」

リザ「それで遅れたら駄目」

雨季「頑張ります」

ルキ「椀出ないゲームなのにね」

雨季「椀が主役の東方活劇綺談の第二幕を買う予定だから」

リザ「結局遅れそう」

雨季「では本編どうぞ」

ミッション22：視察 子守り

エリオside

蜀に着いてまず視察についての説明を蜀の将にしようとしたのだが。

『……………』

はい、睨まれてますね。いきなりいなくなった人間がまたいきなり現れたらこつもなるか。

「思春、お願い」

「はあ、仕方ないか」

だってしょうがないじゃないか。あんなに睨まれて説明が出来るほど肝っ玉据わってないよ。

「何か説明する前に何でお前がいるか説明しろよ」

「馬超さん、帰ってきただけですよ」

「何か理由があるんだろ？」

「いいえ」

「お前……………」

なんかおかしな事言っ たかな？普通に受け答えしただけな気がする

けど。

「まあまあ翠ちゃん。今回はただの視察だし、今は敵じゃないし」

「……………桃香様が言うなら」

「それに変な感じもしないしね」

「俺ってそんな変な感じしてたの？」

『うん（ああ）（はい）（うむ）』

満場一致とは、これは酷い。思春まで賛同してるじゃないか。一体どんな雰囲気醸し出してたんだ俺。そんな変態的だったのか？

「何と云うか、分からない存在だったな」

「思春さん酷いです」

「敬語を使つな。気持ち悪い」

「本当に酷くない？」

分からない存在って初めて言われたぞ。俺以上に分からない存在なんていくらでもいるのに。

「お兄ちゃんががんばって」

「ありがとうお嬢ちゃん。お名前は？」

「璃々!」

「元気があってよろしい。俺はエリオだ」

璃々ちゃんは数少ない良心だな。……あれ? さっきとはまた違う変な視線を感じるんだが。

「まさか、幼女趣味か?」

「いや〜ん、襲われる〜」

「よし蔵顔さん、馬岱、オモテに出ろ。ちよっとO H A N A S H Iしようじゃないか」

「ハツハツハ、冗談が通じんの」

「えっ!?! 冗談だったの!?!」

「馬岱、本気で泣くぞ」

「泣くな、気持ち悪い」

「やっぱり思春が酷い」

「まあまあ、そんなに璃々ちゃんに懐かれてるなら子守りしてもらえばいいじゃないですか。ねえ紫苑さん」

「そうですね桃香様。子供好きに悪い人はいませんし、私も樂できますし」

おつかしいな。俺の仕事って視察だよな。子守りに来たわけじゃないよね。視察って子守りって意味だっけ？

「頑張れよ。視察は私がやる」

「思春って俺の補助だったと思ったけど」

「私に子守りをしると？」

「どうみても不可能です本当にありがとうございます」

「斬るぞ」

それは勘弁願いたい。いくら死徒の肉体でも痛いものは痛いのだから。

「お兄ちゃん！！こつちだよ！！」

「そんなに急がなくても大丈夫だよ」

なんだか街案内を璃々ちゃんがしてくれることになった。最初はそこの兵に頼もうかと思っただが、こういうのも悪くない。子供

だから知っている場所だって沢山ある。むしろ大人より街を知っているかもしれないんだ。

「ここがね、まち一番のお料理屋さんだよ」

「ふむ、腹が減ったら寄ると」「食い逃げだー！」「ベッタでーす」

何このベタな展開。笑っちゃうね。

「どけー！！」

「嫌だね」

バチッ

「いてええええ！？」

ちよつと電撃を当てただけでこれか。仕方ないか。普通は静電気以外で電撃に当たる事なんてないし。

「つよーい！！」

「ありがとう。さあ大人しくお縄につきな」

「くそお……」

「助かったよあんた。是非うちの店に来てくれ。奢らせてもらっよ」

「ならお邪魔しよう。璃々ちゃん行こうか」

「うんー!!」

「あれ？その娘さんは確か黄忠様の」

「子守りを頼まれてるんだよ」

「そうですかい」

不審に思われてないよな。もし不審に思われてたら俺捕まりそうな気がしてならない。

良かった。何もなく普通に終わった。

「あ！璃々ちゃんだ!!」

「みんなー!!」

おっと、璃々ちゃんの友達かな。仲良きことは素晴らしいかな。子供は友達と元気に遊んで、偶に喧嘩して、仲直りして、そうして成長するものだからな。

「お兄ちゃん誰？」

「璃々ちゃんのお母さんの知り合い。璃々ちゃん、しっかり遊んできな。俺はここで見てるから」

「わかった！ありがとうお兄ちゃん！！」

広場だから見失う事もないだろう。さてと……

「黄忠さん、もう出てきて下さい」

「あら、バレてましたか。いつからですか？」

「最初から。暗殺者でもない貴女の気配に気付くのは簡単でした」

とは言ってもそこらの暗殺者に比べたらよっぽどマシに気配を消してたけどな。

「今日は璃々の相手をして頂きありがとうございます」

「頼まれた事ですから」

「信用のためですか？」

「まさか」

「違うのですか？」

「当然。今回は呉のためでも蜀のためでも、ましてや自分のためでもありません。璃々ちゃんと貴女のためですよ」

「それは、一体」

「大して知りもしない俺に璃々ちゃんを預けてくれた。なら俺に出来る事は璃々ちゃんを守って貴女を安心させる事。信用なんてどうでもいい」

子供を預かったならその子に危ない事をさせない。怪我をさせない。それが親と子に最低限にして最大限にすべき事。俺はそう思っている。

「……面白い人」

「そうですかね？」

「ええ、とつても」

「あ、お母さんだ!!」

璃々ちゃんが黄忠さんを見つけて近付いてきたけど、止まってこつちをじっと見た。

「どうしたの璃々？」

「お母さんとお兄ちゃんふうふみたい」

「……ハハハ！夫婦ときたか!!」

「璃々はエリオさんみたいなお父さんは欲しい？」

「うん！お兄ちゃんつよくてやさしくてかっこいいもん!!」

「嬉しい事言ってくれるじゃないか」

「なら結婚しますか？」

「ハハハハ……はい？」

「冗談です」

冗談、だよな。一瞬目が藍さんと同じ獲物を狙う目になってた気がするんだけど。

紫苑 side

「うふふ」

「お母さんごきげんだね」

「そう見えるかしら？」

「へいへい」

「じゃあエリオさんのせいね」

エリオさんたら、私達のためなんて言っつて。年甲斐もなくドキドキしちゃったわ。璃々を預けた理由はどんな人か確かめるためだったけど、あんな女殺しとはね。

「璃々、弟か妹欲しい？」

「ほしー！..」

私を久しぶりにこんな気持ちにさせた責任はしっかりと取ってもらいますからね。

ミッション22：視察 子守り（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

A「隊長、質問です」

隊長「いきなりどうした」

A「隊長と隊長のお姉さんが一緒に戦っても先生には勝てなかったんですよね」

隊長「ああ」

B「信じらんねえな。いくら先生とは言っても二人相手に勝てるのか？」

C「それは確かに」

もぶ「事実ですよ」

B「うおっ！？いきなりだなあんた！！」

C「でも事実って、確かなのか？」

もぶ「はい。私も一緒に戦いましたから」

A「本当ですか」

隊長「では詳しく教えるのでしょうか。あれは私達が学生だった頃だ

な
」

――

カルタ「先生に勝負をふっかけようぜ!!」

マリア「姉よ。先生に勝てるはずがないだろう」

カルタ「もぶも呼んだ!!」

もぶ「呼ばれました」

マリア「貴方も大変だな」

先生「面白い話をしているようですね」

カルタ「お、ちょうどいい。試合しましょう」

先生「ハハハ、では少々揉んであげましょう」

カルタ「胸は揉まないでね」

もぶ「ではお願いします」

マリア「やるからには本気ですよ」

先生「では」

メキイ

カルタ「ガツ……!？」

バキイ

もぶ「ぎっ!？」

ズドン

マリア「ゴフツ!？」

先生「少々やり過ぎましたかね。すぐ直しますよ」

カルタ「うわ、もう治ってる」

もぶ「先生、流石です」

マリア「何をしたのですか？」

先生「定規で叩きました」

カルタ・マリア・もぶ「」「」……………」

――

隊長「こんな感じだ」

もぶ「多分今ならなんとか防げるかと」

A「先生が化け物というのはよく分かりました」

B「老けないしな」

C「怖いな。一人で世界征服出来るだろ」

隊長「先生だからな」

エリ「僕達のスペースが」

キャラ「どんどん小さくなるね」

ルーテシア「諦めるべし」

エリ「エリオさんが熟女に手を出したようです」

キャラ「最低だね」

ルーテシア「お仕置き決定」

エリ「では次回もお楽しみに」

ミッション23：視察したいのですが、駄目？そうですか。（前書き）

雨季「遅くなつてごめんね」

ルキ「大丈夫。誰も外伝の更新は楽しみにしてない」

リザ「そんな事ない。みんなほの管を楽しみにしてる」

雨季「本編はしてないってか？畜生。ゲストを呼んでやる」

ルキ「ゲスト？」

雨季「鬼巫女さんどうぞ」

リザ「それはいけない」

鬼巫女「ダレガイケナインダ？」

ルキ「読みにくい！！読みにくいよ！！」

鬼巫女「コレガワタシノハナシカタダ」（これが私の話し方だ）

リザ「後ろに普通のが付いちゃった」

鬼巫女「サクシャ、ナゼワタシヲヨンダ」（作者、何故私を呼んだ）

雨季「可愛いから」

鬼巫女「カ、カワイイ!？」

雨季「だって普段が怖い人は隠れて可愛い趣味とかあると思うんだ。そうじゃなくても鬼巫女には魅力があるんだよ。俺は強くて可愛い鬼巫女が好きだよ」

鬼巫女「ウルサイ／＼／＼！！」

煉獄『アマテラス』

雨季「ぐはあああああ！？」

リザ「死んだ？」

ルキ「ありゃ死ぬわよ。鬼巫女さんお疲れ様」

鬼巫女「……………」

ルキ「では本編どうぞ」

ミッション23：視察したいのですが、駄目？そうですか。

エリオside

「思春さんや、俺に仕事を」

「ない」

最近思春が冷たい。どうしてだろう。特に紫苑さんと一緒にいる時の思春の瞳が絶対零度なんだが。あ、紫苑さんは黄忠さんの事ね。何故か真名を許してもらったんだよ。

「そんなに仕事がしたいなら蜀の誰かの手伝いをしろ。……………黄忠のはあれだが」

「何か言った？」

「言っていない」

「そうか」

どうしようかな。誰か仕事を分けてくれるかな？

「という事なんです」

「愛紗ちゃん、何かあったっけ？」

「いえ、特には」

だよ。劉備さんと関羽さんに聞いても駄目って事は、実質蜀の誰に聞いても駄目という事に等しい。

「いや待てよ。何でもいいのだな？」

「金が貰えなくてもいいです。働きたいでござる」

「なら一つだけある」

「そんなのあったの？」

「はい」

ほほう、どんな事をやらされるのだろう。まあ関羽さんならそこまでする事は言わないだろう。

「では、エリオ殿にやってもらいたいのは城の敷地内の罾の処理だ」

「罾？いいんですか？」

「ほぼ全てが蒲公英が焰耶に対して作った罾だから問題ない。処理をしると言っているのだが、たまに処理残しに引っ掛かるのがある」

「からな」

まるでてゐだな。まあこの時代の畏なんて大した事はないだろう。てゐなんてたまに砲弾が飛んできたからな。あれには驚いた。

「畏は敷地内のどの辺りに？」

「何処にでも。だから困っているのだ」

「了解。昼過ぎには終わらせる」

「出来るのか？」

「慣れてるから」

畏処理なんて微妙な仕事は早く終わらせてしまおう。

思ったより楽な仕事だったな。てゐ感覚でやったのが間違いだっただか。

《相棒、戻してくれ》

「似合ってるぞ、スコップ姿」

《勘弁してくれ》

「あれ〜？」

この声は、馬岱か。なんだ？ 罨でも見に来たのか？

「どうした？」

「げっ、エリオ・モンディアル」

「げっ、とはご挨拶だな。罨なら全部処理したぞ」

「なんで!？」

「仕事？」

「焰耶を罨に掛ける予定だったのに」

魏延とそこまで仲が悪いのだろうか。それとも仲が良いほど喧嘩するってやつか？

「蒲公英!! 見つけたぞ!!」

「うわー、こんな時に」

「ん？お前は何してんだよ」

「俺？仕事で罨処理だけど」

「蒲公英のか？」

「勿論」

なんか魏延が無言で近付いてきて手を掴まれた。

「ありがとう!!」

「「ええ」」

「お前っていい奴だったんだな!!感動した!!」

そんなに手をブンブンするな。と言いたいけどこんなに感謝されると何も言えない。

「蒲公英!!畏が無くなったならお前は丸裸だぞ!!」

「ひゃー!!逃げろー!!」

「待てー!!」

あの二人はもう放置しよう。今関わったらいけない。巻き込まれる。

またやる事が無くなったな。俺は何をすればいいのだろうか。とりあえず……

「璃々ちゃん、どうして付いてきてるんだい？」

「お母さんが一緒にいろって」

……まあいつか。次に何か出来る事を探すか。

「あ！月お姉ちゃん！！詠お姉ちゃん！！」

「璃々ちゃん、こんにちは」

「あんた、エリオ・モンディアルだっけ？」

「そうだが」

この侍女二人、どこかで見た事あるな。どこだったかな。………………
思い出せない。思い出せないって事は大した事じゃないんだろ。これってフラグか？

「そうだ。ちょっと厨房まで案内してくれるか？」

「いいですけど、どうして？」

「なんか甘い物作ろうと思って」

「甘い物？」

「出来たら璃々ちゃんにあげるよ。二人にもな」

「ありがとうございます」

「別にいいんだけど」

「そう言うなよ。じゃあ頼む」

どうせやる事がないんだ。璃々ちゃんが近くにいたら仕事も出来な
いし。何を作るのかな。作るならこの世界にないのがいいよな。

「ストラーダ、食材と調味料を頼む」

《おいこら、いつ俺が食材の保存庫になった》

「」「喋った!?!」「」

「エリオお兄ちゃん!!見せて見せて!!」

「はい」

《待て！子供に簡単にデバイスを渡す馬鹿がいるか！？》

「わー！！すごい！！」

「これも天の技術なんですか？」

「まあな」

「装飾品を喋らすなんて変わってるわね」

「あれは武器にもなるんだぞ。さあ璃々ちゃん、そろそろ返してくれ」

「はい」

《比較的いい娘で助かったぜ》

「そりゃ良かったな。じゃあ食材頼む」

《ったく》

ストラーダが出してくれたのはいろいろな菓子の材料。これだけあれば大抵の菓子は作れるな。

「どんなの作るの？」

「未来、じゃなくて天の世界の甘味だよ」

ここはパンケーキにするか。すぐに作れて失敗がまず無いからな。

思春side

あいつは……仕事を貰ったようだが、どこに消えたのだ。

「あら、甘寧さん」

「む、黄忠殿。エリオを知りませんか？」

「さあ？ですが璃々が一緒ですので」

「子供を監視に付けますか」

「あら監視なんて、ただ璃々と遊んでほしいと思っただけですわ」

「あれは呉のものですよ」

「エリオさんにはエリオさんの意志がありますわ。それに呉ではなく、貴女では？」

「くくくく」

「うつぶ」

この人は完全にエリオを狙っているな。だがあいつをそう簡単に渡すわけにはいかないな。

「二人は何をしてるんだ？」

「エリオ……今まで何処にいた」

「厨房」

「お前の頼まれた仕事は「あらそんな事いいじゃありませんか。エリオさん、璃々のお相手ありがとうございます」「……」

「いえ、璃々ちゃんはいいい子ですから」

「璃々、楽しかった？」

「うん！！エリオお兄ちゃんね、天のお菓子作ってくれたよ！！」

「良かったわね」

天の菓子………そんなの私達には作った事がないのに。相手が子供だからか？

「エリオ、とにかく仕事が終わったなら報告しろ」

「すまないな。以後、気をつけるよ」

「エリオさんは大変ですね。これから私達の部屋で休まれては？」

「黄忠殿！！そういう事は困ります！！」

「どうしてそこまで意固地になるのですか？」

「だからそやつは呉のもので」

「それだけ？貴女の気持ちは？」

私の気持ちだと？エリオに対する私の気持ちという事か？エリオを見て思う事。それは、間違いなく……

「死ねえ！！」

「ぬわっ！？ちよつと服が斬れたぞ！！」

「前にも考えた事はあつたが、黄忠殿の言葉でも完全に理解した！
！貴様を前にした時のこの動悸も、この頭が真っ白になる感覚も、
胸の痛みも、全て貴様を殺せという本能だったのだな！！」

「何だよそれ！！」

「その命を差し出せ！！」

「嫌だよ！！」

結局逃げられてしまった。無念だ。

ミッション23：視察したいのですが、駄目？そうですか。（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

B「よしー!」

A「どうしたよ」

B「パワプロでオールAが出来た!」

C「なんだそんな事か」

隊長「そ、そんな事!？」

B「何故隊長が反応するのさ」

隊長「私なんてどんなに頑張ってもAが二・三個しか出来ないのだぞー!」

C「いや、それどうなんですか」

A「……………」

B「Aもパワプロやるのか?」

A「ほどほどにな」

B「ならやるつぜ。ちょっと待ってる」

C「ゲーム機まで持ってきてるのか」

隊長「私もやるぞ!!」

A「仕方ないな」

B「……なんでそんなに強い」

A「まあそこそこやってるからな」

C「Bのアレンジチーム、結構強いぞ」

隊長「あうあうあう」

A「隊長はなんでそんなに弱いんですか」

隊長「お前達がおかしいんだ!!これが普通だ!!」

C「とにかくAには驚いたな」

B「ちょっと選手作ってくれないか？」

A「あ？いいぞ」

A「こんなもんか」

B「おかしい」

C「何故、何故そこまで強いのが作れる」

隊長「弟子にしてくれ」

A「ただのゲームでしょう」

B「Aの以外な特技を知れたな」

C「これからはパワプロ王と呼ばう」

A「やめんか」

エリ「Aさんはパワプロの達人だったんですか」

キャロ「どうでもいいけどね」

ルーテシア「エリオは何をやってるんだろ」

キャロ「殺される場所だったね」

エリ「大変でしたね」

キャロ「エリオくんだからしょうがないかな」

ルーテシア「情けないね。私達の夫なのに」

エリ「では次回もお楽しみに」

ミッション24：仕事が終わってしまった（前書き）

ルキ「こんにちは」

リザ「どうも。今日は幕間的な感じで短い」

ルキ「ふーん、そういえば雨季はどこ？」

リザ「ゲストを探しに行った」

ルキ「ゲストって探すものなの？というかどこから連れてきているのよ」

リザ「……分かんない」

雨季「うおーい」

ルキ「あ、来た来た。もう始まつてるわよー!!」

雨季「すまんすまん、なかなか捕まらなくてな」

リザ「誰を連れてきたの？」

雨季「こいし」

こいし「ヤッホー」

雨季「古明地さん家のこいしさんです」

ルキ「そりゃ捕まらなくて当然ね」

リザ「よく捕まえたね」

こいし「お兄さんしつこいから」

ルキ「……………」

リザ「……………変態」

雨季「違っからね!?!」

さとり「こいし、見つけた」

こいし「お姉ちゃん?」

さとり「帰るわよ」

こいし「はい」

ルキ「……………ゲスト帰ったわよ」

リザ「……………ぷっ」

雨季「だ、大丈夫だ!!すぐに新しいのを、おや?」

鬼巫女「……………」(チラッ)

ルキ「……………」

鬼巫女「……………」(チラチラッ)

リザ「……………」

鬼巫女「……………」(チラチラチラッ)

雨季「もういいかな。本編行こうか」

鬼巫女「!?!」

ルキ「そうね」

リザ「……………もうそろそろいい時間だからね」

鬼巫女「オイ!?!」

雨季「どうした?」

鬼巫女「ゲストガイナイノダロウ!? ワタシガデテヤロウトイウノ
ニ!?!」(ゲストがいないのだろう!? 私が出てやるつというのに
!?!)

雨季「誰も頼んでないよ。鬼巫女は出たがりだな」

鬼巫女「ナ、ナンダト!? マエハキサマカラタノミコンダクセニ!
!」(な、何だと!? 前は貴様から頼み込んだくせに!?!)

ルキ「だとしても今は頼んでないわよね」

リザ「……………さようなら」

鬼巫女「キサマラ！！コノワタシヲバカニシオツテ！！」(貴様ら！！この私を馬鹿にしおって！！)

雨季「そう怒らないの？次回は必ず出すから」

鬼巫女「……カナラズダゾ」(必ずだぞ)

雨季「はいはい。では本編どうぞ」

ミッション24：仕事が終わってしまった

エリオside

平和だ。蜀に来てからやる事もないが、静かに過ごさせている。たまに猛獲とかが遊びに来たり、蜀の将と手合わせするけど、概ね平和だ。

「くくく、エリオ殿は流石に強い」

「趙雲さんもなかなかですよ」

今は趙雲さんと試合をしている。なんでこの人は華蝶仮面なんてやってるんだろ。

「あゝ、お茶が入りましたよ」

「っと、ちょうどいい。終わりにしますか」

「次は勝たせてもらいますぞ」

「月ちゃん、茶ありがとうございます」

「いえ」

そうそう、この娘の事も思い出した。董卓だ。偵察に行って見たんだよな。すっかり忘れてた。

「エリオ、此処にいたか」

「おう思春。茶を飲むか？」

「帰るぞ」

「……………おう？」

「仕事が終わったから帰るぞ」

何ですと？今思春さんは何とおっしゃった？仕事が終わったから帰るぞ？俺何もしてないんですけど。

「これは残念」

「またお菓子の作り方教えて下さいね」

突然の事なのに二人は平然としてるな。ちょっと寂しい。

「ああそつだ。鳳統殿と黄忠殿がついて来るそつだ」

「何故？」

「鳳統殿は私達と同じ理由、つまりは呉の視察だ。黄忠殿は鳳統殿の護衛……………という名目だ」

思春さん、なんか紫苑さんの名前を出す度に怒気が滲み出してるんですけど。そんなにお嫌いですか？

「まあいい。行くぞ」

「はいはい」

「では皆さん、この度はお世話になりました」

「エリオさん何かしましたっけ？」

「劉備さん、そこは言っては駄目だ」

「よろしくお願いします」

「よろしく頼むぞ、鳳統殿。それと、黄忠殿も」

「あら、随分嫌そうね」

「気のせいだ」

あの二人は相変わらず険悪だな。最初に顔合わせした時はこんな事なかったのに。紫苑さんは俺を（性的に）狙ってて、思春も俺を（命的に）狙ってる。成る程、俺を狙う同士の衝突か。

「怖いな」

「どうしました？」

「鳳統ちゃんが気にする事じゃない」

「出発するぞ！！」

「了解」

思春が怒る前に行かないと。

風を切って走るのは気持ちがいいね。

「本当に自分の足で走るのですね」

「鳳統殿、あれを我々の常識ではかつてはいけない」

何だよそれ。それじゃあ俺が非常識の生き物みたいじゃないか。俺はまだ常識の範囲に生きている。

「あ、そうだ。またしばらくお付き合いするのですから真名で呼び合いましょ」

「あらいいわね。もう敵ではなく盟友なのだし、雛里ちゃんの案に賛成よ」

「そうだな。では改めて、私は思春だ」

「雛里です」

「紫苑よ」

「俺も言った方がいいか？真名ないんだけど」

「礼儀だろう」

「だな。エリオだ。よろしく」

こう改めてやるとちょっと恥ずかしいな。だけど親交を深められるんだ。いい事だよな。

「思春、握り飯取って」

「走りながら食うのか？」

「いいじゃん」

「お水はいりますか？」

「悪いね、雛里」

到着したぞ。途中いろんな村で休憩して数日掛かったが、移動手段が馬だからしょうがない。

「エ〜り〜オ〜!〜!」

「わっ、と」

「妾を置いていくとは何事じゃ!〜!このばかばかばかばか〜!〜!」

「悪かったよ美羽。今日からまた一緒だ」

「本当にか?」

「ああ」

美羽の奴、結局べったりだな。まあ俺が悪いんだけどな。もしいなくなる時、何か一言言えばこんな事にはならなかったかもしれない。

「む、そっちのちんちくりんと牛乳うしちゆうは」「こらっ!〜!」「ひっっ!〜!?」

「いきなり何を言ってるんだ!〜!謝りなさい!〜!」

「「うっ、うっ、ごめんなさいなのじゃ」」

「あはは……気にしてませんよ」

「私もよ」

全く。美羽にはもう一度教育をし直さないとな。

「エリオだ!!」

「シャオじゃないか。迎えにきたのか？」

「まあね。思春、エリオはちゃんと仕事した？」

「いえ、全て私がやりました」

「仕事くれなかったの思春じゃん!？」

「あーあ、エリオは駄目ね。蓮華姉様に報告しよ」

「ま、待て!!俺は悪くないんだ!!」

「やらなかったら一緒だよ」

「そうですね。エリオ、少しは私が仕事を任せられるようになるのだな」

「思春楽しんでるよね!？」

この後、シャオを捕まえる事が出来ず、蓮華に報告されてしまった。もちろん俺は説教。俺の言い分も聞いてくれなかった。酷いや。

ミッション24：仕事が終わってしまった（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

隊長「今日は休みだ」

A「休み？」

隊長「次回はほの管スペシャルだから今日は休んで準備だ」

B「メタだな」

C「でも準備って、俺達はいつも通りにやるだけでしょう」

隊長「まあな」

B「でも休みなら帰ろ」

A「久しぶりに家族サービスをするか」

C「詰みゲー片付けよう」

隊長「私も帰るか」

エリ「早いですね」

キャラ「まあいいんじゃないかな？」

ルーテシア「ここでお知らせ。もうすぐエリオには新しい世界に行ってもらっちゃうよ」

キャラ「そこでどんな世界がいいか考えてね」

エリ「ただし、作者さんは最近のアニメを一切見ていません」

ルーテシア「要望がなければゼロ魔だって」

キャラ「次回は上で言ったようにほの管スペシャルだよ。次回もお楽しみ」

ほのぼの(?) 管理局スペシャル(前書き)

今回は後書き大人気企画《ほのぼの(?) 管理局》の本編進出です。
以下の要素が含まれるのでご注意ください。

- ・ 台本形式
- ・ 短編形式
- ・ 後書きが本編
- ・ コラボ

コラボに参加して下さったライ様、香崎様、秋代様、畏無様、24
9様、バルディッシュ様、なにか不満があればご連絡下さい。つい
でなんで簡易的なキャラ紹介的なものを部隊ごとにします。

《問題児》 プロフィールチャイルド

隊長・・・女。本名マリア。ライ様のキャラ、御剣一真との間に子
供を作っている。

A・・・男。常識人。既婚者。

B・・・男。ギャグ。二重人格者。

B(裏)・・・Bのもう一人の人格。暗い。

C・・・男。ギャグ。シスコン。

《七つの大罪》

隊長姉・・・本名カルタ。口調がバラバラ。秋代様のキャラ、南武貴史との間に子供を作っている。

もぶ・・・男。モブキャラ(?)。モブキャラとして様々な歴史を記録してきた一族の一人。

他に五人いるはずだが、現在は不明。

《その他》

先生・・・男。謎の人。何よりも強い。いろんな人の先生。

真哉・・・隊長と一真の息子。双子の兄。非常に真面目。

聖哉・・・隊長と一真の息子。双子の弟。兄に似て真面目。

亜衣・・・女。隊長姉と貴史の娘。チート。非常識。

A娘・・・普通。優しい。

A妻・・・Aの妻。Aの事をダーリンと呼ぶ。

C妹・・・学校の先生。ブラコン。

ではどつぞつご覧あれ。

ほのほの(?) 管理局スペシャル

《家族団欒》

隊長「ほら真哉、聖哉、ちゃんと髪を乾かしなさい」

真哉「うう、ドライヤー熱い」

聖哉「お母さん、長いよ」

隊長「ちゃんと乾かさないと風邪引くぞ。このくらい我慢する。男の子だろう」

真哉・聖哉「関係ないよ」

一真「大変だな、マリア」

隊長「む、旦那様か。そう言うなら手伝ってくれ」

一真「はいはい。ほら二人共逃げるなよ」

真哉「お父さんの裏切り者」!!」

聖哉「かかあ天下」!!」

一真「そんな言葉どこで覚えてくるんだ」

隊長「大方学校で姉の娘が教えるのだろう。全く」

一真「ははっ、あれの娘じゃしょうがないか」

隊長「笑い事じゃないんだぞ」

隊長「ふう、ようやく寝たか」

一真「お疲れ様。ほらコーヒー」

隊長「すまないな」

一真「子供の世話を全部させてるからな。このくらいはさせてくれ」

隊長「そうか。ありがとう、旦那さ」ストップ」

一真「その旦那様は止めてくれ。むず痒い」

隊長「口癖みたいなものだがな。だん、一真が言うなら直そう。ただ、少しお願いがあるんだ」

一真「何だ？言ってみろ」

隊長「ん、ちゅ」

一真「んん……マリア」

隊長「体が火照ってるんだ。冷ますのを手伝ってくれ」

一真「分かったよ。俺の大事なお姫様だからな」

隊長「……………ハッ！！ゆ、夢か。うう……………もっと会いたいよ」

真哉「お母さん、なんか沈んでるよ」

聖哉「朝ご飯は僕達が作ってあげよ」

真哉「トーストと目玉焼きぐらいしか出来ないけど、お母さんのためだもんね」

隊長「子供がそんな事考えなくてもよろしい。その気持ちだけ貰っておくよ」

真哉・聖哉「「ひゃっ！！お母さん！？」「」

隊長「さあ今日も一日頑張るぞ！！」

《ちみつ子（？）管理局》

亜衣「真ちゃん、聖ちゃん、子供の作り方知ってる？」

真哉「コウノトリさんだよ」

聖哉「うんうん」

亜衣「まだまだ子供だね。いい？まず」

乱「何教えようとしてんだ！！」

バシン

亜衣「痛っ！！いきなり出てきてぶたないでよお姉ちゃん！！」

乱「お前が馬鹿な事言ってるからだろ」

真哉「えっと、誰ですか？」

乱「神武乱。そこのの異母姉妹だ」

聖哉「異母？」

乱「まあ姉と考えればいい」

葉生「おーい、俺は？」

亜衣「誰？」

乱「こいつの相手をしてくれ。俺は隊長さんに会ってくるから」

葉生「え？ちよつと！！」

真哉「僕は御剣真哉だよ。よろしく」

聖哉「僕は弟の聖哉！！」

亜衣「南武亜衣よ。亜衣様と呼びなさい！！」

葉生「真哉に聖哉に亜衣な。俺は麻倉葉生だ」

亜衣「ちっ」

葉生「性格悪いな！！」

真哉「亜衣ちゃんだもん」

聖哉「亜衣ちゃんだからね」

亜衣「さあ逝くわよ！！」

葉生「字が違う」

《お客さん》

コンコン

A「はい」

ヒスイ「ども、お呼ばれしたんだが」

B「今は隊長休みだぞ」

C「何か用か？」

ヒスイ「いや、特にはないな。シルフは何か」

シルフ「ん〜、可愛いですわ〜」

A娘「お姉ちゃん、ちょっと苦しい」

ヒスイ「こらこら、止めるよ」

A「いや、娘もそこまで嫌がってないからいいよ」

B「ならいいな。男四人でする事あったっけ？」

C「Wiiやるっ！！そうしよう！！」

ヒスイ「あんまりゲームはやらないからお手柔らかにな」

シルフ「そういえば主。ウンディーネがいませんが」

ヒスイ「……………どこだ？」

《戦闘狂》

隊長「楽しいな、乱！！」

乱「本当に！！」

隊長姉「あら面白そうね。もぶ、やるわよ」

もぶ「私は関係ないのですが、仕方ないですね」

ウンディーネ「戦の匂いがしたから来てみれば、随分楽しそうではないか。参加させてもらうぞ!!」

先生「あなた達、周りの被害を考えなさい。クリスタルケージ!!」

5人「「「「「え?」「」「」」

ヒスイ「うおっ!?!なんか人がクリスタルの中に、ってウンディーネ!?!」

A「先生だな」

B「ああ、先生だ」

C「絶対先生だ」

《ちみっ子VS不良(笑)》

亜衣「なんか悪そうなの発見!」

陽「いきなり失礼なガキだな」

真哉「同じ年くらいに見えるけど」

聖哉「うんうん」

陽「好きでこんな格好してんじゃねえよ。ったく」

葉生「なんか事情がありそうだな」

亜衣「しか〜し!!!悪には変わらない!!!」

陽「勝手に悪にされた!」

亜衣「だってギャグ臭漂ってるし」

葉生「……ドンマイ」

陽「うつせえ!!!」

真哉「亜衣ちゃん、止めなよ」

聖哉「恥ずかしいよ」

亜衣「羞恥心なんてママのお腹に置いてきた」

四人「……それ置いてきたら駄目!!」「……」

《兄として（シスコン）》

プルルル ガチャ

妹「もしもし」

「もしもし、俺だ」

妹「あ、お兄ちゃん、どうしたの？」

「ただ電話しただけだ。どうだ？最近は」

妹「うん、いい感じ。生徒達もいい子ばかりだし」

「そうか。でもガキなんていつ変な事するか分からないからな」

妹「危ない事はさせないから大丈夫。きゃあ!？」

C「どうした!?!」

C妹「もう、先生のスカートめくつたらいけません!?!あ、ごめんねお兄ちゃん。ちよっと生徒が」

「……………」

C妹「お兄ちゃん?もしもし、いますか?」

C「ガキ共!?!うちの妹に手出すとは、覚悟出来てんだろつな!?!」

C妹「キヤー!?!お兄ちゃんなんているの!?!」

《趣味》

キーキー

B(裏)「……………慌てるな。ほら」

キーキー

B (裏) 「美味いか？そうかそうか」

B 『俺よ』

B (裏) 「どうした主人格」

B 『コウモリって、そんなに可愛いか？』

B (裏) 「最高だ。蛇やトカゲも良かったが、やはり哺乳類故の愛らしさがある」

B 『そうかい。まあお前の趣味には口出しせんようにするよ』

B (裏) 「ほうら、羽虫だぞ」

キーキー

B 『こいつ本当に俺なのか？』

《《こんにちは先生》》

鈴「久しぶりに来たな」

百合姫「じゃああの部隊に行きましょうか」

先生「おや君達は、真琴くんの転生させた夫婦ですね」

鈴「おおっ！？本物の先生だ！！全く気付かなかった！！」

百合姫「こりゃ凄いわ。見ただけで格の違いが分かる」

先生「ハッハッハ、私などただの年寄りですよ。若者には負ける」

鈴「こんなお年寄りは貴方しかいませんよ」

百合姫「でもなんでこの世界に？」

先生「気に入ったからです。それにこの世界は特異点があまりに多い」

鈴「成る程、なんか納得」

百合姫「でも特異点って要だけじゃないのね」

先生「ええ、それはまた話す機会があれば」

鈴「……消えた」

百合姫「どうやったのかしら？」

《可愛いとつい……》

隊長「酷い目にあつた」

乱「相変わらずあの人だけは苦手だ」

隊長姉「乱ちゃん、そう言わないの。先生が得意な人なんていないんだから」

乱「駄目じゃん」

隊長姉「それより、可愛い服着ないの？」

乱「は？」

隊長姉「素材がいいから最高になるのは確定的に明らか!!」

乱「マリアさん、助けて」

隊長「無駄だ。他に生け贄がいれば話は別だが」

乱「生け贄……」

響介「どうして俺達はこの世界にいるんでしょう？」

胡蝶「俺に聞かれても。いきなり喚ばれたからな」

響介「同じく」

乱「すまない」

響介・胡蝶「はい？」

トントン

響介「あ……………？」

胡蝶「な……………ぜ……………？」

乱「カルタさん！！この男二人でどうだ？」

隊長姉「悪くない。だが私はお前でも遊びたい！！」

乱「ちくしょー！！生け贄意味ないじゃんか！！」

《集まった》

A「異世界から来た人が多いから集めました」

響介「常識がありそうな人だ」

胡蝶「良かった。変な人じゃなくて」

陽「あ、胡蝶じゃん。お前もいたのか」

胡蝶「陽もいたんだ」

乱「なんでこんなフリルがいつぱい付いてるの着てなくちゃいけないんだ。動きにくい」

隊長姉「こっちの趣味ですから」

葉生「意外に少ないな。もつといると思ってた」

一真「いくらこの世界でも毎度毎度何十人も集まらんだろ」

ヒスイ「ウンディーネ、大丈夫か？」

ウンディーネ「まだ体が固まってる感覚が」

シルフ「しっかり固められてましたからね」

鈴「おっと、遅れたか？」

百合姫「お邪魔するわよ。隊長とかは？」

隊長「ここにいるぞ」

B「俺もいるぞ」

A「Cはどこにいるんだ？見当たらないが」

隊長「妹の所ではないか？」

C「遅れました！！」

B「来たな」

隊長姉「じゃあゲームの始まりよ！！」

隊長「ゲームなどしないからな」

《娘の相手》

A「最近何してるんだ？」

A娘「何でもない」

A「お父さんにも何か出来る事は？」

A娘「ないよ」

A「今度お父さんと久しぶりに一緒に寝ようか？」

A娘「しばらく部屋に入ったら駄目」

A「うわあああああああああああああああ……!……!」

A娘「お父さん」

A「ん？」

もぶ「裏のみならず、この世界のあらゆるものを常時調査中ですよ」

隊長姉「かー、めんどくせえ事してんな」

もぶ「仕事ですから」

隊長姉「こっちは？」

もぶ「……副業？」

《何かいる》

A「みんな、紅茶とコーヒーと緑茶、烏龍茶もあるけどどねにする？」

B「コーヒー」

C「麦茶ある？」

隊長「私もコーヒーで」

「オレンジジュース」

A「コーヒー二つに麦茶、オレンジジュースね……………って一人多い!？」

トテテテ

B「? 今何か通ったぞ」

C「そうか?」

隊長「気付かなかった……………」

A「オレンジジュースって言ったのはそれか」

隊長姉「あつれ〜?」

隊長「どうした、姉よ」

隊長姉「こっちに女の子いなかった? 亜衣くらいで、長い黒髪で、着物着た子」

A「見てないですが」

B「ん? ああ……………本当にか?」

C「どうしたよ」

B「もう一人の俺があっちに行ったのに気付いたってさ」

隊長姉「おお助かる」

隊長「姉よ、誰を探しているのだ？」

隊長姉「わちきの部隊の副隊長。座敷童子ちゃん」

四人「……………はい？」

《部隊紹介》

隊長「うーむ」

B「どしたの隊長」

隊長「新人隊員を引き込むためにポスターを描いていたのだが」

C「どれどれ」

・ワイワイ楽しい職場です。

・能力は問いません。やる気がある人を求めます。

B「これも付けようぜ」

・みんなここで強くなりました。

C「後これも」

・仕事は簡単!!

隊長「A、お前も考えてくれ」

A「ん、そうですね」

・上記はフィクションです。

三人「「おい!!」「」」

《仕事終わり》

A「仕事終わった」

B「飲みに行こうぜ」

C「あ、俺は予約してあるゲームがあるから。悪い。また誘ってく

れ

隊長「なら私がついて行こうか」

一真「おーい、マリアいるか？」

隊長「旦那様！！悪いな、私は変更だ」

B「いいな。俺も婚約者が欲しい」

A「……俺も妻のために早く帰るわ」

B「くっ、リア充共め。俺一人で飲むからいいよ」

もぶ「付き合いますよ」

B「もぶさん！！」

もぶ「私も彼女がいますがね」

B「裏切り者！！」

《可愛い》

C「妹「はい、みんな」。ちゃんと付いてきて下さいね」

子供達「はい」

シルフ「（子供は）可愛いですね」

C「あんたよく分かってるな。（うちの妹は）可愛いよな」

シルフ「ええ、（子供は）澄んだ目をしてるのがいいですわよね」

C「本当に。純粹なんだよな（妹は）」

ヒスイ「なんかおかしくないか、あれ」

鈴「噛み合ってるのに噛み合っていないな」

《終了》

A「スペシャル終わったな」

B「次回からまた後書きか」

C「それが俺らにはお似合いだろ」

隊長「Cの言う通りだな。要望があればまた本編進出もあるかもしれないが、そうそうないだろう」

A「では皆さん。次回の後書きでまた会いましょう」

ほのぼの(?) 管理局スペシャル(後書き)

どうでしたでしょうか。楽しんでいただけたら幸いです。ではこれからちよつと出た新キャラ紹介をします。

座敷童子ちゃん・・・名前を呼ぶ時はちゃんと「ちゃん」まで付けましょう。七つの大罪の副隊長。しかしその自由さは世界一。いつもどこかをほっつき歩いている。ほら、あなたの後ろにも……

さて、あまり書くこともないんでここで終わります。では次回もお楽しみに。

ミッション25：え？帰宅？（前書き）

雨季「とりあえず今回で恋姫編終了」

ルキ「あらそうなの」

リザ「お疲れ様」

雨季「ただ恋姫編終了なのに短めになっちゃった。てへっ」

ルキ「てへっ　じゃないわよ」

リザ「でも今更だよな」

雨季「まあ話す事もないからそろそろ本編を」

鬼巫女「ワタシヲダセ」

雨季「いきなりなんだよ。また今度ね」

鬼巫女「ホンペンニダ」

雨季「そりゃ無理だよ。ここに出られるだけマシと我慢なさい」

鬼巫女「ムウ」

雨季「では本編どうぞ」

ミッション25：え？帰宅？

エリオside

うーん、昨日は飲みすぎた。まだ頭が痛い。えっと昨日は……何を
したっけ？よく覚えてな「うーん」……い。

「エリオ」

「あふう、そんなに激しくしたらいけませんよ」

「……あつれ」

なんで美羽と七乃が俺と同じ寢床にいるんだ？というか俺ら裸だよ
な……ヤっちまった。

「起きましたか？」

「紫苑……さん？」

「そんなに呆けた顔してどうしました？」

「そっちって俺が作った」

「シャワーでしたか？天の国は簡単に体が洗えて便利ですわね」

「ええ、だから作ったんですけど。ってそういう事じゃなくて、ど
うして俺の部屋のシャワーを使ってるんですか？」

「昨晩は激しかった……………ポツ／＼／／」

……………お酒って怖い。

「……………」

逃げ出してきたしまったものの、どうすればいい。男なら責任を取らないと駄目なんだろうが、もし思春に会ったら責任の前に命を取られそうだ。

「いや待て、バレなければ……………紫苑さんが言いそう。ああどうすれば」

「あ、エリオさん」

「どうもです」

「明命に亞莎か。もうすぐさよならかもしれない」

「「ええ!?!」」

「何を言ってる」

ゴツン

「あいた！？冥琳、いきなり辞書で叩くなよ」

いきなり現れて辞書の角で頭を叩くなんて、物騒にもほどがある。たんこぶが出来そうだよ。

「縁起でもない事を言うからだろう。また消えるつもりか？」

「でもなあ「エリオ！！」げ……」

思春が来てしまった。顔が真っ赤だし、確実に怒ってる。これはマズい。命がさよならかもしれない。

「聞いているのか!？」

「はい!!何でしょう!!」

「……………せ」

「せ?」

「責任取れよ///」

（（（えええええ!!?）））

待て待て、顔が真っ赤だったのって、まさか、思春相手にもヤったまったのか!?

「お、おいエリオ!! どういう事だ!?!」

「昨晚何かあったとしか」

「さ、昨晚!?! キュ／／／／」

「あわわ!?! 亞莎の頭から煙が!?!」

「ちゃんと話せ!! あの思春がああなってるのだぞ!!」

「そうね。そこははっきりと教えて欲しいわね。主にどんな体位だったとか」

「そういうのは話すべき事では、って紫さん!?!」

当たり前のように突然現れた紫さんが会話に混じっていた。いきなりだし自然過ぎる。

「何奴!?!」

「エリオを引き取りに来た者よ」

「何だと?」

もう帰らないといけないのか? 今回はかなり早かったな。

「悪いが断る。呉にエリオは必要だ」

「それはこちらの台詞よ。幻想郷にはエリオがいないと駄目なの」

「話しても無駄かしら」

「あらそんな事ないわよ。じゃあ話し合いで解決しましょうか」

「なんだ？つまり紫さんと呉の話し合いが決定したのか？とりあえず
亞莎を運ぼう。」

さっきは紫さんと呉の話し合いと言ったな。あれは嘘だ。

「どうして幻想郷のみんながいるんだ？」

「私が連れてきたからよ」

紫さん、なんとという事を。

「この場では公平な審判を下すために雛里ちゃんに頑張ってもらっ
わ。私は観戦ね」

「よろしくお願ひしましゅ」

「雪蓮は参加しないのか？」

「馬鹿ねエリオ。私なんかじゃ隙を突かれて簡単に攻め落とされるわ」

まだ会って間もないのに幻想郷メンバーをよく見ている。流石雪蓮だ。

「で、では始めて下さい」

「では私から。エリオとの付き合いの長さでは幻想郷の方が上よ」

「紫殿、確かにそうかもしれないが、こちらは軍の者が既にエリオと関係を持っている」

「冥琳様!!! / / / /」

「思春は黙ってなさい。関係があるなら責任を取って一緒にいるべきでは？」

「異議あり。私はエリオが12の頃から関係を持つてるぞ」

「藍さん!?! いきなり何を」

「エリオ? 何か言いたいか？」

「ありません」

怖いよ。藍さんの笑顔が怖いよ。しかし止められなかったのは痛い。俺の恥歴史がどんどん公開されてしまう。

「それからも何度も何度も、時に激しく、時に優しく」

「キユ／＼／＼／」

「亞莎がまた!?!」

「どんな事があつたのでしょ。知的好奇心がくすぐられますよ」

「穏も黙ってなさい。こちらの世界ではエリオと関係があるのは四人だ。いくら濃かろうと一人では」

「あら残念。こちらは七人よ」

ん？藍さん、魔理沙、早苗、妖夢、星、残り二人は誰だ？少なくともエリはないだろうし。

(キャラさんとルーテシアさんも入れてるんですよ)

(成る程。ちよつとズルいな)

(でもエリオさんのためですから。早く帰ってきて下さいね。私と新しい風祝を作りましょうね)

「そこ。二人だけで話さないでもらおう」

「いいじゃないですか。孫権さんは固いですね」

その後も煽ったり煽られたり、罵ったり罵られたり、俺だけ攻められたり。

「もうお主らは黙つとれ!!!エリオ!!!」

「どうした美羽」

「お主はどっちにいたいんじゃない!?」

俺の意見か。よくよく考えると一番大切だな。何故今まで気付かなかったんだろう。

「ではその意見を採用します。エリオさん、どうですか?」

「うーん」

どっちも大切な世界なんだよな。しかもどっちも俺を好いてくれる人がいる。まあ一番の解決策はやっぱりあれだよな。

「幻想郷とここが繋がればいいのにな」

『……………その考えはなかった』

「いじむ」

「なら紫さん。この世界の俺の部屋と幻想郷の俺の部屋を繋げます?」

「簡単よ」

こうしてこの世界と幻想郷は繋がった。何人でも来てもいいって訳じゃないが、これで便利にはなったな。

ミッション25：え？帰宅？（後書き）

ほのぼの（？）（管理局

隊長「ふふふ」

B「隊長、ご機嫌だな」

A「最近定期的に一真さんに会えるようだぞ」

C「旦那さんだっけ？いいな、既婚者は。近いうちに新しく子供でも出来るんじゃないか？」

A「お前らも早く結婚しろよ」

B「そんな相手がいればとっくに結婚してるっての」

隊長「結婚はいいぞ。素晴らしいぞ。おおそうだ。私の同級生を紹介してやるつか？」

B・C「マジで！？」

隊長「うむ。良い伴侶を見つけるといい」

A「良かったじゃないか。ただあんまりでしゃばると引かれるぞ」

B・C「惹かれるのか！？」

A「違う！！」

隊長「頑張れよ」

――

エリ「エリオさんがオマケを連れて帰ってきました!!」

キャロ「でも後書きには帰ってこないね」

ルーテシア「そのうち会えるから問題ない」

エリ「そういえば読者さんに聞きたい事があるんですよね」

キャロ「そうだね。何だっけ？」

ルーテシア「次回からまたのんびり幻想郷編だからコラボを募集だよ」

キャロ「そうそう」

エリ「他にも一つ」

ルーテシア「あつたっけ？」

エリ「はい。BさんとCさんに彼女は必要か。そして『七つの大罪』のメンバーを知りたいか」

キャロ「後者はともかく前者はどうでもいいよね」

ルーテシア「では次回もお楽しみに」

ミッション26：ヒスイは毎度戦います。(前書き)

鬼巫女「サアハジメルゾ」

ルキ「なんであんたなのよ」

リザ「うんうん」

鬼巫女「ワタシガヤリタイカラダ」

ルキ「読みにくいわよ」

リザ「……直せない？」

鬼巫女「ア……アア……あ……これでどうダ？」

ルキ「良くなったわ」

リザ「b」

鬼巫女「今回ハ、バルディッシュとやらトのコラボカ」

ルキ「様を付けなさいよ」

リザ「ルール」

鬼巫女「むッ、仕方ナイ。次は気ヲつけヨッ」

ルキ「雨季がないのが気になるけど、本編スタート」

ミッション26：ヒスイは毎度戦います。

エリオside

恋姫の世界から帰ってきてから一日経った。久しぶりの自分の布団は気持ち良く、朝までぐっすりと眠ってしまった。そう、眠ってしまった。

「おはようエリオ」

「ぎゃあああああ!!?!?出たーーーー!!」

藍さんが覆い被さっていた。普段なら問題なく気付けるのに今日に限って起きれなかった。

「久しぶりに……ジュルリ」

「食ーわーれーるー!!!!」

「今日は私だが明日はエリだ」

「順番制!?!」

ああ……朝から疲労度マックスだ。これはきつい。今日は休もう。

「エリオさん、お客様です」

「客？誰？」

「俺だが」

ヒスイさんか。どうしたんだろう。前は妖夢と試合してたっけ。

「えつとな「可愛いですわ」ん？」

「プー!？」

「ああ、あんまりウルスを乱暴にしないで」

「……ハア」

ウルス……うり坊という容姿を恨むんだな。というか今からでも姿を変えればいいのに。

「シルフ、止める」

「可愛いですが」

「プ」

「ウルス、大丈夫？」

「ヒスイさん。要件は？」

「お前と試合をしたくて来たんだが」

また試合か。この人はそんなに試合してどうするんだろ。試合以外に興味がないのかな？

「ヒスイさん。そんなに試合ばかりしてると……えっと……そう
だ。禿げますよ」

「禿げる!?!」

「あ、違った。えっと………しよげる?」

「何が言いたいんだ」

「何でしょう」

「エリオさん、疲れてるんですよ」

「うん」

エリの言う通り、俺は疲れてるな。なんだよしよげるって。そつと
うキてるな。

「今日は朝から搾られたんで」

「大変だったんだな。よく知らないが」

とはいえ何もせずには帰すのも悪いからな。何か出来る事はあるだろうか。

「邪魔するわよ。エリはいるかしら？」

「あ、妹紅さん」

「はい、竹炭。あ、エリオ帰ってきてたのね？」

「ただいまです」

あ、そうだ。どうせならヒスイさんには妹紅さんと試合をしてみようかな。妹紅さんが許可してくれればだけど。

「妹紅さん、ちょっといいですか？」

「ん？なんだ？」

ヒスイ s i d e

エリオの代わりに妹紅って人と戦う事になった。幻想郷の住民はみんな強いと聞いたからこの人も結構なもんだらう。

「シルフ、ユニゾンだ」

「はい」

「「ユニゾン・イン！！」」

「へえ」

俺はシルフとユニゾンをし、ゲイルアークを構える。

「あなた、要の知り合いだっけ？」

「そうだが」

「なら手加減する必要はないね！！！」

妹紅の背中に紅蓮の翼が生える。凄まじい熱気だ。あれは炎で出来ているのか。

「いくよ！！！！」

妹紅は赤や青といった色とりどりの札のような弾幕を張ってくる。全て撃ち落とすなんて不可能。避けながら確実に妹紅にこちらの攻撃を当てるのみ。

「針雀！！！」

「おっと危ない。まるで霊夢の針だね」

「意外に速いな」

「弾幕ごっこで鍛えてるからね。じゃあスペルカードを使おうか」

不滅『フェニックスの尾』

「!?!」

さっきまでとは比べものにならない密度の炎の弾幕が襲い掛かってくる。おいおい、さっきの小手調べでしかなかったのか？

「くっそ!!! 荒鷹!!!」

「甘い」

「そこだ!!! ゲイルバスター!!!」

「くっ!?!」

俺の撃った荒鷹を避けた妹紅に合わせてゲイルバスターを放つと、ゲイルバスターは弾幕をかき消しながら妹紅の腕を飲み込んだ。

「やるわね」

妹紅の腕は血塗れになっていたが、一瞬で再生した。

「なんて再生力だ」

「不死だからね」

「不死つて」

「理不尽だと思う？でも私は要よりいいとは思つよ」

「あ、それは賛成」

「アハハハハ」

「――誰が理不尽だつて？」

「「『！？』」」

今何か変な声が聞こえたような。駄目だ駄目だ。幻聴に捕らわれてはいけない。

『主、今』

「シルフ！俺達は何も聞かなかった！！いいな！！」

『はい！！』

「さあ妹紅続きをやるう！！」

「そうだね！早くやるう！！」

今は戦って忘れるのが一番だ。

エリオside

「「「ただいま」「」」

「おかえりなさい」

三人が帰ってきたな。なんかちょっと疲れ気味か？まあ戦ってたんだから当然か

「それにしてもヒスイさん、焦げましたね」

「あんな炎を使う相手だったとは知らなかったからな」

「主は大分食らいましたからね」

「こっちもなかなか楽しかったわよ。武器を使うのが幻想郷に少ないからね。じゃあ私は帰るわ」

「また来て下さい。ヒスイさん達はゆっくりして行って下さいね」

「ゆっくりして行ってね!!」

「……………なんだこの饅頭は」

「ゆっくりですね」

いつの間に家にいたんだろつな。あ、ちなみにゆっくりつてのは自然界にいるよく解らない生物だ。饅頭の妖怪変化とも言われてるけど、紫さんでもよく解っていないらしい。解っているのは幻想郷の住民を模したのが多いという事。そうそう、たまに畑を荒らすのもいるそうだけど、それ以外は害はないに等しい。

「ゆっ！ゆっ！！」

「あら、私に用ですか？」

「気に入られたんじゃないか？餌でもやったらどうだ」

「駄目ですよ。あくまでそいつらは野生生物なんですから」

「残念ですね。じゃあウルスに餌をあげましょう」

「プー」

「皆さん！ご飯出来ましたよ！！」

「分かった。じゃあ食べましょうか」

「そうだな」

「それでは頂きますわ」

「プー」

「ゆっ！！」

「ゆっくりは帰りな」

みんなも野生動物に餌付けしないように気をつけよう。

ミッション26：ヒスイは毎度戦います。(後書き)

ほのぼの(?) 管理局

隊長姉「七つの大罪メンバー大・発・表!!」

もぶ「ゲストに鈴さんと百合姫さんに来ていただいています」

鈴「イエーイ!!」

百合姫「ヤッホー!!」

もぶ「そこにお座り下さい」

隊長姉「現在判明しているメンバーは私こと隊長姉ことカルタと、
そのもぶ。そして座敷童子ちゃんだZE」

鈴「その座敷童子ちゃんはどこにいるんだ?」

隊長姉「百合姫の膝の上」

百合姫「わっ、気付かなかった」

座敷童子ちゃん「」

もぶ「まず最初のメンバーはこの人」

……シーン

もぶ「あれ？」

？「ごめんね！！遅れた！！」

隊長姉「ちゃんとしなさい」

？「ごめんごめん。お詫びに飴ちゃんやろっ」

鈴「ども」

百合姫「ありがとう」

もぶ「こちらのサラリーマンはうちのメンバー至極の常識人。おじさんです」

隊長姉「おじさん！うちにも飴ちゃんちょーだい」

おじさん「よしよし。座敷童子ちゃんにもやろっ」

座敷童子ちゃん「〜」

もぶ「おじさんは普段他の部署に引つ張りだこ。今の時期は新人訓練で忙しいのです」

鈴「信頼されてるんだな」

おじさん「じゃ、これで」

もぶ「お次はこちら」

ブンッ

? 「……眠い」

ブンッ

百合姫「早っ!?!」

もぶ「一瞬現れて消えた女性はアマテラス。引きこもりです」

鈴「天の岩戸かよ」

隊長姉「そうなの。でも同時に500の魔導兵と30の魔導衛星が操れるから外に出る必要はないの」

百合姫「なかなかの魔力量ね」

もぶ「次はこちら」

? 「来たぞ」

鈴・百合姫「ちっちゃい」

? 「ドワーフだからな」

もぶ「彼女はドワーフさん。年齢はピーです」

ドワーフ「しかし全員紹介という事は、あれも来るのか?」

隊長姉「もちろん。いつ来るのかしら？」

？」「…………」

鈴「いた！？」

百合姫「いつの間に！？」

もぶ「彼は名無し。名前は誰も知りません。無口ですから」

名無し「…………」

ドワーフ「何か言えよ」

隊長姉「無駄」

鈴「何者だよ」

百合姫「座敷童子ちゃん並みに神出鬼没ね」

座敷童子ちゃん「…………名無しと、一緒にしないで」

百合姫「喋った！？かわゆい」

名無し「……………」(ボソッ)

鈴「？ 何て言った？」

隊長姉「帰る。って」

もぶ」ではメンバー紹介お終いです。お疲れ様でした」

ミッション27：恋する博霊の巫女（前書き）

雨季「ふう、前は鬼巫女に縛られて出れなかったんだぜ。鬼巫女はデレないし」

ルキ「ボツシュート」

雨季「なんだとおおおお……」

リザ「奈落に落ちたね」

ルキ「あれなら大丈夫よ。今回はライ様とのコラボ」

リザ「題材は、デ霊夢」

ルキ「では読者様のために早めのスタート」

ミッション27：恋する博霊の巫女

霊夢 side

「ハア……………」

最近何もしていないと一真さんの事を考えてしまう。だからやる必要がなくても境内の掃除をしちゃうんだけど、それも一真さんが来るのを期待しているからかもしれない。

「霊夢う〜」

「どうしたのよ萃香」

「元気ないぞ。酒でも呑むか？」

「こんな昼間から？」

「だからいいんじゃないか。普段呑まない時に呑む酒はいいよ〜」

これだから飲兵衛は嫌だわ。流石に私でもこんな時間から呑む気にはなれないわよ。ただ自分が呑みたいだけじゃないの？

「いいからいいから」

「ちょっと！押さないでよ！〜！」

エリオside

今日は美羽と七乃がうちに遊びに来ている。うちでは横暴しないように言っているんだが。

「蜂蜜の在処を言わんか!! エリオの偽物!!」

「誰が偽物ですか!! 僕も一応エリオです!!」

「美羽!! いい加減にしろ!! エリも付き合うな!!」

「「……はい」

「お二人共シユンとしちゃいましたね」

「七乃……本来美羽を止めるべきは」

「あはは、すみません」

こいつらと一緒にいるのは嫌いじゃないんだが、もう少し節度と常識をわきまえて欲しいな。

「騒がしいな」

「おおっ！？一真さん。いつの間に」

「さつきから何度か呼んだが返事がなかったから悪いと思いながらも入らせてもらったぞ」

「いえいえ」

気付かなかったのはこっちのせいだし、一真さんみたいな常識人なら何ら問題ない。

「今日は何をしに？」

「遊びに来たんだが、遊ばなくても面白いな」

「くっ、言い返せない」

この状況は端から見ればお笑いものだもんな。間違いない。俺だったら笑う。

「あ、そうだ。一真さん、霊夢の所に行ってあげて下さい」

「霊夢の？まあ行く予定だったからいいけど」

「じゃあ早く。待ってますよ」

「分かったよ」

さて、こいつらの再教育に取り掛かるとしますか。

一真side

博霊神社はここだな。変わらず寂れてるかと思ったが、なかなか綺麗になつてるじゃないか。だが霊夢はどこだ？

「お？誰だ？」

「俺は御剣一真。君は？」

「伊吹萃香。鬼だよ。しかしあんたが一真か」

こんな幼女が鬼か。しかし何故俺をジロジロと見てるんだ？

「成る程ね。悪くないね」

「霊夢はいるか？」

「ああいるよ。さ、上がって」

萃香に連れられて神社に入ると異様に酒臭かった。まるでさっきまで宴会をしていたようだ。

「霊夢、入るよ」

「萃香あゝ？何してたのよあゝ……………はれ？」

「よ、よう」

「か、かじゅましゃん？」

神社の一部屋には霊夢はほぼ半裸の姿で寝転がっていた。顔も赤く、周りには酒瓶が転がっている。

「み、見ないで！！！！／＼／＼」

「あ、ああ、ちょっと出てるよ」

俺は萃香を引っ張って部屋の外へ出た。

「おい、どういふ事だ？」

「霊夢が悩んでたからちょっと酒を呑んでたんだよ」

「あれはちょっとではないだろ。調理場はどこだ？」

「あつちだけど何するの？」

「酔い醒ましのために茶を入れてくる」

霊夢 side

うあく、頭痛い。でもそれ以上に心が痛い。一真さんに肌を晒しているのが見られちゃったよ。はしたないって思われてないかな。嫌われてないかな。

「おーい、入るぞ」

「はひ!!!!どうぞ!!!!」

「大丈夫か？酔い醒ましの茶を持ってきたぞ」

「あ、ありがとうございます」

一真さんの持ってきてくれたお茶を飲む。ちよつと熱かったけど、酔った頭にはちよつど良かった。

「ふう」

「落ち着いたか？」

「はい。さっきはお見苦しいところを見せてしまいました」

「気にするなよ」

気にするな、って凄いい気にするわよ。どうしてこのタイミングで一真さんはうちに来るのよ。

「なあ霊夢。何を悩んでたのかわからないが、誰でもいいから相談してみる。それともそんなに相談しにくい事か？」

「……………」

「こんな事誰にも相談出来ない。というか相談してもまともな答えが返ってきそうにない。」

「そうか。なら俺に出来る事があれば言ってくれ」

「一真さんに、出来る事」

……………勇気を振り絞るのよ博霊霊夢。こんな弾幕に飛び込むのに比べたらeasyじゃない。一歩、一歩踏み出すだけ。

ギョッ

「っつ」

「／／／／」

だ、抱きついちゃった／／／／

「あ…の、しばらく、このまま」

「ああ、構わないよ」

「……………私、父親を知らないんです」

「うん？」

「母親はいたんですけど、父親は見た事もなくて。だから男の人に甘えた事もなくて。もし、父親がいたなら、一真さんみたいに優しく、力強くて、我が儘を聞いてくれて、全てを包み込んでくれるような人なのかなって」

「俺はそんな立派な人じゃないんだが、俺で良ければいつでも父親代わりになってやるぞ」

「……………し、しまったー！ー！！何故父親の話をした私！！ここは彼氏とか夫にすべきでしょう！！一真さんに絶対勘違いされたわ。どうしよう……………まあ今はこの温もりを堪能しましょう。」

ミッション27：恋する博霊の巫女（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

C「おーい」

C妹「あ、お兄ちゃん」

C「時間通りだな。じゃあ行くか」

C妹「うん」

~~~~~

A「どうも皆さん。今日はCが妹さんとお出掛けという事で俺が監視に来ています」（鳩に変身中）

隊長『おい、早く追え』

B『近親相姦なんて認めぬぞお!!』

A「五月蠅いなあ。じゃあ追うか」

~~~~~

C「ん?」（キョロキョロ）

C妹「どうしたの?」

C「何か不穏な気配を感じただけど」

C妹「お兄ちゃんと同僚さんが追跡してるんじゃない？」

C「怖い事言つなよ」

C妹「ふふふ、ごめんね」

~~~~~

A「鋭い」

隊長「何をちんたらしているんだ。キスはまだか」

B『キヤーキヤー』

A「五月蠅いなあ」

~~~~~

C妹「この服なんてどうかな？」

C「そんな肌を晒すような服は認めません。こっちにしない」

C妹「……………ダサイ」

C「なっ……………!？」

~~~~~

A「あれはないな」

隊長「そうか？実に実用的で素晴らしいと思うが。だが女性なら好きな男の前で大胆になるもの！！」

B「つまり妹はCが好きだと！？」

A「五月蠅いなあ」

〓〓〓

C妹「次は遊園地行こう」

C「こういう複合型施設は便利だな」

C妹「あ、パレードやってる」

C「なら見てくか」

C「うん！！」

〓〓〓

A「今度家族サービスで来るかな」

隊長「そうだな。家族サービスは大切だぞ。もちろん夜の営みも」

B「リア充爆殺しろ！！！！」

A「五月蠅いなあ」

くくく

C 妹「観覧車乗ろつよ」

C 「観覧車？もうすぐ閉園時間だぞ」

C 妹「いいからいいから」

C 「仕方ないな。妹のためだ。付き合っよ」

くくく

A 「この時間に観覧車とは、攻めたな」

隊長『もう我慢ならん！！この眼で確認するぞ！！』

B 『観覧車はリア充の宝庫。爆殺する！！』

A 「五月蠅いなあ」

くくく

C 妹「ねえ」

C 「なんだ？」

C 妹「ずっと言いたかったんだけど、私……」

C 「待て」

C 妹「え？」

C「隊長！なんで外で飛んでるんですか！？」

隊長「私は気にせず。さあ続きを」

C「無理です！！」

C 妹「あれなんだろう？」

C「ん？」

B「リア充爆殺しろー！！！！」

A「今はお前が爆殺しろー！！！！」

C「A……頑張ってくれ」

隊長「さあ、続きは？」

C・C 妹「「しません！！」」

ミッション28：フラグを強化しましょう（前書き）

雨季「今日は俺が大好きなキャラに登場してもらいます」

ルキ「誰よ」

リザ「椀？」

雨季「椀は愛してる。好きなキャラとは別」

鬼巫女「私力？」

雨季「いや、登場させてあげてくれ。ではどござ」

留美奈「もういいか？」

雨季「東京アンダーグラウンド主人公の浅葱留美奈くんです」

ルキ「女の子みたいな名前ね」

リザ「うん」

留美奈「それは言わないでくれ」

鬼巫女「弱そうだな」

雨季「留美奈は主人公だから強いよ」

留美奈「主人公だからってのではないだろ」

雨季「事実じゃん」

ルキ「では本編スタート」

## ミッション28：フラグを強化しましょう

エリオside

今日は朝から暑いな。もう夏になってきているのを実感するよ。

「エリオ、いるかしら？」

「アリスじゃん。どうしたのさ」

「吼太さんって連れてこれない？」

「吼太さんを？」

吼太さんか。頼むなら俺より紫さんの方に行くべきだろうが、だが吼太さんを連れてきたい理由はわかる。

「神綺さんはそんなに飢えてるのか？」

「うっ、別に飢えてるって訳じゃないけど、やっぱりちょっと寂しそうだから」

「優しいな。しょうがない。吼太さんと呼ばう」

俺一人でも誰かを連れてくるぐらいは出来る……かな？

「じゃあ行ってくる。ストラダー」

《はいよ》

上手くいくかな。失敗したら嫌だな。

吼太side

仕事終わった。思ったより早く終わったし何しようかな。

ドカーン

「何だ!？」

「転移反応がありました」

「転移?」

誰か来たのか?どこぞの知らない転生者だったら容赦はしないが。

「俺の部屋か。誰だ!!」

「あ、吼太さん。どうも」

「……お前か」

要のこのエリオかよ。ああ驚いた。って部屋がぐちゃぐちゃじゃないか。こりゃ片付けが大変だ。

「こんにちは、エリオさん」

「こんにちは、トワードさん。今日もお綺麗で」

「褒めても何も出ませんよ」

「でも吼太さんは貸してもらえるのでしょうか？」

「ええ」

おい、勝手に主を貸すんじゃない。お前はそれでも俺のデバイスか。

「じゃあ吼太さん、行きましょう」

「理由くらい教えてくれ」

「女性を泣かせたいんですか？」

「え？」

「女性を泣かせたいんですか？」

「いや、それはあんまり」

「なら行きましょう。ストラダ」

《転移だ》

俺の意思を尊重しろよ。

幻想郷か。ここは結構好きなんだよな。空気が美味しい。

「帰ってきたわね。吼太さん、お久しぶりです」

「アリスさんか。久しぶり」

「アリスでいいですよ」

「なら俺も吼太で」

「今日はアリスの頼みだったんですよ」

アリスの頼み？俺って頼まれるような事が何かあったか？

「アリスちゃん！！さっきの話本当！？」

「早いわねお母さん。ほらそこに」

「吼太く〜ん!!」

「むぐつ!?!」

文字通り飛んできた神綺さんが俺に抱きついてきた。というか抱き締めてきた。胸に顔を押し付けられて呼吸が苦しい。女性なのになり力がある。

「神綺さん、落ち着いて」

「そつよお母さん」

「」

駄目だ。エリオ達の言葉が届いてない。これでは俺が窒息死してしまふ。

サクッ

何か軽い音と共に神綺さんが倒れた。神綺さんの後頭部にはナイフにも似た短剣が刺さっていた。

「殺人!?!」

「「幻想郷ではよくある事」」

「駄目だろ!!」

「いいえ、問題ありません」

「貴女は？」

突如現れた金髪で赤いメイド服を着た女性。手には神綺さんに刺さっているのと同じ短剣を持っていた。

「神綺様のメイドの夢子と申します。先程は神綺様が失礼致しました」

「メイドが主人を攻撃していいの!？」

「いったく。もう夢子ちゃんったらこれはやめてって言うてるですよ」

「立った!？」

あまりに普通に立ちすぎでしょう。頭に深々と短剣が刺さってるんだぞ。

「じゃあ吼太くん、アリスちゃんのお家まで行きましょう」

「頭は大丈夫ですか？」

「大丈夫よ」

「大丈夫じゃないな」

「大丈夫じゃないわね」

「大丈夫ではありませんね」

「三人共酷いわ。ちゃんと大丈夫よ」

いや神綺さん。多分この三人の大丈夫は怪我とかじゃなくて、もっと別な意味だと思いますよ。言えないけど。

アリスの家は森の中にあつた。ただこの森は特殊らしく普通の人間が入ると大変らしい。普通じゃなくて良かった。ちなみに一緒にいるのは神綺さんとアリス。夢子さんもついて来ようとしたが、エリオが用があつたようでエリオと一緒にエリオの家に行った。

「ここがアリスの家か。人形がいっぱい女の子らしいな」

「まあ私が人形使いつてもあるけど、人形自体が好きだしね」

「へー」

「じゃあ私はお茶淹れるわね」

神綺さんが台所に行くのとはほぼ同時にアリスが立ち上がった。

「どづした？」

「……ちよつと」

外に行つたけど、何かあつたのか？

「あれ？アリスちゃんは？」

「外に行きました。何か用があるみたいで」

「そうなんだ。じゃあ先にお茶にしま、ひゃっ！？」

バシヤツ

「熱っ！？」

「あわわ！？は、早く脱いで！！」

「あ！そ、そんな無理矢理！？だ、だめっ！！／／／／／」

アリス side

変な気配がしたと思つたら天狗だつたとはね。

「確か、姫海棠はたてだったかしら？もう少しバレないように上手くやりなさい」

「うう、暴力反対。そして私ははたてよ」

射名丸だったら気付けなかったかもしれないし、速いから逃げられてたかもしれないからこいつで良かったわ。さあ帰りましょう。お母さんはここ一番でポカするから。

「ただいま」

「「あつ」」

……現状を把握しましょう。えっと、お母さんが吼太を押し倒して  
いて吼太がパンツ一枚。つまりこれは……／＼／＼／

「こ、ごめんなさい！！／＼／」

「ま、待ってアリス！！」

「駄目よ吼太くん！！最後までちゃんと……」

ああ一体どうすれば。そうだわ！！エリオよ！！エリオに相談しましょう！！

エリオside

「ほら三人共。しっかり掻き回さないと焦げますよ。変な味付けはしないよう、こまめに味見をしなさい」

「疲れるのじゃ……」

「私は基礎くらいは出来るんですけど」

「料理とは大変なものだな……」

いや、夢子さんがいて良かった。美羽と七乃と思春に料理を教える事が出来る。エリ？あいつは大丈夫だ。俺がいない間に咲夜さんに教わってた。

「エリオ!!」

「アリス?どうかしたか?」

「えっと、あれが、その、お母さんが」

「落ち着け。深呼吸して考えを纏めるんだ」

「すー、はー、すー、はー」

「さあ言え」

「吼太をお義父さんって呼んだ方がいいかしら？」

「……………いいんじゃないか？」

俺は考えるのをやめた。神綺さんと吼太さんがどうなったのかは知らない。

ミッション28：フラグを強化しよう（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

B「大変だ？」

A「疑問系かよ」

隊長「どうした？」

B「Cの妹が風邪だつてさ」

A「最近Cの妹ネタが多くないか？」

隊長「A、メタ発言はアウトだ。しかしCがいないのはそれが理由か」

B「この機会にみんなでボーリング行こうぜ」

A「何故ボーリング」

隊長「……………」

A「隊長、どうしました？」

隊長「確かCは父親と絶縁していたはず。しかしCの妹はその父親と共に暮らしているはずだが」

A・B「……………大変だ？」

隊長「そうだな。まあ妹さんが病気の時にそんな事で喧嘩はしない  
だろっ」

A「どうぞでしょう」

B「Cの親父さん頑固っぱいしな」

隊長「まあ私達はボーリングを楽しもう」

A「いいのかな？」

B「イインダヨ」

隊長「グリーンダヨ」

……

キャロ「久しぶりの出番だね」

ルーテシア「最近ほの管が長かったしね」

キャラ「でも話す事ないよね」

ルーテシア「仕方ないね」

キャラ「じゃあそっさと終わっちゃおう」

ルーテシア「次回もよろしく〜」

ミッション29：女×女（？）＝百合（？）（前書き）

雨季「今回は249様とのコラボだよ」

ルキ「書きにくかったって？」

雨季「何でそれを」

リザ「ぼやいてた」

雨季「そうか。まあなんというか、俺はオカマは書けない」

ルキ「それ次からこのキャラ出さなって言ってるようなものじゃない」

リザ「ルキは誇大解釈しすぎる。雨季はこのキャラが嫌いって言うだけ」

雨季「二人共酷いな。頼まれれば俺はやるし、嫌いじゃなくて苦手なだけ。では本編スタート」

ミッション29：女×女（？）＝百合（？）

紫side

「橙はいるかしら？」

「なんですか紫様？」

「えいつ」

「にゃあっ!?!？」

はー、耳がもふもふして気持ちいいわ。やっぱり橙は癒されるわ。橙の耳って作ったら沢山売れそうよね。

「ゆーかーりーさーまー」

「あら藍。そんな怖い顔しちゃ嫌よ」

「外で反省してなさい!?!」

追い出されちゃったわ。もう藍ったら、橙を過保護にしすぎよ。主人を外に投げ出すなんて。

「どうしようかしら」

それにしてもやる事がないのよね。そうね、誰か呼ぼうかしら。

「開け」

ドサッ

「いった〜」

「久しぶり、ファルチエ」

「紫さん？もう、いきなり落とさないでよ」

「いいじゃない。私と貴方の仲なんだし」

「親しき仲にも礼儀有り、よ」

「「ふふふ」」

ファルチエは話しやすくいいわ。せつかく呼んだはいいけど、どうしようかしら？この前は適当に遊んだりしたけど。

「ぶらぶらしましょうか」

「何も考えてなかったのね。いいけど」

はあ、それにしても本当に勿体無いわ。ファルチエがもしオカマじゃなかったらもっとモテたでしょうに。それだったら私だってこんな微妙な距離を取らずに積極的に攻められたのに。

ファルチエ side

紫さんたら、こっちの予定くらい考えて欲しいものね。予定なんてなかったけど。

「ん？これは……」

「どうしたの紫さん、ってあら」

「ファルチエも気付いたみたいね」

「流石だね」

うっすらとだけこの匂いがかはよく解る。これは血の匂い。ただ人間って感じがしないのよね。獣臭さも混じってるし。

「誰か妖怪狩りでもしてるのかしら？」

「これが妖怪の血の香りなのね」

「こっちな」

森の奥。血の匂いが濃くなる中、草木を掻き分けた先に小さな広場のような場所があった。そこに多少血に塗れたエリオくんが立っていた。

「エリオだったのね」

「紫さん、それにファルチエさんも」

「こんにちは」

「はい、こんにちは」

死体はないけど、焼けた跡が所々にある。この小さな広場自体が死体を処理した跡なのかもしれない。

「それにしても貴方が妖怪狩りなんてね」

「依頼ですよ。最近ルールを守れない人喰い妖怪がいるって」

「人喰い妖怪にルールなんてあるの？」

「あるわ。幻想郷の人間は食べない。食べていいのは私が外から連れてきた人間だけ」

あら、意外と残酷な事をしてるのね。人を連れてきて妖怪に喰わせるなんて。

「紫さんの名誉のために言いますが、紫さんが連れてくるのは生きるのを諦めた人間だけです」

「たまに間違えちゃうけどね」

「その処理をするのは誰だと思ってるんですか」

「頑張りなさい」

「はあ……」

エリオくんも苦勞をしてるのね。だけど相手が紫さんじゃあしょうがないかしら？

「じゃあね。私達は人里に行ってるわ」

「はい。ではまた」

私達は人里に下りて、とりあえず近くのお茶屋に入った。

「お抹茶二つにお団子四串貰えるかしら？」

「はい。少々お待ちを」

「紫さんって妖怪なのに普通に人里にもいれるわよね」

「そうね。要と子供達のおかげかしら？」

要くんはなんとなくわかるけど、子供もね。

「どんな事があつたの？」

「あれは8年くらい前だったかしら。私は知り合いのゼルレッチっていう吸血鬼に面白いのがいるって聞いて要に会つたの」

吸血鬼ね。多分紫さんの言う吸血鬼は本物なんでしょうね。

「本当に変わった人間だったわ。私がいきなり来てもお茶出ししてさし。あんまり変わつてたから幻想郷に連れてきたの。その時にエリオも付いて来たんだけどね」

それってどうなの？普通変わつてたからって連れてきたりはしないわよ。普通じゃないのは知ってるけど。

「要つたら自由すぎるのよ。いきなりどこかに行つたと思つたらいろいろ勝手に観光してるんだもの」

「それで？」

「妖怪や妖精を勝手に人里に連れてくるし」

「それは問題ね」

「そうよ。大問題よ。なのに要は『子供同士が遊ぶだけ』って。確かに要が連れてきたのは人間の子供みたいな精神年齢しかない子供ばかりだったけど。それに文句言つたら『ならせつかく寺子屋があるんだ。いろいろ教えるべきだろ』なんて言うのよ」

「間違つてはないけど、ねえ」

「そうなのよ。でも子供には関係なかったみたい。大人が困ってるのに気がついたら遊んでるんだもの」

子供はいつになっても無邪気なものね。だからこそ大人には見えな  
いものだって見えてくる。この話だつてきつとそう。大人にとつて  
は恐怖の対象でしかない相手も子供からすれば遊び相手だったのね。

「結果、人並みに知性のある妖怪は普通に人里に出入りし、中には  
付き合ったり結婚したりするのもいるのよ。私も貴方が男だったら」

「あら、私だつて生物学に見れば男よ」

「そうね。所詮女を真似ているだけ。でもそのせいか分からないけ  
ど、私は貴方を『最高の親友』までしか見れないの。好きなのにな」

「『最高の親友』。私もよ」

「結局私達は似た者同士なのかもね」

「違うわ」

あのお団子美味しかった。覚えときましよう。

「じゃあね。また勝手に呼ぶわ」

「一言欲しいけど、紫さんなら構わないわ」

「その紫さんってやめてくれない？もうそんな仲じゃないでしょう？」

「それもそうね。それじゃあ、紫、またね」

チユッ

互いの頬に軽くキスをして私は紫の開けた隙間に入って元の世界に帰った。

ミッション29：女×女（？）＝百合（？）（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

A「今日はどこ行く？」

B「軽く遊ぼうか」

C「軽くつて、ボーリングとか？」

A・B「それもう行った」

C「何!？」

ドンッ

C「あた」

おじさん「おつと失礼。飴ちゃんあげるから許して」

C「あ、はい」

A「おじさんだったな」

B「あの部隊のおじさんか。忙しそうだな」

ドワーフ「当然だ。おじさんは常に引つ張りだからな」

A「うわっ!？」

B「いきなり出てこないでくれ」

ドワーフ「おじさんに対する誤解を解くためだ」

C「誤解？」

ドワーフ「うむ。おじさんは実質うちの部隊のナンバー2に辺り、その能力も桁違いなんだ」

A「知らなかった」

B「普通のベテラン局員とばかり」

ドワーフ「その認識は間違いではない。おじさんは地味だ。だがおじさんがいるからうちの部隊が存続出来ている」

C「あの部隊ハチャメチャだからな。普通消えるもんな」

ドワーフ「おじさんは上に圧力を掛けて部隊を残してくれているからな」

B「凄いな。でもそれだけじゃナンバー2にはなれないだろ？」

ドワーフ「当然。ナンバー2の所はおじさんのスペシャルスキルだ」

A「スペシャルスキル？レアスキルじゃなくて？」

ドワーフ「おじさんが勝手に名付けたものだがな。その力は圧倒的

だ。よく使うのは『オールスルー完全無視』だな」

C「めだ ボックスに出てきそうなスキルだな」

ドワーフ「あんな漫画と比べるな。『オールスルー完全無視』発動中のおじさんにはあらゆるものが干渉不可能だが、おじさんから干渉可能だ」

A「ちょっと待ってくれ。ならそれを使えば」

ドワーフ「相手は何も出来ず一方的にいたぶられる」

B「……他のスペシヤルスキルは？」

ドワーフ「秘密だ。おじさんに直接聞くんだな」

C「七つの大罪って実質の順位を付けたらどうなるのさ」

ドワーフ「そうだな。ナンバー1は名無し。ナンバー2はおじさん。ナンバー3は隊長。ナンバー4が同率でアマテラスと座敷童子ちゃん。私ともぶは同率最下位だな」

A「隊長のお姉さんがナンバー3とは、恐るべし」

B「これが七つの大罪か」

C「後書きクオリティは流石だな」

ドワーフ「まあ後書きなんてこんなもんだ」

ミッション300：のんびりゆったり（前書き）

鬼巫女「今日は知り合いヲ連れテキたゾ」

リザ「いきなりね」

ルキ「……許可は？」

鬼巫女「イルのか」

禍霊夢「もういいか？」

リザ「四大霊夢の一人じゃない」

禍霊夢「なんだそれは」

ルキ「ニクニコ動画」

禍霊夢「？」

鬼巫女「次回カラは順番にクゑるぞ」

リザ「ええ〜」

ルキ「禍、これ、読んで」

禍霊夢「いいだろ〜。今回は畏無様とのコラボ。本編ど〜ぞ」

## ミッション300…のんびりゆったり

響介side

ある日、街中を歩いていると目の前にぽっかりと口を開けたスキマがあった。

「……………」

どうしよう。これは誘われてるのか？ちょっと後ろに、いや、無駄そうだし。

「早く入りなさい」

「あ、ごめんなさい。って紫さん、見てたんですか」

「貴方の反応が楽しみでね」

そんな面白い事なんてないだろうに。

「ますます美人になっただわね」

「男ですよ」

「男の娘でしょう」

言い返したい。でも言い返しても無意味な気がする。どうして俺はこんな容姿だったんだ。

「じゃあ幻想郷に行くわよ」

「はい」

エリオside

ブンッ　ブンッ

「ふう……」

剣の鍛練もたまにやるといいな。さて、次は槍をやるか。

ドサッ

「いてっ!？」

「響介。また落ちてきたか」

「エリオ……これどうにかならない?」

「紫さんか?無理無理」

あの人がどうにか出来るなら誰かもつどつにかしてゐるって。

「せつかく来たんだ。何かしようぜ」

「なら、槍を教えちゃいけないか？」

「槍？お前って槍使ってたっけ？」

「最近な」

成る程、なら軽く基礎くらいは教えてやらないとな。

「なら、ほい」

「おっと、普通の槍だな」

「槍の基礎訓練をやるからな。構えて」

響介は槍を構える。見た目は様になってるな。一応使ってるだけあるか。

「突いて」

「おっ」

「ビュッ」

「もっと速く」

「わかった」

ビュッ

「よしよし、次は払ってみようか」

「よっ！！」

ブンッ

「はい終了」

「早っ！？他には！？」

「ないよ」

槍つてのはその二つの基本的動作を極めて最強に至る武器だ。もちろん石突きで殴ったりもするけど、威力弱いしね。

「遊ぶぞ〜」

「それがしたいだけだろ」

せっかくダチが来たんだから遊ばないと損だからな。

響介 side

どこに行くんだろつな。エリオの後をついて行くだけけど、この竹林を結構歩いてるよな。

「着いたぞ」

「永遠亭？」

「まあ、病院だな」

病院？別に病院に来る必要なんてないんだけどな。

「俺がちよつと用があつてさ。ついだから健康診断してもらえよ。腕は確かな医者だからな」

「師匠は人格も確かよ」

「つとすまないな。その通りだ」

ウサギ耳？それにブレザーって、コスプレか？幻想郷ではこんなコスプレもあるのか？

「そつちの子は？」

「俺のダチの響介」

「男みたいな名前ね」

「……男です」

「えー!?あ、ごめんなさい」

「やっぱり女にしか見えないよな!!アハハハハッ!!」

「エ〜リ〜オ〜」

人が気にしている事を笑いやがって。

「さあ永琳さんに見て貰おうか」

「逃げたな」

「師匠、お邪魔します。お客さんを連れてきました」

「ん、入りなさい」

部屋に入ると中心で赤と青に分かれてる変わったナース服を着た女性  
性がいた。この人が永琳さんか。

「エリオと、その男は？」

「解るんですか!？」

「何が？」

「性別が!！」

「私は医者よ。衣服を着ている程度で性別が解らないなんてないわ」

医者って凄いな。いや、多分この人が凄いなだろうな。

「エリオはいつもの薬ね」

「ども」

「貴方も座りなさい。ちょっと診てあげるから」

「はい」

永琳さんが軽く診断をしてくれた。  
体力が回復した。

なんて事はないぞ。

「最近慣れない事をしているようなね。疲れが溜まっているわよ」

「そうですね」

「栄養ドリンクを出しておくわ。あんまり無理しないようにね」

「分かりました」

確かに最近シールドスライサーとかの練習をしたり槍の練習をしたり、あんまり慣れた事してないな。

「今日は永遠亭の見学でもしていきなさい。外にはないものがあるでしょうし」

「いいんですか？」

「正確にはエリオの検査が終わるまでね。今回はうどんげがやっているから、半日くらいかしら」

「半日!？」

そんなに長い間も何を検査してるんだ?見学しても流石に半日も時間を潰せないだろうし。

「まあ私も今から手伝うから早く終わるわよ」

「よろしくお願いします」

まず見学をしよう。そうしよう。

広いな。竹の擦れる音が風流だ。

「ちよつと」

「ん？君は？」

和風の黒髪の少女が部屋から顔を出して俺を呼んでいた。

「貴方、エリオと一緒に来たという事は外界人でしょう」

「外界、人？」

「幻想郷の外から来た人って事よ」

「うん、そつだよ」

「なら付き合いなさい」

少女に引っ張られて部屋に入るといろいろとゲームが置いてあった。

「外のゲームの相手を探してたのよ」

「テトリス？」

「出来るわね？」

「そりゃね」

テトリスは日本人なら誰でもやった事があるんじゃないかな？ 幻想郷にもあるんだな。

「遊ぶわよ」

「いいよ」

時間潰しにはちょうどいいしね。

エリオside

終わった終わった。久しぶりの検査だったけど、鈴仙の腕はまだまだだ。永琳さんが来てくれたから早く終わったけど。

「響介はどこかな？」

「あー！！また負けた！！！」

「ん？輝夜の声か」

何をやってるんだ？輝夜の部屋から聞こえたが。

「入るぞ」

「あ、エリオ助けて」

「まだ勝負は終わってないわよ！！！」

「……輝夜」

こいつは響介を捕まえてゲームの相手をさせていたのか。輝夜らしいやらしいけど。

「響介を返してもらっぞ」

「ああ！！逃げるつもり！？」

「姫様？」

「あ、永琳」

「いい加減にきなさい！！！」

「ぎゃあああああああ！！！！？」

遊び過ぎだな。永琳さんも怒るのは当然だ。

「響介、どうだった？」

「良かったよ。まああんなにゲームに付き合わされるとは思わなかったけど」

「あれがかぐや姫なんだから信じがたいよな」

月人や天人ってそんなに暇なのかね？お空の上ってのは余程つまらないんだろう。

「じゃあそろそろ帰るな」

「そうか。なら紫さん、見えますか？」

「呼ばれて飛び出て〜」

「「……………」」

「何かリアクションしてよ」

何かしたらそれはそれでおかしい反応するでしょう。

「じゃあ開けるわよ」

「ありがとうございます。またな」

「ああ、またな」

ミッション300のんびりゆったり(後書き)

ほのぼの(?) (管理局)

A「……プツ」

B「何をいきなり笑ってるんだよ」

C「気持ち悪いな」

A「悪い悪い。昔を思い出してな」

隊長「昔？」

A「先生の命名センスの無さがさ」

B「？」

C「なんだそれ」

隊長「先生は命名センスがないのか」

A「クラスにペットショップをやってる奴がいましたね。売れ残りのハムスターを持ってきたんですよ」

B「ほづほづ」

C「それで」

A「せつかくだから先生に名前を付けて貰おうという事になってな。そして先生が付けた名前が……」

隊長「名前が？」

A「吾郎左エ門」

B・C・隊長「」「ぶはっ!!?」「」

A「しかも」

B・C・隊長「」「それは酷い」「」

隊長「そうそう、最近アリスという娘がよく家に遊びに来てな。どうやら真哉が目当てらしい」

A「突然ですね」

B「なん……だと……?」

C「まだ小学生なのにね。淡い恋じゃないの」

B「ガキなのに……」

隊長「今回はこの話でいっつ」

A・B・C「」「メメタア」「」

――

キャロ「えっと、次回のコラボは？」

ルーテシア「霊亀様だよ」

キャロ「なんだか前書きが作者のMUGEN劇場になってるね」

ルーテシア「小説は趣味。前書きと後書きは遊びって言うってた」

キャロ「どうなのそれ。では次回もお楽しみに」

ミッション31：料理を舐めるな！！（前書き）

雨季「ちわ〜」

鬼巫女「また連レてきたぞ」

ルキ「今度は誰よ」

リザ「おかしいのじゃない？」

鬼巫女「お前らが判断シロ。来イ」

白麗「えつと、お邪魔します」

雨季「白麗霊夢か。なら問題ないな」

ルキ「純粹そうね」

リザ「瞳がピュア」

白麗「え、あ、ありがとうございます」

鬼巫女「私は？」

雨季「……俺は好きだよ」

ルキ「穢れてそうね」

ルキ「濁ってて底が見えない」

鬼巫女「そこまで言わないでもいいだろう……」

雨季「白麗、これ読んで」

白麗「はい。今回はね、ね、れいかめ様とのコラボです」

ルキ「霊亀よ。れ・い・き」

白麗「あわわっ！？し、失礼しました！！霊亀様とのコラボです。  
本編どうぞ」

ミッション31：料理を舐めるな！！

エリオside

こんな光景初めてだった。とてもじゃないけど信じられない。

「何でこんな事が出来ないの！！！！ふざけてるんでしょ！！！！？  
あんまり馬鹿な事をするんじゃないわよ！！！！！」

「ひいゝ、助けてゝ」

ミステリアがフェイトさんをあんなに怒鳴るなんて。事の始まりは、  
そう、ライトさんがライトさんの所のフェイトさんと一緒に来た事  
から始まる。

ゝゝゝ

「よっ、エリオ」

「あ、ライトさんに……フェイトさん」

「本当に大人なエリオだね。ってなんで隠れるの？」

「いえ」

貴女の料理がトラウマになってるんですよ。

「エリオくん久しぶり〜」

「やつほ」

キャロとルーが来たな。珍しい。いや、今まで来なかったのがおかしいのか。

「キャロとルーテシアも大人になってるね」

「フエイトさん？」

「キャロ、多分並行世界の」

「あ、ライトさんがいるもんね」

この二人は流石に理解が早い。一人で異世界に行ったりしてるからな。たまに異世界で変なのと契約してくるけど。

「ライトさん、今日は？」

「のんびりしようと思ってな。これ土産」

「おお、酒ヤシの実に酒豪メロン。酒乱牛じゃないですか。ってこれは兄さん用でしょう」

久しぶりにグルメの世界の食材が食べられると思ったら酒系ばかりじゃないか。嫌いじゃないけど。

「ほら、白毛シンデレラ牛もあるし。これを見る!!」

「なんと!虹の実じゃないですか!!」

こんな高級食材まで持ってきてくれるとは。有り難い。

「か〜わ〜い〜い〜」

「もみもみもみもみ、エリオなのに柔らかい」

「私も、私にも抱かせて」

「た、たしゆけて〜!!」

いつの間にかエリがキャロとルーとフェイトさんに捕まっていた。止めてやるか。

「キャロ、ルー、落ち着け」

「フェイト、止める」

「いいじゃない」

「気にしたら負け」

「お兄ちゃんが言うなら」

フェイトさんが止めたのにこの二人ときたら。どうしようもないな。

「頑張れエリ」

「え、ええ〜!？」

「ライトさん、フェイトさん、行きましょう」

あの二人を止めるのは諦めよう。

人里を歩いていると買い出しをしているミステリアがいた。

「何買ってたんだ？」

「エリオ、薬味をちょっと」

……………そうだ。

「ミステリア、お願いがあるんだが」

「エリオが？」

「フェイトさんの料理を見て欲しい」

「フェイトさんって、料理出来たよね？結構美味しかったよ」

あー、うちのフェイトさんは料理が上手かったな。説明しないと。

「何というか、料理な下手なフェイトさんがいるんだ。そのフェイトさんが違う世界から来ててさ」

「よく分かんないけど、私の知ってるフェイトさんじゃないんだね？」

「おう。あそこで男の人といるだろ？あのフェイトさんだ」

件のフェイトさんはライトさんと菓子屋を見ていた。和菓子ってのはいろいろと凄いからな。見た目がどう見ても菓子じゃないのもあるから見飽きない。

「お二人共、ちょっといいですか？」

「なんだ？」

「どうしたの？エリオ」

「フェイトさんに料理が出来るようになってもらおうと思ひまして。教えてくれるミステリアです」

「よろしくお願いします」

「私でも大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ」

「エリオ……」

「ライトさん？」

「本当に、大丈夫だな？」

「ミスティアは自分のお店も持ってるんですよ。大丈夫ですよ」

）  
）  
）

大丈夫……そう思っていた。だがフェイトさんの行動は俺らの予想斜め後ろを走るものばかりだった。

「もう一度……！——から……！私の言う通り……！やれ……！……！！  
」！  
」！

「お、お兄ちゃん」

ライトside

ああ、やっぱりこうなってしまったか。料理人にとってフェイトの行動は怒りの対象でしかなかったんだな。そりやまな板ごと生きた魚を真つ二つにしたり、フランベしようとして要用のスピリタス使ったり、下味もせず衣も付けず食材を油に投げ入れて天ぷらを作ろうとしたり。

「キユ」

「エリちゃん、生きて」

「キヤロ、気絶してるだけ。まあ半分に斬った生魚がピチピチしてたら気絶してもしようがない」

「ゾンビだよね」

あれは確かに怖かったな。魚が死んだ事に気付いてないって感じだった。とりあえず止めよう。

「ミステリア、止まってくれ」

「今止めたら逆に大変なの！！分かってる！？」

「とりゃ」

パコオン

「へぶつ！！？」

「よくやった、エリオ」

エリオがミスティアの頭を叩いて気絶させた。

「フェイト……」

「ヒック……怖かった」

凄い勢いだったからな。もうこれからは料理を作らないかもしれないいな。トラウマになっているかもしれない。というかなってるだろ。

「これから楽しい場所に案内しますよ」

「だそうだ。フェイト、行くぞ」

「……うん」

「私達はエリちゃんの看病してるから」

「……いつてらっしやい」

此処は、花畑か。

「凄い……」

「だな。こんな広大で立派な花畑は初めてだ」

「取らないようにして下さいね。花畑の持ち主に殺されますから」

殺されるのかよ。花が好きなのはこの花畑を見れば分かるが、それはやり過ぎじゃないか？

「最近は何氏が出来て丸くなりましたけど」

「あ、女の人なんだね」

「妖怪ですけど」

妖怪だったのか。花の妖怪とかそういうのだろうか。

「エリオじゃない。何の用かしら？」

「どうも幽香さん。心を休めに来ました」

「そう。荒らさないようにね」

「分かっています」

成る程、確かに花に手を出さなければ大丈夫って感じだな。

「フェイト、そろそろ行くか？」

「うん。幽香さん、ありがとございました」

良かった。フェイトも大分良くなったみたいだ。

チュンチュン

「!?!」(ビクッ)

……しばらく鳥に慣れる事をしないとな。

ミッション31：料理を舐めるな！！（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

真哉「お母さんおはよー」

聖哉「おはよう」

隊長「ああ、おはよう。今日はアリスちゃん来るんだろっつっつとさと準備してしまいなさい」

真哉・聖哉「はい」「はい」

ピンポーン

隊長「はいはい。アリスちゃん、いらっしやい」

アリス「おはようございます。おば様」

隊長「ほら、上がりなさい。二人が待ってるよ」

アリス「お邪魔します」

真哉「アリス、いらっしやい」

聖哉「おはよう、アリスちゃん」

アリス「真哉くん、聖哉くん、おはよう」

真哉「今日は何する？ゲームとかか？」

聖哉「アリスちゃんに合うのあるかな？」

アリス「私は見るだけでもいいよ」

真哉「それじゃあ意味ないだろ。せつかく遊びに来たのに」

聖哉「無理な遠慮は相手を不快にするってお母さんが言ってたよ」

アリス「じゃあ……ぷよぷよ、あるかな？」

真哉「大丈夫だ！！手加減しないぜ！！」

聖哉「兄さん。相手は女の子だよ」

真哉「ゲームは腕っ節の勝負じゃないから男女平等なんだよ」

聖哉「お母さんは腕っ節でも強いよ。叔母さんも」

真哉「例外出すな」

アリス「楽しそうだね」

真哉「あ、わりい」

アリス「ううん。二人の楽しそうな顔見てるこっちも楽しくなるよ」

聖哉「そうかな？」

アリス「うん」

真哉「よし、始めるぞ!!」

隊長「三人共、おやつだぞ。つて」

真哉「グウ……」

聖哉「ムニヤ……」

アリス「スウ……スウ……」

隊長「仲良くお昼寝か。アリスちゃんなんて真哉の腕を枕にして……  
… 将来が楽しみだ」

~~~~~

キャロ「なんでか本編に出れたね」

ルーテシア「何故？」

キャロ「それは知らないよ。さて次回は？」

ルーテシア「秋代様とのコラボ。とりあえずそれでコラボは終了」

「キャロ」じゃあその後は無印なのはの世界だね。では次回もお楽しみに」

ミッション32：幻想郷の隠しボス？（前書き）

雨季「いいのが書けなかった」

ルキ「そんな事もあるわよ」

リザ「……ドンマイ」

鬼巫女「また連レテキたぞ」

霊夢「何で私なのよ」

リザ「霊夢？」

雨季「本気霊夢さんともです」

ルキ「本気霊夢？霊夢じゃないの？」

霊夢「霊夢よ」

鬼巫女「私とタメを張れるレベルのナ」

ルキ「強いんだ」

リザ「これ読んで」

霊夢「何々？今回のコラボは秋代様。ではどござ」

ミッション32：幻想郷の隠しボス？

エリオside

これは昨日の夜の事だ。俺はいつも通り風呂から出て体を拭いていた。その時だった。

「おんや？」

タオルに何か書いてあるのに気が付いた。そこに書いてあったのは……

『明日、茶々丸とまた試合ってもらおう。
カスミより』

これはどうやって書いたのか。ホラーだ。って違う！！また茶々丸さんと戦わないといけないのか！？代役はいないのか！？明日まで時間がある。頑張つて捜そう。

茶々丸side

再びやって参りました。幻想郷です。

「マスター、今回もエリオさんと試合ですか？」

「その予定だが」

幻想郷にはエリオに匹敵する力の持ち主は僅かしかいないと聞きま
すし、その人達は皆さん気まぐれだそうですね。

「エリオ、来たぞ」

「いらっしやい。こないだ虹の実貰ったんで食べます？」

「それはいいな。頂こう」

虹の実ですか。そういうのを持ってくる人もいるんですね。

「ちなみにどういつつもりか聞かせてもらおうか」

「はい？どういつつもりとは？」

「エリオさんは何か企んでいるのでしょうか？歓迎してマスターの「
機嫌をとってお願いでもするのでは？」

「…………バレます？」

「「バレバレ（です）」」

「…………実は、今回は俺は戦いたくないんですよ」

「ほう、なら代役はいるんだろうな」

マスターの言う通りだ。それにエリオさんも馬鹿ではない。マスターとの約束を破ればどうなるかは分かっているはず。

「もちです。二人共」

「呼んどいて遅いわよー!!」

「この人と戦うの？」

出てきたのは二人の子供。どちらも人間ではないようだが、力は小さなものだ。

「おい、こんなガキで茶々丸の相手が務まると思ってるのか？」

「チルノとルーミアだって戦えますよ」

チルノという子は水色の髪に青と白の服、三対の氷の羽。ルーミアという子は金髪に赤いリボン、黒い服を着ている。

「失礼ですが。二人では私の相手は無理かと」

「むっかー!! あんたなんか、けちよんけちよんのカツチカチにしてやるんだから!!」

「私達もちゃんと戦えるよ」

「はあ、茶々丸。遊んでやれ」

「了解」

幻想郷とは別の世界の広い場所へと移動してきた。早く終わらせてエリオさんと本格的に試合をしよう。

「チルノ！！ルーミア！！封印解除を許可する！！」

「凍らせてやるんだから！！」

「終わったらエリオからお菓子貰うんだ」

何というか、特にルーミアちゃんがおかしな事を言っていました。二人は何かの変身シーンのように光に包まれ、光が晴れた所には当たり棒とスイカバーを模した巨大な剣(?)を持ち、黒い軽鎧を装備し成長したチルノさんと、これまた成長し、闇の大剣を持つたりボンのないルーミアさんがいた。

「サイキョーのアタイ参上！！」

「相手は生半可ではないのだ。油断するな」

成る程、二人共先程までとは比べ物にならない力を持っていますね。

そしてルーミアさんは性格すら変わっていますね。

「確かにこれなら先程よりは楽しめるか」

「なんだと！？お前も叩き斬ってやるうか！！」

「チルノよ。どうして氷の妖精なのにそう熱くなる」

「うっさいわね！！そのメイド！！さっくりと倒してやるわ！！」

「お手柔らかにな」

「よろしくお願いします」

「そりゃー！！」

チルノさんが真っ直ぐに突っ込んできました。速さはなかなか。ですが性格と同じで行動にも捻りがありませんね。

「闇符『ブラックホール』」

「！？ 足が！？」

足が闇に嵌って動けなくなっていました。これでは避ける事が出来ない。

「どっせい！！」

「ちっ！！」

機会仕掛けの剣を取り出し、チルノさんのスイカバーを受け止める。威力が重い。技術は感じられませんが、単純な速さと剣の重さで破壊力が高いといったところでしょうか。とにかくチルノさんの攻撃のおかげで闇から抜け出す事が出来ました。

「ルーミア！ちゃんと止めてよ！！」

「君が馬鹿力で抜けてしまったのだろう」

チルノさんが攻撃、ルーミアさんが補助ですか。

「とりゃとりゃとりゃとりゃあ！！」

小太刀のような小回りの効く剣ではないが、二刀流なだけあって隙が少ない。

「飛びなさい」

「させない」

ミサイルなどの兵器で動きを止めようとしてもルーミアさんの弾幕が的確に相殺してくる。

「凍れ！！氷結『アイススタチュー』！！」

チルノさんが剣を地面に突き立てると氷が地面を走ってきた。飛べば弾幕に狙われるでしょうが、ここはあえて飛びましょう。

「迂闊だな」

「予測済みです」

「！ 障壁か！」

対魔法障壁がこの世界の弾幕にも効いて良かった。

「隙ありい！！」

「ありません」

ドカツ

「うぐっ！？」

チルノさんの攻撃を避けて、地に叩き落とす。

「ハアッ！！」

「甘いです」

ズドン

「ッ！？」

「ぐえっ！？」

更にルーミアさんの剣も避け、チルノさんの上にルーミアさんを投げつけた。

「つく……強いな」

「もう、あつたまきたー!!」

「チルノ!？」

突然冷気が吹き荒れる。発生源はチルノさんのようで、ルーミアさんは咄嗟に逃げたようだ。

「こんなにいるか!!」

当たり棒の剣が投げ捨てられ、チルノさんはスイカバーだけを握り締める。するとスイカバーの外装が吹き飛んで、細身の剣へと姿を変えた。

「でりゃ!!」

「速い!？」

先程より更に速く攻撃が飛んでくる。さっきまでのスイカバーの姿はリミッターを掛けた状態だったのでしょうか。

「オリヤアアアアアアアアア!!!!」

「ハアアアアアアアア!!!!」

確かに速くはなりました。ですがこれはまだ対応可能な速度。

「私も忘れてくれるなよ!!」

ルーミアさんも追加ですか。こうなると面倒ですね。

「ハア…ハア…」

「チルノさんは限界ですね。ルーミアさん、どうします？」

「アタイはまだ「下がってる」「ルーミア!…」

「私達の負けだよ」

「ちょっと!!まだアタイは負けを認めてないわよ!!」

「勝てないのだから諦める」

「はいはい、チルノもルーミアもご苦労さん。封印」

エリオさんがそう言うと、チルノさんもルーミアさんも元の姿に戻ってしまった。これで終わりですね。

カスミside

分かりきっていた結果だな。まあ一介の妖精と妖怪如きがよくやっ

たと言っべきかしら。

「エリオ、次はお前だからな」

「えー」

「次もアタイに決まってるでしょ！！アタイはまだもう一段階変身を残してるんだから！！」

この妖精は威勢だけは一人前だな。

「では次はその変身を見せて貰おうか」

「ふん！！」

可愛げがない事で。だが子供は素直か生意気かが大半だからな。

「茶々丸、帰るぞ」

「お邪魔いたしました」

「はい、また」

ミッション32：幻想郷の隠しボス？（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

貴史「カルタ、亜衣、邪魔するぞ」

カルタ「ういゝ／＼／＼」

貴史「酒臭っ!?!」

亜衣「パパいらっしやい」

貴史「どうしたんだこれ」

亜衣「五日酔い」

貴史「二日酔いじゃないのかよ」

カルタ「酒ゝ／＼／＼」

亜衣「もう駄目。アルコールランプあげるから」

カルタ「わゝい／＼／＼」

貴史「完全に酔ってるな。アルコールランプで喜ぶ、って飲むなよ」

カルタ「なら貴史のゴツクンしゆるゝ／＼／＼」

亜衣「部屋でやる？此処でやる？」

カルタ「三人でやる〜／＼／＼」

貴史「誰が娘とやるか」

亜衣「えっ!？」

貴史「驚くなよ」

カルタ「名無しきゅんを呼べ〜／＼／＼」

亜衣「どうしてそこで名無しさんなの!!迷惑でしょ!..」

貴史「そこはツッコむんだな」

カルタ「おとーさん、亜衣が怒った〜(泣)」

貴史「泣くなよ。どうして遊びに来たのに酔っ払いの相手をしな
といけないんだ」

カルタ「相手してくれるんだ〜／＼／＼」

貴史「お前の思ってるのと違うと思うが」

カルタ「浮気者〜(泣)」

貴史「もう疲れた」

）
）
）

キャロ「今回はアドベントチルノとEXルーミアの登場」

ルーテシア「分からない人はググってみよう」

キャロ「次回が無印なのはなんだよね。ゲストは同人ソフト『怪伝』の主人公『一淨晃』」

ルーテシア「分からない人はググってみよう」

キャロ「では次回もお楽しみに」

ルーテシア「ググってみようがマイブーム」

ミッション333：リリカル世界へ（前書き）

雨季「今回は早かった」

ルキ「いい事じゃない」

リザ「鬼巫女は？」

雨季「いないよ」

ルキ「あ、そうなんだ。じゃあ早く本編を始めれるわね」

リザ「短くやるのもたまにはいい」

雨季「では本編どうぞ」

ミッション333：リリカル世界へ

エリオside

いきなりだが俺は違う世界へ行く事になった。

「何処に行くんですか？」

「何処だろな。とりあえず留守番は頼むぞ、エリ」

「はい」

でも実際に何処に行くのか聞いてないんだよな。藍さんが昨晚、俺を襲うついでに言っていた事だからな。襲うついでにっておかしいよな。

「エリオく、入るわよ」

「紫さんですか。どうぞ」

丁度いいタイミングだな。ここでしっかりと聞いておかないと……
……つてええ！？

「あ、晃さん！？」

「エリオ、久しぶり」

紫さんと一緒に家に入ってきた黒髪の青年は一淨晃さん。あらゆる可能性が混ざった世界（俺はクロスワールドと呼んでいる）で八岐

大蛇の頭二つを倒した人だ。苗字が兄さんと同じ読みというだけで兄さんに気に入られてる人でもある。

「侵食は止まりましたか？進んでいませんか？」

「おかげさまでな。全く問題ない」

侵食というのは晃さんが持つてる草薙剣が晃さんの肉体と精神を呑み込む事だ。いろんな人の協力もあり右腕が少し侵食された程度で済んだ。

「しかし晃さんを連れてくるとは。残りの大蛇退治で忙しいでしょうに」

「その大蛇を退治するために一緒に異世界へ行くんだよ」

「どういう事ですか？」

「私が簡単に説明するわ。まず大蛇が八人の巫女に封印されているのは知ってるわね？」

「はい」

八岐大蛇はその頭一つ一つが八人の巫女へと封印された。その巫女が子を成す度にその封印も知らず知らずのうちに受け継がれていく。

「知ってるなら結構。それで大蛇を封印した巫女の子孫が子を成さずに死んだのよ」

「……………まさか、その封印が異世界に？」

「そうよ」

「だから協力してくれ。異世界ならエリオの方が得意だろ？」

「分かりました。やります」

あんなものが外に逃げ出したなんて大変だ。俺に出来る事なら協力しないとな。

「世界は特定出来ているけど、誰に封印されているかは解らないわ」

「少なくとも女性に封印されているのでしょうか？」

「ああ。それもそこそこ力のある人だな。そうじゃないと大蛇おんちが女性を食い尽くして外に出ているはずだ。とは言ってもその人も大蛇おんち封印の巫女じゃない。いつまで耐えられるか」

「何言ってるんですか晃さん。その人を救うために俺らが行くんでしょ」

「だな。変な事言っただけだった」

「エリオ、早く支度しなさい。時間はないわよ」

「分かっていますって」

支度言われても必要なのはこの身とストラダくらいだし、大抵のアイテムは転送アポーツで持ってこれるし。薬は持ったし。

「やる事ないんで大丈夫です」

「さあ飛ばすわよ。入りなさい」

スキマが開いて俺と晃さんはそこに入った。少し進むと暗い路地裏に出た。

「此処は、日本のようですね」

「俺らのいる時代にも近いみたいだな」

路地裏に張つてあるボロい張り紙は日本語で書いてあるし、建物は古い様式ではない。

「とにかく外に出てみましょう」

路地裏から出ると、よく見る普通の街並みが広がっていた。

「……………あれ？」

初めて見る街並みなのにどうして『よく見る』なんて思ったんだろ。

「なあエリオ、見覚えないか？」

「晃さんもですか」

《当然だ。此処は海鳴のようだからな》

「「成る程」」

通りで見覚えがあるはずだ。晃さんも共に戦った仲間、恭也さんや美由紀さんがいたから知ってるんだよな。

「翠屋探してみます?」

「この道だと、あっちか?」

「あの建物があるんでこっちでいいと思います」

「あ、本当だ。よし行くか」

晃 side

まさか並行世界の海鳴市に大蛇おろちがいるとはな。この街で力がある女性っていうと、那美さん辺りか?

「晃さん」

「ん?」

「ここ、俺の知ってる海鳴と晃さんの知ってる海鳴、どっちが近いと思います?」

「……………」

俺の知ってる海鳴の場合、これはまだマシだ。魔力や霊力のような力を持つ存在が限られてくる。だがエリオの知ってる海鳴の場合、強力な力を無意識に持つて存在が多い。例えばなのちゃんみたいな。

「俺の知ってる海鳴だといいな」

「そうですね。っと翠屋発見」

カランカラン

店のドアを開けるとベルが鳴り、店員の格好したなのちゃんが出てきた。

「いらっしやいませ！！」

「席は開いてるかい？」

「はい！こちらへどうぞ！」

元気がいいな。まあ子供なんだからこんくらい元気じゃないとな。

「ご注文はお決まりですか？」

「珈琲と……シュークリームで。エリオはどうする？」

「同じものを。ただ珈琲にはミルクを付けてほしいな」

「かしこまりました！少々お待ち下さい！」

「……エリオ」

「……晃さん」

「「最悪なのが当たっちゃった」」

なのちゃんから感じた魔力は膨大なものだった。ここはエリオの方の世界かよ。

ミッション333：リリカル世界へ（後書き）

ほのぼの（？）（管理局

もぶside

皆さんこんにちは。もぶです。

「何してるのよ。今更自己紹介なんて」

「隊長、地の文を読まないで下さい」

「基本スキルだからしょうがないだろう」

どんな基本スキルですか。そんな人は普通はいません。ってうちの部隊に普通はいませんでしたね。

「もぶくん！！今日の予定を言いたまえ！！」

「ありません。強いて言えばおじさんはいつも通り忙しいと」

「つまんな〜い」

「はい、つまらないですね」

とは言ってもうちの部隊が動く事などほとんどない。もしうちの部隊に仕事が入るとすればそれはとんでもないものか、くだらないものか。

「……………」(ボソッ)

「名無しさん、いたんですね。隊長、今名無しさんなんて言っていました?」

「最近の政治は不安定で嫌だね、って」

「そうですね。でもその分僕らが頑張らないと」

名無しさんは突然現れてはよく分からないことを言いますね。とはいえ無視したら可哀想ですし。

「……………」(ボソッ)

「今日は中華丼番屋の新作肉まんが発売日だから早退します、だよ」

「はい。でも仕事が入ったら連絡しますからね」

「……………」(ボソッ)

「(ヅノ・・)(ナイナイ、ですと」

何故顔文字を使ったし。でも事実だから否定は出来ないし。

『おはよ』

「アマテラスさん!?!どうしたんですかいきなり通信してきて!?!」
ひきこもりで連絡もメールとか自作のロボットでしかないアマテ

ラスさんが自ら通信してくるとは。でもこのパターンは過去にもあったような。一体なんだったか。

『けほっ』

「……風邪ですか？」

『……』（コクリ）

「無理しちゃ駄目よ。しっかり寝なさい」

『うん』

そうでした。何故かアマテラスさんは病気などの場合は律儀に連絡をくれるのでした。不思議な人ですね。

「そういえばもぶちゃん」

「なんでしょうっ？」

「ドワーフっちはデートしないの？」

「の？」

いきなり何を言ってるのでしょうか。しかも座敷童子ちゃんまで出てきて。

「どっしてそうなるんですか。付き合ってもないのに」

「付き合っていないの!？」

「突き合ってないの!？」

「座敷童子ちゃん、自重なさい」

この人達は……確かに僕とドワーフさんは実力が近いのでよく一緒に行動していますが、付き合っただけ……

「……もぶ」

「おやドワーフさん。いたの「バカッ!?!?!」はい？」

「ずっと私を弄んでいたんだな!! 私は、私は本気だったのに!!」

「ええ〜」

どうしましょう。こんな修羅場は初めてです。対応の仕方がわかりません。

「ドワーフ」

「隊長!! なんとか言ってくれ!!」

「もぶは鈍感だったのだ!!」

「な、なんだって……」

隊長、座敷童子ちゃんに何を教えているんですか。っていうか私は鈍感じゃありません。

「いい？もぶはラブレターを先週まで知らなかった男なのよ」

「いや、そんな事は「そ、そうだったのか」信じた!？」

「よしもぶ!!これから一緒に恋愛というものを手取り足取り教えてやるっ!!」

「ドワーフさん、本気ですか？」

「本気と書いてマジだ!!」

今日分かった事。ドワーフさんは頭が弱い。

)))

キャラ「どうしてこっつなった!!」

ルーテシア「ググツてみよう」

キャラ「本編は、導入編かな？」

ルーテシア「次回からが本番だよ」

キャラ」では次回もお楽しみに」

ミッション34：介入スタート（前書き）

雨季「流石に難しい」

ルキ「何が？」

雨季「無印にエリオ達を介入させるのが」

リザ「そこは頑張るべき」

鬼巫女「作者なのだから当然だな」

雨季「久しぶり。元気？」

鬼巫女「久シブリだな」

ルキ「そんな久しぶりだっけ？」

リザ「久しぶりでいい」

雨季「では本編スタート」

ミッション34：介入スタート

エリオside

並行世界でも翠屋は美味かった。これは世界の心理だね。

「……………はあ」

「どうしました？」

「あの純粋ななのちゃんが魔砲少女になると思うと」

「もっとなってますよ」

翠屋でユーノさんの存在も確認しましたしね。けど魔法に関わらなかったなのはさんを知ってる晃さんからすれば、この現実を受け入れがたいのかな。

「この周辺でジュエルシードってのは暴走するの？」

「そのはずですよ。なあ、ストラーダ」

《ああ。データが正しくて、それがこの世界でも変わらなければな
ジュエルシードの暴走。実際に見た事はないけど、この時代のフエ
イトさんがデバイスを犠牲にしながらも止められたなら、俺らは無
傷で出来るはず。》

「……………なんかゲームしないか？」

「暇ですしね。何をします?」

「そうだな……………しりとりとか?」

「それしかないですよ。じゃあ、ジュエルシード」

ゴォッ

ジュエルシードの力を感じた。今のフラグだよ。

「お、結界が張られたぞ」

「行きましょう。ストラダー!」

「だな。草薙!」

俺はストラダをセットアップし、晃さんは草薙剣の力を開放させる。草薙は普段はボロい青銅剣だが、遣い手が力を開放させると赤紫に輝く剣となる。

「こっちか」

「ストラダ、距離は?」

《約140。速くしろよ》

「言われなくとも」

俺らはビルや家の屋根を飛び移りながら現場へ急ぐ。距離は短かつ

たのですぐに着いた。

「戦ってますね。こっちは気付いていない」

「好都合だ。そういえばどっち側に付くんだ？」

「俺はフェイトさん。晃さんはなのはさんで」

「了解した」

下手に俺らが第三勢力として介入するよりもそれぞれの陣営に付いた方が並行世界とのズレが少なくなると判断したので、俺はフェイトさん側、晃さんはなのはさん側に味方する事にした。それにどっちかに付いてたら大蛇遭遇率も高まりそうだ。勘だけどね。

「っと、お面しないと」

恋姫の世界ではハサンのを使ったから、今回は別のにしよう。狐でいいかな。

「どうしてそんなもんを」

「なのはさんに会ったじゃないですか」

「ああ。一緒に喫茶店でお茶をした俺らが敵と味方になってたらおかしいもんな。でもそんなお面で大丈夫か？」

「認識阻害使いますから」

そろそろ行くかな。

なのは s i d e

フェイトちゃんとのジュエルシードを賭けた戦い。空中での魔法の戦いはフェイトちゃんの方が上だけど、私でも戦えている。

「サンダーボルト」

「え？きやあつ！？」

だけどそんな時、私に向かって雷が落ちてきた。なんとか避けたけど、今のはフェイトちゃんじゃない。

「外したか。思ったよりも動けるじゃないか」

「誰なの！？」

「さあな。だが君の味方ではない。味方するならフェイト・テストタ
ロツサだな」

「私？」

フエイトちゃんもよく分かってないみたい。あの狐のお面の人は何なんだろう。

「次は当てよう。サンダーブレード」

空から巨大な雷の剣が降ってくる。こんな魔法を一瞬で使えるなんて。

「なのは！逃げて！！」

ユ一ノくんが叫ぶ。でも剣の速度が速くてもう間に合わない。

「俺式必殺『疾風』！！」

だけどそれはどこからともなく飛んできた攻撃によって消された。

「大丈夫か！？」

「お昼のお兄さん！？」

さっきのをやったのはお店に来てくれたお兄さんだったの！？でも守ってくれたって事は味方だよな。

「お前！！こんな小さな子に何やってやがる！！」

「厄介なのが出てきたな。フエイト・テストロッサ。あれと高町なのは俺が止めてやる。早く封印しろ」

「あんたいきなり出てきて偉そうに」

「アルフ！今は手を借りよう。あの子だけならともかく、あの男の人は強い」

「フェイトが言うなら……」

なんだか結局あの狐のお面の人はフェイトちゃんの味方になったの。

「えっと、君。何かよく分からないけど手伝うよ」

「ありがとうございます。でも」

「もう巻き込まれてるんだ。気にするなよ」

「なのは、今は協力してもらおう」

「……うん」

あんまり他人を巻き込みたくないけど、お兄さんもああ言ってるし、協力してもらおう。

「来るぞ」

狐のお面の人が向かってくる。ディバインシューターで迎撃しようにも速くて当てられない。

「喰らえ！……」

「ちっ」

お兄さんが剣を振ると狐の人は槍で受け止めた。狙うなら今だ。

「デイベインバスター!!」

「!!」

砲撃を撃ったけど避けられちゃった。フェイトちゃんより速いよ。

「サンダーフィールド」

「これは……?」

「捕縛結界だ!!」

雷で出来たドーム状の空間に閉じ込められてしまった。ユーノクンの言う捕縛結界っていうのがよく分からないけど、出れないような結界なんだよね。

「これくらい斬ってやるよ!!」

ザンツ

「え?」

「す、凄い」

結界をお兄さんが簡単に斬っちゃった。結界ってそんなに脆くないよね。

「想定内だ」

「おいおい、そんなの出すのかよ」

「うそっ!?!」

「質量兵器じゃないか!?!」

「撃つ」

狐の人が出したのはマンガやアニメとかでは見たりするあのロケットランチャー。あんなのどこから出したの!?!?

「ジュエルシールド封印!?!」

「しまった!?!」

「こちらの勝ちか」

やっちゃった。こっちで足止めされている間にフェイトちゃんがジュエルシールドを手に入れてしまった。

「ではな」

「!?!」

狐の人がロケットランチャーをこっちに向けたので身構える。もう終わったのに、そんなのお構いなしと言わんばかりに引き金が引かれた。

カッ

「にゃあ!？」

「目、目が!？」

「閃光弾か!！」

いきなり強烈な光を喰らって、少しの間だけ目が見えなくなってしまう。そして目が見えるようになった時にはフェイトちゃん達はいなかった。

「逃げられたな」

「うう……まだチカチカする」

「大丈夫か？」

「うん。ありがとう、お兄さん」

「気にすんなって」

「あの、貴方は何者ですか？」

確かに、ユーノくんの言う通り、お兄さんが何なのか気になる。

「今はもう遅いし、明日でいいかな？」

「はい」

「場所は？」

「えっと、夕方5時くらいにお店に来て下さい」

「了解した。そんじゃ、また明日」

「あ！名前は？」

「一淨晃だ。よろしくな、なのちゃん」

晃お兄さんか。……………あれ？私って名前言ったっけ？

ミッション34：介入スタート（後書き）

ほのぼの(?)（管理局

A「……………」

ニヤッ

B「……………」

ニヤ?

C「……………」

ニヤ〜ン

隊長「……………」

フーッ

隊長「……………」（ズーン）

A「た、隊長、落ち込まないで」

B「そうそう。猫なんて気まぐれなんだから」

C「てかこの猫誰のだよ」

A「うちの親戚が旅行に行くから預かって欲しいって。ついでに楽

しそつだから連れてきたんだけど」

フニッ

C「おっつと、よしよし」

B「懐かれてるな」

隊長「……」（そ〜）

フーッ

隊長「……」（ビクッ）

A「隊長、何か喋りましようよ」

B「C。お前がなんとかしろ」

C「えっと、どうしろと？抱かせるのは無理だぞ。滅茶苦茶警戒してる」

隊長「……」（ズズーン）

A「また落ち込んだ」

B「どうしてこの猫は隊長に懐かないんだ？以前街中で見かけた野良猫は大丈夫だったよな」

A「基本的に隊長は動物に好かれるタイプなのに」

C「こいつが雌だからじゃね?」

A「まさか」

B「んなはずないだろ」

隊長「……………」(トボトボ)

A「隊長!どこへ、って帰る!?!」

B「どんだけショックなんだよ」

ゴロゴロ

C「よゝしよゝ」

)))

キャロ「エリオくんはフェイトさん側。晃さんはなのはさん側へ」

ルーテシア「ジュエルシード暴走なし」

キャロ「だからデバイスも壊れなかったね。暴走したらエリオくんが止める予定だったけど」

ルーテシア「フェイトさんがゲツチュ」

キャロ「では次回もお楽しみに」

ミッション35：それぞれの説明・見編（前書き）

雨季「久しぶりの更新」

ルキ「外伝なんだからこんくらいが妥当でしょ」

リザ「期間は長く、文は短く」

雨季「リザ、それは言わないお約束。こんな茶番はさっさと終わらせて、本編スタート」

ミッション35：それぞれの説明・見編

なのはside

今日は晃お兄さんが来てくれる予定だから、学校からすぐに帰ってきました。

「ただいま、お母さん」

「なのは、お帰りなさい。早かったわね」

「うん、ちょっとね。お店のお手伝いするね」

「あらあら、今日はどうしちゃったのかしら？　もしかして、お店に彼氏でも来るの？」

「にゃっ！？　そんなんじゃないよ！！　えっと……そう！　昨日助けてくれたお兄さんにお礼をするの！！」

間違っていないよね。あの戦いで助けてくれたんだから。

「そんな事があつたの。なら私からもお礼をしたいわね。その人が来たらうちに上がってもらいなさい」

「はい」

良かった。変に思われなかったし、お家に上がってもらえば話しやすくなるからね。

……
……
……
……

長い。晁お兄さんが来る時間が5時っていうのをすっかり忘れてた。まだ4時半。後30分もある。

カランカラン

「いらっしやいませ。って晁お兄さん」

「よう、なのちゃん。今日もお手伝いとは偉いな」

「まだ30分もあるよ」

「女の子を待たせるわけにもいかないだろう」

お兄さんは紳士ってやつだね。早速お家に戻ってもらおう。

「お兄さん、今日はお礼がしたいから上がって」

「いいのか？」

「うん！」

「ならお言葉に甘えようか」

晃 side

少し早く来すぎたかと思ったけど、そんな事はなかったみたいだな。

「先日はなのがお世話になったそうで」

「いえ、お気になさらず」

今は高町家一同にお礼を言われている。なのちゃんはどっい説明をしたんだろうな。

「そういえば君は剣が使えるそうじゃないか。うちでも剣術を少しやっていてね。恭也と試合してみないかい？」

「父さん。晃さんに迷惑だろう」

「そつだよ、お父さん」

「そつは言っても恭也も戦ってみたんじゃないか？」

「む……」

恭也も好きだな。別に頼まれたらやってやらない事もないけど、こつちの恭也は俺のダチの恭也に比べて弱そつだからな。すぐに終わりそつ。

「あの、晃お兄さんと話したい事があるんだけど、いいかな？」

「そつか？ では晃くん、なのはを頼むよ。俺達は仕事はまだあるからね」

「美由紀、少し鍛錬だ」

「恭ちゃんつたら晃さんに触発されたね。うん、手伝つよ」

「そつだ、晃くん。夕飯はうちで食べて行きなさい」

「桃子さん？」

「気にしないの。それじゃあね」

いや、返事をそもそもしていないんだが、ともかくこれでこの場には俺となのちゃん、ユーノしかいなくなったわけだ。

「さて、何から話そつか」

「えっと、僕が質問してもいいですか？」

「ああ」

「晃さんは何者なんですか？ それにあの剣は一体？」

どう説明するか。あえてある程度真実を教えた方がいいか。嘘は苦手だし。

「俺は妖怪退治をしているんだ」

「妖怪ってゲゲゲの 太郎とかに出てくるの？」

「そうそう。それで今回追ってる妖怪がこの近くにいてって判明したから」

「妖怪っていうのはよく分かりませんが、害があるものと考えていいですか？」

「基本的にな」

まあ座敷童子やぬらりひょん、他にも害がない、もしくは子供の悪戯程度の害しかない妖怪なんて山ほどいるけどな。ただ今回は災害レベルだが。

「次はこいつだな」

「これ、あの時の剣？」

「見た目が違いますけど」

通常時はどう見てもただの骨董品の青銅剣だよな。

「戦闘になると変わるの。なのちゃんのペンダントだって杖になる
だろ？」

「そっか」

「変化以外に特殊な力とかはあるんですか？」

「そうだな。妖怪に滅法強いのと、担い手には手足のように扱える
事ぐらいか。古いけどな」

「ロストログアには認定されなさそうですね」

あ、そうか。管理局がいたんだっただな。でも草薙がロストログア認
定されても管理局なら大丈夫だろ。晃は後書きのほのぼの(?)
管理局のような管理局しか知りません。

「そういえば晃お兄さん、今日は泊まってるよ」

「いいのか？」

「うん。お母さん達もいって」

「ならお言葉に甘えようか」

野宿の予定だったから正直有り難い。エリオの奴はどうしてるだろ
うな。俺より説明大変そうだな。

ミッション35：それぞれの説明・見編（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

隊長「失礼。姉はいるか」

名無し「……………」（フルフル）

隊長「いないのか。何処へ？」

名無し「……………」（ボソッ）

隊長「またサボリか。助かったよ、名無しさん」

――

ドワーフ「名無し〜」

名無し「……………」

ドワーフ「頼む、金貸して」

名無し「……………」（ボソッ）

ドワーフ「あ、あはは、もぶとのデートのために新しい服をいろいろ買ったら金欠になって」

名無し「……………」（ボソッ）

ドワーフ「そんなに笑う事はないだろう!」

名無し「」(スッ)

ドワーフ「あ、ありがとう。これは近いうちに返す」

――

おじさん「おんや? 名無しくんしかいないのかな?」

名無し「」(ボソッ)

おじさん「私かい? 仕事をしに来たんだよ」

名無し「」(ボソッ)

おじさん「終わってるのかい? こりゃ参った。流石名無しくんだ」

名無し「」(ボソッ)

おじさん「そうだね。今日は早く帰って家族サービスをするよ」

――

先生「名無しくん、こんにちは」

名無し「」

先生「ハハハ、そう睨まないでくれ」

名無し「……………」(ボソッ)

先生「用などないよ。強いて言うなら君を見に来た、かな？」

名無し「……………」(ボソッ)

先生「そうかい。では帰ろうか。しかし君はまともに話そうとは思わないのかね？ 昔はもっと普通に話していただろう」

名無し「……………」黙れクソジジイ。オレは今を楽しんでいる。余計な口出しをするな。また消すぞ」

先生「それは怖い。では」

~~~~~

キャラ「名無しさんの貴重な会話シーン」

ルーテシア「ワールドだね」

キャラ「というか最低でも一度は先生を倒してるんだね」

ルーテシア「びっくり。次回は説明、エリオ編」

キャラ「では次回もお楽しみに」

ミッション36…それぞれの説明・エリオ編（前書き）

雨季「あ〜っ〜い〜」

リザ「う〜……麦茶〜」

ルキ「暑い時こそ熱い物。冷たい物ばかりだとお腹壊すわよ」

雨季「それでも冷たさが欲しい……では本編どうぞ」

ミッション36…それぞれの説明・エリオ編

フエイトside

チュンチュン

……朝だ。昨日はよく分からない事が起こりすぎて疲れて寝ちゃったんだっけ？

《おはようございます、マスター》

「おはよう、バルディッシュ」

とりあえず顔を洗おう。さっぱりして昨日の事を整理しないと。

コンコン

「アルフ？」

「俺だ」

この声、昨日の。

「……入って下さい」

私はバルディッシュを手に持ってもしものために準備しておく。

「失礼する」

昨日、私達を手伝ってくれた狐のお面の男性が入ってくる。その後ろにはアルフがいた。

「ほら」

「……これは？」

洗面器に入れられた水を渡された。それと着替えまで。

「顔を洗って着替える。話がしたい」

「……どうも」

怪しい所は………なさそうだ。魔法で軽く調べたけど水と服には細工をしてなさそうだ。

「その程度で安心するのは止めた方がいいぞ。魔法では感知出来ない仕掛けなどごまんとある。警戒するなら自分で用意したものを使うべきだ」

「……忠告、感謝します」

でもアルフもきつと見ていただろうし、大丈夫。そう思い、洗面器の水に手を付けた。

シュワッ

「ひゃっ!? な、何!？」

「炭酸だ」

「変な悪戯すんじゃないよー!」

ドガッ

「ぶへっ!？」

うっ、通りで洗面器に泡が付いてるはずだ。驚いた。

……

……

……

…

さっきは妙な悪戯をされたけど落ち着こう。落ち着いて今日の前にある朝食を調べよう。

「食べないのか？」

「さっきみたいな細工は？」

「あれは初見だから効果がある。連続するのは意味がない」

「本当にかい？ 嘘だったらあたしが噛むよ」

「本当にだ」

……まあ食べてみよう。お腹も空いてるし、ベーコンエッグとトーストに何か仕込めるとは思えない。

「はむっ」

……美味しい。何も問題ないみたい。

「では話をしよう」

「その前に、あんたは何者だい？ 何であたし達の名前を知ってる」

「今は話せない。目的を果たした時にでも話そう」

「なら目的は？ それまで言えないって事はないよね」

「化け物退治だ」

化け物？ あれだけの実力があるこの人が化け物って言うものは一体……

「フェイトは何か訊かないのかい？」

「あ、そうだ。貴方のデバイスは私達のとかなり違いましたけど」

「ベルカ式だからな」

「ベルカ式？」

「古き時代に繁栄したものだ。ミッド式とは違い、接近戦を主とする戦いをする。俺のはそれを近代版に改造したものだ」

そんなものもあるんだ。リニスからはミッド式しか教わらなかったから知らなかった。

「他には？ 答えれる範囲なら答えよう」

「化け物とは？」

「龍の一種だ」

龍ってこの世界の伝説の生き物のはず。そんなものがあるの？ でも魔法もこの世界にとっては伝説みたいなものだし。

「そうだ。あんたの名前は？」

「名前？」

「いつまでもあんたとか貴方じゃ面倒じゃないか」

「……狐」

まんまだなあ。偽名にしてももう少し考えてもいいんじゃないかな？

「最後にいいですか？」

「ああ」

「貴方は敵になりますか？」

「……く、くくく、有り得ない。それだけは必ずないと約束しよう」

何がおかしいのかわからないけど、とにかく敵にはならないみたい。

「本当に？」

「ああ。これから悪戯もするだろうしおちよくるだろうが、裏切りはしない」

「そうですか。って悪戯するんですか!？」

「こんなに弄りがいのある娘なんてそうそういないからな」

「ふざけんじゃないよ!！」

ドガッ

「あべしっ!？」

今回はよくやったよアルフ。私はそんなに弄りがいなんてないもん。

「いたた、酷いな」

「あんたがふざけた事を言っからだよ」

「本気だ」

「……フェイト」

「うん、やっていいよ」

「ま、待て!! そんな暴力ばかりに「うるさい!!」「うぎゃあ  
ああああああ!!? う、腕はそっちに曲がりませーん!!」

なんだか変な人が仲間になっちゃったな。実力は確かなんだけど、  
これから変な事したらアルフにお仕置きしてもらおう。

ミッション36：それぞれの説明・エリオ編（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

A「……ああ。……そうか、分かった」

ガチャ

B「誰と電話してたんだ？」

A「Cだよ。旅行だつてさ」

隊長「妹さんと避暑地にか？」

A「よく知ってますね」

B「なあにい？ 妹とデートだとお？」

A「旅行だよ。勝手に近親愛者にしてやるな」

隊長「妹さんの部屋には近親相姦ものの本があったが」

A「何ですと、ってどうして隊長がそんな事を」

B「じゃあやっぱり」

A「C自身は違つたる。あいつは長い間妹さんに会っていなかったから重度のシスコンだけで」

C「誰が重度のシスコンだ」

B「お前だ。この変態」

C「てめえの脳内よりマシだ」

隊長「旅行はどうした？」

C「中止ですよ。クソジジイにバレたんで」

A「いい加減に親父さんと仲直りしろよ。そうすれば妹さんといつでも会えるぞ」

C「向こうが謝ればな」

隊長「強情だな」

B「その間に俺が妹を」

C「やらねえよ」

〜

キャロ「フェイトさんを弄るエリオくん」

ルーテシア「エリオを殴るアルフ」

キャロ「アルフさんに命令するフェイトさん」

ルーテシア「見事な三角関係」

キャロ「次回はその黒い人が登場。では次回もお楽しみに」

ミッション37：管理局（前書き）

雨季「この雑談いらなく感じてきた」

ルキ「今更？」

リザ「……もう分かった」

雨季「うえっ、ならどうしょ」

ルキ「何かやるのは決定なのね」

雨季「まあね」

リザ「……適当に考えればいい」

雨季「じゃあ次回までに何か考えよう。では本編どうぞ」

## ミッション37：管理局

なのはside

結局ジュエルシード探索には晃お兄さんも手伝ってくれる事になったの。妖怪退治のついでだって。私としても強い晃お兄さんがいると安心だし、こないだの狐のお面の人が出てきたらやつつけてくれるって言うってくれたし。

「な〜のは〜」

「アリサちゃん？　どうかしたの？」

「どうかしたの？　じゃないわよ。ぼーっとして。ねえ、さすが」

「そうだよ。何か悩み事？」

「う〜ん」

ジュエルシードは悩み事といえば悩み事だけど、それよりもフェイトちゃん優先かな？　でもそれだとユーノくんが悪いし。

「こりゃ大丈夫ね。悩み事がないのが悩み事って感じだし」

「にやつ！？　アリサちゃん酷いよ！！　私にだって悩み事あるもん！〜！」

「じゃあ教えて欲しいわね」

「私も知りたいなあ」

「引っかけられたの!?!」

「「ハリー! ハリー! ハリー! ハリー!」」

「何かおかしいよ!?!」

どうやって抜け出そう。普段なら味方をしてくれているはずかちやんまで変だし。

キンコーンカーンコーン

「ほ、ほら、もう授業だよ」

「ちっ、次の休み時間は覚悟しなさい」

アリサちゃん、今日は三限終わりだよ。

.....

.....

.....

…  
なんとか逃げ切れたの。魔法関係の事を相談するわけにもいかないし、かといって誤魔化しも効かないから大変。

「!?!? 今の」

『なのは!! ジュエルシードが発動したよ!!』

『こつちも感じたよ。ユーノくん、すぐに行くね』

『今、晃さんにも連絡したから』

『分かったの』

私はレイジングハートを起動させて魔力を感じる方へと向かった。そこには以前見たほどではないけど、巨大な木が暴れていた。

「なのは!?!」

「ユーノくん、大丈夫?」

「うん、こつちは大丈夫。それと今さつき晃さんと金髪の子達も来たよ」

確かにフェイトちゃんとアルフさんはいる。木が魔法障壁を張っているから大変みたい。でも晃お兄さんと狐の人は?

ガキイン

「邪魔すんなよ、ド腐れ狐!!」

「邪魔はそちらだ、脳筋剣士!!」

物凄い速さで喧嘩してた。今回は敵も強いから協力した方が良さげなのに。

「フエイトちゃん!!」

「何ですか？」

「今は協力しよう。あれを倒したらジュエルシールド争奪戦で」

「……………いいですよ」

「フエイト、いいのかい？」

「大丈夫、アルフ。私は負けないから」

むっ、私だって負けないもんね。それよりまずはあの木を倒さないとね。

「その面ごと顔面斬ってやらあ!!」

「体中を穴だらけにしてやるうか!!」

オオオオオオオオオ

「邪魔するな!!」

「「「「あっ「「「」

晃お兄さんと狐の人に攻撃をしようとした木がどんどん削られていく。

「私達の出番が……」

「な、なのは。いいじゃないか。魔力を節約出来てさ」

「……………」

「フェ、フェイト。あっちのフレットの言う通りだよ。出番ならこの後あるじゃないか」

「「……………うん「」

せっかくフェイトちゃんと一緒に倒せると思ったのになあ。なんだかなあ。あ、木が完全に木材になってジュエルシードが出てきた。

晃side

エリオの野郎。かなり本気でやりやがって。

「晃お兄さん」

「どうした、なのちゃん。忙しいんだが」

「木、木を見て」

木？ 木がいったいどうしたって……

「おい狐野郎。いつの間になれば木材になった？」

「いや、記憶にないな」

「狐さん、これからジュエルシード争奪戦なので退いて下さい」

「あ、そうか」

俺らの戦いはもう終わりか。見学をするとしよう。

「じゃあ行くよ、フェイトちゃん」

「負けません」

しかしこの状態で戦って大丈夫なのか？ ジュエルシードが普通に放置してある。ってユーノとアルフが結界張ったな。

「やあつ！！」

「ハアツ！！」

二人がぶつかろうとした時、その間に誰かが転移してきた。

「止まれ！！ これ以上の魔法行使は禁止だ！！」

クロノ、だっけ？ 会った事ないから名前と簡単な容姿しか知らないけど、確かに黒いな。

「フェイト！！ 管理局の執務官だ！！ ここは退くぞ！！」

「でも」

エリオ達は逃げるようだ。フェイトちゃんはごねてるみたいだが。

「逃がすか！ 話を聞かせて バサバサッ なんだ!？」

「鳥!？ って痛い痛い!!」

どこからともなく現れた大量の鳥。種類は一定ではなく、日本にいないような鳥までいる。

「このっ！ 狐!! なんだいこいつら!!」

「知るか!!」

俺達にも、エリオ達にも、クロノにも、全員に鳥が集ってきていた。草薙で斬ろうとしたが、想定外の速さだ。

クエー

「! ジュエルシードが!!」

ユーノが守っていたはずのジュエルシードがカラスによって奪われた。

「カラスが生意気な!! 俺式必殺『疾風』!!!!」

「撃ち抜く!! デルタレイ!!!!!!」

俺は斬撃を飛ばし、エリオは3つの光弾を放ったが、その全てをカラスは避けて逃げていった。それと同時に他の鳥もどこかへ行ってしまった。

「くそつ、やられた」

「ジュエルシードが無ければ此処にいる必要はない。さらばだ」

「ま、待て!!」

クロノは逃げるエリオ達を追いかけようとしたが、速さであちらに勝てるはずもなく、追跡は失敗した。

「……君達だけでも話を聞きたい」

「俺はいいが、あんたの身元は？」

「時空管理局、執務官のクロノ・ハラオウンだ」

「じくーかんりきよく？ しつむかん？」

「知らないな。ユーノは知ってるか？」

「知ってるも何も、有名な組織だよ。魔導師にとっては」

魔導師の元締めみたいなもんだしな。でも此処は地球だし、一応此処の住民って設定だから知らない振りをしなと。

「そこの二人は知らないのか？ 魔導師だろう？」

「俺は魔導師じゃないし、なのちゃんは先日魔導師になったばかりらしいからな」

「現地民なのか？」

「そうだな。なあ？」

「うん、そうだよ」

「僕が協力をお願いしたんです」

「そうか」

『話は聞かせてもらったわ』

「にやっ!?!?」

リンディさんのお出ましか。こっから交渉に入らないといけないのかな？ 苦手なんだよな。

「ホログラムってやつ？」

『そう思ってもらえばいいわ。初めまして、私はアースラの艦長、リンディ・ハラオウンよ』

「苗字が一緒なの」

『クロノは私の息子だからね。さて、三人には我が艦、アースラに来てもらいたいんだけど、いいかしら?』

「なのちゃん、どっしするっ。」

「いいですけど」

「ならOKで」

『分かったわ。じゃあ今から転移させるわね』

まあ管理局はそこまで危ない組織でもないから大丈夫だろ。

フェイトside

家に逃げ帰ってきたけど、まさかジュエルシールドが鳥に取られるなんて。あの鳥、絶対に誰かが操ってた。

「はあ………」

「落ち込むな」

「あんだねえ、フェイトがどれだけ頑張ってると思ってるんだい。せっかくジュエルシールドが手に入りそうだったのに」

「もう手に入れてるぞ」

「「えっ？」」

何を言ってるのかがよく分からなかった。呆然としている私達を無視して狐が口笛を吹くと、あのカラスが飛んできて、狐の手にジュエルシールドを置いた。

「そいつ!?!」

「ご苦労。『戻れ』」

それだけでカラスは紙切れになった。

「それは？」

「式紙って言う地球にある一種の使い魔だ」

「地球に魔法はないはずです」

「昔にあったんだよ。追放されて滅んだけどな」

それを狐は使える。彼は本当に何者なんだろうか。

「さあジュエルシールドだぞ」

「ありがとう」

「いつの間にあんなの準備してたんだい？」



ミッション37：管理局（後書き）

ほのぼの（？）管理局

A「おつ、新しい管理局通信だ」

説明しよう！！ 管理局通信とは校内新聞みたいなものである！！

B「今回は管理局内の人気・不人気投票だったか」

C「やっぱりなのはさんとかは高いな。一番は久遠ちゃんか」

隊長「妥当だな。要さんは相変わらず不人気トップか」

先生「彼自身が良くても、ORTは恐怖の対象ですからね。それに訓練も厳しい」

A「先生どうも。お茶いります？」

先生「ホットミルクで」

B「あ、隊長がいますよ」

隊長「おお、まさか私が入るとは。おじさんもいるな」

C「流石のおじさん。Aもあるし、って俺があるぞ！！」

B「なん……だと……？」

隊長「これで我が隊はB以外は入ってるのか」

先生「いえいえ、Bくんもいますよ。不人気投票に」

B「畜生！！こうなったら読者に聞くぞ！！」

A「読者とか言つなよ」

B「好きなキャラ上位三人を順位を付けて書いてくれ！！」

C「参加キャラは？」

B「下に任せる！！」

隊長「では下をお願いしよう。頼むよ」

~~~~~

キャラ「隊長に頼まれたらしょうがない。ほの管人気投票！！」

ルーテシア「参加キャラはこちら」

- ・隊長 (マリア) ・A
- ・B
- ・B (裏)
- ・C
- ・A妻
- ・A娘
- ・C妹
- ・真哉
- ・聖哉
- ・隊長姉 (カルタ)
- ・もぶ
- ・ドワーフ
- ・座敷童子ちゃん
- ・おじさん
- ・アマテラス
- ・名無し
- ・亜衣
- ・先生

キャロ「こんな感じだね」

ルーテシア「投票は

一位

二位

三位

という感じで」

キャロ「一位に三点 二位に二点 三位に一点ね。参加は自由。では次回もお楽しみに」

ミッション38…交渉。またの名をOHANASHI(前書き)

雨季「決めた」

ルキ「ここでやる事？」

リザ「何？」

雨季「本編のキャラを連れてくる」

ルキ「面白そうじゃない」

リザ「今回は、誰？」

雨季「いないよ」

ルキ・リザ「えっ？」

雨季「今決めたからいないよ」

ルキ・リザ「……………」

雨季「では本編どうぞ」

鬼巫女「最近、出番がナイ」

まずはなのちゃんを落ち着かせるか。話が進まなくなる。

「なのちゃん、落ち着いて聞け」

「で、でも」

「魔法だから問題ない」

「……………根拠がないのにすごい説得力なの」

魔法って言葉は便利だよな。ただ安易に使つとヤバいけど。特に魔術師の前とかな。

「では艦長の部屋へ案内するよ」

「おう」

「はい」

「お願いします」

さあ大切な話し合いの始まりだ。怪しまれないように気を付けないと。

なのはside

ふあゝ、いろいろびっくりする事があったけど、ユーノくんの変身には一番びっくりしたよ。

「艦長、連れてきました」

「入りなさい」

「はい」

クロノくんが扉を開けると、何か間違った日本文化を習った外国の人が造りそうな和室にクロノくんのお母さんのリンディさんが座っていた。

「改めて初めまして。この艦の艦長をしているリンディ・ハラオウンです」

うぐん、うちのお母さんも若いけどリンディさんも若いなあ。っと自己紹介しないと。

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「一淨晃です」

「エイミィ、三人にお茶をお出しして」

「分かりました。何か好みはあるかな？」

「私は特に」

「僕も」

「渋くてあつつい緑茶を」

「晃さんはおじさんみたいだね。了解しました」

晃さんってそういうのが好みなんだ。うちだといつもコーヒーばかりだから知らなかった。

……

……

……

…

「お茶を持ってきました」

「ありがとう。それでは話を始めましょうか。まずはジュエルシートを探している経緯から聞かせてもらえるかしら？」

「はい」

ユートくんが話したのは私達に話したのと同じ事。遺跡で発見したジュエルシートを運んでいる船が事故にあって、地球に落ちてしまったジュエルシートを回収しているという事。

「立派ね」

「しかし無謀過ぎる。何故すぐにこっちに連絡をしなかった」

「それは……」

「まあいいじゃないか。事故で慌ててる時に冷静な対応するのは難しいのは知ってるだろ？　そう責めるなよ」

晃お兄さんの言う通りなの。私だって昔、お皿を割った事があるけど、その時は慌てて何にも出来なかったもん。

「別に責めてなんて」

「クロノくんは言い方がきついんだよ」

「エイミィの言う通りね。さて……これよりジュエルシート探索の全権は管理局が持ちます。貴方達はこれまでの日常に戻って下さい」

「「えっ!?!?」「」」

私とユーノくんは驚いた。まさかそんな事言われるなんて思ってもみなかったから。

「当然だ。ジュエルシードは危険なものだ。本来は一般人が関わっていいものじゃない」

「ただ、晃さん。貴方の力は貸してもらいたいんだけど」

「艦長！？ 言ってる事が」

「分かってるわ。でも強力な戦力がなければジュエルシードを手に入れるのは難しい。あの少女達、特にお面の男性の力は凄まじいわ。彼と打ち合えるのは現状アースラには、いえ管理局全体にもいるかどうか」

ふえー、そんなに強いんだ。晃お兄さんって本当に凄いんだな。

「なら僕が彼に勝てばいいのでしょうか!？」

「無理よ。貴方では「いいぜ」晃さん？」

「管理局の手伝いも、クロノとの勝負もやろう。ただ条件付きだ」

「条件とは？」

「なのちゃんとユーノも協力させる。ただし、なのちゃんは親の了承を得てからな」

晃お兄さん……………お父さんとお母さんを説得する自信がありません。

「……………分かりました。でもご両親の許可がなければ駄目よ」

「はい」

「よし。それと草薙を検査とかもなしな」

あ、どさくさに紛れて条件追加した。

晃 s i d e

これからクロノとの試合だ。クロノは一般的の魔導師だから遠距離戦が主体だろうな。

『クロノくん、頑張ってね。アースラの切り札なんだから』

「言われるまでもない。晃さん、行きますよ」

「どっからでも来な」

『本当に剣が変わった。魔力はそこまで変わってないけど』

草薙が真の姿になったら特に魔力よりも霊力が増えるからな。管理局の検査で解るはずがない。というか契約違反だろ。まあこんくらいならいいけどぞ。

「確かに貴方は強いが、それはあくまで接近戦の話。遠距離戦で魔導師に適うはずがない！！ ステインガースナイプ！！」

子供だな。間合いというものは確かに大切だ。特に遠距離型なのに剣士とかとまともに接近戦を挑むのは愚の極み。けどな、俺の間合いを甘く見すぎだぞ。

「おらよー！！」

俺はクロノが撃った剣型の魔力弾を弾く。

「ステインガースナイプを弾いたか。だがその程度は予想済みだ！！」

「なんだ。自分の攻撃が弾かれるくらい弱いのを自覚してるのか」

「なんだと！？」

挑発に乗ってくれるな。しかし昔はこんな事しなかったのに、俺も変わったな。

「喰らえー！！」

「さつきより強いじゃないか。けどまだまだ」

さつきよりも強力になった攻撃を弾きながら警戒されないように少

しずつ近付いていく。一步、また一步。確実に……

「!?!?」

ちっ、あの様子だと気付いたか。だがもう俺の間合いだ。

「なっ!?!?」

「終わりだあ!?!?」

一步で20mは進み、飛んでいるクロノの下に着く。そして飛び上がりクロノのデバイスを弾いた。

「落ちろ!?!?」

「がっ!?!?」

そのままクロノの胸ぐらを掴んで地面に落とす。

『そこまで!?!?』

「くそっ!?!?」

「よく頑張ったんじゃないか?」

普通に強かったが、俺に勝つにはまだいろいろと足りなかったな。

なのは side

ピンチです。晃お兄さんがクロノくんとの試合に勝ったけど、私は目の前の強敵を倒せる気がしません。

「なのは？ お母さん達の話聞いてるかしら？」

「ひゃい！...」

お父さんとお母さんに交渉するなんて無理だったの！！ 魔法を告白してユーノくんが入っただけでもあれだったのに、今まで危ない事して、これからもそんな事続けるなんて。そりゃ怒るよ。

「なのは。無理してやる必要はないのでしょうか？ 危ない事はやめなさい」

「でも私は.....」

フェイトちゃんとお友達になりたい。フェイトちゃんの事を知りたい。どうしてもあんな悲しい目をしているのか。私で助けてあげられないのか。それが知りたい。

「.....なのは、どうしてもやるのか？」

「お父さん.....ごめんなさい。それでもやりたい事があるから」

「はっきり言うが、父さんもなのはに危険な事をさせるつもりはない」

そつだよね。やっぱり無理だったかな。

「だが応援したい気持ちもある」

「えっ？」

「確かに心配だが、晃くんもいるんだ。桃子、ここはなのはの我が儘を優先してあげよう」

「お母さん、お願い！！」

「土郎さんはなのはに甘いんだから。もし怪我でもしたらやめさせるからね」

「ありがとう！！」

お父さん、お母さん、我が儘言つてごめんね。でも私、凄く嬉しいよ。

ミッション38：交渉。またの名をOHANASHI（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

おじさん「おや？ お嬢ちゃん、どうしてこんな所に？」

？「オウカちゃんにあいにきました」

おじさん「オウカちゃん？」（この娘、異常だな）

？「けーかいするひつようはありません。いまはオウカちゃんにあってだけです。ごきげんよう」

おじさん「……………警戒はさせてもらつよ。可愛いお嬢ちゃん」

――

隊長姉「名無し、飯」

名無し「……………」（ボンッ）

隊長姉「太らないもん!!」

?「みつけました」

隊長姉「あらあら? どこから潜り込んだのかしら?」

ビュッ ガキン

隊長姉「!?!? 名無しちゃん!?!?」

?「あぶないですね」

名無し「……………」(ボソッ)

隊長姉「容易く弾いてよく言う。ですって? 確かにそうだけども、きなりこんな可愛い娘にナイフ投げるなんてどうしたの?」

名無し「そいつはクロナだ」

隊長姉「喋った!?!? ってかクロナ!?!?」

クロナ「流石に気付きますわよね、オウカちゃん」

隊長姉「おつきなりました!?!?」

名無し「それで呼ぶな。寒気がする」

クロナ「昔はあんな事やこんな事を一緒にしましたのに」

名無し」……表に出る」

クロナ」うふふふ」

続く

くくく

キャロ「アンケート結果を軽く発表」

ルーテシア「軽くというか、もうこれが結果でしょ」

隊長^{カルタ}姉……5点

隊長^{マリファ}……4点

先生……4点

座敷童子ちゃん……4点

C……3点

C妹……3点

真哉……2点

アマテラス……2点

A娘……2点

名無し……2点

ドワーフ…2点

聖哉…1点

おじさん…1点

亜衣…1点

キャロ「こうなりました」

ルーテシア「もぶ、いないね」

キャロ「それに触れてはいけませんよ。では次回もお楽しみに」

ミッション39：本当の想い（前書き）

雨季「さて、今回は一条楔がゲストです」

楔「イエーイ」

ルキ「ただの要の性転換キャラからいつの間にか結構重要（？）なポジションに」

リザ「でも星海だと出番が、あんまり」

楔「仕方ないわよ。で、フィーラはいないの？」

雨季「懐かしいな。知らない読者様もいるんじゃないか？」

ルキ「フィーラはザフィーラの性転換キャラね」

リザ「人気だった」

楔「いないなら帰る」

雨季「またね。では本編どつぞ」

ミッション39：本当の想い

エリオside

最近こっちのフェイトさんが恐ろしい。玉狙いの攻撃が激しくなっている。まあそんなのはいい。

「相棒よ。この情報は確かかな？」

《時の庭園にハッキングしたんだ。間違いない》

俺が見ているのはプレシアさんの日記だった。これはある日からおかしくなっている。これを見てある予想が出てきたが、もしそれが当たっていたら……

「狐」

「はいはい、なんだ？」

「勝手に私の下着を洗った？」

「……駄目？」

「駄目。バルディッシュ」

「待て待て待て！！」

わざわざデバイスを使ってまで玉狙いするか。俺の玉が死んでしま
う。女の子になってしま

「フェイトく、ジュエルシードの位置が解ったよ」

「本当!？」

「アルフ、ナイスタイミング!」

「また何かしたのかい？」

別に洗濯は悪い事じゃないと思うけどな。下着を洗ったらいけなかったのかな？

……

……

……

……

そうそう、海の中だった。こっから魔力を流して強制覚醒させるんだっけ？

「俺がやってやるよ」

「あんたは戦うんだから下がってな。あたしがやるよ」

「アルフ、無理しないでね」

「あたしを誰の使い魔と思ってるんだい!!」

アルフさんが雷撃を海へ叩きつける。それに反応した残り六個のジュエルシードが覚醒をして大竜巻を起こした。しかしさっきの魚は死なないのか？

「管理局が来る前にやるよ」

「任せとけ」

晃 s i d e

管理局から連絡があつて来てみれば、エリオ達が竜巻と戦ってるじゃないか。

「フェイトちゃん!? 早く行かないと!!」

「その必要はない。放っておけば勝手に自滅する」

確かにクロノの言う事は正しいかもしれない。ただそれはフェイトだけの場合だ。

「あそこへ連れてけ!!」

「晃さん、貴方もか」

カッ

クロノが俺に何か言おうとした時、画面が光り、光が収まった時には竜巻は消えていた。

「だから言つたろ」

「……エイミイ!! クロノ、なのはさん、ユーノさん、晃さんを転移させて!!」

「は、はい!!」

リンディさんの早めの対応で俺らはエリオ達の前に転移した。ちなみに俺はユーノの魔法で浮いている。

「フェイトちゃん! ジュエルシードを渡して!!」

「渡せない」

「君達はそれがどれだけ危険なものが解っているのか!？」

「執務官うっさいね。狐、何とかしてよ」

「逃げるなら十分可能だ。なにせ厄介な奴が自由に動けないからな」
エリオは俺を見ながらそう言う。こういう時に魔導師って便利だな。しかし今更だがエリオは飛べたのか。

「さあさあ、執務官殿。そのと同等の実力の俺に勝てるかな？」

「舐めるなよ。今お前達を捕まえる必要はない。少しでも時間を稼げばアースラから増援が来る。まずはその最低限をするだけだ」

「ほう、自分で解決しようとしなないとはい冷静だな。だがその最低限すら出来ない事を教えて!？」

突然エリオが上を向いたと思ったら俺らに雷が降ってきた。赤黒い、負の妖気を纏った雷が。

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」」

俺は草薙で、エリオはストラダでそれぞれの陣営に降ってきた雷を消し飛ばした。しかしその瞬間にジユエルシードは奪われた。

「おい管理局!! ここにいる全員をアースラに避難させる!!」

「狐!？」

「あんた何を!？」

向こうの陣営が騒がしいが、そんなの知ったこっちゃない。ようやく見つけたぞ、大蛇オウゴン。

エリオside

「借りるぞ」

「えっ！？ あ、ちよつと!?!」

アースラに着いてすぐに通信機を奪い取った。

「何をいきなりするんですか!! 貴方は自分の立場が」

「悪いが黙ってくれ。今回の元凶に話を付けないといけないんでな」

「元凶?」

リンデイさんを無視して時の庭園に通信をする。そしてモニターにフェイトさんのある意味生みの親であるプレシア・テストロッサが現れた。

『誰かと思えばフェイトと行動しているお面じゃない。わざわざ管理局を使って何か用?』

「初めまして、プレシア・テストロッサ。話してやりたい事があっ

てな」

「プレシア・テストロッサ!? まさかフェイトさんは」

リンディさんは鋭いな。一応教えておくか。

「娘だよ」

『気持ち悪い事言わないでくれるかしら? それが娘?』

「あ……お母、さん」

「この鬼ババ! フェイトの前で何を言うんだい!!」

「少し静かにしてくれ。あれはプレシア・テストロッサの意見じゃない」

「「えっ?」「」

さて、口撃のスタートだ。

「あなたは最初からフェイトを娘と置いていなかった。そう言えるのか?」

『当然でしょう』

「違うな。最初、あなたの日記にはそんな事書いてなかった」

『!?!? 私の、日記?』

やはり日記の存在すら忘れていたか。途中から書いてないからそんな気はしていたんだよな。

「フェイト。お前にはかなりキツイ話になる。いいな？」

「……………お願い」

「……………あんたは日記に書いてたよな。フェイトを造って後悔したと」

『後、悔？』

「狐！ フェイト造ったって一体！？」

これはどう伝えるべきか。いや、正直に言うしかないな。

「プロジェクトF。要するに、フェイトはプレシアの本当の娘のクローンだ」

！？

晃さんを除くその場にいたに衝撃が走る。しかし俺は構わずに話を続けた。

「日記にはアリシアへの謝罪。フェイトを造った後悔。そしてフェイトを本当の娘として愛する覚悟が書かれていた」

『知らない……………』

「だがある日を境にそれは激変する。アリシアを生き返らせる欲望

「えっと、狐さん？」

「本名はエリオだ。よろしく」

「それはいいですけど、晃お兄さんと仲間ですか？」

「仲間だよ」

「フェイトちゃんとは？」

「仲間だと思っぞ」

「????」

いい具合に混乱してるな。当然だよな。っと、転移先の座標設定終了。

「狐……」

「どうした、フェイト」

「お母さんを助けて」

「言われなくとも。家族だからな」

「家族？」

「全てが終わったら教えてやる」

その前に屑蛇退治だ。覚悟しろ。

ミッション39…本当の想い（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

前回のあらすじ

秋代様のクロナとうちの名無しが出会った

名無し「やるか？」

クロナ「クスッ ヤるなら大歓迎ですよ」

名無し「……………」

クロナ「貴方に勝てるか。貴方の体質が変わっていれば別ですけど」

名無し「人がそう簡単に変わると？」

クロナ「人？ 冗談が相変わらず上手」

名無し「こんなのに……………」

クロナ「こんなのに？」

名無し「……………」

クロナ「だんまりですか。そう恥ずかしがらなくてもいいですけど」

名無し「恥ずかしがる？ 後悔しているんだ」

隊長姉「うわ、名無しんが饒舌」

クロナ「今までがおかしかったのですよ。お喋りな彼がまともに喋らないなんて」

名無し「理解したんだよ。言葉は不要なものとな」

クロナ「あらあら」

隊長姉「それで、何が始まるのです?」

クロナ「大惨事大戦です」

名無し「帰れ」

クロナ「クスッ　　そう言わずに、一晩相手をしてくれれば帰ります」

名無し「……………一晩だ」

隊長姉「行っちゃった。それにしても一晩って、やるの?　殺るの?」

く
く
く

キャラ「本編はついに大蛇登場だね」

ルーテシア「残り一、二話で幻想郷に帰るね」

キャラ「ちなみにほの管は何がしたいの？」

ルーテシア「この作者の作品での前書きと後書きはお遊びです」

キャラ「では次回もお楽しみに」

ミッション40：悪い蛇は退治だよな（前書き）

雨季「今回のゲストは鏡だよ」

鏡「よろしく頼むぞ」

ルキ「要の MATERIAL ね」

リザ「いろんなのを取り込んで強くなってる」

雨季「いつの間にか主人公より有能になってるし」

鏡「儂としては強くなってオリジナルを超えたいだけなんじゃが」

ルキ「それが強くなりすぎ」

リザ「では本編どうぞ」

ミッション40：悪い蛇は退治だよな

晃side

転移完了。これから大蛇退治だが。

「なのちゃん達まで着いてこなくても」

俺とエリオの他にもなのちゃん、ユーノ、フェイト、アルフ、クロノがいる。

「私だつて手伝えるよ」

「お母さんを助けたいんです」

「エリオ、なんとかならんか？」

「ユーノとアルフが守ってくれるでしょう」

楽観的だな。でも守ってもらわないとこっちが困るけどな。あいつらが手を出さずに俺とエリオが倒す。それが理想だな。

「なら向こうに着いたらフェイトはプレシアさんを助ける。そして全員守りに徹しろ」

「晃さんの言う通りにしとけよ。下手に攻めたらやられるのはお前らだからな」

不満そうなのが何人かいるが、そんなのは無視して進む。所々に奇

妙な穴がいくつあった。

「虚数空間だな。落ちるなよ。魔法が使えないからな」

「魔術とかはどうなんだ？」

「魔術なら大丈夫じゃないですか？」

「貴方達は何を話しているんですか」

「「気にするな」」

魔術なんてこっちの奴らは知らなくてもいいからな。知ってもどうしようもないし。

「そつえば動力があつちにあるよ」

「そうか。ならクロノとなのはとユーノ、それと案内でアルフが壊してきてくれ。念のため壊しておかないとな」

エリオが指示した四人がアルフが言った動力がある方へ向かった。

なのは side

出来れば晃お兄さんとフェイトちゃんと一緒に行動したかったな。

「あの扉だよ!!」

「扉の前にデカブツがいるんだが」

確かに大きなロボットがいる。いろいろ武装をされていて強そう。

「警備用の魔導機械だよ!! 気をつけな!!」

「一気に片付けるぞ!! スティンガー スナイプ・エクセキューションソフト!!」

クロノくんが無数の魔力の剣をロボットに降らせた。けども剣が突き刺さっているのにロボットはこっちに動き始めた。

「もう、しつこいの!! デイバインバスター!!」

私が撃ったピンクの魔力砲がロボットごと後ろの扉も吹き飛ばした。これでいいの。

「なのは、威力上がった?」

「どうだろ。でも今は動力を破壊するのが先だよ」

早く壊して晃お兄さん達と合流しないとね。

見 side

見つけた。相変わらず禍々しい奴だ。

「うん……」

「フェイト、無理せず下がっていいぞ」

「大丈夫」

妖気に当てられたようだが、動けそうだな。大蛇おろち後ろの方にフェイトっぽいのが入ったポッドがあるな。あれがアリシアか。あれも助けて埋葬してやるか。

「俺達が気を引いてる間にあそこに倒れているプレシアさんを助ける。出来るな？」

「うん」

「よし、なら始めるか！！ 雷槍！！」

エリオは雷で槍を創り出し、大蛇おろちに投げつけた。しかしそれは当たる直前に吸い取られた。

「プレシアさんの中に長い事いたせいで雷を操れるようになったか」

「何！？ なら人間発電所のお前は使い物にならないじゃないか！
」

「人間発電所って」

「いいセンスじゃないか？ しかしこれだとエリオが本当に使い物にならないぞ。どうするんだ。」

「手はあります。転送^{アホーッ}」

エリオが出したあれは、弓か。あいつ弓なんて使えたのか。

「喰らえ」

エリオが弓から撃つたのは光の矢。それは吸い取られる事なく大蛇^{おろち}に刺さった。

ガアアアアアアアアアアアアアアアア！？

効いてるみたいだな。あの弓が何かは知らないが、チャンスだ。

「ハアアアアアア！！」

ザンッ

俺が振った草薙は大蛇^{おろち}の鱗を切り落とし、鱗がなくなった表皮へ深々と草薙を突き刺した。

大蛇は口から雷を纏った妖気の砲撃をぶつ放してきた。俺らは避け
たが、時の庭園に一本のドデカイトンネルが開いた。

「なのはさんのSLB並みですかね？」

「当たらなけりゃいい。もしくはもう一発来る前に殺す!!」

そんな時だった。別れた四人がこっちに来たのは。

「何なのこの穴!?!」

「微妙なタイミングで来たな。お前ら!! そこで見てろ!!」

「わ、私も「なのはちゃん!!」あう」

なのはちゃんはどもも出たがりだな。ユーノとかクロノなんて頑張っ
ても目立てないのに。

「「凄く失礼な事言われた気がする」」

「気のせいだ」

エリオside

体内に弱点とか。こいつ馬鹿以外の何者でもないな。

「晃さん。早く終わらせましょう。長引かせたら被害が広がります
からね」

「ならばどうするっ..」

「大口を開けさせて下さい。その瞬間に俺が殺します」

「いいぜ」

晃さんが大蛇おろちに向かって走り出す。大蛇おろちは放電をし晃さんを払おうとするが、晃さんは容易く避け、草薙に霊力を込めている。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!

大蛇おろちが目の前にいる晃さんを喰らおうとする。このまま攻撃しても晃さんに当たってしまう。

「そのまま一生口開けてろ!!」

晃さんは大蛇おろちの噛みつきを横に避け、下顎を切り落とした。

!!!!!!!!!!??!!??

声を上げる事さあ出来ない大蛇おろちが哀れだが、それだけの事をやったんだ。消し飛べ。

「第五聖典よ。あいつを貫け!!」

矢がさつきよりも強力な光を放ち出す。以前悪竜を殺した時は死徒状態と万全じゃなかったが、今度は死徒状態じゃない。第五聖典を完全に使いこなせる。

「その魂ごと燃え尽きな!!」

矢は下顎の無くなった大蛇おろちの口に吸い込まれ、頭から尻尾まで一瞬で焼き尽くした。

「エリオ、お疲れ」

「お疲れでした」

さて、プレシアさんを治すか。どうせすぐに紫さんは迎えに来るだろうし。

「フェイト、プレシアさんの様子は？」

「そ、それが」

「もう無理だ。間に合わない」

クロノ……勝手にそんなの決めつけるなよ。

「ほら、これを飲ませろ」

「これは？」

「エリクサーだ」

エリクサーがこの世界にあるか知らないが、効能に世界は関係ないからな。

「これで大丈夫なの？」

「ああ」

「……貴方は本当に何者だ？ 瀕死の人間を一瞬で健康にする薬やさっきの蛇を殺した矢」

「それはな」

「エリオ、迎えた」

本当だ。スキマが開いてやる。

「悪いな。もうお別れの時間だ」

「待て！ まだ話がある！！」

「晃お兄さんも行っちゃうの？」

「ああ。さようならだ、なのちゃん」

「フェイト、最後に俺の正体を教えてやる。未来のお前の養子だ」

「えっ？」

フェイトのみならず周りもポカーンとしている中、俺と晃さんはスキマへ飛び込んだ。またしばらく幻想郷でのんびりするか。

ミッション40：悪い蛇は退治だよな（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

B「誰か人気を分けてくれ!!」

A「まだ引きずってるのか。俺も入ってなかったけど」

C「俺は入ってたぞ」

隊長「!?!」

A「どうしました？ 手紙なんか見て固まって」

隊長「今日はエイプリルフルか？」

C「真夏じゃないっすか」

隊長「だよな。目がおかしくなったようだ」

A「なんですか、全く……………」

C「Aまで固まっ……………」

B「どうしたんだよ。ちょっと見せてみる」

Bさんへ

告白したい事があります。明日、ミッド中央公園で待っています。

B「……………」

続く

――

キャロ「何があるやら」

ルーテシア「告白？」

キャロ「とりあえず、短いね」

ルーテシア「次回が長くなるんだよ」

キャロ「本編は次回からコラボスタートらしいよ」

ルーテシア「まずは決まってる人が先だよ」

キャロ「コラボしたい人は感想に書いてね。では次回もお楽しみに」

ミッション41：恋してこうなった（前書き）

雨季「今日はライ様とのコラボだよ」

ルキ「本編からのゲストは？」

リザ「彼女」

久遠「最近めつきり出番のない久遠だよ！！」

雨季「出番がなくても元気だな」

久遠「落ち込んでても出番はこないもん」

ルキ「偉いわね」

リザ「どこぞの誰かさんとは大違い」

久遠「出る時は出る。出れない時は出れない。割り切らないと」

雨季「本当によく出来た娘。ではどうぞ」

ミッション41：恋してこっぴな

エリオside

あそこから帰ってきて一週間。非常にのんびりした時間が流れている。

「璃々ちゃん、これ味見して」

「あむっ、美味しい」

「そりゃ良かった」

今日はうちに紫苑さんと璃々ちゃんが遊びにきている。紫苑さんの狙いは遊びなんかじゃないんだらうけど。

「エリオくん、お客さんよ」

「はい、紫苑さんありがとう」

「いえいえ」

誰が来たかな？ お向かいのおっちゃんが大根でも持ってきてくれたかな？

「どちら様ですか」

「俺だ。突然で悪いな」

「一真さん、こんにちは」

「一真さんなら大丈夫だな。厄介事を持ち込むなんて………あった。一つだけ厄介事があった。」

「一真さん、お願いがあります」

「お願い？」

「一真side」

ただゆつくりしに来たただけなんだが、突然エリオが神妙というか、渋そうな顔をしてお願いとやらをしてきた。

「それで、この家に何かあるんだ？」

連れてこられたのは里にあるごく普通の民家。

「霊夢のお母さんに会って下さい」

「霊夢のお母さん、いたのか」

「そりゃいますよ。命みことさん、いますか？」

「エリオね。いるわよ」

「失礼します」

民家の中には霊夢に似た女性がいた。ただ髪は長く、結んでいないし、胸も霊夢より圧倒的にデカイ。そして一児の母とは思えない若さだ。

「命さん。この人が一真さんです」

「どうも」

「あんたが霊夢をたぶらかした男ね」

「たぶらかしたって」

「分かってる。あの子が勝手に惚れただけってのは。ちよつと言っ
てみたかっただけよ。エリオ、霊夢を連れてきなさい。すぐによ」

「了解しました」

「それといい加減に星ちゃんを貰ってあげなさい」

「……では」

エリオ、そんなんじゃないぞ。

「さて、あの馬鹿娘が来る前に話をしましょうか。あんたは既婚者

で重婚なんだって？」

「そうですが、問題が？」

「いや、別に他人の事情に口出しはしないわよ。要だって同じだしね。ただここに娘が入るとしたら話は別」

その通りだな。娘が重婚なんかしてる相手に惚れてるなんて問題だし。

「見た感じ、悪い雰囲気はしないし、実力も確かなようだ。重婚して問題が起こってないなら人としての魅力も十分にあるんでしょ」

「それはどうも。しかし一目でそこまで見ますか」

「伊達に母はやってないわよ。それで、あんたは霊夢をどう思う？」

あ、敬語はいいから」

「霊夢か。いい娘だな。だけど向こうが何かしない限りこっちからどうこうするつもりはない」

「お母さん！！一真さんが来てるって本当！？」

件の霊夢が来たな。思ったよりも早かったな。

「霊夢、座りなさい。エリオは？」

「邪魔出来ないって帰ったわ。一真さん、お久しぶりです」

「ああ、久しぶり」

エリオは無駄に空気を読んだみたいだな。こういつ時はクッション
役をやれよ。

「霊夢、気持ちは変わらないのね？」

「当然よ。私は一真さんの事が、その……す、す……／＼／＼」

「本人が目の前にいるとこれかい。私の娘とは思えないわね」

「う、うるさいなあ／＼／＼ それより一真さんはどうなのよ……！」

「人としてはいいかもしれないけど、やっぱり母としては認められないわね」

うん、まあそういう回答だとは思った。

「いい人なら構わないじゃない……！」

「駄目よ。もっと相応しい相手がいるでしょう」

「いないわよ……！ どうして認めてくれないのよ……！」

「貴女のためを考えてに決まってるでしょう……！ 既婚者との結婚
がどれだけ不幸になるか分かってるの……？」

「知ったような口しないでよ……！ お母さんだって知らないくせに
……！」

ギリッ

命さんから齒軋りが聞こえた。これは止めに入るべきだな。

「いい加減になさい！！！！」

「待て！！」

霊夢にビンタしようとした命さんの腕を掴む。思ったよりも速くて重い一撃で驚いた。霊夢に当たっていたら大変な事になったかもしれない。

「あんだ、これは親子の問題よ。邪魔しないでくれる？」

「邪魔するつもりはなかったが、つい動いちゃってな」

「そこまですなさい」

空間に裂け目ができ、八雲紫が現れた。今回俺を連れてきたのもこの人（？）だ。

「紫……」

「命、貴女は少し過保護じゃないかしら？ 一度娘に全てを託してみなさい」

「それで不幸になったらどうするつもり？」

「ならない可能性だってあるわ。そうね……三日。三日だけ二人つきりにしてみなさい。その間に進展があれば認めて、なければ止めさせればいいわ」

俺の意見とかは聞かないのかよ。どうせ言っても却下されるのには目に見えているが、少しは聞いてもらいたいもんだ。

「そ、それって、一真さんど、どどど同棲！？／＼／＼」

「……………いいわ。この調子なら三日なんてあっという間よ」

結局俺と霊夢は三日間一緒に暮らすのか。まあどうとでもなるだろ。

命side

二人は博麗神社に行ったわね。

「そういえば三日間で誰か訪ねてきたりするんじゃないの？」

「そこは大丈夫よ。藍やエリオが守っているわ」

既に手回し済みという事ね。相変わらず食えない奴。

「しかし藍はエリオに惚れてるでしょう？ 心配じゃないの？ エリオも将来確実に重婚になるわよ」

「そうね。まあ藍はそこら辺の経験は豊富だし、大丈夫でしょう。それにしても、まだ過去を引きずってるのね」

「……五月蠅い」

あれを忘れるはずがない。娘である霊夢にも同じ思いは決してさせたくない。

「貴女も惚れた相手が既婚者だったものね」

「五月蠅いと言っている!?!」

全身から気を放出させ殺気を浴びせる。あの過去を思い出させるような事を言うのは許さない。だがこの程度で怯む八雲紫ではない。

「言わせてもらうわ。霊夢と貴女は違う。貴女は昔の自分と霊夢を重ね過ぎなのよ。もっと霊夢と一真を信じてあげなさい」

「……信じてあげたいわよ。でも、思い出してしまうの」

「ええ」

あの子には幸せになってほしい。博霊の巫女といっても女性であるのは変わらない。だから、女性として普通の幸せを得てほしい。

霊夢 side

「真さんと同棲なんて、紫もたまには気が利くじゃない。でも進展
つて、えっと……キス以上の事しないといけないの？ それって/
//
//

「どうした？」

「な、何でもありません！！」

無理無理無理！！ そんなの出来るはずないわよ！！ これはヤバ
いかも。

初日

「真さん、ご飯出来ましたよ」

「おう」

「真さんの好みを知らなかったから煮物と焼き魚にしたけど良かったかな？」

「美味しいな。この魚は？」

「山女魚ですよ。最近よく捕れるんです」

「ほう」

気に入ってもらえたみたいで良かった。これで奥さんとして料理は大丈夫そうね。

「お風呂も沸いてますから入って下さいね」

「分かった」

あ、お風呂って事は服を用意しないと。うちに男物ってあったかしら？ それに一真さんの着てたのを洗わないと、って事はパ、パンツとかも……／＼／＼

「で、出来ないわよ／＼／＼」

こうやって悶えてるうちに一真さんはお風呂から上がって自分で服を洗ってしまった。こうやって初日は終わってしまった。

二日目

昨日は何も出来なかった。今日はやるしかない。と言ってもどうしよう。

ブンッ　ブンッ

「ん？」

外で何かを振る音が聞こえた。見に行ってみると一真さんが木刀を振っていた。

「起こしちゃったか？」

「いえ、一真さんも早起きですね」

「霊夢もな」

「少し見ているもいいですか？」

「ああ」

「一真さんはそのまま鍛錬を続けた。前も見せてもらった事があるけれど、極めた技というのはやっぱり綺麗だ。」

「……ふう」

「お茶でも用意しましょうか？」

「いや、それよりも軽く試合でもしないか？ 霊夢はそこそこ強いんだろ？」

「む、無理ですよ！！ 私なんかじゃ勝てません！！」

「なら俺はここから動かない。それでどうだ？」

「うーん」

動かないなら弾幕で攻め続ければ勝てるかな。でもそれは卑怯だし。だけどそうしないと勝てないからなあ。そもそもそれで勝てるから不安だ。

「分かりました。でも制限時間ありますよ」

「サンキュ」

私は庭に出て札と封魔針を取り出す。

「行け!!」

まずは封魔針を撃ち放つ。針は高速で一真さんに向かっていった。

「ハッ!!」

それを一真さんは一振りで薙払う。だけどそんなのは予想通り。次の手はもう打ってある。

「! 後ろか!!」

私が針を撃つたすぐ後に放ったホーミングアミュレットが後ろから一真さんを狙ったが、気付かれて落とされた。

「なら!!」

弾幕が駄目なら直接打撃を与える。ホーミングアミュレットを迎撃したばかりの一真さんの上空に亜空穴を使って移動し、飛び蹴りを加える。

「鈍い」

「えっ? きゃあ!?!」

当たったと思ったけど、上手く流され地面に頭から落ちた。

「大丈夫か？ 綺麗に落ちたが」

「……フラフラ、します」

「無理に付き合わせて悪かった。今日はゆっくりしとけ」

この後、一日中看病してもらったのは嬉しいけど、これじゃないの。

最終日

三日って短すぎよ。ちょっとトラブルがあったらすぐにお終いじゃない。

「はあく、やられた」

お母さんは私が慌てて何にも出来ないのを予想して許可したわね。イヤらしい。でもお母さんの予想通り、今日も夜まで何も出来なかった。今はお風呂だし。

「ブクブク」

……やらなきや始まらないわよね。

一真side

もう夜だ。結局何もなかったな。霊夢はいろいろやるうとしてたみたいだが、空回りしまくってたし、仕方ないか。

「あの、一真さん」

「霊夢？ どうした夜遅くに」

「……………一緒に寝て下さい。私を抱きながら」

「本気か？」

「はい」

はっきりとした強い口調。覚悟は出来ているのか。

「失礼します」

霊夢が俺の布団の中に入ってくる。俺は霊夢を抱き寄せた。

「じゃ、じゃあおやすみなさい」

……………ん？

「伽するんじゃないのか？」

「で、出来ればそうしたいですけど……今の私じゃ無理なので、このまま私を抱いていて下さい。それなら『一真さんが私を夜に抱いた』という事になるでしょう?」

あゝ、確かにな。今間違ひなく俺は霊夢を抱いている。しかも布団の中だ。考えたな。

「でも……これだけはさせて下さい」

チュッ

「おやすみのキスです／＼／＼」

「赤くなるならやるなよ」

「……………おやすみなさい／＼／＼」

命side

三日の同棲を終えた霊夢からとんでもない事を聞かされた。

「本当に、本当に抱かれたの?」

「そうよ」

「あんたは、抱いたの？」

「ああ。しっかりと」

こゝこれは……ここまで自信満々に言えるなんて。

「分かったわ。二人の交際を認めます」

「お母さん、ありがとう!!」

「ただし、霊夢はちゃんと次代の博霊の巫女を作るように頑張るのよ!! あんた、一真も霊夢をほったらかしにしない!!」

「もちろんよ」

「約束する」

「一真、帰りの時間よ」

ひょっこりと顔を出した紫が言う。一真は紫のスキマで外界へ帰り、霊夢は神社へ戻っていった。

「やられたわ。霊夢がここまで大胆な事するなんて」

「本当にね。ただ『抱いた』だけなのに」

紫がスキマから顔を出してそう言う。その言い回しはどっぴいっ事よ。

「！まさか、本当に『抱いた』だけ!？」

「ええ。でも認めちゃったわよね。親として、一度認めた交際を却下するのはどうかしら?。」

「ぐぎぎ」

やられた。完全にやられたわ。こんな知略を使うなんて。そりゃ勘違いした私が悪いけど。

「今度来たら一真を虐めてやる」

「あらあら、嫌な姑ね」

結婚もしてない、子供もない奴にこの悔しさが分かるもんですか。

「命さん、お惣菜が余ったんですけどいりますか?。」

エリオめ、暢気にやってきて。元はと言えばエリオがいなければ一真は来なかったわけで。

「殴らせなさい。満足するまで」

「なんで!?!?。」

憂さ晴らしに決まってるじゃない。

ミッション41：恋してこづなつた（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

前回のあらすじ

Bに告白したいという手紙がきた。

A「ここですね」

C「一体誰なんだ？」

隊長「しっかりと止めさせなければな。それが私達に出来る事だ」

A「そういえば時間は今でいいんですか？」

C「待ってれば来るだろ」

隊長「……」

C「隊長？」

隊長「あの金髪の女性、さっきからずっといるな」

A「確かに」

C「あ、Bが来ましたよ」

A「!?!? Bに抱き付いた!?!?」

C「野郎ぶつ殺してやる!」

隊長「いや待て!」

スパーン

A「Bがハリセンで叩いた!」

隊長「どついう事だ?」

――

B「此処か。一体誰が待ってるんだか」

?「B」

ギュッ

B「何すんだ」

スパーン

? 「痛ひ!？」

B 「余裕綽々だな」

C 「女性を叩くとは何事だ!？」

B 「何でお前がいるんだよ」

? 「貴方は？」

C 「貴女の心を奪いにきました」

A 「黙れ」

ズビシッ

C 「あたっ!？」

隊長 「私達はBの同僚だ。貴女は？」

? 「えへへ　お嫁さん」

B 「黙れ」

スパーン

? 「痛ひ!？」

B「この人は俺が世話になった園の人だ」

A「園？」

隊長「そういえばお前は虐待されてたな」

B「そうそう。そんで世話になったのがこの園長。歳は、今年で46だったか？」

園長「女性の歳は言わないの」

C「46!?!? 若すぎ!?!」

A「それで、告白って?」

B「そっぴゃ何だ?」

園長「寄付ちよーだい」

B「しゃあねえな」

C「Bが金を出した!?!」

園長「ありがとー」

B「また飯食いに行くからな」

園長「うん」

隊長「心配して損したな」

〜

キャロ「霊夢さんの結婚はまだ遠い」

ルーテシア「でも親公認。騙したけど」

キャロ「戦略だよ」

ルーテシア「次回はアポリオン様とのコラボ。お楽しみに」

ミッション42：狂気の死神（前書き）

雨季「今回はアポリオン様とのコラボです」

ルキ「本編からのゲストはユーノよ」

ユーノ「どうも」

リザ「何故今更」

ユーノ「酷くない？」

雨季「リア獣爆発しろ」

ユーノ「それでも作者!？」

ルキ「以上なのはにてまさか敵側のキャラと結婚して孕ませたりア
獣でした」

ユーノ「終わりなの!？」

リザ「スタート」

ミッション42：狂気の死神

N o s i d e

幻想郷のとある森。そこに男はいた。

「んだ此処？」

男は般若の面をし、腰には西洋刀を引っ提げている。男は今いる場所がどこかも分からぬまま歩き出した。

グルルル

「犬？」

草陰から出てきたのは犬のように見えるが妖怪。本来人間では手も足も出ないような相手だが、男には関係なかった。

「犬ところ、死にたいか？」

グルルル

「そうかそうか……………死ね」

キヤイン！？

男は一瞬にして妖怪の首を跳ねた。その後も大量の妖怪が男に襲い掛かったが、男が通った後にはそれらの斬殺死体しか落ちていなかった。

エリオside

コンコン

「はい」

朝っぱらから誰が来たんだ？ まだ7時ぐらいだったのに。

「おはようございます、エリオくん」

「映姫さん？ どうなさいました？」

「少しお願いがありました」

「そうですね。とりあえず上がって下さい」

閻魔様直々に何の用だ？ いつもなら小町辺りの死神を使いに出してくるはずなのに。そんなに重要な事があったのか？

「粗茶ですが」

「ありがとうございます。突然すみませんね」

「いえ。それで本題は？」

「昨晚から大量の人妖が殺害されています。幸いながら女子供に被害はありませんが、放っておくわけにはいきません」

「成る程、そんな事件が」

「そこで貴方に解決してもらいたいのです」

「分かりました」

誰だか知らないが、幻想郷の治安を乱すのは見過ごせないな。いくら幻想郷がどんなものでも受け入れるからってルールや限度がある。

コンコン

「また客か？ 映姫さん、失礼」

「お気になさらず」

玄関を開けると妹紅が立っていた。そういえば今日は炭の配達日だったな。

「そうだ、ちょっといいか？ 話したい事があるんだけど」

「私に？」

……
……
……
……

今回の事件の事を妹紅に話した。他の奴に協力を頼むのもいいが、
実力も性格も確かな妹紅なら大丈夫だろ。

「分かったよ。人里にそんなのが入られても困るしね」

「すみませんね、藤原妹紅」

「閻魔様は気にしなくてもいいわよ。人里のためだし」

「そついえば敵の情報は？」

「残念ですが目撃者がいないもので」

そつだよな。どうせ目撃者は全員殺されたんだろう。まあそんな無
差別殺人鬼なんだから会えば分かるだろ。

「エリオく、飯を……ゲツ、閻魔」

「ゲツ、とはなんです袁術。そこに座りなさい。目上に対する礼儀を教えてください」

「ひくん、助けてたも」

美羽は運が悪かったな。

妹紅 side

場所はこの森で合ってるのよね。怪しいのは見当たらないけど。

「……………怪しい」

森の中を歩いている般若の面をした男を見つけた。腰にある剣は護身用としても、あの面はないわね。

「ねえ」

「ん？ 僕かい？」

「いや、あんた以外いないわよ。何をしてるの？ 山菜採り？ 妖怪とかいるから危ないわよ」

「腕には自信があるよ」

「そう。でもその妖怪や人を殺す殺人鬼が昨晚から出てるようだから早く帰りなさい」

「気をつけるよ」

やっぱり怪しい。普通は腕に自信があっても妖怪に勝てるような発言はしないし、妖怪を殺す殺人鬼を気をつけるで済ませるなんて。

「……どこに住んでるの？」

「え？」

「だからどこに住んでるのさ。私が送ってってあげるわよ」

住処を調べればこいつが本当に怪しいかどうか分かるかもしれない。もし殺されてもこっちは不老不死だしね。

「お〜い、妹紅」

「エリオ」

「怪しいの……いたな」

「失礼だなお前。死ぬか？」

ブンッ

「うおっ!？」

突然さっきの男がエリオに剣を振った。すんでのところでエリオは避けたが、服が少し斬られていた。

「危ないな。お前が殺人鬼か。妹紅、気付けよ」

「性格がさっきと違いすぎるのよ」

こんな凶暴じゃなくてもっと優しくそんな雰囲気を出してたのに。完全に騙されてたわね。

「お前、名前くらいは聞いといてやるよ。墓に名前がないのは寂しいだろ?」

「言うな、クソガキ。岩見祥吾、てめえを殺す男だ!!」

祥吾 side

いい感じの嬢ちゃんに話しかけられていい気分だったのに野郎付きかよ。

「妹紅、誰か呼んでこい。幻想郷から放り出すからな」

「分かった」

女は逃がしたか。そっちの方が俺もやりやすいがな。

「雷神・纏!!」

「何？」

「あんたは人としては最上位だけど人を超えていない。どれだけ人を殺せても、どれだけ妖怪を殺せても、あんたが人じゃ俺は殺せない」

「ガキ……随分偉そうだな」は？」

ドゴオオオオン

突然声が聞こえたと思ったらガキが木々を薙ぎ倒しながらぶっ飛んでいた。そして青白い長髪の男がガキの頭を掴んでガキを持ち上げた。

「がふっ……兄、さん」

「エリオ、いつからお前はそんなに偉くなった？ 人に説教垂れていい人間になった？」

「……」

「悪いなあんだ。うちの馬鹿が」

「何者だ」

「一条要。御歳32になるバケモノだ」

自分で自分をバケモノと言っか。

「ガキの代わりだ。お前が俺と殺し合え」

「ほどほどにな。最近肩凝りが酷くてな」

「ならその肩落としてやるよ!」

俺は抜刀術で一条とかいうのの肩を斬り落とした。避けないとは、ガキと違ってパワーだけだったか。

「ほいさ」

ブンッ

「!?!? ゴツ!?!」

だが相手は予想外の行動をしてきた。落ちていく自分の腕を掴み、それで俺を殴りやがった。痛みを感じている様子もなく、それが当然であるかのように。さらに落ちた腕を傷口に付けると腕がくっついていた。

「……バケモノか」

「だから言ったじゃねえか」

「なら粉微塵にしてやるよ!」

「おっしや!」

俺が手榴弾を大量に投げるも相手はその全てを銃で撃ち落とした。爆発した手榴弾で辺りは煙に包まれた。この隙に近付いてその首を斬り落とす

「……イライラすらア」

例え夢だったとしてもあんな不快な夢は初めてだ。もしあいづらに似たのを見つけたら絶対に殺してやる。

ミッション42：狂気の死神（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

A「あゝじ〜」

B「溶ける〜」

C「そ〜め〜ん」

A「ひま〜」

B「ひま〜」

C「そ〜め〜ん」

A「そ〜い〜え〜ば〜ん」

B「んだよ」

C「おめでとさん」

A「ありがとう。第二子が出来た」

B・C「なんだと!?!?」

A「そう驚くなって」

B「……それもそうか」

C「健全な夫婦なら当然か。羨ましい」

B「お前には妹がいるだろ」

C「お前には園長がいるだろ」

B「誰が手を出すか」

C「同じく」

A「ふと疑問に思ったんだがいいか？」

B「言ってみ」

A「名無しさんの能力ってなんだ？ あの大罪の中でトップなんだから何らかの能力があるだろ」

B「意外と何もないかもな」

C「それは流石にないだろ」

隊長「何をだらけているんだ。仕事しろ」

A・B・C「「「終わりました」」」

隊長「早いな」

A「隊長は名無しさんの能力はなんだと思います？」

隊長「作者に聞け」

B「最強のネタバレ要員」

C「というか読者は知りたいのか？ この話題」

隊長「私はどうでもいいな」

B「Aの第二子の方が気になる」

隊長「第二子が出来たのか。おめでとう」

A「ありがとうございます」

C「まあその全てより重要なのは、何故うちにはクーラーがないかだな」

隊長・A・B「」「確かに」「」

（（（

キャラ「Aさんおめでとう」

ルーテシア「めでたいね」

キャラ「本編はまさかの要さん」

ルーテシア「出張ってきたね」

キャラ「アポリオン様、不満があれば言って下さい。極力直します」

ルーテシア「不満しかないんじゃない？」

キャラ「では次回もお楽しみに」

ミッション43・手合わせだそうです(前書き)

スランプなんで前書きの茶番は無しで。
今回は十六夜アミナ様とのコラボです。

ミッション43…手合わせだそつです

エリオside

「エリオさん、起きて下さい」

「……ねむ」

もうそんな時間か？ それとも寝過ぎで眠いのか？ とりあえず眠い。動きたくない。

「顔を洗ってご飯を食べて」

「お前は俺のお母さんか。ふわぁ〜」

エリは最近小姑のようになってきた。俺だっただらける時間くらい欲しい。

「おはよう」

「ようやく起きたか。もう10時だぞ」

「思春か。別にいいじゃん」

「さつさと飯を食え」

「はいはい」

さつさと食ってだらけよう。今日は一日中だらけると昨日決めたん

だ。

「あ、お醤油取って」

「ほら………どちらさん？」

醤油を渡したのは家族ではなく知らない少女だった。

「十六夜セレナだよ。よろしくね」

「おう」

知らない人がまた増えたな。大方兄さんの知り合いだろう。あの人もいろいろなものを連れ込んでくる。

「ご馳走さん。んで、君の用は？」

「手合わせ」めんどい「即答!？」

どうしてわざわざ俺に手合わせを申し込んでくるかな。兄さん辺りに頼めばいいだろうに。

「お願い、ね？」

「え〜」

「エリオ、少し程度やってやったらどうだ？」

「思春は他人事みたいに言うなよ」

「他人事だからな」

もういいや。適当にやって終わらせよう。

セレナ s i d e

要くんの所のエリオくんだから戦いが好きだと思ったんだけどな。でもやれるからいいや。

「武器は何を使う?」

「デバイスじゃないの?」

「それだとつまらないだろう。素を鍛えるなら普通の武器の方がいい」

「そっか。じゃあとりあえず二刀で」

「あいよ」

渡されたのは普通の日本刀。切れ味も良さそうだ。

「準備はいいか？」

エリオくんも槍を手に取っていた。あの槍も丈夫そうな普通の槍だ。

「大丈夫だよ」

「なら来いよ」

「行くよ」

槍を構えているエリオくんに斬り掛かる。エリオくんはそれを受け流して石突きで突いてきた。それを斬り掛かったのと別の刀で受け流した。

ピシッ

「!？」

刀に罅が入った!？

「デバイスに慣れすぎだな。実際の刀で攻撃を受け流すなんて出来るはずないだろう。刀は最も脆い武器の一つなんだからよ」

普段デバイスや特別な武器ばかり使ってたから刀という武器の特性を忘れてた。

「どっつする？ 武器変える？」

「このままでいいよ」

「強がるなよ!!」
素早い突きを受け止めてしまいそうになる身体を抑えながら避ける。
もう完全に身体に染み付いてしまった動きを修正するのはここまで
難しいのか。

「動きが固いな! 受け止めてもいいんだぞ!! その時はお前の
負けだな!!」

「冗談!!」

そう啖呵を切ってみるものの、これまでデバイスや魔法に頼ってきたツケなのか避けるのがキツイ。武術の鍛錬は欠かしていないつもりだったけどエリオくんはそれ以上だ。

「いい加減しぶといな」

「慣れてきたからね」

「ならもう一本追加するか」

「へっ?」

もう一本って……槍が増えるって事!? 落ち着け私。今まで一本だったけど、それは両手で操っていたから自在に操れたんだ。二本になったら片手で重い槍を操らなければいけないからきつと隙が出来るはず。

「ハハハハハハハハハハッ!!!」

「ちよっ、速過ぎ!!!」

分かってたよ。考えが甘かったって。それにしてもエリオくんのデ
ンションがあんなに低かったのにこんなに上がって、やっぱり戦闘
狂だったね。

エリオside

頑張ってしまった。だらけたかったのに完全にだらけられない状態
になってしまった。

「セレナ、生きてるか？」

「……………きつつ」

ずっと避けてたからな。よくあれを避けてたよな。しかも今回はこ
っちに有利な状態。なんでもありなら負けていたろう。未熟な自分
が恨めしい。

「この後何か予定があったか？」

「特にはないよ」

「そうか。ならまたな」

「？ ひゃあああああああああ！！！！？」

セレナは見事にスキマに吸い込まれていった。

「紫さん、良かったんですか？」

「貴方と手合わせをするだけという約束だもの」

「そうですね」

んじゃ、やる事もないから畑仕事でもしてるかね。

ミッション43：手合わせだそつです（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

突然スタート過去編

15年くらい昔

隊長（小）「お姉ちゃん」

隊長姉（小）「どつたの？」

隊長（小）「ペットが欲しい」

隊長姉（小）「獣が欲しいの？」

隊長（小）「わんちゃんがいいな」

隊長姉（小）「バター犬なんて定番ね」

隊長（小）「お母さん、お姉ちゃんの言ってる事がわからないよ」

隊長姉（小）「母ちゃんに助けを求めるのは反則！！」

隊長母「また下らない事教えたのかい！！ ケツ出しな！！」

隊長姉（小）「パパー！！ ヘルプミー！！！」

隊長母「大人しくしな！！ そりゃ！！」

スパーン

隊長姉（小）「オウフツ！？」

~~~~~

もぶ（小）「父上、何用でしょう」

もぶ父「とりあえず座れ」

もぶ（小）「はい」

もぶ父「お前にもそろそろ俺の技術を継いでもらおう」

もぶ（小）「自分にはまだ早いのでは？」

もぶ父「天才だからしょうがない」

もぶ（小）「ならしょうがないですね」

もぶ父「相変わらず生意気だな。ともかく、うちの一族の役割は知ってるな」

もぶ（小）「歴史の記録ですね」

もぶ父「そうだ。歴史を記録するためには歴史に残ってはいけなし、歴史から消えてはいけない。お前はこれから徹底的に気配を殺して、生き残るだけの実力を付ける」

もぶ母「実力だけなら貴方以上でしょう」

もぶ父「お前は黙ってなさい。早く一人前になれよ」

もぶ（小）「はい」

――

キャラ「何故ABCがいないの？」

ルーテシア「ABCの過去は以前に軽く話したからじゃない？」

キャラ「Aさんって話したっけ？」

ルーテシア「そついえば名無しななしの力は言ついの？」

キャラ「作者は言いたくいてしょうがないらしいよ」

ルーテシア「なら言いつつ必要ひつないね」

キャラ「では次回ぎもお楽しみたのみに」

ミッション44：シャーマンと幻想郷（前書き）

スランプが止まらない。  
秋代様とのコラボです。

## ミッション44：シャーマンと幻想郷

??side

「いいかしら？」

「いつでも」

今日の前に紫の服を着た若作りの女がいる。こいつが幻想郷とかいう場所に俺を飛ばすそつだ。

「しかし興味あるな。あの人の弟子なんだろう？」

「弟子、なのかしらね？ 弟子と言えば弟子かもしれないけど」

「構わない。楽しければいい」

「そつ」

紫の背景で目玉が浮いている空間が口を開ける。  
さあ行くか。

「気をつけなさいよ」

「気をつける必要がないな」

空間に足を踏み入れる。そして気持ち悪い空間をしばらく歩くと辺りが開けた。

「クソババアめ」

俺がそう呟いた理由は簡単。空間を抜けた先が空中だったからだ。地面とキスする前に対策するか。

エリオside

！？　なんか強力な力を感じたぞ。間違いなくチートの類だ。すぐに対処しないと大変な事になるかもしれない。

「こっちか」

しばらく走るとその現場を見つけた。周囲が焼け焦げたクレーターだ。

「かなりの霊力だな。精霊か？」

「まあそんなところだ」

「！？　雷槍！！」

「危ねえな」

後ろから聞こえた声に向かって雷槍を投げつける。自分にとって最速に近いスピードで投げたのに避けられた。

「ちっせえな」

「……………安い挑発だ」

「よく分かってんな。あの人の弟子なだけある」

「あの人？ 兄さんか？ 生憎と俺は弟子じゃないんだよ」

確かに兄さんにいろいろ教わってはいるけど、弟子にしてもらった記憶はない。兄さんだって弟子にしたつもりはないだろう。

「だがあの人に教わってるんだろ？ やるか？」

「やらずに済むならそれがいい。あんとやり合ったら俺もタダじゃ済まなそうだからな」

「自己分析も相手の実力把握もしっかり出来ている。惜しいな、アルトリアも戦いがってるのに」

「アルトリア？ アルトリア・ペンドラゴンか。何故その名が今出る」

「持ち霊だからな」

持ち霊、こんな単語を使うのは俺が知る限りあいつらしいかない。

「あんたはシャーマンか」

シャーマン、霊を自分の体や武器に憑依させ戦う者達の総称だ。先程のクレーターの霊力もこれで領ける。

「博識だな」

「まあな。あんた、名前は？」

「麻倉葉生だ。よろしくな、エリオ・モンディアル」

葉生 side

これからエリオと適当にぶらつく。しかしうちのエリオもあんなになるかな？

『それはないと思いますよ』

『どうしてだよ、アルトリア』

『環境が違いすぎますから』

それもそうだ。動物でも野生と飼われているのではかなり違うし、

飼われているのでも訓練されているかどうかで違う。このエリオは訓練されて野生に放り出された感じかな。

「そろそろ警戒を解いてもいいんじゃないか？」

「お断りだ。あなたが兄さんの知り合いだろうと危険だから」

「違うない。だが過剰な反応は良くないんじゃないか？」

「知るか」

「ギスギスしてるわね」

突然出てきたのは俺を落としたババア。顔を見ただけでさっきの思い出してイラツとする。

「さっきはよくも落としてくれたな」

「気をつけなさいよ、と言ったはずよ」

「あんなの予想するか」

「紫さん、またですか？」

「またよ。それで、これからどうするのかしら？」

「決めてませんよ」

「当然だが俺もだ」

あくまでエリオについて行っているだけだし、幻想郷に何かがあるかも分からない。

「なら彼岸にでも行ったら？」

「白玉楼でもいいと思いますが、そうしますか」

彼岸か。シャーマンである俺をそんな場所に連れて行くか。構わないけどな。

……

……

……

…

彼岸花が大量に咲き、三途の川が流れる場所。ここが彼岸か。

「何処にいるかな、つといたいた。おーい、小町」

「エリオ、と誰だい？」

「兄さんの知り合いだと」

「麻倉葉生。シャーマンだ」

「シャーマン……」

シャーマンって言葉だけでそんなに苦い顔されるもんか？

「あんま霊を使役したままにしないでおくれよ。死神として仕事が減るのはいいけど」

「俺が使うのは輪廻の理から外れた英霊とかだから勘弁してくれ」

「ふーん」

別に全てのシャーマンが持ち霊をそのままにしてる訳じゃないのにな。ちゃんと成仏させてるのだっている。しかし死神だったんだな、この女。

「小町はまたサボリか？」

「シエスタだよ」

「つまり昼寝か。映姫さんが怒るぞ」

「見つからなければ「大丈夫と思っていましたか？」げえっ!？」

「映姫さんこんにちは」

「こんにちは、エリオ。そちらの方は初めましてですね。幻想郷の閻魔をやっている四季映姫と言います」

「麻倉葉生だ」

閻魔ねえ。これで閻魔か。これまた随分と……

「ちっせえな」

「ちよっ！？ 四季様が気にしてる事を！！」

「いくら映姫さんの背が低いからって直接的すぎるだろ！！」

「彼の言っているのは閻魔としての格の事でしょう。見たところ凄まじい格の霊を連れているようですし。二人は後でお説教です」

いや、身長的事なんだが。何か勘違いされてるな。閻魔だからもつと威厳がある感じでいいだろ。こんなちっせえとな。

「失礼な二人と思いませんか？」

「ん、まあな」

「ですが貴方の言い方にも問題がありますよ。いいですか……………」

うわー、絶対長話だ。面倒だが、逃げたら更に話が長くなる。俺の勘がそう告げている。

『葉生、聞こえるか？』

『エリオか』

『良かった。シャーマンだから念話が通じないと思ったが、通じるもんだな』

『そんな事はどうでもいい。それで？』

『映姫さんから逃げる。話を合わせる』

『ああ』

何をするかは知らないが、長話を聞かされ続けるよりはよっぽどマシだ。

「映姫さん、よろしいですか？」

「何でしょう？」

「葉生は紫さんとの約束でもうすぐ帰らないといけないんですよ。だから家族のお土産くらい買わせてあげたいんですよ。なあ、葉生」

「そうだな。俺を父や兄と慕ってくれるあいつらに何か買ってやりたいな」

「そうですね。家族を大切にすることは良い事です。分かりました。行きなさい」

「ありがとうございます」

流石の閻魔もそういつとは認めてくれるのか。エリオも相手の性格を理解して上手くやったな。

……  
……  
……  
……

本当に土産を買っちゃったな。饅頭とか煎餅はいいが、ペナントは  
いらんだろ。というかこの明治っばい村に何故ペナントがある。

『ジュルリ』

『アルトリア、お前も何か食い物欲しいか？』

『い、いつ私がそんな事を言いました！？』

『言わずとも分かる』

むしろ俺じゃなくても誰でも分かる。食事に関してはアルトリア以  
上に分かりやすい奴もいないだろう。

「時間よ」

「来たか、ババア」

「お姉さんと呼びなさい」

「紫お姉さん」

「エリオは気持ち悪いから止めなさい」

「そんな事はいい。帰るならさっさと帰らせろ」

今回の目的はエリオを見る事だったからな。機会があれば次は是非とも戦いたいが。

「じゃあな」

「別にもう来なくていいぞ」

口だけは減らない奴だ。

ミッション44：シャーマンと幻想郷（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

過去編

ドワーフの場合

私は数十年鍛冶屋をしていた。数少ないドワーフ一族の生き残りとしてドワーフの作品を残すために。

「ここ、か」

「！？ 誰だ!?!」

私が暮らしているのは人が住めないような地下。そんな所に客だと？

「管理局の者よ 貴女をスカウトに来たわ」

「管理局？ 私なんかをか？」

「十分だよ。君は強いからね。強くなければこのような場所には住めまい」

「口調がコロコロ変わる奴だな」

「ふふくん、それが私だもん」

「そうか。ではその実力をを見せてみる!?!」

それから三分。私は地に伏せられていた。これが私と隊長の出会いだった。

~~~~~

アマテラスの場合

私の引きこもりは小学生の頃からだった。別に苛めがあったとかじゃない。

「おーい、出てこーい」

「父さん、わざわざ姉さんを呼ばなくてもいいよ」

「せっかく管理局の試験があるんだぞ。あいつの才能なら一発合格だ」

理由はこれだ。親ですら贖する魔導師としての才能。教師も、同級生も私を特別視しかなかった。それが気持ち悪くて仕方なかった。

「あ……」

パソコンを見ると一通のメールが来ていた。ネットでよく話をしてる人だ。

「……私、管理局の部隊の隊長してるんだけど貴女来ない？」

意外だった。こんなふざけてる人が管理局員だったなんて。でもど

うして？ ネットでしか話してないから私の才能なんて知らないの
に。

――何故？

それだけを書いて送る。するとすぐに返信が来た。

――楽しそうじゃん。それと数集め。

気になった。こんなふざけてる人がやっている部隊はどんなの
か。

その日、私は久しぶりに外へ踏み出した。

くくく

座敷童子ちゃんの場合

座敷童子ちゃん「ないよ」

隊長姉「ですよね」

――

キャロ「コラボは残り二回だね」

ルーテシア「今回はかなり時間掛かったけど、どうなるんだろ」

キャロ「さあ？　今回は特に難しかったって」

ルーテシア「そうなんだ。私達には関係ないけど」

キャロ「では次回もお楽しみに」

ミッション45：兄の弟子（前書き）

ルキ「おひさ〜」

リザ「誰？ って思った人は初期の前書きを見て」

雨季「今日も仕事ないよ」

ルキ「今日もって何よ、今日もって」

雨季「そのまんまの意味」

リザ「ないなら作る」

雨季「無理だから。今回は時空の旅人様とのコラボです。どうぞ」

ミッション45：兄の弟子

エリオside

「今日は依頼人が来るわよ」

「唐突ですね」

妖怪の山に山菜採りに来たんだが、目の前に紫さんが現れてそう告げられた。

「何をするんですか？」

「依頼人をコテンパンにしてほしいんですって」

「それ脚色してません？」

「かなりしてるわよ」

………とりあえず、来る人と戦えばいいんだな。コテンパンって事は俺より実力は低いんだろうが、油断はいけない。油断や慢心は動きを鈍らせ、正確な判断を出来なくしてしまう。

「依頼人はもう貴方の家にいるわ。どうする？」

「どうするって」

・パツと行く

・のんびり行く

なんだ今のRPG的な選択肢は。これを選べというのか？ 構わないけど。

- ・パツと行く
- ・のんびり行く

「自分で歩いて帰りますよ。山菜採りの途中ですし」

「そう。でも時間は有限よ。依頼人を待たせないようにね」

なら山菜採りしながら走って帰るか。

……

……

……

…

思ったより山菜生えてたな。これだけあれば今晩は山菜の天ぷらかな。想像しただけで涎が。

「ただいま」

「遅いわよ」

「紫さん、何故？」

あのまま帰ったんじゃないのか。この人の事だから帰って昼寝してると思ったんだけど。

「私がどうしようと私の自由よ。それより、彼が依頼人よ」

「こんにちは。神威と言います」

「エリオ・モンディアルだ。よろしく」

そこには黒髪黒目の少年がいた。見た目は普通だが、普通じゃないのが来るのがこの世界。

「彼は未来の要の弟子よ」

「……………マジすか」

「マジよ」

「神威、だっ たっ け？」

「はい」

「よく生きてたな」

兄さんの修行はきつとめんど、キツかったろうに。まだまだ若いの

に本当によく頑張った。お前も若いだろというツツコミは無しで。

「それで、何しに来た？」

「ちょっと手合わせをお願いしようかと」

「お前も戦闘狂か？」

「違いますよ。自分の実力を確かめたいんです」

ふうん。まあ実力を確かめるために誰かと手合わせするのは悪くないな。

「よし、やるか」

「なら行ってきなさい」

「おっ」

「わあっ!?!」

紫さんのスキマに俺と神威が落とされた。幻想郷で戦うわけにはいかないけど、どこに飛ばされるやら。

神威 side

ワァー ワァー

何故か観客が大量にいるフィールドに落とされた。ここはどこなんだ？

「……………うちかよ」

「えっ？」

「ここはうちの管理局の訓練フィールドだ。しかもバグクラス以上の特製品だ」

『さあようやく主役達の登場です。我らが管理局のイケメン、エリオ・モンディアル！そして相手はあの一条要の弟子、神威くん！この試合どうなるのか！？』

『はいはい、賭けをやる人はこっちだよ』

「キャロ、ルー……………」

「なんか大変ですね」

「一割はこっちに寄越せよ……！」

「それ!？」

賭け金が欲しかったただけなのか。でもこの賭けって正直意味ないよな。俺が負けるのは確実だし。

「さあ、兄さんの弟子の実力見せてもらおうか」

「弱いですよ」

「気にしないからよ。ストラダー!!」

《おつよ!! やろつぜ相棒!!》

「《セットアップ!!》」

「俺も、覇煌刃!!」

エリオさんはデバイスを起動させ、俺は黒い大剣を出す。

「随分と熱気を出す剣だな」

「そういうものですから。シッ!!」

「あつっ! 熱風来たぞ!!」

そりゃそういう剣だし。でも一瞬で俺の間合いから10m以上も離れるなんて、なんて速さだ。だけど速さなら技でなんとか出来る。

「瞬ど」「つりゃっ」「くっ!?!」

「雷撃」

バチィ

「いつ!?!」

気が付けばエリオさんが近くに来て突きを放ってきた。防いだものの、槍から雷を流された。

「蒼火墜!?!」

「おっと」

片手から蒼い魔力の炎を出すも、また離れられた。

「なんて言うか、もっと激しい攻撃はないのか?」

「なら見せてあげますよ!! 理想を現実に変える力!! そして、十ツ星神器、魔王!?!」

俺が理想とする最強の魔王が創り出される。巨大な魔牛のような魔王が砲弾のごとくエリオさんに向かって飛んでいった。

「フンッ!?!?!」

パァン

「そ…んな…」

だが理想の魔王ですら紙屑のように軽く粉碎されてしまった。

「理想を現実に変える力、とか言ってたな。その理想は俺を倒して

たか？」

「……ああ、無理でしたよ。どうにも想像しきれなかった」

「そうか。なら終わりにしよう。その心臓、貫い受ける！！」

《ゲイボルグ》

不規則に動く槍を俺は止めようとせず、槍は俺のリンカーコアを貫いた。そしてそのまま俺の意識はなくなった。

……

……

……

…

「プーッ！！」

「げふっ！？」

寝ている俺の腹の上に突然子豚が飛び乗ってきた。突然感じた衝撃により俺は飛び起きた。

「起きたか。水いるか？」

「頂きます」

「ほら。ウルスは離れなさい」

「プギユ」

俺が水を飲んで落ち着いた所でエリオさんが話し始めた。

「もっと自信持てよ」

「自信ですか？」

「そう。お前って格上相手だと勝てないとかそういう考えを無意識に持つてるみたいだからさ。あの理想を現実に変える力だってそれが必要ならば十分に強いのに」

「ならどうしましょう？」

「兄さんなら自分で考えろ、とか言うんだろうけど。とにかく常に意識して行動したらどうだ？ イメージは大事ってよく言うだろ？」

「そうですね。相手より強い自分をイメージしないと勝てるものも勝てませんしね」

イメージというのはそれだけ自分に強力に作用する自己暗示だ。自分のイメージ一つでいろいろ変わってくる。

「別に強くななくてもいいんじゃないか？」

「それは？」

「勝てるなら強くななくてもいいだろ。例えば大人より子供は弱いけど、銃とか使えば勝てるだろ？」

「それはイメージとは違うんじゃない？」

「いいんだよ」

「ご飯出来ましたよ」

「おう、今行く。神威も食ってくか？」

「じゃあ貰います」

勝てればいいのか。なかなか難しいな。武器や能力だけでなく、戦略やフィールドですら影響する。

今日は短い手合わせだったが、いい勉強になる日だった。それと山菜の天ぷらが美味かった。

ミッション45：兄の弟子（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

過去編 おじさんの場合

――

私は幼少の頃、捨てられた。理由は簡単だ。私が持つ数々の異常なスキルのせいだ。だがそんな私を捨てた奇特な人間がいた。それは一人の老人。老人は裏世界を牛耳る人間の一人だった。

「や、やめ グシャツ」

私は老人へ恩返しするために様々な行動をした。その時は裏で調子に乗りすぎた政治家を文字通り踏み潰したところだ。十にもならないうちに千以上の人間を殺し、キリンググマシーンと呼ばれる私はこの程度では罪悪感の欠片も持たなかった。

「ボス、帰還します」

『ケツケツケ、分かった』

ノイライフドール
不死人形

私の体組織、つまり血や肉を僅かでも取り込んだ成分は全て私の蘇生のための人形となる。今、部屋には私の血が充満しているため、此処にいる男達は全て私の糧だ。

「相変わらずの化け物め」

「私は恩人である貴方を殺したくない」

「……………なら行き先は作ってやる。二度と裏には来るな」

「感謝」

くくく

「これが私の過去ですよ」

行き先がまさか管理局とは思いませんでしたけどね。

「過激よねえ」

「次は名無しくんですよ」

「……………」

「言いたくない？」

「ならば私が教えましょう」

「先生！」

「……………チッ」

「あれは……………」

次回に続く

――

キャロ「こんにちは」

ルーテシア「儲けた」

キャロ「要さんの弟子だから強いと思って賭けた人いっぱいいたも

んね
「

ルーテシア「今回はコラボ最後」

キャロ「では次回もお楽しみに」

ミッション46：兄とかの弟子（前書き）

雨季「今回でコロナ終了です。次に行く世界が決まってるので募集します」

ルキ「今まで知ってるのを選んできたけど、今回から知らないのもやってみるわ」

リザ「流石に情報が見つからないと書けないけど」

雨季「今回のコロナは畏無様です。どうぞ」

ミッション46：兄とかの弟子

エリオside

幻想郷にも秋が来た。今朝早くも穰子さんが秋の味覚を持ってきてくれた。デザートに梨でも食つか。

「エリオ！ 早く剥くのじゃー！！」

「エリオお兄ちゃん、早く早く！！」

「美羽も璃々ちゃんも少し待ってくれ」

「……………私も」

「そんな遠慮しなくても思春にもあるから。エリにもな」

「バレてました？」

「バレてました」

梨はどれだけあったかな？ 一人一個くらいは貰ったと思ったけど。

「私達には無いようですよ、紫苑さん」

「私達は忘れられてるのかしらね、七乃さん」

「そこの二人は変な事言わないでくれ」

まるで俺が酷い奴みたいじゃないか。こりゃ俺の分は我慢してでもやらないとな。

「私も頂戴な」

「紫さんにはありません」

「酷いわ。お土産あげるから」

「お土産？」

「はい」

ドサッ

「いてっ!?!?」

黒い長髪の少年がスキマから落とされた。どうせまた転生者とかの類だろ? それで試合とかだろ? このパターンにも慣れたというか飽きたというか。

「お前、名前は？」

「霧夜だ。遠坂霧夜」

「遠坂? 凜さんと」何も関係ないから安心しなさい」そうですか
てつきり凜さんの子孫か何かかと思っちまったが、あの人の子孫なら幻想郷に来る理由はまず間違いないく『うっかり』だろう。

「で、何をすれば？」

「彼と戦ってあげなさい。彼は要と他数人の転生者の弟子だから」

「……………」

兄さんはどれだけ弟子を作ったのか。そして何故その相手を俺がしなければならぬのか。

「考えてもしょうがない。紫さん、お願いします」

「行ってらっしゃい。あ、エリちゃん、梨お願い」

「はい」

今回の相手、霧夜ってのはどんなのだろうね。

霧夜 side

また落とされた。あの紫って妖怪、突然現れて落とすだけ落としやがって。

「試合、やるか？」

「もちろんだ。要師匠に鍛えられた者同士、どっちが強いかわかめようぜ。エリオ・モンディアル」

「あくまで試合でだけだな」

エリオは二本の槍を出す。デバイスの槍に雷で出来た槍か。実力は一目見れば分かるくらいに強い。

「全力でやる」

「お、おおおお！？ ロボット！？ 落ち武者型ロボットか！？」

『誰が落ち武者だ』

俺はペルゼインという赤い鬼をあしらった鎧のようなものを着て、両肩近くに赤い鬼の面が浮いている存在になった。それを落ち武者とは。しかもロボというか生物に近いんだがな。

「まあ人じゃなくなったただけだろ？ 来いよ」

『大口ヲ叩ケナイヨウニシテヤロウ』

ペルゼインの武装である太刀、鬼蓮華を抜いて斬りかかる。

ザンツ

あっさりと斬れたかと思えば、エリオは消えた。そしてエリオの代わりに斬れた人型の紙が落ちていた。

「貫け、雷槍!!」

『後口力!!』

両肩に浮いている鬼の面、鬼面砲を異形に変化させ光線を放つも、そのエリオも紙になった。

「なかなか隙がないようだな」

『偽物ヲ使ツテ観察力? 臆病者メ』

「式紙も知らないのか? 無知だな。それでよく兄さんの弟子を名乗れる」

下手な挑発合戦をしても負けそうだな。エリオがどれだけ式紙とやらを使ってるのか知らないが、全て壊して本人を倒せばいい。

「そろそろ攻めるかな」

『漸ク力』

「ほい」

『!?!?』

エリオが片手を上げると地面から雷が登ってきた。突然の事だったが、防御は間に合った。

『師匠達ノ猛攻ニ比ベタラ大シタ事ナイナ』

「比べんな」

『鬼牙流・斬撃ノ型』

「聞けよ」

『戦慄桜花ノ舞!!!』

エリオを無視して舞うように千の斬撃を繰り出す。

「うおおおおおおおおお!!!?」

エリオも避けるのがかなり精一杯のようだ。確実に仕留める。

「なんちって」

エリオは動きを止めて斬られた。だが流石に三度目は予想していた。今度は何処だ? 後ろか? 上か?

『……イナイ?』

全く見当たらない。気配も魔力の類も感じない。一体、何処に……

『ウオツ!?!?』

突然足の裏を突き上げられて飛ばされた。すぐに体勢を立て直してその場を見るとエリオが地面から出てきていた。魔力も何も使わずに2〜3mはある今の俺を突き飛ばしたのか!? それ以前にいつから地面の中にいた!?!?

「最初からいたぞ」

『読心術ヲ使ウナ』

「分かりやすいんだよ。なあ、試合終わらないか？」

『コンナ不完全燃焼デ終ワレルカ』

「いいじゃないか。疲れたし」

そう言うエリオの眼が金色に輝くと俺の中に何か入ってくるような感覚に陥った。あれは魔眼か！ だが対抗くらい出来る。

「やっぱり黄金程度なら利かないか」

『黄金？』

「魔眼のランクだよ。上位の魔眼の中でも最下位が黄金、次が宝石、そして全ての魔眼の最上位に位置する虹。とりあえず人に戻れよ」

『アア』

ついつい人に戻ったが、これじゃあ戦う意思がありません。って言うてるようなものじゃないか。

「式紙の多重操作は疲れる。慣れない事はするもんじゃないな」

「ならどうしてしたんだ」

「そつちの実力を見たかった」

「俺は見れなかったけど」

「そうふてくされるなよ。機会はあるさ。紫さん、見てるならスキマをお願いします」

エリオの言葉に応えるように、俺とエリオの前にそれぞれスキマが開く。

「またな」

「次はちゃんとやれよ」

「約束しよう」

その約束が破られない事を切実に願うよ。

ミッション46：兄とかの弟子（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

過去編 名無しの場合

~~~~~

とある世界に男の子が生まれた。何処にでもある平凡な夫婦の間に生まれた男の子。普通の病院で普通に生まれた男の子。だがその男の子が生まれた瞬間に、その世界全ての生命力が失われた。

「これは？」

私こと先生はその異変を察知しその世界へ飛んだ。世界は死滅し、宇宙も、いるはずの神々も死んでいた。ただ一人、赤子だけが無邪気に笑っていた。崩壊していく世界で赤子だけ無事だった。

「危険だ」

そう思った私が近付いた瞬間、私の生命力が無くなっていくのを感じた。咄嗟に離れたが、半身の生命力は既に無くなっていた。私は別世界にストックしてある命を使いそれを治した。

「何なのだ、この赤子は」

近付くだけで生命を死に追いやる力。ならば遠距離から破壊する。そして私は世界が数個は消滅する力を叩きつけたが、逆に力が消滅した。異常。それ以外の言葉が出てこなかった。

「殺せないのなら、育ててみますか」

赤子だから力を制御出来ない。なら成長させて制御させればいい。育てるには近づく必要がありますが、ストックを消費し続ければ100年は持つでしょう。

〃  
〃  
〃

10年後

「ハザマ、おはよう」

「今はナナよ」

「今度は女の子ですか」

この子は変わっていた。私という奇妙な存在が育てたせいか、それとも本当の親が自分に名前をくれる前に自分が死なせてしまったからか、常に自分を探していた。名前や性別すら変えてた。変化の術は教えた覚えがないのですがね。

「体質は大丈夫ですか？」

「問題ないわ」

体質というのは世界の生命力を無くしたあの力。『力を無くす体質』。この子の周りに存在する力は全て無くなってしまふのだ。

「あまり暴走させないで下さいよ。この前なんて私を殺したじゃないですか」

「意図的にやったの」

「そうですね。意図的に暴走出来るという事は力を制御出来るといふ事ですね。良かった」

「ふん」

こんな奇妙な共同生活は50年ほど続き、彼はある時忽然と私の前から姿を消しました。

〃  
〃  
〃

先生「こんな感じですよ」

隊長姉「名無しんの体質凄い」

名無し「……………」

おじさん「では過去話は終わりです仕事をしますよ」

もぶ「そうですね」

――

キャラ「名無しさん最強？」

ルーテシア「尺がないからまた次回。バイ」

ミッション47：日常……日常！？（前書き）

雨季「今回は型月世界に決定しました。海人様ありがとうございました。」

ルキ「選んだ理由はちゃんとあるのよね？ 書きやすいとかは駄目よ。」

雨季「こうしたらどう、という意見があったから採用させて頂いた。」

リザ「そう。」

雨季「畏無様はわざわざ喰霊についてメッセージを送って下さったけど、Wikiを見たらかなりめんどそうだったので。」

ルキ「結局そういう理由じゃない。」

リザ「ダメダメ。」

雨季「うっさい。では本編どうぞ。」

ミッション47…日常…日常!?

エリオside

うん、よく寝た。今日は何をして過ごそうか。

「ん〜?」

何か違和感があるのに違和感がない。何を言ってるか……………これはいいか。顔を洗って飯にしよう。

「んん〜?」

やっぱり何かおかしいな。でも自然だし。

「まあいいや。飯だ」

食卓にはいつものメンバー。うん、何もおかしくない。

「エリオ、おはよう。貴方にしては遅かったわね」

「エリオさん、おはようございます」

「おはようございます」

今日は和食か。美味そうだな。特にこの芋の煮っ転がしなんていい艶だ。これは本当に、本当に……………

「何故俺は此処にいるんだ!?!?!?」

これまで自然にしてたけど、何故俺は衛宮家にいるんだ！！ 長い間暮らしてた事あるからまだ暮らして間もない幻想郷の家より快適で違和感なく過ごせるけどさ、おかしいのをさっさと認めるよ！！

「何故って、昨日の夜に庭で寝てたんだろ」

「士郎さん、起こして下さい」

「悪いかなと思って」

もういいや。とりあえず紹介しよう。今のは家主の衛宮士郎さん。そしてさっき話してた士郎さんの魔術の師匠である遠坂凜さんと、妹の間桐桜さん。ついでに会話にはまだ参加してないけど、士郎さんの使い魔、サーヴァントのセイバーさんと、桜さんのサーヴァントのライダーさんもいる。

「とりあえず座れって。飯時なんだからさ」

「そうですね。騒いでもしょうがないですし」

「エリオ、そこのおひたしを所望します」

「どうぞ、セイバーさん」

「ありがとう」

ああ、士郎さんの飯は落ち着くな。しかし誰が俺を飛ばしたのか。まあ紫さんか老師しかいないんだけどさ。

「それにしてもエリオさんが来たという事はアルトルージュさんも来るんですかね？」

「知りませんよ。向こうも俺がいるのを知ってるかどうか」

「知ってる筈ですよ。貴方を連れてきたのは宝石翁ですから」

「ライダーさん、マジ？」

「はい」

「そうか、老師の仕業だったか。どうせアルトが会いたいと言ったって理由だろ。」

「師父が来てたの？ どうせなら私の魔術を見ていっけてくれて良かったのに」

「それに関してですが『もう教える事はない（笑）』だそうです」

「あるでしょう。それにその（笑）は何よ」

「そんな事考えてもしょうがないですよ。老師ですから」

「そうよね」

俺らでは老師はどうしようもない。物理的にならともかく、言葉遊びとかだとコテンパンだ。

「士郎さん、悪いですけどしばらくお世話になります」

「気にするなよ。家族みたいなもんだろ」

「エリオさんがいると賑やかになりますね」

「桜、あれは賑やかなってもんじゃないでしょう。エリオがいるだけで二十七祖やら真祖やら人形師やら反則1と2やら混血やら、とにかくいっぱい集まるんだから」

間違っではないけどそこまで言わなくてもいいでしょう。

「反則1と2って両儀式さんと遠野志貴さんの事ですか？」

「それ以外ないわよ。タイプが多少違うとはいえ直死の魔眼なんて最上位の魔眼持ちが二人なんて」

「志貴か。志貴はちょっとな」

「土郎さんは苦手ですからね」

「苦手というか、馬が合わないというか」

土郎さんと志貴さんは基本的に相性最悪だからな。間にクッションが入ってようやく向かい合えるって感じだし。

「エリオ、食後の鍛錬に付き合ってください」

「っとセイバー、抜け駆けはなしだ。俺だってエリオと手合わせしたいからな」

「それでは私も立候補しましょう」

おいおい、いくら俺がそこそこスタミナがあってもセイバーさんと  
士郎さんとライダーさんの相手は無理だぞ。

「久しぶりに冬木に来たんですからのんびりさせて下さいよ」

「なら私にデザート作り教えて下さいね」

「それなら桜さんには洋食作りを教わろうか」

「エリオの作るデザートは素晴らしいものばかりですからね。今晚  
が楽しみです」

セイバーさん、今晚デザート作るの決定ですか？ 桜さんに教えて  
たら沢山出来そうだからいいけど。

「和食のシロウ、洋食のサクラ、中華のリン、そしてデザートのエ  
リオ。最強の布陣ですね」

「セイバーは食べる事以外の楽しみはないのですか？」

「そう言うライダーも、涎が出てますよ」

「！」

今晚は何を作ろうかな。桜さんに教え、教えられながらやらないと  
いけないし。でもそうになると晩飯は洋食だから、こっちも洋にしな  
いと。悩むな。

ミッション47：日常……日常！？（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

A「今日はBは休みですか？」

隊長「まあな」

C「何かあったのか？ 風邪？」

隊長「いや、見合いらしい」

C「嘘だ！！」

隊長「本当だ。あの園長がセッティングしたとか。B自身は乗り気じゃなかったようだがな」

A「珍しい。あいつなら飛びつきそうなのに」

隊長「相手がこれだからな」

C「……………うわぁ、こりゃやる気出ないはずだ」

A「流石にない。どうしてこれが相手なんだ」

隊長「将来有望だとか」

――

B「……………本気だったのか？ てつきり俺を呼んで金を集めるためだと思ったが」

園長「本気も本気。うちの園の美女よ。将来有望よ」

B「あのな、8歳児と本気で付き合う馬鹿がいるか。将来有望って何年待てばいいんだよ」

園長「青田買いと考えて。さあ！！」

B「さあ！！じゃねえ」

スパーン

園長「痛ひ！？」

B「帰るからな」

園長「なら私と結婚を前提にお付き合いを」

スパーン

園長「酷ひ!？」

B「酷くねえよ」

くくく

キャラ「普通のほの管でした」

ルーテシア「型月世界、大変だね」

キャラ「ほのぼのだったりバトルだったり、いろいろあるからね」

ルーテシア「忘れてる人のために言うけど、エリオは料理はまあまあ、でもデザートに関しては超×5くらい凄い」

キャラ「では次回もお楽しみに」

ミッション48：冬木を歩く（前書き）

刹那「外伝始まるで」

雨季「何故刹那がいる。大人しく本編の幻想郷へ帰れ」

刹那「最近本編のキャラ紹介しとらんみたいやからうちから来たんやんか」

ルキ「じゃあ私達を紹介するわ。彼女は一条刹那。旧姓は桜咲で要の奥さんの一人よ」

リザ「天狗と人間のハーフ。強い能力使い。ネギま本編とは違い関西弁をバリバリ使う」

刹那「詳しくはinnネギまをよろしくな」

雨季「では外伝スタート」

## ミッション48：冬木を歩く

エリオside

前回久しぶりに冬木市にやってきた俺。やる事もないんで散歩しようかな。

「エリオさん、お出掛けですか？」

「そうですね」

「それなら帰りにでもお買い物をしてきてくれませんか？」

「分かりました」

桜さんからメモを受け取り、衛宮を出た。買い物は最後でいいから、商店街は後回しにしよう。

「どこに行こうか」

「！ エリオじゃないですか！！」

「ギルさん、お久しぶりです」

ポーンと道を歩いていたら金髪の少年、ギルガメッシュさんに出会った。大人だったり子供だったりになるんだけど、今日は子供みただい。

「戻ってきたなら言ってよ。歓迎したのに」

「いえいえ、迷惑になるでしょう。それにカレンさんに何をされるか」

「ハハ、それもそうだね」

ギルさんもサーヴァントで、そのマスターがカレン・オルテンシアさんという人だ。ただその人が非常に厄介で、あまり会いたい部類の人ではない。どう厄介って、人の弱点とかに笑いながら土足で踏み込んだ挙げ句、爆弾を置き土産にしていく人だ。

「マスターの悪口を考えてなかった？」

「はい」

「そんなはつきり肯定しなくとも。とりあえずマスターの前では考えないようにね」

「分かっていますって。もうトラウマはいらない」

「そうだよね。じゃあ僕はサッカーがあるから」

「ではまた」

せっかくギルさんに会ったし、冬木に在住しているサーヴァント一同に会いに行こうかな。



「慣れって大切だと改めて思わされました」

「鯖いるか？」

「夕飯は決まっているようなので結構です。それじゃあ俺は挨拶まわりをしたいので」

「おう」

次はそうだな。ちょっと遠いけど柳洞寺にお邪魔するとしようか。

.....

.....

.....

...

長い長い石段。歩くだけでもいい運動になりそうなの先に柳洞寺はある。そして柳洞寺の前の門。そこにも一人、サーヴァントは住み憑いている。

「こんにちは、小次郎さん」

「おおエリオではないか。甘味はあるか？」

「そう毎度毎度持つてきません」

「そうか……」

門にいるこのどこからどう見てもお侍な人はアサシン、佐々木小次郎さん。魔術とかは一切関わってないのに老師の使う第二魔法の技である多重空間屈折を生身でやった農民だ。これには老師も笑った。そして俺の菓子のファンでもある。

「甘味でないとすると、手合わせか？」

「違います。ただ会いに来ただけです」

「ふむ、では女狐にもか？ 生憎女狐は暫く帰ってこんぞ」

小次郎さんの言う女狐というのは、この柳洞寺に住んでるサーバーヴァントの一人であるキャスターさんの事なんだけど、何があったのかな？

「どつしてです？」

「宗一郎と西欧へ温泉旅行だそうだ」

「へー」

宗一郎さんってのはフルネームは葛木宗一郎といって、キャスターさんのマスターで暗殺拳『蛇』の使い手だ。その技は初見ならサー

ヴァントすら圧倒する。ちなみにこの世界で暗殺といえば七夜の一族が有名だけど、別に関係ないみたい。

「温泉か。いいな」

「以前は私も含めて温泉に行ったというのに、寂しいものだな」

「でも小次郎さんって飛行機無理でしょう」

「うむ……」

他のサーヴァントは生きてる時代に多少なりとも人を乗せて空を飛ぶものを見た事があったり、自身が飛んだりするのがあったりするかもしれないが、小次郎さんはただの農民だからな。

「では他を回ってきます」

「今度は羊羹でも頼む」

「ははは、分かりました」

……



変わった服装のメイド、リーズリットの後ろから白髪赤眼の少女、イリヤスフィールさんが出てきた。

「バーサーカーさんを止めて」

「いいじゃない。バーサーカーだって暇だったのよ。戦ってあげたらっ？」

「今日は挨拶まわりなんです」

「仕方ないわね。バーサーカー!!」

「.....」

ふう、助かった。数回なら殺せるかもしれないけど、バーサーカーさんを12回殺しきる自身はない。

「嘘言わない。貴方ならバーサーカーを殺す道具くらいいくらでもあるでしょう」

「そう見えるなら買いかぶり過ぎです」

「エリオ、お茶いる?」

「ありがとう、리즈。でも今回は顔見せ程度だから」

「あら、セラに会っていかないの?」

セラは리즈とよく似たメイドで、セラは本格的なメイド。리즈は戦

闘型なメイドかな。

「買い物があるんで」

「そうなの。衛宮家今日の夕飯は？」

「メモを見る限り、パエリアでしょうか」

「いいわね。お邪魔しようかしら」

「なら買い足す必要がありますね」

「リズ、セラに今日は夕飯は衛宮家で食べるって伝えておいて」

「分かった」

「なら先に行ってるわね」

では俺もそろそろ商店街で食材を買い込むとしますか。

.....

.....

…  
…

こんなもんだろ。久しぶりに会ったからか商店街の皆さんもいろいろサービスしてくれたから、今晚はおかずが増えそうだ。

「あ……エリオくん？」

「三枝さん？ お久しぶり。相変わらず陸上部のマネージャーを頑張ってるんですか？」

「あ、うん。大学でも二人にサポートしてくれて頼まれたから」

「氷室さんに蒔寺さんですか。二人も陸上界では有名になったでしょう。これも三枝さんがいるからでしょうね」

「そ、そんな事ないよ」

彼女は三枝由紀香さん。一般人で陸上部のマネージャー、主に親友の氷室鐘さんと蒔寺楓さんのサポートをしている。

「エリオくん、大きくなったね。さっきは分かんなかったよ」

「ん？ 数年でそんなに変わりました？」

「スッゴい変わったよ」

土郎さん達とは何度かよく会ってたけど、三枝さん達一般人には会う機会がなかったからな。

「これから飯ですけど、一緒に食べます?」

「えっ、そんな」

「土郎さん達なら許してくれますよ」

「……衛宮くん達も一緒なんだ」

「どうかしました?」

「ううん、何でもない! 弟達に連絡するね」

三枝さんは携帯を取り出し連絡する。そして会話の途中で顔が赤くなっていたりしたが、連絡はすんだようだ。

「大丈夫だっけ」

「それじゃあ行きましよう」

三枝さんと一緒に帰宅した事を凜さんに弄られたのはまた別の話。

ミッション48：冬木を歩く（後書き）

ほのぼの（？）（管理局

名無し「……………」

隊長姉「お前がウォークマンか。何聴いてる？」

名無し「……………」（ボソッ）

隊長姉「自作曲？ 凄じじゃない」

貴史「名無しにそんな才能があつたのか」

乱「意外だな」

隊長姉「あぁん　ダーリンに乱ちゃん　来るなら言つてよ」

貴史「いいじゃないか。気にするなよ」

乱「行きたくなつたから。なあ名無しさん、手合わせしないか？」

名無し「……………」（ボソッ）

隊長姉「もっと腕を上げな、小娘。ちいたあ大人の階段登つてから出直せ。ですとな」

乱「何を」

貴史「やめとけ。名無しは本気で強いぞ」

乱「分かってるよ。だから戦いたいんだ。親父だって同じだろ？」

貴史「さあて、どうだろな」

隊長姉「貴史はこれからうちとベッドでプロレスして戦うんよ!!」

「こっちきいや!!」

貴史「今日は足腰立たないくらいにヒィヒィ言わせてやるよ」

乱「親父達は……」

おじさん「珍しいお客さんですね」

乱「あんたは、おじさんだっけ？」

おじさん「はい、そうですよ。飴ちゃんあげましょう」

乱「いらないよ。それより手合わせしない？」

おじさん「嫌です。分の悪い賭けは嫌いですから」

乱「何をもって分が悪いと思う？」

おじさん「今の貴女ならば勝つ事は不可能ではありません。しかし貴女は若い。戦いの中で成長し、私を超える可能性が十二分にあります。負ける戦いほど分が悪いものではありません」

乱「そうか。残念だな。あんたとなら楽しい戦いが出来ると思った

のじ」

おじさん「ご希望にお応え出来ず申し訳ない。まあこの世界で遊んでいって下さいな」

乱「そうするよ。親父達は暫く戻ってこなさそうだしな」

――

キャロ「なんか後書きで秋代様とコラボ」

ルーテシア「よくあるよくある」

キャロ「エリオくんは型月世界だと、アルトルージュさん、陸上部三人娘を落としてます」

ルーテシア「では次回もお楽しみに」

ミッション49：来訪者（前書き）

雨季「新しくもう一作品書きたい」

ルキ「やめなさいって」

リザ「無理」

雨季「酷いな。大丈夫、これを月一更新にするから」

ルキ「ふざけるなあ！！」

リザ「いくら人気ないからって」

雨季「気にするな。では本編どうぞ」

## ミッション49：来訪者

エリオside

カン カカン

衛宮家の道場から響く木と木がぶつかる音。俺と土郎さんが簡単な手合わせをしている音だ。俺は木槍、土郎さんは短い木刀を二本使っている。

「まあこんなもんにしますか」

「あー！ また勝てなかった！！」

「手合わせでは負けません。ただ何でもありだと厳しいですけど」

「それでもエリオは強いだろ。まだまだ未熟だな」

土郎さんはこれからも成長する。対して俺は死徒になった分成長はないに等しい。この先抜かれる可能性は十分にあるんだ。

「エリオさん、お手紙がきてますよ」

「ありがとう、桜さん」

この世界にいる俺にわざわざ手紙を送るなんて誰だ？ 冬木の人なら直接会いに来るし、老師なら転移して来るし。考える前に読むか。

ーエリオへ

会いに行くから動くでない。

アルトルージュ・ブリュンスタッドよりー

「……………」

もっと書き方があるだろ。ってか動くなって事はすぐに来るな。アルトはそついう奴だ。

「土郎さん、アルトが来ます」

「アルト？　もしかしてアルトルージュさんか？　いつの間に呼び捨てするようになったんだ？」

「少し前に向こうのしつこさに負けまして」

「やっと諦めたのか。さて桜、昼飯の準備をしろぞ」

「はい、先輩」

ああ、二人共行っちゃうんですね。しかしアルトだけが来るのか、それともリイゾさんとフィナさんも付いてくるのか。これだけでもかなり違う。

「エリオ〜！！」

ズドッ

「ぐぼっ！？　あ、アルト、いつの間に」

「今の今だ。御爺様に飛ばしてもらったからな」

「レイゾさん達は？」

「居らぬ、いらぬ、邪魔にしかならぬ」

「北斗にハマってる？」

「日本の文化は素晴らしいな」

アルトってどこか庶民的な部分があるよな。二十七祖の一角がそれでいいのか？ 黒い吸血姫がそれでいいのか？

「もうすぐ昼食の時間だけど」

「いや、寝る。時差があるからな。エリオは膝枕をしろ」

「了解です、お姫様」

腹減ったな。アルトはもう寝ちまったし、今回の昼飯は我慢するか。

……  
……  
……  
……  
アルト起きないな。脚が痺れたりしたとかいうわけじゃないけど、  
夕方だしそろそろ起こした方がいいだろう。

「ん、ふあゝ」

「いいタイミングだな。おはよう、お姫様」

「……………！？／／／／／」

「どうした？」

「いや…………いきなりエリオの顔があるとな。それにずっと膝枕して  
くれているとは思わなかったから／／／／／」

「当然だろ。さっ、起きた起きた」

「うむ」

道場から母屋に戻ると凜さんと廊下で会った。

「むっ、御爺様の弟子か」

「黒の吸血姫！？ 何でいるのよ！？」

「エリオに会いに来たに決まっておろっ」

「……そうよね。そうでしょうね。もういいわ……………」  
諦めないで下さい。確かにどうしようもないですけど兄さんに比べたらマシなんですから諦めないで下さいよ。

「ん？ その手紙何ですか？ 魔力を感じますけど……………」

「ああこれ。これはね ピンポン 誰かしら？」

「俺が行きます」

玄関に行つてドアを開けると三枝さんと時寺さん、氷室さんがいた。

「おお！ 本当にエリオがいた！！」

「嘘じゃなかったでしょ」

「私は三の字の事は信じていたよ。エリオくん、久しぶりだ」

「お久しぶりです、氷室さん。時寺さんもお元気そうで」

「あたしはいつだって元気さー！！」

「エリオに客であつたか」

「あれ？ 貴女は誰？」

「アルトルージュ。エリオの妻となる者だ」

「はっ？」

アルトの奴いきなり何を言い出すんだ！？ ほら三人の目が何か怖くなった！！ って三枝さん雰囲気、笑ってるけど雰囲気が！！

「エリオくん、どういう事？」

「それよりもお前は何を言ってるんだよ！！ エリオに迷惑だろ！！」

「迷惑ではないさ。なあ、エリオ」

「離れないか。貴女がエリオの何かは知らないが、少なくとも今はどいてもらいたい」

「エリオくん、ちゃんと話聞かせてもらおうからね」

誰か……助けて……

：

運良くライダーさんがバイトから帰ってきて助かった。ありがとうライダーさん。貴女は天使だ。

「遠坂、さっきの手紙は本当か？」

「本当よ。だから黒の吸血姫もいるんじゃないかしら」

「それはエリオに会うためだと思っが」

そういえば手紙があつたな。内容は何だつたんだろ。

「エリオ、もうすぐ協会に行くわよ」

「協会つて、魔術協会ですか？ じゃあその手紙は」

「そういう事。ちなみに内容は死徒払い」

死徒払いなんて俺らがわざわざ行かなくてもいい事だろう。

「アルト、詳しく知ってるか？」

「もちろんだ。ただ私が会いたいから来たと思っていたか？」

「正直ね」

「まあ良い。仕事は簡単だ。アインナツシュを払え」

「「「はあっ!?!」「」「」

ミッション49：来訪者（後書き）

ほのぼの（？）（管理局）

隊長「おっ、茶柱立ってるな」

A「さっき四つ葉のクローバーを見ましたよ」

B「俺宝くじ当たったもんね。1万円だけど」

隊長「みんな運がいいな。Cは……今日休みだったか？」

A「そんなはずは」

プルルル プルルル

B「はい、管理局です」

C「Bか。俺だ、Cだ」

B「C、どうしたよ」

隊長「Cからか。スピーカーにしてくれ」

B「あいよ。で？」

C「今病院にいてさ」

A「病院？ 怪我でもしたのか？」

C『実は……柳並木を自転車で走ってたなら黒猫が出てきて、避けたらカラスが目の前について、また避けたら転けて霊柩車に跳ねられた』

隊長・A・B「「うわぁ……………」」

）  
）  
）

C妹「お兄ちゃん、結婚して」

C「いいよ」

……

……

…

C「という夢を見た」

C妹「私は……別に……………その……いいよ」

C「なんか言ったか？」

C「妹「な、なんでもない!!」」

〃  
〃  
〃

A「七不思議ってお前の学校にもあったか？」

B「あったあった。三ノ宮さんの銅像が盗んだバイクで走り出すとか定番のдарろ？」

A「どんなアグレッシブな三ノ宮さんだよ。ってか普通は三ノ宮さんだろ。どんなパチモンだ」

C「俺の学校には校長室の叫びなんてのがあったけど、ただ校長がよろしくやってただけだった」

A「酷いな」

隊長「懐かしいな。姉と一緒に全制覇したな」

A・B・C「〃〃〃隊長姉妹は格が違った」

――

キャロ「今回は短編集的だったね」

ルーテシア「本編は大変そう」

キャロ「アインナツシュの説明は次回の本編で。では次回もお楽しみに」

幕間：機内危険（前書き）

雨季「久しぶりの更新」

リザ「短い」

雨季「言わないで」

ルキ「もうどうすんのよ。新作にうつつ抜かしすぎよ」

雨季「楽しいんだもん。では本編どうぞ」

## 幕間：機内危険

エリオside

魔術協会からの連絡もあり、冬木からは俺と土郎さん、凜さん、二人のサーヴァントであるセイバーさんとアーチャーさん。そしてアルトが向かう事になった。

「遠坂、そろそろ時間だろ」

「少し待ちなさい。もうすぐ来るはずだから」

もうすぐ来るって、誰がだ？

キキキキッ

空港の駐車場にとんでもない運転の車がやってきた。でもあの車は見た記憶があるな。

「橙子！ もっと安全な運転をしろ！！」

「いたた……頭打った」

この声は、間違いない。

「式さん」さん付けするな「……式に志貴さんじゃないですか」

「私もいるわよ」

アルクエイドさんもいるのか。老師が手紙を出したならこうなるのも当然と考えるべきだったな。

「……………」

「士郎、今回は協力するんだから落ち着きなさい」

「志貴もよ」

士郎さんも志貴さんも黙ったままで怖い。殺気も何も出てないのが逆に怖い。

「二人は変わらないな」

「そんな事はどうでもいい。ロンドンに行くならさっさと行くぞ」

「橙子さん、式……………」

結局全ての後始末は俺がやらないといけないんだよな。はあ、面倒だ。

「アルクエイド、志貴とはどうなってる？」

「どう、って？」

「言わせるでない」

「そこ、変な話をするな」

アルクエイドさんの方が絶対に進んでるに決まってるだろ。聞くま

でもない。

……

……

……

…

俺らはロンドン行き of 飛行機に乗って日本を旅立った。

「「……………」」

誰だよ士郎さんと志貴さんを隣にしたのは！！ 機内が大変な空気になってるじゃないか！！

「妾とアルクエイドも仲良くなったからな」

「二人にも仲良くなってほしいわよね」

「あんたらか！！」

この二人は確かに昔は仲が悪くて今は仲が良くなったけど、それが他人にも通じると思うなよ。特にあの二人は根源から仲が悪いんだ

から。

「式助け……………」

「スウ……………」

寝とる！！ぐっすりだ！！ すごい！！ だがこの状況はどうすべきか。サーヴァント勢は霊体化してるし。

「凜さん」

「…………グウ」

「寝たふり下手ですね」

でも凜さんも逃げ出したという事は完全に俺に任されたのか。嫌だ。全力で嫌だ。

「土郎さん、志貴さん、どっちか俺と席を交換しませんか？」

「大丈夫だ」

大丈夫じゃないから言ってるんだよ！！ 分かってよ！！

『エリオ』

『アーチャーさん！！』

そうだ。念話を忘れてた。未来の土郎さんであるアーチャーさんなら何か対策を知ってるかも！！

『いい事を教えてやろう。記憶はかなり薄れているが、私が殺人貴と会った時は互いの気配を感知しただけで殺し合いになったものだ』

『それで？』

『この状況は凄まじく改善されてるぞ』

そんなのアドバイスでもなんでもないじゃん！！ だけど言いたい事は分かった。諦めろという事ですね、畜生め。

幕間：機内危険（後書き）

ほのぼの（？） 管理局

B「今日は隊長と俺だけか」

隊長「AもCも任務だからな」

B「俺はなんで行かないんですか？」

隊長「気にするな。大した理由はない」

B「大した理由はないね。って顔近くないですかね？」

隊長「嫌か？」

B「……いやいやいや、どうして、まさか、そんな」

隊長「好きだ、としたらどうする？」

B「……」

ガバツ

隊長「……押し倒すとはやるな」

B「隊長……俺、隊長がそんなだなんて知らなくて」

隊長「ふ、ふふふ」

B「もし、隊長がいいなら」

隊長「馬鹿め!! それは偽者だ!!」

B「隊長!? じゃあ俺が押し倒したのは」

A「俺だ!! レアスキルで変身してたんだよ!! 馬鹿め!!」

C「しっかり映像に残したぞ!! 馬鹿め!!」

B「ノーーーーーッ!!!!!!」

――

B「……夢か」

隊長・A・C「「夢じゃないよ!! 馬鹿め!!」」

B「嘘だ――!!!!!!?」

）  
）  
）

キャロ「今回短いね」

ルーテシア「だから幕間ってハードル下げてるんだよ」

キャロ「だよね。では次回もお楽しみに」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3989q/>

---

チートじゃ済まない外伝 エリオ伝

2011年9月30日03時59分発行